
ネギま！の世界で魂生成～キティとのラブイチャ日記～

百合姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！の世界で魂生成くキティとのラブイチャ日記く

【Nコード】

N8536R

【作者名】

百合姫

【あらすじ】

急性アルコール中毒で死亡した主人公がネギま！の世界で適当に生きる話。

転生物が書きたくてやった。

後悔はしてない・・・こともない。

微妙に原作介入しつつもしかし、第一目標はただ生きること。

方針は基本的にギャグテイスト。

適当に頑張ってみる。

タイトル変更。

変更というよりは付けたしですが。

1つ目 ちょっと長めのプロローグ（前書き）

勢いとノリだけで一気に書き上げてみたプロローグ。

裏で暗躍する主人公を書いてみたくなったから仕方が無い！

評価、批判などはお手柔らかにお願いします。

アンチにはならないと思う。

1つ目 ちょっと長めのプロローグ

僕は死んだ。

享年21歳。

まあしょうもない理由だ。

急性アルコール中毒。

自棄^{ヤケ}になって一気飲みをした結果こうなった。

いやね、今の世の中内定が決まらないのなんのって。

自棄の一つや二つ、起こしてもしょうがないってね。

んで、ぼんやりと両親に申し訳ないなあと思いながら死んでったワケですが、今よくわからない空間にいます。

真っ白のような真っ黒のような。

矛盾してることを言ってるのは分かってるんですよ。

でも、そう表現するしかないようなーありていに言えば、不思議空間にいるわけです。

特別信仰心も無かったので、死んだら何も無いと思ってたから、死後の世界。

すなわち死んだ先があるというのは純粹に嬉しかったりする。

んでもって、さらに不思議なことに目の前には金髪幼女がいた。

「どなた？」

ついでにやいたのも仕方ないと思う。

これまたありていにー状況的に考えるならば神様とか、閻魔大王だとか、そんな感じの存在なんだろう。

「うんうん、良い具合に落ち着いてるね。

最近の現代人は想像力豊かなせいかな、説明の手間が省けて良いよ。」

可愛くもなまめかしい声で、はつらつと語る少女。
話の内容が全く読めない。

「私の名前は無い。」

君達で言う神様。その概念に近いものと思ってもらえばいいよ?」

神様が・・・夢と言うわけでもなさそうだからとりあえず信じよう。
というか現在の不思議空間と、はっきりと死んだ記憶があるのでこの辺は信じるしかない。

それよりも気になっていることがある。

「神様って金髪幼女なんだ・・・」

昨今の萌文化を具現化したような存在だ。
神様も意外と流行に敏感なのかもしれない。
俗世間にまみれた神様に絶望したっ!!

「あはは。違うよ。私にコレといった個は無く、これと言った姿も無いよ。」

何を言ってるらっしゃるの?

「私には“意思”しかないってことだよ。」

私の今の人格、姿などは君が無意識的に神様に抱くイメージって所かな?

現在喋ってるこの言葉も君にとっては言葉として認識されてるかもしれないけど、私からしたら単に“意思”をぶつけてるに過ぎない。
言葉と言う文化になれた君の頭が無意識的に意思を言葉と言う形に変換してるだけなの。」

え〜っと？

つまりどういうこと？

「そうだね。

例えるなら、君がアリだったら、私もアリの姿で、言葉ではなく触覚で意思疎通をしていたってことだよ。」

え〜っと？

とりあえず相手によって姿を変えるってことだよね？

「そういうこと。

それで、話を進めるけど結論から言えば転生だね。転生をしてもらいます。」

「転生って・・・輪廻転生の転生？」

「そうなるね。」

ソレすなわち、またの人生を楽しめるということだ。

ありがたいけど、転生なんてそうポイポイ誰でも出来るのかな？

「もちろん。

というか死んだ生物にはバクテリアなどの細菌から人間に至るまで転生してるんだよ。

世界には魂の数が決まっていて、ソレが循環してるわけ。」

ほうほう。そんな裏事情が。

というかこんな説明をいちいちしてるのだろうか？

「してるね。

というか私としては意思をぶつけるだけ。

それを君たち生物が勝手に理解するから手間なんて無いに等しいよ。
時の概念も無い。」

カラカラと笑いながらそう答えた金髪少女。
やけにフランクな神様だ。

いや、先ほどの説明的に僕にとっての神様像がそういう認識になっ
ているのだろう。

まあそこは置いておく。

「記憶とかは・・・」

「もちろん消えるよ。前世の記憶を持つ生き物なんて見たことない
でしょ？・・・と言うところなんだけどね。

君にはやって欲しいことがあるの。」

「やってほしいこと？」

「これまた結論から言えば世界の創造を手伝ってもらいたい。」

「世界の創造？」

なんか話が大掛かりになってきた。

「適当に君を選んだから嫌なら嫌で良いけどね。
どうする？」

もし手伝ってくれるなら、報酬として今の君の人格をそのままに想
像した世界で好きなだけ生きれる能力を与えるけれど。」

ううむ。

力うんぬんはともかくこのままでは記憶が、人格が消えるのだから
断れるはずも無い。

「・・・えと、じゃあお願いします。」

「手伝うってことでいいのかな？」

そこそこにしんどいけど?」

「まあ・・・このまま消えるよりはマシかなと・・・」

「おっけ～。んじゃまさっそく。」

創る世界は「ネギま!」。死なないとは思っけど、死なないようにがんばってね?

少なくとも1000年くらいは生きてもらわないと困るから。」

「は、はいっ!?!」

ネギま!ってあれか!? 漫画のっ!?!
というか、なぜにそのチョイスっ!?!

「私の趣味かな。」

マジかよっ!?!

「いいや、ウソだよ。」

ウソかよっ!?!

「魔法のある世界を創ってみたいと思って、適当に選んでみただけ。それじゃ行つてらっしゃい。」

「い、いやっ!?!」

ちよ、ちよつとまつ!?!

まだ、詳しいことを――ひいあつ!?!」

突如足元に穴が開き、重力が無いように思えるこの空間なのにも関わらず重力にしたがつて落ちていく僕。

重力と言うよりは引力と言ったほうが正しいか?

「ちなみにネギ君との二卵性双生児として生まれるって設定だから。私個人の趣味で君の外見は男の娘。がんばってねえっ！」

とかいう金髪幼女の声が聞こえた気がするが、こちとら鋭意落下中でそれに耳を傾けてる余裕は無かった。

こうして僕は世界の気まぐれによる世界の創造を手伝うため。ネギまの世界に産み落とされることとなった。

はい。

というわけで始めましたネギま世界における僕の人生。

現在3歳。

1〜2歳の頃にも前世の記憶があつたにも関わらず、その記憶を受け入れる脳自体があまりにも未熟なせいかぼんやりとしか覚えていなかったりする。

記憶があれば、なんで僕とネギを産んでそのまま故郷の人達に任せたのか分かりそうなものだけど、残念ながら覚えていない。3歳になって、ようやく体に精神が定着した——そんな感じである。

ちなみに見た目は母親であるアリカ王女の幼少の姿って感じ。

男性ホルモンに真正面から喧嘩を売っているような外見だったりする。

単純に見てる第三者側としてならともかく、自分が男の娘となると複雑な思いがある。

漫画やアニメである女装して実は男だと驚かせる展開は、好きなのだがそれはあくまでも自分がやらないからであり早い話、自分がやるとは思っても見なかった。

初対面の人には必ず驚かれたり、未だに女の子だと勘違いしてる人も多々いるが、面白そうなのでそのままにしてたりする。

そんなわけでネカネ姉さんのお世話になってる僕です。

精神年齢がいかにも肉体に引っ張られようと、現在24になる精神年齢の僕からしてみるとネカネ姉さんの過保護振りがうっとうしいと思ってしまうのは仕方が無いことだと思う。

とはいえ相手は善意からくるものだから下手に無下にも出来ず。

なおかつ3歳児の演技をしなくちゃならないのは面倒なことこの上ない。

名探偵コ。ンの主人公であるコ。ンに尊敬の念を感じずにはいられないここ最近。

周りが英雄の息子だからと簡易式の杖を貰ったのはありがたかったりする。

さっそく魔法の矢であるサギタ・マギ力を覚え、前々からやってみたかった特訓を試してみた。

ちなみに属性は闇。

黒い矢とかカッコいいじゃないということで覚えてみた。

闇属性に対する相性があまり良くないみたいで、溢れんばかりの才能をもってしてもちよつと苦労したのは良い思い出である。

「リステル・マステル・アリステル。

魔法の射手 闇の3矢!!!」

ちなみに場所は村から離れたちよつとした森。魔法の始動キーである「リステル」アリステル」部分は適当。放った矢をコントロールして自分に向ける。そう、コレが僕のしたかった修行。

もといドラゴン。ールで主人公の孫。空がナ。ツク星に向かう際、宇宙船内の修行で自分の必殺技を自分に射ち放ちソレを撃破するという修行があった。

それを参考に、今やってみたのである。
ぶつちやけ、かめ。め波でないのが残念極まりない。

「さあ来いっ！！全て打ち落としーーぐぼほっ！？」

予想以上に速い、重い、魔法の矢が鳩尾にクリーンヒット。

「ぐ・・・ぐぐ・・・」

あまりの一撃にたまらずうずくまる僕。

やばい。

吐きそう。

結局吐いたんだけどね。

吐きながら二度とこんなバカなこととはしないと誓った僕である。

所詮、ただの地球人にサイヤ人の真似事は危険すぎたということだろつ。

うん。

そんな感じで適当に修行をしつつ、ネカネ姉さんは学校の教師をし

てるため、たまにつれてもらっては、魔法書を読み込み。
ただひたすら適当にこつそり修行をするという毎日。

師匠が欲しいなと思う今日この頃です。

そして4歳になるころにはそこそこ使い勝手の良い魔法を多々覚え
てしまった僕であった。

サウザンドマスターと王女の血はすごいなあと関心を通り越して、
呆れるばかりである。

もちろん、努力の甲斐もあるけれどね。

校長にはばれてた節があるけれど、接触してこなかったので無視し
た。

多分英雄の息子なら間違ったことには使うまい・・・みたいな色眼
鏡で見ていたのだろう。

子供の僕が学んでしまえば危ない魔法とかでも渋々見なかったこと
にしてみるみたいだった。

英雄の息子だろうとなかろうと子供に対して見せべき物と見せない
べき物を分けるくらいのことはするべきだと思ったけど、都合が良
いから良しとした。

というよりはまだ小学生にもならない子供に理解できる物では無い
と思っていたのだろう。

僕だって逆の立場ならそう考える。

ちなみにネギとアーニヤとの仲は良好。

他にも数人の幼馴染が居る。

ただネギとは普段は普通に仲の良い兄弟だけれど、父親の話になる
とそうはならなかった。

子供が父にあこがれるのは至極当然。

でも、僕としては一度もあったことのない父にあこがれるなんてこ
とは無く。

その温度差ゆえに上手くいかないなんてことがあったりする。

ファザコン気持ち悪い。・・・とか思ったりしてないよ。
もちろん！

5歳間近になるころ。

そろそろかなと思ってみるとそろそろだった。

ネギのトラウマとも呼べる村人石化事件である。

原作に介入して良いのか迷ったが、僕達双子の母親代わりとばかりに世話になっていた、アーニヤのお母さんぐらい助けてやりたいと思っていたのでこの日のために準備は万端である。

村のはずれから多数の魔力の蠢きを感知した。

「ネギ、僕から大事なお話がある。」

「な、何？

アリス？」

今更だけど、僕の名前はアリス・スプリングフィールドである。

もういない我が両親は名前まで女の子っぽくするとは何を考えているのやら。

ちなみに。現在は村からちよつと離れた川で釣りの最中。

突然の僕の真剣な声音に、少しおびえた顔をするネギ。

悪いことをしたとき、ネカネ姉さんがいないときは僕が叱ってる為、何か悪いことをしてしまったのだろうか？と不安になっているのだろつ。

「今すぐ村に帰るんだ、良いね。」

「う、うん。」

良い聞かせるような僕の言葉に渋々従うネギ。

ネギには悪いがトラウマを作ってもらう。
これから先、原作の展開において重要な転機点だからだ。
なおかつ囿になってもらう。

ネギどころか、ネカネ姉さんにもスタンおじちゃんにも申し訳ないけれど父親が助けに来てくれるのだから問題ない。

ここにいるほうが危険なのだから。

「ネギ、釣竿は僕が持つていくから早く。」
「わ、わかったよ。」

鬼気迫る僕に従うネギ。

例え前世の記憶があろうと、小さな頃から一緒にいた兄弟だ。
心配でないと言ったらウソになるが、確実に助かる道があるのだからそれを頼らせてもらう。

「さて……。」

ネギが見えなくなつてから、僕は魔法を使う。
身体強化の魔法。

“戦いの歌”である。

そして、魔法を唱える。

遠見の魔法とさらにもう一つの魔法。

雷の暴風を唱える。

できれば闇の吹雪が良かったのだが、命のかかつてる状況で自分と

相性の悪い魔法を使うわけにも行かない。

出来るだけ収縮して細く細く、圧縮。

狙いをつけてここから村へ向かう下位悪魔達に照準をつける。

この日のためにネカネ姉さんから普通の杖も貰っている。

ここまでやればわかるだろうけれど、5歳にも満たない子供が勝つためにどうしたらと考えた結果。

僕は超遠距離からの連続射撃で出来るだけ蹴散らす。

そういう作戦をとることにした。

一発撃つことに移動して、また撃つ。それを繰り返す作戦である。

これでちゃんと助けられるかは微妙だが仕方が無い。

アーニヤのお母さんの家に近寄る悪魔を優先して狙い撃つ。

まずは一発目。

「雷の暴風っ！！」

僕というイレギュラーによって1人でも多く助かることを祈って。

ところがどっこい。

さすがにそこまで甘くないってのが世の中である。

最初は上手くいっていたのだが、やはり敵もさることながらやり手で、いつの間にか村の中まで追い込まれていた。

後ろからいきなり悪魔が出てきたのはビビッたわ、本当に。

ついつい“なんでやねんっ！！”とつつこんだのは仕方ないと思う。
悪魔が召喚されたってことは召喚主が近くにいるわけで。
おそらくだけど適当に僕のいる場所に召喚したのだと思う。

逃げてくる内にいつのまにか村まで追い込まれていたってわけさ、
こんちくしょうっ！！

「やばっ！？」

焼けまくりで崩れまくりの家を曲がった先にちょうど悪魔に出くわした。

戦いの歌で身体能力が増しているとはいえ、元が元だけに近接戦は非常にまずい。

いくら鍛えようと所詮は子供の体。

攻撃力に限界があると思って、特別鍛えてなかったのがここに来て裏目に出た。

だって、攻撃魔術だけで精一杯だったんだものっ！！

どちらも中途半端になるぐらいなら、攻撃魔法のみに特化した僕。
防御魔術も常時展開用の障壁ぐらいしかない。

そもそも、たった二年くらいでここまでやっただけでも褒めて貰いたい位である。

本を見る機会も少なかったから、ほぼ我流だし！！

ぶっちゃけ助けとか期待できません。

ネギの魔力は反対側。

父親と思わしき魔力も向かってはいるけれどネギに間に合っても僕には間に合わん。

というか育児放棄の父親に庇われたくなんかないわっ！！

というのは建前で、父様、神様、仏様。

何でも良いので僕を助けてくださいっ！？

「プライドなんかより命のほうが100倍大切ですっ!!」

急性アルコール中毒で前世の生涯を閉じた人間とは思えない言葉を吐き、僕は必死に悪魔の攻撃をかわす。

悪魔パンチとか叫んでるけど、それどころじゃねえっ!?

そのまま必死こいて近くの家逃げ込んだ。

「っひうつ!?!」

目の前には石像。いきなりのこととて悲鳴を上げかけたが、そこで声を押しとどめる。

なぜなら・・・

石像はアーニヤのお母さんだったからである。

「・・・おばさんっ!?!」

もちろん、何の返事も無い。

何度呼んでも返事は無い。

当然だ。

すでに石化しているのだから。

それでも呼ばずには居られない。

前世の記憶があるとはいっても、自分はすでにこの世界の住人である。

そしてこの世界で本物の母親よりも母親として感じている彼女の悲惨な姿に、茫然自失とする。

そして守るように立っていたアーニヤのお母さんの背後には幼馴染のステラが居た。

ネギにとっての幼馴染がアーニヤならば、自分にとっての幼馴染がステラである。

肩くらいまで伸ばした茶髪と、くりつとした目が可愛い元気な

女の子。

その目が恐怖に彩られて、そのままの状態であらずんでいる。その状態で石化しているのが、いつまでもいつまでも恐怖に縛られ続けているように思えて見ていられなかった。

というよりも、ワレながらあほらしいほどにショックを受けていた。すでに精神年齢は下手な大人より高いはずなのに。

4歳相応の反応。

すなわちただただ、泣き続けるしかなかった。

何もできず、何もしようとせず。

ただただ嗚咽を上げて。

慟哭するしかなかった。

理性では、このままではいけない。動け、逃げろ。

そう感じているのに感情がそれを許さない。

理性を簀巻きにして鎖でがんじがらめにして、ひたすら理性の足を引っ張る感情。

体が金縛りにあったように動かず、指一本動かないくせにバカみたいに涙腺は反応する。本当にバカみたいだ。

「っひく・・・っひくっ・・・」

泣きすぎて、痙攣して、喉から勝手に声が出る。

嗚呼、どうにもならない。

また死ぬんだろうな。

そう思った瞬間。

僕の意識はそこで途切れた。

「困っちゃうよ。」

死なないうようにって言ったのに、死ぬ一歩手前になってもらっちゃ。

「

僕の眼前には久しぶりに会う金髪少女。

ここは・・・あのときの？

「そう、あのときのあの場所だよ。」

死にそうになつたので、強制的にこちらに呼び出したの。
やっぱり修行期間を設ければよかったかなあ？」

「・・・そ、それどころじゃないだらうっ!？」

ついつい声を荒げちゃう僕。

仕方ないと思う。

ただそんな僕を冷たく見据えて、金髪少女は一言。

「別に君がどうしようと君の勝手。そういう話だったし。
でも、死なれるのだけは困るんだよ。
お手伝いをしてもらうためにはね。」

「アーニヤのお母さんとステラは・・・」

「助けることはまあ不可能ではない。」

でも、それは私で無くて君にしか出来ないこと。」

「ど、どういうこと・・・？」

「まあ、面倒な説明は省くけど、世界に干渉するには世界に生きる
物で無ければいけない。」

だからこそ、君をあの世界の住人として転生させたの。」

つ、つまり？

「つまり助けたけりや自力でしろってことね。でも、それも今となつては無理。

世界が認めてしまったから。あの歴史を。」

「は、はあ。」

よく分らないけど、彼女達を救うのは無理ということだろうか？
「世界の歴史を変えるには外部から潜り込んだその世界の住人が必要ってことよ。

でも君はすでに世界に認識されてしまった。

たとえばAという世界の歴史を変えようとして、外部の世界からBという人が介入しようとする。

Aの世界に本来存在しなかったBはAの世界の動きにありとあらゆる面で影響を与えることが可能なんだけど、Aの世界に影響を与えた瞬間からBの人は外部から来たAの世界の住人としてでは無く、元々いたAの世界の住人として認識されることになる。

まあこの説明は理解できなくても良いけど、結論を端的に言えば私が君を過去に送ってあの日を繰り返したとしても、世界による強制力が働いてどんなにがんばってもあの日あの時の出来事を変えることは出来ないってことよ。」

「・・・難しいことばかりで分からないけれど、とりあえずタイムマシンに乗って過去を変えるなんて虫のいいことは出来ないようになってるってこと？」

「うん、そういうこと。」

でも、神様である目の前の金髪少女ならば出来るのではないだろうか？

「出来ないよ？」

何でも出来たら、君の力自体借りないよ。

あの世界に干渉して欲しいために干渉できる体。

すなわちあの世界の住人として転生してもらったわけ。」

うぐ・・・それもそうである。

「それよりも落ち着いてきたみたいだね。

この空間は安らげる場所でもあるから、精神的に追い詰められたらいつでも気軽に来るといいよ。」

「そんな簡単に出入りできる場所なの？」

「うつん、出来ないよ？」

「出来ないのかよっ!？」

「3日3晩断食するくらいの根性と気合で持って始めて来れる場所だよ。」

「気軽にという言葉はどこへっ!？」

「ちなみに水無し断食。」

「死ぬわっ!!」

水も無いとか!？」

死んであの世へ、この世界に來いってことかいなっ!？」

「元氣が出たようで何より。

んじゃま、ほいっ!！」

「ひいあっ!？」

いきなり目潰し攻撃をしてくる金髪幼女。

目がああああああっ!？」

ひぐうあああああっ!？」

焼けるように目が痛いっ!？」

何をしたのっ！？この金髪幼女はっ！？

「生きるための力をあげるっていったでしょ？
とりあえず不老と適当に魔眼の力をあげたから。」

「ま、まがん？」

目を赤くして涙しながら聞き返す僕。

「頭を潰されても生き返れるように不死もつけたかったけど、それは世界の理ことわりからして不可能。せいぜい吸血鬼並みの再生力で精一杯腕や内臓の一つや二つは大丈夫だけど、頭をぐちゃで死んじやうからその辺を気をつけてね。

ちなみにコレは真祖の吸血鬼でも一緒。

エヴァンジェリンを殺したかったら頭を狙うようにしてみてね。」

いや、殺さないよっ！？

満面の笑みで何を言ってるの！？この人っ！？

「魔眼の効果はあらゆる物に対する“視認能力”。地味だけかなり使えるよ？」

音の波はもちろん、本来人間には見えない赤外線や紫外線。

赤外線が見えるために熱源探知も可能。

温度ももちろん視認出来るし、魔法も西洋、東洋問わず術式を視認可能。

精霊、妖精、幽霊といった存在も確認できるし、魔力の残り香まで使いようによつてはかなり強力な力になるから十二分にいけると思う。

ついでに言つと使つてる最中は眼球が白くなるから気をつけてね。
他の人に見られたら“何、こいつ！？白い目とか気持ち悪いんですけどゲラゲラ”となるから。」

「ならないよっ!？」

「なるよ。そういう呪いも一緒にかかっているから。」

「なんでやねんっ!？」

「ウソだけど。」

「ウソっ!？」

金髪少女はウソが好きな様である。

いつか殴ってやる。

性別も無いだろうし、女の子の格好をしてるだけの物体ならば問題ない!!

「殴ったところで痛くも痒くもないんだけどね。」

まあ、話はこれくらいにして。

いつでも監視できるわけでもないし、今度こそ死にそうになってもらっちゃうと困るから、修行してもらうために過去に飛んでもらうよ。」

「うえっ!？」

いや、いきなり過去とか!？」

どうしてまたっ!？」

「修行期間だよ。」

ちなみに15歳くらいまでは成長するけど、そこから止まるから。成長。」

「は?ってーひいあっ!？」

また落とし穴あああああああああああああああああああああああ
あああっ!？」

いろいろ詳しいことは聞けたのだが、結局生きて何をするかがまた聞けず。

まだ聞きたいことがあるってのにっ!？」

「君が行くのはざつと700年前。

せつかくだからエヴァンジェリンあたりの過去を変えてみると良い。
一度存在して、したことは覆らないが、まだ存在してない時間軸の
歴史はいじれるよ。

達者でねえっ！！」

またしても落ち際に金髪少女の言葉を聞いたが、それどころではな
く。

僕は気絶した。

さて、目を覚ますと僕の目の前には無骨なカカシが立っていた。
カカシが立っていた。

大事なことだと思うので二回言ってみた。

なんでやねん！

なんでやねん！！

ツッコミも大事だと思うので二回言ってみた。

どっかの家の一室。

とりあえず、じっくりとカカシを見て、値踏みして。
もう一度声に出して言ってみた。

「なんでやねんっ！？」

いや、まあ良い。

カカシがあるのは良ししよう。

本来、鳥避けなり狸避けに使うはずの・・・畑にあるはずのカカシが家の中の寝室と思わしき場所に突っ立ってるのは、100歩譲ってよししよう。

目の前でギギと動き出した、ということも良ししよう。

中には電気で動くカカシがあってもおかしくない。

「おっすオラ、カカシ。

おめえの名前はなんだ？」

とか喋ってるのも無視しよう。

カカシが喋るはずも無いので、気のせいかな幻聴。

1000歩譲ってテープレコーダーが内蔵されてるか、簡単な反応なら出来るように組み込まれているのだろう。

そこもよしとする。

首にかかっているネームプレートに名前と思わしき「スーパーカカシゼット」というのもネーミングセンスにそこはかたなく憐憫の情を感じるがそこはまあ良い。

カカシに対して、丹精込めて作ったカカシにスーパーカカシゼットという名前をつけてしまう人も居るはずだ。

問題はアレである。

コレである。

「なぜまた使用済みを寝室につっこむわけっ!？」

カカシはもともと畑に使われていた現役バリバリのカカシらしく、思いつきり泥まみれ、砂まみれ、穂まみれである。

米農家で使われていたものだったらしく、動くたびに穂がパラパラ

と落ち、泥も砂もちろん落ちる。

寢室の床がカオスなこととなっていた。

虫も付いているようでヨコバイと呼ばれる農家における害虫。（セミの仲間）それまでもが室内であれよあれよと飛び散る。

意外と数があつて、うつつうしい。

そして枕元には手紙が一通。

目の前をピョンピョン飛び跳ねるうつとおしいヨコバイを払いのけつつ。

手紙を見ると差出人は神様からであつた。

内容は以下のとおりである。

<おつす！

オラ神様。

そこは700年前のマホラ。

世界樹の加護で外からは滅多に人が来ない迷いの森と化してるから修行の場所としては最適。

適当にがんばってね。

ある程度力が付いたらエヴァンジェリンの出身地に向かうと良いよ。暇つぶしになるだろうから。

中世欧州のどこだったかな？

まあ適当に魔力探知で探してね。

魔眼を使つてもおつけ。

P S

その力カシは君が寂しくないように現代日本の農家で現役バリバリの力カシを一つチョイスして失敬してきたもの。

感謝してね。

寂しさが紛れるどころか、日本の空気を感じれて一石二鳥！！
泥とか面倒だから自分で掃除して。

どうせなら掃除した物をよこせて？

甘ったれんなYO！

神様は忙しいのです！！

詳しいことはその力カシ。

スーパークカシゼット君にでも聞いてね。

ではまた。

次に会うのはいつになるか分からないけどくれぐれも死なないように。

親愛なるあなたの神様より。ヨコバイとかww>

「・・・」

「お、おう？どうしたんだべ？」

手紙を読み終えた力カシがそんなことを聞いてきた。
が、その言葉に答える余裕なんざない。

「ぶっころす・・・ころすころすころすころすころすころすころす
ころすころすころすころすころすころすころすころすころすころす
ころすころすころすころすころすころすころすころすころすころす
ころすころすころすころすころすころすころすころすころすころす
ころすころすころすころすころすころすころすころすころすころす

ころす！！

ぜったいに殺してやるんだからなああああああああああ
あああああああああああああああああああ
！！

うざいことこの上ない手紙だった。

最初のおっす！から始まって途中のラップ調。

最後の“ヨコバイとかww”をわざわざ紙に書くという部分。
確実にわざとである。

今この瞬間も僕の周りをピョンピョン飛び跳ねるヨコバイ達。
これもまた怒りを加速させる。

とはいえ、どちらかといえばこのヨコバイ達も被害者だ。

「ああ・・・わかっているとも。

ヨコバイ君達。

君たちも苛立っているんだろう？

むかっているんだろう？

こんなバカにもてあそばれるということに・・・」

いや、これで終わりならば良かった。

良かったのだが。

ここまでならば怒らない。

まあむかつくが、そうそう怒らない。

問題はハラリと落ちた二枚目の手紙だ。

そこにはこう書かれていた。

上がると、さらに一枚。

手紙があった。

そのままゴミ箱にツッコみたいが、また下手な呪いだと困るので見ておかねばなるまい。

<女装中は女の子言葉。

それも呪いに引っかけるのでよろしくね。

イタズラ大好きっ子代表取締役 神様より>

「——っ!」

声にならない叫びを上げて僕は発狂した。

コレ以来、闇属性の魔法と相性が良くなったのは唯一の救いだった。

第一目標は修行

第二は一度起こった歴史を変えられないなら、後から変えれば良い。

アーニャのお母さんとステラの石化解除薬の開発。

第三にあの金髪幼女を血祭りに上げること。

それを念頭に僕は修行をすることにした。

英雄どころか人外を殺すための力を手に入れるため。

僕は頑張る事となった。

一方、不思議空間では。

「ふう。これだけやれば気が紛れたかな。

全く・・・人というのは得てして脆い物だよねえ。

少しの情を受けた人間を助けるためだけに命を捨てようとするとは、こうしたことが起こらない様に薄情な人間を選んだつもりだったのに、大失敗。」

とぼやく金髪の少女。

残念そうな声音でありながら、少しの喜色が見て取れる。

「まあそれが美徳というものだし、仕方ないといえば仕方ないか。せいぜい適当にがんばってね。

私は世界の調整をしておかないと。」

アリスは知らないことであつたが、闇属性との相性が良くなったのはネギと同じく心に闇を抱えたから。

自身の母代わりと幼馴染をあんな目にした奴らに対する嫌悪、憎悪、恐怖といった負の感情が源泉と化したから。

いつかその闇が払われることを祈って、金髪幼女は今日も世界の管理を始める。

「次の世界は何を模して造ろうかなあ。」

そんなことをぼやきながら。

2つ目 のんびり自給自足生活

さて。

ふざけた呪いに呪われながらも、私は今現在。

5歳の誕生日を向かえ、日々家事に従事する毎日と化して早一ヶ月。ネギは大丈夫かなあとかネカネ姉さんはちゃんと治療してもらえただろうか？などと家族の心配をしつつも、家事修行の毎日である。自身の戦闘面での修行は体が出来てから。

すなわち15歳になってからするとして、今は魔法部分の修行と石化解除薬の研究である。

驚くべきことに、スーパーカカシゼット君にはあらゆる方面での知識、技術が内包されているようで、色々なことを教えてもらっている。

現在は中世なので、その時代における言葉。

すなわち古語や、いずれエヴァンジェリンに会いに行く際に必要なヨーロッパの言葉。

それらも学んでいる。

古典は不得意だったので、非常に面倒なことこの上ない。

「スパ君、今日のご飯は何が良い？」

「オラ、スパゲッティがいいだ。」

驚いたことに、スーパーカカシゼットーすなわち、スパ君も飲み食いをする。

おそろしいくらいに多機能なカカシだ。

しかも無駄にグルメ。

この辺の嗜好までつける必要があったのかと思う。ちなみに食事は練習がてら私がやっている。

「おっけ～。さっそく僕が腕によりをかけて作ってやるぜい……
しまった。」

パンと音を発てて弾け飛ぶ服。

ゴスロリ調の服が見るも無残な姿となる。

「……はあ。」

厄介な呪いだな。」

女装中は女言葉で無いといけないという呪いに反したため、弾けとんだ服。

これで10着目である。

どうせスパ君以外にないわけだし、すっぽんぽんで居ようかとも思うがいずれエヴァに会いに行くときに女言葉を癖付けておかないと困ったことになるので、代えの服を着用する。

うっかり男言葉を使って、目の前でパン。

……想像するだけで、頭が痛い。

下着は男物でもOKだったというのが本当に良かった。

「大丈夫だか？アリス。」

「大丈夫だよ。」

そして、ここ一ヶ月で分かったことと言えばスパ君がとても良い人……じゃなくて良いカカシだと言う事である。

私が気落ちすると必ずといって良いほど心配してくれる。

あの金髪幼女に比べてなんと良い子か！！

「不幸中の幸いだったのは呪いの範囲が狭いことだ……かしらね。」

「僕」
僕っ娘という言葉があるように、”僕”という一人称は許されるみたいではあったが、一人称が”私”ならばある程度乱暴でも、はっきりとした男言葉でなければ概ね大丈夫なようである。そのためにまずは一人称から直した。

正確には私が”女としての言葉を使っている”と意識するかどうかで呪いのあるなしが決まっているようで、語尾に”くぜ”とかあからさまな言葉を使ってもそれが私の中で”女性の言葉使いだ”と認識していれば服ははじけ飛ばない。

それを意識しながら今までどおりの言葉使いにすれば良いのだが、これがまた難しく。

そもそも元の言葉使いでいたいと感じることですでに男言葉を意識していることに他ならず。

緩い様で結構キツイ忌々しい呪いである。

実にむかつく呪いだ。

さすがに一生ということは無く、とある条件で解除されるらしい。それは原作キャラとの干渉、もとい会話。

誰でもいいから原作キャラと会話することで呪いが解けるらしい。というわけでその面からもエヴァンジェリンに会いに行きたいわけだ。

「地道にがんばるしかないよね・・・うん。」

「オラも手伝うからそんな悲しそうな顔しないでくれた。」

「うん、ありがとう、スパ君。」

本当に良い力カシだよ君は。
な、泣いてないんだからね！！

そんなこんなで私は今現在。

ヨーロッパへと向かっています。

魔女狩りとか100年戦争とかの真っ最中であるけど、今の私なら大丈夫だろうということ。

居をヨーロッパで作るべく、がんばって見たのです。

「スパ君・・・本当にこのあたりなの？」

「そうだ、おそらくこの辺にエヴァンジェリンが生まれる家があるだ。」

あれから80年程が経ち、純粋な戦闘力も現在は原作で言うフェイトレベルとなったので、さっそく国を移動してみた次第です。

石化解除薬はなかなか難しく、あと100年はかかりそうである。

「中世ヨーロッパの町並み・・・といっても汚いなあ・・・」

「仕方ないだ、アリスが生まれた時代と比べたらダメだべ。」

その辺に排泄物が撒き散らされてるってどういうことよ？

臭いがキツイです。

「下水なんて配備されて無いだからな。

基本的に外に捨てて一箇所に集めるだけだべ。」

「うっ・・・納得いかないなあ・・・」

せっかく楽しみだったのに・・・」

ちなみに外見は実の母親であるアリカ王女そっくりなので、この顔

で好き勝手やると母親が困るだろうということで髪染めの魔法を使っている。

もちろん元日本人たる私は黒をチョイス。

髪の毛を黒に変えるだけで別人のような雰囲気になるから十分だろう。

身長は160センチ。

12歳くらいになってからぐんぐんと伸びていた身長が15歳になったとたんに止まってしまい、もう10センチは欲しかったものである。

「まだ10年ちょっとかかるだからその間に過ごすための居を構えるだ。」

「うん、分かってるよ。」

何よりもこの忌々しい呪いを解くことが出来るからね。

私もやる気が沸くって物よ。」

とりあえず、未開の森に居を構えることにして、畑でも耕しながらのんびりと10年を過ごそう。

原作では600年前あたりに吸血鬼になったとしか聞いてないから詳しい部分は分からないんだよね。

というか、80年も経てばあらかた忘れてしまった。

「まずは家を作らないとね。」

スパ君は家の設計図と指示をお願い。

私が組み立てるから。」

「分かっただ。」

家は数日で建て終わり、畑を作って米やら野菜、一部の果物などを植えてのんびんだらりと10年ほど過ごしていたある日。

人が迷い込んできた。

「どなたかいらっしゃいませんか!？」

家の外から声がかかる。

「誰だろう？」

こんな辺鄙なところに人がやってくるなんて珍しいわね。
なんとなく予想はできるけどさ。」

「オラが出るだか？」

「いやいや、カカシが動いてたらダメでしょ？」

魔法世界ならともかく、ここは旧世界だよ？

下手したら魔女狩りの手がここまで来ることになるよ。」

「そ、そうだか。スマンだ。」

「別に謝ることじゃないけどね。」

「すいませーん!」

「はいはい、今出ますよ。」

とたとたと玄関に向かって、扉を開くとそこには満身創痍で放っておけば死ぬような男が1人。
血まみれの女の子を背負って突っ立っていた。

「何か御用でしょうか？」

想像はつくけどさ。

「あ、あの!!」

む、娘を・・・娘を助けてくださいっ!!」

と言つて、土下座をする男。

「不躰な願いなのは分かっています!!
何でもしますから・・・どうか、どうか娘を助けてください!
天使様に助けていただくしかないのです!!」

いや、もうね。

気まぐれで街に出た時に魔女狩りの被害にあつた人を見逃せないからつて、その魔女狩りの組織を暇つぶしがてらに潰してみたんですよ。

あの時は私も若かった。

と言つても5年くらい前のことなだけどね。

元日本人としては見逃せないくらいの惨い参上だったから、ついつい助けたら魔女狩りの被害に遭つた人達にあがめられちゃつてまあ大変。

とりあえず助けたからといってそのまま、ほっぽり出すわけにもいかず。

適当な隠れ里的な村を作つてそこに被害者をぶち込んで、村おこしの手伝いや病気の治療、生活環境の改善をした結果。

そこから徐々に私のこの住処の噂が広まつて、ここにすれば奇跡の御業で何でもしてくれるみたいな噂まで広まり。

それからと言うもの、ぼちぼちと人が来るようになったわけ。

最初の頃はスパ君以外の話し相手が居なかったからさ。

嬉しかったんだけど、こうも人が来られちゃうとね。

面倒さが先立つてくる。

私の噂を聞きつけた人間が何も善人ばかりとは限らないわけで、たまたま武器を持った兵士がやってきたりするわけである。

そして「死ね!忌々しい魔女め!!」みたいな?

普通の人には理解できない奇跡の業。すなわち魔法を使ってるからって天使様みたいな恥ずかしい二つ名まで出来ちゃって、凄い恥ずかしかったりする。

神様の使いだ、なんだとあなたが間違ってるので否定するのもね。そう考えると天使様ってのは意外にも的を射ていると言って良いのだろう。

ちなみにこの大陸では滅多にいない黒髪から魔女狩りを行う連中からは”悪魔”だなんだと呼ばれるときもある。

失敬な輩もいるものだ。

自分で言うのも難だけど、こんなにも愛らしい姿だと言つのに。

「・・・はい、終わりました。」

とかなんとかやってる間に魔法で治療を終える。

純粹な戦闘力で言えばフェイトレベルと言ったが、魔法の腕で言うならばおそらく世界一だろう。

無駄に研鑽を積み重ねてきた結果、大体の魔法で無詠唱、遅延詠唱、複数詠唱が可能となっている。

私が神様から貰った能力は不老と魔眼のみなので、この力は単なる才能である。決してチートなんかでは無い。

サウザンドマスターの血って凄いなと再認識するのみだ。

ついでに言つと魔力を増やす訓練も行っているので、今は元の2倍くらいある。元が元なのでかなり膨大な量だ。

とは言つてもやはり増やしづらいことには変わりなく。80年欠かさず訓練してこれなので、魔力に関しては才能と言うよりは努力と積み重ねが物を言うのだろう。

あと600年ほどあるが、その時までどれくらい増やせるかがちょっと楽しみ。

お金をコツコツと貯める感覚に近いかもしれない。

「あ、ありがとうございます!!
天使様!!」

私の怪我まで治してくださって・・・こ、このご恩は決して忘れません!!」

「いえ、お気になさらずに。」

困ったときはお互い様ですわ。」

「・・・あ、ありがとう・・・ございます・・・ぐず・・・うう・・・」

なんか感極まって泣き出してしまった男である。

まあ、見た感じ魔女狩りの被害の遭った人だから、人に優しくしてもらうこと自体滅多に無かったのだろう。

泣くのも無理は無い。

「この家の裏手に簡単に舗装した道があります。」

道なりに進むと、とある隠れ里に着きますからそこで新しい生活を営むと良いでしょう。」

「そ、それは・・・あの、争いも差別もないという桃源郷のことでしょうか?」

「桃源郷なのかどうかはわかりませんが、差別と争いが無いことは確かですよ。」

桃源郷なんて名前が付いてるのかな?

あの村も有名になった物だ。

村人には出来るだけ秘密にするように言ってるんだけどね。
人の口に戸は立てられないってことか。

「あ、ありがとうございます。」

「あ、それと少し頼みたいことがあるのですが、構いませんか?」

「は、はい！なんなりと申し付けてください。」

そこまでかしこまらなくても。

とりあえず玄関においておいた車輪の付いた木箱を渡す。

「村に行くがてらこれを届けてもらいませんか？

野菜が入っていますから。」

「わかりました！

喜んで受け取らせてもらいます。え〜っと、この紐は？」

「車輪が付いてますので引っ張るだけで運べますよ。

娘さんを抱えながらも出来ると思いますが・・・大丈夫ですか？」

「ええ、なんとか大丈夫です。

本当にありがとうございます。」

「いえ。

お気をつけて。」

「重ね重ねありがとうございます。」

野菜はおすそ分けである。

カカシと私が食べる分以上は腐る前に食べてもらわないともったいない。

「そろそろ潮時かしら？」

彼を見送って、そんなことを思う。

ちょっとした被害者ですらここにたどり着くことができる。

それすなわち魔女狩りの手がいつ届いてもおかしくない状態である。

このまま私がここにいると村の存在までばれかねない。

まあ、ここに来る人間を皆殺しにしてしまえば良いんだろうけど、
そついう短絡的な思考はちょっとね。

もちろん法律なんて無い物騒な今の世の中。
人殺しの一つや二つはもうすでに経験済みだが、だからといってこの選択は野蛮極まりない。

「うん、決まりかな。
スパ君。」

数日中にエヴァを探しに行くから家の中の荷物をまとめてくれる？」

「急だな。別にいいだが、どうしてまた？」

「隠れ里の存在までバレかけてるからね。」

私はこれから付近の魔女狩り組織を潰した後、村の人に強めの口止めとお別れの挨拶をしてくるから準備をしておいてくれるかしら。」

「そうだか。」

「わかっただ。」

「うん、お願いね。」

こうして私ののんびり自給自足生活は終わりを迎えた。

おそらく、真祖の吸血になる直前か直後の今ならただの10歳児に変わりないエヴァンジェリンが原作とどう違うかちょっと楽しみになりながら。

彼女に会った後ならば久方ぶりに男物の服を着れるというのもあって、ちょっとテンションが上がってる私。

「うん、楽しみだ。」

なんだかんだで今の人生が良い物だと思っている。

3つ目 気軽なお節介はたまに傷

エヴァンジェリンを探すべく、のんびんだらりと旅すること1ヶ月。これまたなかなか見つからない。

真祖の魔力を辿っていいこうと思ったけど、真祖どころか魔力の残り香を見ることが自体まれである。

ううむ。

この時代は魔法使いがそれほど存在しないってことだろうか？

どうやらエヴァちゃんはまだ真祖には至ってないようで、それっぽい魔力を感じることも無い。

スパ君も漠然とした位置を知識として知っているだけにしか過ぎず、手がかりが全く無い状況である。

「とりあえず、今日の寝床はこの辺でいいかな。」

「んだ。」

ここは小さな村外れの森の中。

ロールプレイングゲームじゃあるまいし、宿やらホテルがそうそうあるわけでもないこの時代。

野宿が基本である。

もしくは村や街の人に泊めてもらうかであるが、魔女狩りやら戦争で大変な今時分に得体のしれない旅人を泊める余裕のある家があるはずもなく。

もう一月も野宿しっぱなしで、もう会わなくてもいいんじゃないか？と思い始めてる私である。

「明日、近くの村に行って何の手がかりも無かったらおとなしくマホラの家に帰ろうか。」

これ以上は面倒だしさ。」

「オラも賛成だ。
布団が恋しいべ。」

もう女装して90年以上は経つ。

確かに呪いは解きたいが、今となつては野宿してまでの物ではない。
正確には分からないけど、あと500年もすればマホラ学園が設立
されるだろうしね。

「できれば復讐を止めてやりたかつたんだけどね。」

原作では自嘲気味に最初の1人は憎しみで殺したと言っていたエヴ
アンジェリン。

後悔してはいないけど、して良かったとも思っていないみたいだっ
たから阻止しようかな？

とか思っていたんだけど仕方ないね。

「おやすみだ。」

「う、うん？」

ああ、おやすみなさい、スパ君。」

野生動物に襲われない様に、結界魔法を張った後、眠る私とスパ君
うとうとしていると急に沸いて出た様な魔力反応を感じた。

「っ！？」

「これは・・・人間とは違う魔力だな。」

魔力を感じる方向に視線を向けるスパ君。
私も同じ方向へ目を向ける。

「ようやく見つけた！

スパ君も付いてきてね。

私の予想通りなら、私1人じゃ難しいから。」

「わかっただ。」

影のゲートで、即時に移動。

魔眼を発動して即刻見つける！

「魔力の流れは・・・こつちかしら？
ん？」

エヴァちゃんと思わしき魔力の他にもう一つ。

ヤケに大きい魔力がこちらに向かってくる。

おそらくだが、エヴァを吸血鬼へと変えた誰かだ。

「ふむ・・・私の手で殺して置かないとダメね。

殺しておけば復讐をしようが無いし。

スパ君は先に行って、エヴァちゃんの気を引いておいて。」

言葉で返事をせず、頷いてそのままスパ君は走り抜ける。

私は私で戦闘準備。

闇の魔法を開発かつ会得済みなのでそれを発動。

最近の悩みは闇の魔法の影響で魔族化してきたせい、尻尾やら翼が生えてきたことである。

翼の色は髪の毛と同じ金色に近い黄色。

全く持って、天使様という名に相応しくなってしまったものだ。

「む？

お前は・・・村はずれに居た化け物か。

なぜここにいる？」

進路方向に待ち伏せ——というより道を通せんぼする。

「酷い言い草ね。

傷つくわ。」

不老とか魔族化したりとか、人間止めちゃってるから否定はできん。悲しいことに。

「それで、私に何か用かな？」

「いいえ、特には。

用が無いと会ってはいけないのかしら？

ダンディなオジサマ。」

「貴方ほど美しくも可愛らしい女性に声を掛けられる。殺気を垂れ流しながらでなければ歓迎したのだから？」

「あら、ごめんなさい。

これで・・・いいかしら？」

いかんいかん。

ついつい殺気が漏れてしまったようである。

修行が足りないね、私も。

殺気を抑えて、再度目の前の40頃のおじさんを見定める。

「それで、私に何用か？」

「なぜ吸血鬼を作り出したのか聞こうと思ひまして。」

私の言葉を聞いて、少し目を見開くおじさん。

「何のことだか分かりかね——」

「とぼけないでくださいな。
手が滑って喉に向かってしまうかも？」

とつと話を終わらせないと、エヴァちゃんがどうなるか分からない。
い。

それどころか付近の人間を皆殺しだ。

多分だけど吸血鬼と化した直後は手当たり次第に周りの人間を襲う、
獣同然になるはずだ。

ネギが闇の魔法に取り込まれかけたとき、人間が魔族化した直後は
そうなるのかかんとか言ってたから間違いあるまい。

まず殺されるのは身近な人間。

そんな経験させたくない。

スパ君が向かっているが、間に合うかどうか微妙である。

「あはははははははははは。

そこまで分かっているならば致し方あるまい。」

いきなり笑い出す男。

そしてあふれ出す魔力。

「あなた・・・もしかして・・・」

「そうだ！

私もそうなのさ！！

老いが怖かった私は不死と知れた吸血鬼となるべく研究を続けた！！

あまたの吸血鬼を捕獲し、切り刻み、その血の一滴に至るまで調べ
つくしたっ！！

そして見つけたのさ！！

いや、造り出した！！

人間でありながら、吸血鬼へと・・・究極の生き物へと進化する術

を！！

いや、いや、いやいやいや！！

いや、違っっ！！

吸血鬼をも越えた完璧なる超人へと化す手段だっ！！」

おじさんの瞳孔が開き、紅く染まる。

厚みと質が増して行く、大量の魔力。

それを目で、体で感じる私の体が震えだす。

「吸血鬼が本来弱点とする、陽光や十字架、聖水。

それらをも克服した吸血鬼ならざる吸血鬼。

真祖の吸血鬼。とても呼ぼうか。

そのための術が今しがた完成したのだ！！

あの娘のおかげでなああああっ！！」

なるほど。

エヴァちゃんは実験台だったということか。

エヴァちゃんにかけた術が成功し、完成したと判断。

おそらくすぐにでも自分に使ったのだろう。

どおりでエヴァンジェリン以外の真祖と呼ばれる吸血鬼がいなかったわけだ。

まあアレだ。

こいつは殺さないとだめだろう。

「しっかり馴染んでからと思っていたが・・・やむを得まい。

貴様でこの力を試させてもらおう！！」

「っ！？」

ズガンと地面が抉れる音と共に、瞬時に距離を詰めてきたおじさん。改め外道魔法使い。

予想外のスピードだ。

とはいえ、十二分に反応できる。

だが。

あえて私は反応しなかった。

「じふつ。」

胸を貫く外道の腕。

血が傷口から、口腔からもどばどばあふれ出る。

「ふはははははあははあはつ！！
どうだこの力っ！？」

黒い髪にその魔力。魔女狩り組織の人間を虐殺して回っているという噂に聞く天使様とはお前のことだろう？

その辺の人間では足元にも及ばない天使といえど、私の力の前にはゴミに等しいっ！！

身の程を弁えるが良い！！

完全な生物と化した私にはたとえ、神の使いとは言え勝てるはずが
「――ぎああああがつ！？」

私は外道の腕を掴み、そのまま”握りつぶした”。

「ぐあああああああああつ！？」

き、貴様っ！？

貴様っ！！貴様っ！！貴様ああああつ！？」

すぐさま腕を引く外道魔法使い。

涙を流しながら泣き喚いているがどうでも良い。

「ふぐぐが・・・があ・・・ふく・・・ふふふ・・・くくくくあは
はははあはは。

見ろっ！！

見ろっ！！

見てみろっ！！

死に損ないの思いがけない力にビビったが、所詮は魔力が多いただけの人間！！

私は究極だ！！

完璧だ！！

腕が……腕がすぐに治っていく！！

あははあははあははっ！！

貴様が死に物狂いで与えた傷ですらこのとおりすぐさま治る！！

無駄だったなあっ！！

せめて、腕だけでも思ったかっ！？

だが無駄だっ！！

貴様はそのまますぐにでも死ぬだろうが、私は傷一つ残らんっ！！
ざまあみろだっ！！あはははあははははははははっ！！」

嗚呼・・・なんと、こいつ凄いウザい。

不愉快だ。

自分のエゴで年端もいかない子供に業を着せて。

自分は何も思っていない。

下手をしたらすでに忘れているんじゃないだろうか？

これから先、彼女がどれだけの苦勞と悔恨と苦痛にまみれて生きていくのか一欠けらも理解してない。

しよびりしてない。

出来ていない。

所詮、この世は弱肉強食だ。

弱い物は泣き寝入りするしかないかもしれない。

それが正しいかもしれない。

それが理かもしれない。

世界の決まりかもしれない。

でも、しつたことか。

しつてたまるか。

あれだな。とにかく殺さないと。

「あはははあははは・・・はは？

なっんだとっ！？」

私の胸に空いていた風穴がシュウシュウと音を発てて塞がっていく。急激な細胞分裂による熱で傷口付近の血液が沸騰し、蒸発している音だ。

「な・・・なぜ！？」

「究極の生物とやらが貴方以外にもいるってことじゃない？」

瞬動で距離を詰めてアイアンクロー。

頭をぐわしつと掴む。

「き、ぎざまつ！？」

こ、このばげものめっ！！」

「貴方に言われたくないわよ。」

そのまま握りつぶす。

トマトが潰れるような音を発てて、脳漿と髄液、血液、骨片などが飛び散る。

「頭を潰せば殺せるはずだったから・・・これで大丈夫よね？」

血にまみれながら、呟く私。

「・・・さて、早く向かわないと。」

誰にと言うでも無く、口を動かしながらエヴァンジェリンの元へと向かう。

スパ君は大丈夫だろうか？

目の前には眠る少女。

エヴァンジェリンが居た。

僕は結局、また同じミスを犯した。

犯してしまった。

外道魔法使いのクソつたれな話を聞いていたにも関わらず、また後々ながら理解した。

もつと頑張ればよかったんだ。

頑張つて頑張つて、頑張つて。

頑張つて彼女を探して助けてあげればよかったんだ。

こんなバカの実験台にされた彼女が不憫で不憫で仕方が無い。

結局のところ、どこかで僕は他人事として見ていたんだ。歴史を変えられたにも関わらず、また失敗してしまった。復讐を阻止してあげれば良い？

バカじゃないのかと思う。

何を寝ぼけたことを言っていたのかと。

僕は不老だ。

これから先、1人で生きていかないといけない。

友達を作っても、家族を作っても最終的には1人残される。

無意識的に同じく不老となるエヴァを望んでいたのかもしれない。

1人残されるのが嫌だから。

だから否定的だった。

無意識的にでも意識的にでも。

元々の歴史に介入して物語を変えてしまうのは良くない。

せめて復讐を阻止してあげよう。

後々しこりとなるのだから。

そのしこりを取り除いてあげよう。

よしそうしよう。

なにが、あげようだ！！

してあげるっ！？

何を善人ぶっているだ！？僕は。

そんなことを思いながら、正当化しながら自分の汚い部分から目を逸らしていた僕。

あいつを見ていて気づいた、気づいてしまった。

あいつとなんら変わらないと言っ事に。

「別にエヴァが吸血鬼とならなくても、僕がエヴァのポジションに代わりに入ってやれば良かったんだ。」

物語でエヴァの出てくる所、全てにおいて僕が代わってやれば良かったのだ。

僕がネギに修行を付けて、茶々丸を作って、京都でフェイトと戦って。

そうしてあげれば良いだけの話だった。
そうしたほうが良かった。

僕が来たとき、スパ君と戦い合っていた彼女。
なかなか苦勞して彼女を眠らせるとき彼女は振り絞るように泣きながら、悲痛な声で、慟哭をあげた。

『私を・・・私を殺さないよっ!!』

父さんも母さんも・・・きつとソレを望んでいるものっ!!』

『そ、そんなこと・・・』

『貴方に・・・貴方に何が分かるっ!？』

何を分かるっ!？

貴方は親を殺したのかっ!？

殺したことがあるのかっ!？

体を・・・体を私の・・・私の腕で貫かれながら・・・「私が付い

てるわ」と私を抱きしめてくれた母親をっ!!

容赦なくそれを・・・その血を啜った娘にっ!!

実の母を食らう化け物を・・・娘を何も言わずに抱きしめてくれた

父親にっ!!

それに牙を突きたてた私の・・・私の気持ちの何が分かるっ!!』

『っ!？』

『殺してよ・・・お願いだから・・・私を殺しなさ・・・い・・・
よ・・・こんな化け物。
生き・・・て・・・いい・・・けない。』

変えられたにも関わらず。

これで僕はまた一つの過ちを犯してしまった。

僕は本当にバカだ。

「アリス・・・気にすることないだべ。
仕方なかったことだべ。」

「もう少し私が・・・いや、村で聞いていれば分かったはずだよ。
あそこで野宿せず、もう少しやる気を出して・・・いや、そもそも
真祖になることを阻止してあげればよかったんだ。

本当に嫌になる。

もう変えられない。

世界は・・・歴史はこの時間の僕を認識してしまった。」

「・・・おめえが気にすることでは・・・」

「・・・違うんだ。」

違うんだよ。スパ君。

僕は自分と同じ・・・存在が欲しかったただだった。

もつと真剣に、真面目に考えてやれば良かった。

分かっていた。

分かっていたはずだった。

自分を真祖にした人間を殺す。ただ真祖にただけだったら動機と
しては弱いと思ってた。

もう少し早く思い出せばよかったんだ。

魔族化した直後のデメリットを。

彼女が憎んで殺した唯一の人間。

彼女は600年生きるうえで色々な迫害を受けていたはずだ。それでもはつきりと憎んで殺したのは最初の1人。

あの外道魔法使い。

これだけのことがあれば無理もなかっただろうさ。

なにが復讐は阻止してやろう・・・だ。

馬鹿馬鹿しいにもほどがある。

きつとあいつを殺すことで、彼女は気持ちに区切りをつけるはずだった。

その区切りを僕の勝手な自己満足で消してしまった。

彼女という人間を構成する上で一番重要なファクターだったはずだ。

「

「・・・だけどさ、おめえは・・・」

「ううん、大丈夫。

分かってるよ。

別に助ける義理も情も無いことは。

でも、どうしようもないんだ。

目の前であんな物を見せられちゃうとね。

どうしようもなく、虚しくなる。

もう少しなんとか出来なかったのか？と思ってしまっ。

何よりもあいつを殺してしまった。

キツカケを。

けじめを。

区切りを。

それを失くしてしまった。

その責任は僕が取らないといけないよね。」

「・・・アリス。」

スパ君は心配そうに僕を見る。
本当に良い友達を持った物だ。

僕みたいな阿呆なんかにはもったいないくらいだ。

「スパ君、頼みがあるんだ。

僕にはまだ使えない・・・使いたくないし、必要ないと思っていた魔法。

それをエヴァに掛けて欲しい。

念入りに、完全に、きっちりかつちりと。

どうあっても解けないくらいに堅牢に頑丈に。」

「そ、それはなんだべ？」

不安そうに僕を見る。

別に大したことじゃないよ。

スパ君。

「・・・分かったべ。

本当に良いだな？」

おめえさがそこまですることは・・・。」

いいや、僕だからこそするべきなのさ。

「大丈夫。

金髪幼女の手伝いはしっかりとやるからさ。」

「・・・分かっただ。

決意は固そうだからな。」

「嫌なことさせてごめんね、スパ君。」

「気にするなだ。

おめえとオラの仲だからな。」

ありがとう、スパ君。

せめてもの償いが出来そうで一安心の私である。

4つ目 仇敵

「てやつ！」

「甘いわ。」

突きを放ってくるエヴァちゃん。

それに合わせて、カウンターを放つ私。

たまらず一撃を受けて倒れこむエヴァちゃん。

「その程度で殺せると思ってるのかしら？」

「・・・ごほっ・・・ごほっ・・・」

「何を休んでいるの？」

私を殺すつてのは口先だけ？

貴方のお母さんとお父さんが今のあなたを見たら、どう思つかしら？
まあもうこの世には・・・」

「だ、黙れっ！！」

肩で息をしながら、向かってくるエヴァちゃん。

体を半歩ずらして足を引っ掛ける。

たまらずズツこける。

「戦いの最中に感情を持つことを悪いとは言わない。

でも、感情をそのまま出すのは悪手ね。

気をつけなさい。」

「・・・えらそうに・・・」

「そういうことは一撃でも私に当てることが出来たら言いなさいな。

今のままだと負け犬の遠吠えよ？」

「・・・っ！！」

エヴァちゃんと暮らして早一週間。

私の思い通りに事が進んでいる。

私がスパ君に頼んだのは“記憶の改竄^{かいざん}”。

彼女を真祖にした人間が私であるということ。

これは勝手なお節介で復讐を取り上げた私だからこそやらなければならぬこと。

眠らせる前に聞いた「殺して」というセリフ。

自殺しないかが心配だったけど、文字通り目の前に親の仇を用意したのが功を奏したようで、生きようと懸命にもがいてるのがありがたい。

どの道、自殺するほどの勇氣は無いだろうと思っていたけれど、これでまず間違いなく自殺はしないだろうから良しとする。

「今日はコノくらいにしておくね。

スパ君、晩御飯の用意をしなさい。」

「了解です……だ。」

少し高圧的な物言いなのは、スパ君が私に無理やり従わされているという構図を作り出すため。

スパ君にはエヴァちゃんの味方になってもらう。

これから先、私は彼女の生きる目的としても生きることになる。

復讐を目的としたほうが、イキイキするかなあと思ってやってみた作戦。

ちなみに記憶の改竄に使った魔法は強力な物である代わりに、効果時間が短い。

50年ごとに掛けなおさないといけないのだ。

短いといっても不老である存在から見ればの話だが。
徐々に弱まってしまふのだ。

「・・・出来ただ。」

「敬語を使いなさいと言わなかった？」

「す、すまんだ・・・です。」

このやりとりは何度もした。

スパ君には申し訳ないが、直しても貰わないと困ってしまう。
残虐非道を売りにしたいのに、口で諫めるだけではいずれ演技だと
バレる可能性がある。

今はまだまだ大丈夫だが、エヴァちゃんが100年、200年と経
験を積んで行けば、まずバレる。

まあ、それを言えば、ストレス解消の玩具遊びと称して、エヴァち
やんに生きるための修行をつけてやってるのもバレ兼ねないが、そ
こはそんな疑問も抱かないくらいに徹底的にしごく。

勉強面は似たような立場に置いているスパ君に教えてもらっ
そのうち、勘繰られないように修行とは全く関係なく苛めることも
必要かも知れない。と思うと今から鬱だ。

そうしたことと挟まなきゃ難しくなってくるよね、やっぱり。

「食べたらとつとと寝るのよ、言わずもがなガンガン苛めていくか
らね。途中で潰れたらつまらないし。」

「・・・」

無視してご飯を食べるエヴァちゃん。

最初はご飯も食べなかったのだから良いほうだ。

その後に寝入ったのを見計らって、スパ君が話しかけてきた。

「こんなこといつまで続けるんだべ？」

「オラ辛いだよ。」

「うう・・・それを言われると困っちゃうな。」

「そんなに敬語無理？」

「ち、違うだよ！！」

「オラが辛いつて言ったのはそのことじゃなくて、アリスが・・・」

「・・・分かってる。」

「友達が謂われなく憎まれてる・・・それを見るのが辛い。」

「そうでしょ？」

「んだ。」

「そこまで分かっただけでどうして・・・」

「まあ謂われはあるんだよ。」

「私が悪い。どう悪いかはもう話したでしょう？」

「だけでも・・・」

「大丈夫だって。」

「予定では500年くらいで済むから。」

「神様から頼まれたこともあるし、死んでやる気もない。」

「そだけど、十分長いし辛いことだと思っただが？」

「心配そうに私を見て、気遣ってくれる。」

「最近、ずっとスパ君にこんな表情をさせてるな。」

「罪作りの男だぜ、僕ってやつは！」

「まあ、どうせ寿命無いしね。」

「これから少なくとも1000年は生きるんだよ？」

「そのうちの半分くらい余裕だって。」

「単位も単位だし。」

「100年のうちの50年だったらともかくね？」

「・・・しょうがないだ。」

無理はするでねえぞ。アリス。」

「うん、ありがとう、パパ。」

「だ、だれがパパだべ!？」

「あははは。」

心配の仕方が、娘バカのお父さんそのものだよね、うん。

「おやすみ、スパ君。」

「ああ、お休みだ、アリス。」

こんな感じで私の親の仇なりきりごっこが始まる。

「ほらほらどうしたどうした!

それで終わりかしら?

おーほっほっほっほ!」

適当にお嬢様風に嘲り笑ってみた。

現在世界は魔法世界。

場所はケルベラス大樹。

野生の飛竜種や各魔獣種が横行する大森林である。

富士の樹海なんて目じゃない。

「くっ!!」

こんなところで死ねない・・・っ!!」

適当に放り込んでサバイバルをさせてみた。
事前説明無しで、寝てる間にベッドごとぶち込んだ。

ちなみにスパ君をサポート役として付けてある。
いざというときのためにね。

一応、エヴァちゃんの前でスパ君には“死んだらそれまで、所詮玩具で暇つぶしだから、助けるな”と言いつけてある。

もちろん、これは芸人的な意味の“助けるな”であり、要は助けるって言うてるのだ。

押すなど言ったら押せ、みたいなお約束だね。

もう付き合いが100年近いスパ君にはもちろん分かってる。

そしてまたある日はコンクリ詰めにして鎖分胴を巻きつけた後、海に沈したり、意味も無く重りを付けて走らせたり、賞金稼ぎに喧嘩を売らせたりと色々やってみた。

もちろんそういった日も、ストレス解消サンドバックごっこという名の私との組手は欠かさない。

言葉や算数、一般常識といった教養はスパ君から押教えさせ、一部苛め風に鍛え上げる日々。

そろそろ大丈夫だろうということで、今度は魔法世界に置いて行き、転移魔法無しで我が家に戻ってくるなんていういささかシンドイ特訓も行った。

魔力を込めた首輪をかけて、「一ヶ月以内に戻らないと首から上が吹き飛ぶ」と脅しておくのも忘れない。

逃げないようにと付けた物だが、もちろんこれは私の印象を悪くするためのものである。

人間、どうしたって近くにいれば情が沸く。

その情を消し飛ばすのと、追い込んで結果的に鍛えられているということに気づかせないためだ。

人間、いくら歳を食おうとも一度持った偏見や植え付けられた先入観と言った物を覆すのはなかなか難しい。

いい具合に先入観を育てられてるようで、我ながら見事な誘導である。

そのまま200年程が経過。

300年を越えたところでいい加減限界が近くなった。

近くに長く居させるのはよろしくないと判断して、魔法世界や旧世界にほっぽりだすことが多くなってきた。

もちろん恒例の首輪と魔力封印の腕輪や詠唱封印の指輪などもつけてさせてだ。

期間も短くしたりして、修行の難易度を上げている。

私に対する印象も本来ならいらぬであろう、首輪などをつけることによって、しっかりと私を憎んでいるので無問題。

会ったたび会ったたび恨み辛みの籠った呪詛の言葉を吐かれるからね。

自分で望んだこととは言え、しんどいものがある。

なんせ300年以上の積み重ねであるからして。

なおかつ言葉使いなども可愛く強制してみた。

「姉様って呼ばなきゃ、修行増やす。」

とか

「くかしら」とか「よ」とか使うように。」

とか。

450年ほどが過ぎたある日。
彼が活躍する頃まであと130年ほどだろう。
そろそろ準備をしないと間に合わなくなる。

今日でこの生活も終わりだと思つとももの悲しいものがある。

「エヴァちゃん、もう飽きたからどこへなりと行ってもいいのよ。」

と言った。

「な、何を言ってるの・・・姉様。」

「どこへなりと好き勝手に良いよってこと。」

あ、でも魔力は軽く封印ね。」

「は？」

私のいきなりの飽きた宣言に開いた口が塞がらないようだ。

「というか、目障りだからとつと消えて頂戴。」

「え？へ？」

ちよ、ちよっと！？」

転移魔法で送り込む。

ついでに軽く魔力封印。

今のままじゃ強すぎるからね。

ピンチに陥ってもらわないと困る。

ふつと目の前から消えたエヴァちゃん。

「これで彼女にやるばきことは終わり。」

「ど、どこへ送ったべ？」

「適当に魔法世界。」

歴史で言うならもつと後に会はずなんだけどね。

今から送っておかないとフラグが立たないもの。

それに少しだけ細工もしてある。

良くすれば仮契約・・・もといキスくらいできるでしょうから。」

「もう、会わないだか？」

「少なくとも私からは会うつもりは無いわね。」

まあ、私・・・アリス・スプリングフィールドが生まれてこの場に居る段階で、細工のほうは上手くないでしょうけど。

本当に・・・残念なことだね。」

「なんだべ？」

「まあ大したことじゃないの。」

ここ麻帆良の土地も騒がしくなってきたようだし。いい区切りだと思ってたから。

・・・初めてのお客さんよ。お茶を出してもらえる、スパ君。」

私の目の前には1人の男がいた。

「さすがは“金色の魔女”殿。

気配は消していた・・・つもりだったのですが。」

「若い割には出来そうだけど、少なくとも気配の消し方は二流よ。」

という私の言葉に苦笑する男。

「これは手厳しい。

それに、若い・・・ですか。

どう見えてるのは分かりませんが、私、70はいつているのですかね。」

男の外見はしわが多く、若く見ても60後半である。

「分かってるわよ。

70でも若いって言ってるの。

私の歳、聞く？」

「いえ、遠慮しておきます。」

女性に対して歳を聞けるほどの度胸はありませんので。」

「ふふふ、分かってるのね。」

まあ私は正真正銘男だけど。

「椅子に座つたらいかが？」

「・・・はい、そうさせてもらいます。」

ここでお茶が運ばれてくる。

男は一口のみ、「これはおいしいですね」と微笑んだ。

「単刀直入に言いますと、この土地を買い取らせていただきたい。」

「それはお断りしますわ。」

即拒否する私。

もちろんこれには考えがある。

今このときのためにこの辺一体の土地は買い占めている。

「それはお断り・・・となると妥協案があるのですね？」

「ええ、もちろん。」

あなた方の目的は世界樹を中心に学校を・・・学校を模した東洋拠点の開設、でしょうか？」

「そ、そこまでご存知でしたか。」

確かに、貴方様の言うとおりです。」

「そこで私はあなた方に土地を貸し与えるという形を取りたいのです。」

私の目的。

それはこの土地を誰よりも先に買い取っておき、その土地を貸するという形で貸与することである。

すなわち、ネオニート、ならぬニュータイプなニート。

略して“ニユート”となるべく100年前くらいから考えていた計画である。

土地を貸与するにあたり、土地の使用量をせしめようってわけだ。我ながら頭の良い作戦である。

「ううむ……。」

「私の家は先祖代々この土地を守ってきました。

この土地を離れるのはこの土地が滅び、我が家が滅んだときです。譲り渡すことだけは出来ません。」

「……わかりました。

そう上に掛け合ってみましょう。」

「……申し訳ありません。」

「いえ、こちらから頼んだことですから。」

勝った！！

これから先は、80年ごとくらいに適当に変装魔法と偽名を使えば良い！！

これで向こう500年は安泰じゃないだろうか？

まあさすがにそこまで上手くはいかないだろうけどね。

「あくどいべ……。」

スパ君の呆れ声が聞こえた気がするが聞こえないフリをした私である。

騙されるほうが悪いのさ！！

ぐははははあははは！！

5つ目 エヴァの気持ち

私は幸せだった。

裕福な家庭に生まれ、何不自由ない生活。

優しい両親。

大きな家。

華美な服。

幸せを体現した様な存在。

それが私だった。

そうした幸せがある日急に壊れることになる。

不思議だった。

自分の体のようで体じゃない。

少し腕を動かしたつもりでも、その”少し”は目の前に居たメイドの上半身を吹き飛ばした。

あまりの光景に目を疑った。

あまりの速さ、あまりの重さ、あまりの力。

それゆえにあっけないくらいに簡単に千切れとんだメイドの上半身だった何か。

彼女はメリーと言って、幼い頃から私の面倒を見てくれた姉代わりのような人だった。

可笑しい。

オカシイ。

おかしい。

おかしいじゃないか。

なぜ吹き飛ばす。吹き飛ばす必要があったのだ。

吹き飛ぶ理由が分からない。

いや、分かってはいる。

分かってはいるのだ。

今までにはありえない、ありえるはずの無い圧倒的な腕力で目の前のメイドを殴り飛ばした。

その結果が目の中のコレだ。

あれ？こんな力がなぜ自分にあるのだろうか？

そんなことをぼんやりと考えながらも頭の大部分は眠っているように鈍い。

考えが、理性が纏まらない。

メイドを吹き飛ばした際の音を聞きつけてきたのだろう。

母様が部屋に入ってきた。

ダメだ。

ダメ。

近づかないで。

お願いだからこないで。

今にも意識が飛びそうな中、がんばってがんばって声を振り絞った。にも関わらず近づいてくる母。

やめて、どうして、近づかないで、殺しちゃう。

殺す？

誰を？

母を？

どうして？

なぜ？

なんで？

分からない。

どうして殺したくなるのか分からない。

とかなんとかやってる間にほら、言わんこっちゃ無い。

私の右腕が母様の右胸を貫いていた。

簡単に簡潔に。

ずぶりと音を発てる間も無く。

母様は何か言っているようだけど聞こえない。

そういえば、右腕と右胸ってなんだかイントネーションが似てる。

なんていうとりとめもないことを思ってみた。

まあ何でもないことだ。

どうでもいいことだ。

くだらないことだ。

さあ、食べよう。

啜ろう。

お腹が減った。

目の前には美味しそうな暖かくて真っ赤な血の塊がある。

ちょうど良い。

ちょうど良かった。

あれ？

なんで血の塊があるんだっけ？

嗚呼、そうそう。

母様を殺したからだ。

誰が？

私が。

ナンだろうか？

何か忘れてる気がする。

とても大事なこと。

人として忘れてはいけない。
大切なこと。

食べる前の頂きます？

ごちそうさまだったかな？

まあいいや。

とりあえずお腹を満たして、寝てから考えよう。

そうしよう。

そうすればいい。

起きた時、起きた時考えれば良いことだ。

今考えても詮無いことだ。

今考えるとダメな気がする。

うん、きつとダメ。

動けなくなっちゃうもの。

寝ようとした矢先。

今度は父様がやってきた。

何を驚いているのだろう？

何かしたつけ？私。

それよりも早く寝て。

早く寝て早く起きて。

食べないと。

殺さないと。

誰を？

人を。

どんな人？

私をこんなにした人。

殺してどうするの？

殺したいから殺すの。

どうして殺したいの？

母様を殺したから。

殺したのは私？

ううん、私は悪くない。

誰が悪いの？

私をこうした人。

だから？

だから食べる。

彼を。

殺す。

殺してやるの。

とか考えていると、目の前には首筋が。

誰の？

まあいいや。

食べてから考えよう。

そうしよう。

食べて食べてお腹一杯に。

さて、今度こそ寝ようと思ったら、藁と丸太の塊がやってきた。
なにこの人？

人？

そもそも人なの？

まずそう。

まずそうだから要らない。

邪魔。

目障り。

壊す。

しばらく経って、今度は女の人
私を。

部屋を。

見た瞬間に酷く悲しげな顔をしたけどなぜだろう？
こんなに幸せな家庭。
なかなか無いのに。

嗚呼、酷く眠い。

眠くなってきた。

私の口が勝手に動く。

何を喋っているのか分からない。

分からないの。

分かりたくない。

分かったらダメ。

ダメなの。

分かったら、ダメ。

目の前の女性を殺すため。

私は今日もがんばる。

この人のせいだ。

この人のせいで私の幸せは壊れた。
壊された。

死ね。

死ねば良い。

どうして死なない。

死んでくれない。

私の幸せを壊しておいて。

どうしてのうのと生きていられるの。

どんな顔をして生きていられるの。

死にたくても死ねない。

それもこの人のせいだ。

この人のせいに違いはない。

信じられない、信じたくない。

こいつはゆるせない。

あれから100年。

あの忌々しい女は未だ変わらず。

私と同じく化け物のようだ。

年老いない。

化け物め。

最近、ヤツの嫌がらせがエスカレートしてきた。

覚えてろ。

絶対に殺してやる。

10倍、100倍、1000倍にして返してやる。
返してやるんだからな。

苦しめて苦しめて殺してやる。
いつか絶対だ。

ある日、あいつの従者のような木偶に聞いてみたことがある。

「なんで、貴方はあいつの言うことを聞くの？」

「オラ・・・おど・・・そうだ、脅されてるだ。」

言うこと聞かないと・・・殺すて。

オラノロマだから。」

「・・・下種め。」

「・・・そ、そんなこと言ったらダメ・・・でないけど、言わないほうがイイだ。」

根っからの悪人はいるにはいるが・・・アリ・・・あいつがそうとは限らないだ。」

私の下種という言葉聞いた瞬間、涙をこらえるようにプルプル震えだす木偶人形。
言わされているのかも知れない。

やっぱりあいつは下種だ。

400年と少し。

あいつの苛めにも慣れた頃。
唐突にあいつが言い出した。

飽きたから、目障りだから。
とっとと出て行けだとか。

全く持ってむかつく。

今度は首輪と何をつけられるんだか。
と思っっていたら。

ヤツは首輪をつけるのを忘れた。
ざまあ見る！！

最近は言葉遣いまで強制してきていい加減付き合い切れないところだ。

魔力を封印されたけど、中途半端なものでせいぜい5分の1減った位。

この程度、今までの嫌がらせに比べたら何の枷にもならない。
なによりも首輪を付け忘れたことがありがたい。
気づいて追手が来る前に、すぐさま逃げよう。
逃げ出そう。

あいつを・・・アリスを殺すには力が足りない。
もっと心を。

技を。

体を。

鍛えて鍛えてあいつを殺す。

殺してやる。

待ってて。

父様。

母様。

今、仇をとるからね。

まずは数をそろえよう。

人形だ。

人形に魂を込めてそれに襲わせよう。

待っている。

絶対に絶対に殺すから。
殺しにいくから待っている。

チリつと痛む胸のことは気づかないフリをした。
考えたところで分からない。
そんな気がしたから。

私が魔法世界を旅して130年。
最近ではサウザンドマスターとその一行とやらが名を上げているらしい。
噂ではとても強い傭兵集団だとか。

どうでも良いな。
それよりも今の私の状況をどうにかせねばなるまい。

飽きたと言ってほっぽりだされてから10年くらいは目立たずに追っ手を警戒しながら生活していたが、あの言葉は本当のようであつた。一度たりともあの女の姿を見たことは無い。
それを実感してからと言う物。

人形軍団を造って動作確認兼ストレス解消のため、適当に人間にち

よっかいを出し回っていた。

といっても、他愛も無いもので特別悪逆非道なことをしていたつもりは無かったのだが、いつの間にか600万\$の賞金が付いていたのにはびっくりだ。

どうやら見に覚えの無い罪までがこれ幸いとばかりに擦り付けられているらしい。

ほとんど殺した覚えが無いのに、殺した数は10万人を越えるとか。もう笑うしかない。

話を戻すが、恥ずかしながら結論から言えば現在絶賛迷子中なのである。

賞金稼ぎを撒くがてら森に逃げ込んだら迷ってしまったというわけだ。

さすがの真祖といえどこれは答える。

もう迷って一ヶ月は経っていた。

どれだけ広い森なんだって話だ。

魔法の発動媒体を失くすわ、そもそも魔力自体が枯渇するわ、お腹が空くわでもう大変。

なんで私がこんな目に遭わんといかんだ。

どうせ、こういう目に遭うならば私ではなくあの女にするべきだろうが。

神はとことん私を嫌いなようだ。

まあ信じてなど居ないがな。

せめてもの救いは従者たるチャチャゼロがいることだろう。

「オイ、ゴシユジン。

ソツチハ”ガケ”ダゼ？」

「は？」

目の前には絶壁とも言つべき直角の崖。
というか――

「言うのが遅いわあああああああああつ！！
アホ人形めええええええええつ！！」

これは死んだ。

死んでしまった。

吸血鬼が崖に落ちて死ぬって、どこまで間抜けなんだ。

頭から落ちればいかに吸血鬼とて死ぬ。

嗚呼、私のバカ。

せめて旦那を・・・将来の伴侶を見つけてから死にたかった。

「つっ――――つ！！」

・・・あれ？

いつまで経っても落ちないんだが？

「おい？

大丈夫かちびっ子？」

「む？

お前は誰だ？」

「・・・人に名を尋ねるときは自分からとか、崖に落ちかけてる今の状態でまずそれを聞くとか、お前みたいなちびっ子がなぜこんな辺鄙なところにいるとか聞きたいことはまああるが、とりあえず先に助けてもらつた礼を言つたらどうだ？」

目の前には赤毛の――まだ幼さの残る少年が私の手を握って笑つ

ていた。

「で、なんであんなところに居たんだよ？」

「ナギ。」

「いけませんよ。」

女性にはいろんな秘密があるものです。」

「い、いや。そうは言ってもな、アル。」

こんな辺鄙な場所の崖に落ちる秘密って何だっただよ？」

「この辺に出てくる上位竜種に喧嘩を売りに来たとかじゃねえか？」

「いや、ジャックじゃあるまいし。」

てか、詠春。鍋の準備はもう終わりか？」

「ちよつとまで。」

もう少しで出汁が取れる。」

「出汁なんて肉を入れてる間に出るじゃろつに。」

「いけませんよゼクト。」

最初に出汁を取るのが――」

一体ナンなんだ？

こいつらは？

「驚きましたか？」

常にニコニコしてる油断なら無い男が話しかけてきた。

「う、うん？」

ま、まあな。お前らは・・・いや、私はエヴァンジェリン。
こっちは従者のチャチャゼロ。」

「ヨロシクナ。」

とりあえず自己紹介を済ませておこう。
名前だけならば賞金首とて問題あるまい。

「あの不死者の、ですか？

闇の福音とも言われている？」

「・・・だとしたらどうする？」

と思ったのだが、速攻でばれてしまった。

意外と有名なのか？

たかだか600万\$・・・はまあ有名になるわな。

「いえ、どうもませんよ。面白そうな人にあえて嬉しいくらいです。」

「むっ。」

どうもこの男は気に食わん。というか・・・まあ気に食わん。

「私はアルビレオ・イマ。」

唐突でなんですが、私って他者の人生の覗き見が趣味でしてー」

「ふむ。」

悪趣味だな。」

「ふふふ、ありがとうございます。」

私にとってはこの上ない褒め言葉ですね。

・・・話を戻しますが、その甲斐あって私のアーティファクトはこんな物であつたりするわけです。

アデアット。」

「・・・？」

本ばかりだな。

本が好きなのか？」

アルビレオ・イマの周りに螺旋状に展開された本の数々。

「私のアーティファクト。」

イノチノシヘンの能力は会ったことのある人間の半生を記す……すなわち人生の書とも言えます。」

なるほど。

覗き見が趣味とは良く良く言ったものだ。

「わかつて貰えたでしょうか？」

早速あなたの半生を見たいのですがよろしいですか？」

「ダメと言った所で見えるのだろう？」

そもそも見られて困る物でもない。

不愉快ではあるがな。」

というと、残念そうに眉をひそめるアルビレオ。

「ここできやーきやー恥ずかしがってくれば、可愛かったのですけれどね。」

「……本格的に性格が悪いな、お前。」

「よく言われます。」

ニコリと微笑んで返す男。

そして、さっそく私の本を開いて読み始める。

私の半生など概ね碌な物ではない。

目の前で読めばさすがに恥ずかしがるだろうとも思っているのだろが、600年前後も生きていればその程度何の問題も無い。せいぜい気まづくなれば良いさ。

と思ってほくそえんでいると唐突に笑みを消すアルビレオ。

ここまで露骨に表情に出すとは思わなかったが、少しせいせいしたな。

「どうした？」

予想以上に酷かったか？うん？」

「ええ・・・ある意味予想以上でした。

あなたは・・・記憶を一部、改竄されている。

あなたの身近にいたある人に寄ってね。」

・・・改竄？

身近のある人？

心当たりがありまくるな。

だが、改竄とはどういうことだ？

「ゼクト。

解析用の魔法をお願いしますか？

最高位の物を三連式でお願いします。

エヴァンジェリン。

少し動かないでもらえますか？」

「あ、ああ。分かった。」

なんだ？

なんだか大掛かりだな？

「む？

どうしたのじゃ、アル。」

「やればわかります。」

「・・・分かった。

最高位となると・・・あれかのう。」

しばらくじつとしていたが、五分ほどかけてようやく分かったようだ。

「恐ろしく巧妙に隠されていた記憶改竄魔法じやのう。」

本来記憶を弄る魔法は持続時間を優先的に、威力を弱めて使うものなのじゃが・・・

驚くべきことにこれはどんなキツカケがあっても、たとえ起こったことをそのまま本人に知らせても、決して思い出さない様に嚴重に幾重にも記憶を封印しておる。

持続時間は50年。

しかもお主。

一部が封印されていて、それだけの膨大な魔力量か。
真祖の吸血鬼だけはあるの。」

ゼクトとか呼ばれた白髪の子供が呆れたようにそう言った。

嚴重に封印するほどの記憶？

なんだそれは？

あの女はもちろん、木偶からも聞いていない。

何をしたんだ？私に？

「それだけではありませんよゼクト。」

この記憶改竄魔法の驚くべきところは50年の寿命しかないところを封印した魔力で補っていたということです。

これは解除するか死ぬかまで解けませんね。

決して自然には解けないように仕上がっています。」

「うむ、分かっている。」

さらに驚くべきことはワシとアルが協力して、ようやくその存在が分かるほどの希薄な封印。

希薄でありながら、厚く硬い。

解除もその辺の人間には決して出来ない仕様になっているとは、恐ろしい物じゃのう。

それほどまでに知られたくないこと・・・とはナンなのか？
少し興味がある。」

いつの間にかゼクトとアルのみならず、ナギと呼ばれた少年や剣士、ムキマツチヨまでこちらを見ていた。
が、私としてはそれどころではない。

「そ、そんな物・・・いつの間に？」

「・・・私としてはこれに関わるつもりはありません。
今しがた会った他人が口を出せるようなことではない。
ですが、個人的には知っておくべきことだと思います。」

あなたが解いて欲しい・・・というなら今すぐにでも解除しますが
どうしますか？」

今まで・・・今まで騙していたのか？

あの女は。

木偶は。

私の記憶を弄って？

何を隠した？

おかしいと思っていた。

うすうすは気づいていた。

私に対して負に落ちない点が多かったことが。

これがその答えのような気がする。

私の勘がそう告げていた。

なんだかねで彼女達には感謝していた。

遊ばれていたとは言え、玩具扱いだったとはいえ、結果的には助かっているから。

最近に至ってはあれほど願っていた復讐の念が弱まるくらいには。でも、でも、でも！！

あいつらは何を隠した？

私に？

どんなやましいことを？

「おそらくあなたが考えていることとは真逆ですよ。

どうしますか？

念のため。

これは言っておきます。

この記憶改竄は彼女らが”貴方のことを思って”やったことだと。」

私のため？

私の？

人をこんなにしておいて？

親を殺させておいて？

何を虫のいいことを言っているんだ！？

あいつらはっ！？

「解除しろ。

・・・してくれ。」

決まっている。

無き記憶を取り戻して、復讐心も取り戻す。

そして、そして、そして。
今度こそ殺してやるっ！！

「・・・分かりました。
では・・・始めます。」

ナギやラカン、詠春、ゼクトの魔力も借りますよ。
これを解除するには膨大な魔力が必要ですから。
エヴァンジェリン。

貴方の魔力も使わせてもらいます。」

「・・・構わん。」

早く。早く。早く。

思い出して、思い出して、あいつらを殺し・・・殺しに・・・

「殺しに・・・行けますか？
貴方は。」

・・・なんなのコレは。

「お、おい！？

アル？何やったんだよっ！？

泣き出しちまったぞ！？

ちびっこが！！」

「アル、さすがに年端もいかないガキンチョを泣かすのはどうかと
俺様も思っただが？」

「・・・私もさすがに今回のことは見損なつたぞ。」

私は・・・泣いているのか？

「失礼ですな三人とも。」

ゼクトは分かってくれて・・・」

「痛くしたんじゃないかな？」

「・・・ませんね。」

仲間なのに、ここまで信じてもらえないとは。」

殺しに？

殺す？

誰をだ？

「殺せるはずがありませんよね？」

貴方にとって彼女は・・・親でもあり、姉でもあり、師匠でもあり、恋人でもあり、伴侶でもあり。

本当に気づきませんでしたか？」

気づく？

何に？

「彼女が親の仇である・・・その事実がウソだということに。」

貴方にしてくれた全てのことが、貴方の今のためだったということに。

本当に？

微塵も？

欠片も？」

気づかなかった。

・・・ワケが無い。

目をそむけていただけだ。

目標が無ければ。

やりたいこと。

それに向けて強い意志が無ければ、生きていける気がしなかったから。

私の弱さから目を背けて、見ないようにしていただけだ。復讐に逃げていただけだ。

「気づかないわけが無いですよね？

その辺の人間が相手ならばともかく。

あなたは何年、何十年、何百年と近くに居たのですから。

・・・気づけないわけが無いんです。

どんなに隠していても。

どんなに逸らしていても。

どんなにとぼけていても。

隠しきれるはずが無い。」

「・・・ひくっ・・・ひくっ・・・

・・・あ、・・・あああ、ああ・・・ああああ――――っ！

！」

そうだ、私は甘えていただけだ。

あの人に。

あの木偶に。

私があの子の悪口を言うて決まって悲しそうな顔を見せる木偶。
毎日欠かさず、美味しい食事。
無茶無謀な嫌がらせに見えても、結局生きている今。

あれだけのことがあって、あれだけのことをしてもらって。
なぜ気づかなかったのだろう。
気づいていたはずなのに。
なぜ目をそむけてしまったのだろう。

「・・・これを。」

なきじゃくる私に指輪を持たせるアルビレオ。
魔法媒体だ。

「貸しにしておきます。
すぐにでも向かいたいのでしょう？
応援してます。
がんばってくださいね。」

アルビレオの言葉が終わるのも待たず、駆け出した。
彼女の・・・アリスの家へ。

久しぶりに来た家はとうになくなっていて。

学校となっていた。
でも、さがした。
きつとどこかにいるはずだ。
すぐ近くにいる。
魔力がある。
あの暖かい魔力が。
ほっとする優しさを持つ魔力が。

家は変わっていたが、間違えるはずもない。
雰囲気で分かる。
彼女の家だ。

思いっきりドアをぶち開けた。
びっくりしているアリスの顔が面白い。
魔力を抑えてやってきたから、驚いているのに違いない。

彼女は言った。

「今更、何しにきたの？
君にはもう興味がないんだけど？」
と。

ははは。
バカみたいだ。

私がまだアリスを憎んでと思っている。

本当にばかばかしい。

600年も経って漸く自分の気持ちに向き合えるのだから。

「もうそんな芝居しなくて良いの・・・姉様。」

「・・・芝居？」

何のことだかわから・・・」

嗚呼、この期に及んでこの人は悪役を演じようとする。

もう無駄なのに。

無理無駄、極まりないのに。

本当に優しい人だ。

私の恨み言。

今まで1000や2000なんて物じゃない。

一万二万でもない。

それこそ毎日、私の罵倒を聞いてまで、私に生きる目的を作らせてまで。

私を愛してくれた姉様がここにいる。

目の前にいる。

都合の良いのはわかってる。

でも、でも、でも。

もう間違えない。

姉様のためにも私のためにも。

間違えない第一歩。

その言葉を私は紡いだ。

『だあくいすきっ!!』

今日からが本当の私の人生だ。
大好きな姉様に抱きつきながら。
切にそう思う。

6つ目 アリスの気持ち

「ここも変わったわね。」

「そうだな。」

人がこんなに溢れるとは、ちょっと前までは思いもよらなかったべ。」

私は新しく作ったこの家でのんびりと過ごしていた。

ここは静かであるが、少し歩けばすぐに喧騒の真っ只中である。

「麻帆良学園・・・だったべか。」

「ええ、いつの間にか名誉会長なんて立場も付いてるし。」

面倒極まりないわね。

単に土地を貸し与えて後は適当にニート生活を楽しもうと思っていたのに。」

貸与どころか、こうなってくると法外な値段で売りさばいても良いと思ったのだが、良くも悪くもお金の価値は不変では無い。

硬貨一つとっても、江戸時代から今にいたるまで、かなりの変化がある。

たとえば、社会で習うであろう硬貨における金の流出問題。

江戸時代。日本と外国が貿易をするさいに行われた外国貨幣と日本国貨幣。

あの時代は金の量〃お金の価値、という価値観が主流だったため、日本硬貨に含まれる金の比率が外国よりも多かったため日本は損をしていた。

それに気づいた日本は、銀貨にもかかわらず金貨と同等の価値を持つ硬貨を作り出したり、金の比率が少なくても金貨として扱う。な

どという貨幣革命と言っても良いようなことがざらであった。

現代で言うなら、二千元札が有力か。

一時期流通した紙幣、二千元札。

結局のところ、当初予定していた効果が見られず、イタズラに混乱しただけに、後に廃止された。

すなわち、昨今の中学生、高校生は貨幣自体に価値が存在すると刷り込まれているが（もちろんその解釈でも普通に生きる分には問題が無いしあながち間違いでもない）、厳密には貨幣は商品券のような物であり、それ自体には価値が無い。

商品券となる貨幣、紙幣を渡して始めて価値あるものを入手できるのである。

こういったことから長期的に・・・特に私のような人外からすれば土地を売りに出すよりも、貸して常に搾取できる形を取った方が遥かに建設的かつ効率的である。

「本当に・・・良かったただべか？」

「・・・何が？」

スパ君が唐突に真面目な声音で聞いてきた。

「お嬢のことにきまつとる。」

・・・はあ。

下手な人間よりも人の機微に敏感な力カシがここまでやつかいだとは思わなかったよ。

「今更、何を言ってるのさ。」

もう100年も昔のことだよ？」

「・・・そだけでも、アリス。
おめえさ、気づいてないんか？
あの日からおめえ、笑ってねえべ。」

そんなことは無いと思うんだけどな。

「そうかな？

割と笑ってると思うよ？

ポーカーフェイスは元々苦手だし。」

「・・・本当に心の底から・・・幸せな笑みをしてるだか？」

「心配性だなあ、スパ君は。」

やめてくれ。

言わないで。

そんなこと望んでない。

望んでも無駄だ。

「ずっと一緒にいたオラには分かるだよ。

おめえさ、無理してるだ。

おめえさ本当はあの娘っ子のことを・・・」

「やめてっ！！」

つい魔力が流れ出してしまい、家にヒビが入る。

そうそう、今となっては人外どころか化け物すら超越する魔力量になってます。

純粹な戦闘力で言えば、サウザンドマスターとラカンが2人がかりでなんとか勝てるくらいの強さ。

魔力ありきならどんな存在にせよまず負けない戦闘力を誇る私。

私TUEEEEEEEEEが出来てしまう。

「・・・分かつてるから言わないで。

お願いだから、分かつてるから・・・。」

「いやダメだ!!」

いい加減、オラも見てるのが辛いだ!!

限界だ!!

おめえさに付き合ってきたのもアリスのためだと思っでたらだっ
!!

でも・・・とてもじゃねえが、そう思えねえんだべ!!」

・・・スパ君には分からないよ!!

「わかつてたまるか!!

おめえさがやってるのは、ただの自虐だべっ!!

自己満足だべ!!

あの娘つ子のためならまだ分かる!!

でも、おめえさがやってるのは・・・やってるのは・・・」

なんで君が泣くんだよ・・・スパ君。

「オラはおめえに幸せになって欲しいだよ・・・ぐず。

なんで自分を許せないだよ・・・もう許されていいべ。アリスはが
んばったべ。」

違う。

違うんだよ。

「確かにスパ君の言ってることもある。

何よりも自分が許せない。

その罪滅ぼしだって部分が大半だ。

自己満足だったのが概ねだ。

でも違う。

一番の理由はそこじゃないんだ。」

確かに許せない。

気軽に彼女の復讐を。

けじめの機会を奪った自分が許せない。

助けることができたはずなのに、見過ごした自分が許せない。

見通しが甘かった自分が許せない。

楽観的な同情が、お節介が許せない。

それは確かにある。

責任を感じている。

でも、それだけなハズが無い。

あるわけが無い。

それだけで。

罪悪感だけで。

責任感だけで。

100年ならともかく、200、300、400年と。

罵倒されながら、殺意を向けられながら、それでも相手を想いつづける。

出来るはずが無い。

出来るわけが無い。

僕のせいだから？

僕がやるべきだから？

義務感？義理？道理？筋道？常道？正道？

ふざける。

ふざけてしまえ。

ふざけんな。

そんなちんけな物でここまで頑張れるはずが無いじゃないか。
僕はそんなマゾじゃないし、自虐趣味も持ち合わせていない。
そもそもそこまで誠実な男じゃないっての。

好きだからに決まってる。

愛してるからに決まってる。

彼女をはじめてみたとき。

その目を見たとき。

一目ぼれと言っても良いかもしれない。

魔族と化しながら、親を殺しながら、それでも自身を、自我を持ち
続ける強靱さ。

自分のしたことを受け止めようとする誠実さ。

誰のせいにするでもなく、殺した相手を抱え込む優しさ。

憎い憎いと良いながらも決して卑怯な手は取らなかった気高さ。

どんなに苛められても。

どんなにいたぶられても。

どんなに苦労しても。
這い上がってきた堅実さ。

そんな彼女の力になりたい。
手助けをしたい。
救いたい。

それが一番の理由。
同情なんかでここまで出来る人間なんているわけ無い。

僕は彼女が好きだから。
大好きだから助けていたのだ。

一目ぼれって嫌だよね。

全く持つて嫌だ。嫌だ。
どんなに辛くても。
どんなに苦しくても。

惚れた女のためならば火の中水の中、魔法の中。
余裕綽綽ってやつですよ。
僕って嗚呼良い男。

僕が生まれて存在してるがゆえに、サウザンドマスターであるナギとの恋は破局確定だけれども。
アリカ姫と会う前ならば多少はラブラブできるかなと。
記憶封印の魔法に無意識的に後を追う様に簡単な意識誘導魔法をかけたりして細工したりとか。

封印に使う魔力の確保のために魔力も一緒に一部封印したけれど、
万が一死んでしまわないように。
万が一、野垂れ死にしないように。
チャチャゼロにこっそりお願いしたり。

そう、僕が今まで生きてやったことは全て自分を責めているように
見せかけた、単なる手助けだ。

惚れた女性が少しでも、多少でも、微量でも。

幸せに、楽に、おかしく過ごせるように。

恋敵であるはずのサウザンドマスターの件まで応援したりして。
バカじゃないのかと思う。
でも、男ってやつは概ねバカなのだ。
仕方ないのだ。

せつかく、割り切ってたのに、スパ君がほじくり返すからまた涙が
出てきたじゃないか。
どうしてくれる？

「仇役が泣くほど嫌なら止めればいいべー！」

惚れたなら、おめえさの手で幸せにしてやればいいべー？」

「そしたら、誰が仇役をやるのさ。」

誰を犠牲にすればいいのさ。」

「そんなのオラが・・・」

「そう言ってくれるスパ君だからこそ出来ないんだよ。」

他人を巻き込むのは論外。となると僕しか居ないでしょ？」

本当にスパ君は良いやつである。

「それに僕は単なる失恋ってやつだよ？」

彼女に比べれば遥かに幸せだ。

さつき、スパ君は言ったよね？

本当に幸せを感じて笑ってるかって？」

「んだ。」

「最上の幸せじゃないってだけで、今僕はとっても幸せなんだよ？好きな人のために色々出来て、その人の幸せの手伝いだって出来る。スパ君っていう親友も居る。

ほら、振り返ってみればとても幸せだ。」

「・・・そうだべか？」

「そうだよ。」

さつきは惚れた人のためだから頑張れるとか言っただけど、君が居てくれたから・・・理解者が、唯一の家族が近くで支えてくれたから、今の僕がある。

十二分に幸せだよ。」

「・・・本当にそうだべか？」

「そうさ。」

無理してるかは長年付き合いのあるスパ君なら分かるでしょ？

悪いところにはっか目に向いてるけど、良いところももちろんあるさ。」

「・・・分かったよ。どうせ言っただって無駄なことは分かってるだ。今回のことでまたそれを再確認しただべ。」

「ごめんね、頑固な息子で。」

「・・・オラの息子だと想ってるならたまにはオラに甘えるだよ。」

「十分甘えてるつもりなんだけども・・・こんな迷惑や心配をかける時点です。」

「もつと甘えて良いってことだよ。」

そっちの方がよっぽど心配ないだよ。」

・・・もつととなると甘え方が分からなくなるね。

「それに女の人は彼女だけじゃない。

今回はたまたま上手くいかなかった。それだけ。」

「とか言いながら、もう好きになることは無いんだべ？」

うぐ。

鋭いなあ、本当に。

まあ好きになる人なんて一生に1人いればいいよね？

「そ、そんなの分からないじゃないか？

自分でも予想外の恋が芽生えるかもしれないよ。」

「・・・そう願うだ。」

難しいことには違いない。

だが、本当にその辺は前向きに考えている。

というか考えざるを得ない。

サウザンドマスターがダメならその息子。

ネギにまかせようと想っているのだ。

歴史上ではネギはこれから先、ハーレムをつくることになる。

が、それを僕が横から掻っ攫うのだ。

エヴァちゃんに会うまでは原作に介入するつもりはあまり無かったが、エヴァちゃんの恋を成就させるためには必要である。

本来の歴史ならばエヴァちゃんはサウザンドマスターに惚れるはずだ。

そのためのお膳立てもしてある。

結局、失恋は決まっているが、そこからネギへの興味も人一倍とな

る。

僕というイレギュラーがいなければ特に何もせずとも、好感度は上がっていくだろうからネギの感情のみが問題となる。

もちろんネギに近づく女生徒をここぞとばかりに名誉会長の権限を使って妨害。

それで無理なら手段は選ばん。

優しくして僕に惚れさせるという手も考えている。

申し訳ないが、殺しや脅しも視野に。

下種な手だと自覚はしているが、僕は全知全能でも聖人君子でもない。

誰を一番大切にするべきなのか？

その優先順位は間違えない。

弟のネギにはエヴァちゃんとのみラブラブしてもらおう。

「この話はここまで。」

せつかくだし、ネギとエヴァちゃんをくつつけるための作戦も軽く考えておこうかな？」

「・・・オラにも協力しろってか？」

「当然。」

やってくれるよね？パパ。」

「・・・オラが手伝わなくてもおめえさはやるんだべ？手伝うだよ。」

「だからパパって大好き！」

「・・・気持ち悪いだな。」

し、失敬だな。

パパさんプレイはスパ君にとってはよろしくないみたいだ。

ボタンッ！

急に乱暴に開いたドアが目の前を過ぎ去った。

なにこれえ？

開いたというか引きちぎったって感じ。

引きちぎって、飛ばした？

「ちよっ！？」

だ、誰よ！？

人ん家のドアを景気良くぶち壊してくれたヤツ……は……あら？」

え？

なんでエヴァちゃんがこんなところに？

おかしいぞ？

チャチャゼロからは何も聞いてない。

つとやバイヤバイ。

ポーカーフェイスポーカーフェイス。

彼女の前での私を演じないと。

「今更、何しにきたの？

君にはもう興味がないんだけど？」

まあ普通に考えれば殺しに来たってところだよな？

でも、何かおかしい。

そもそも魔力がエンプティ間近。

そんな状態で殺しに来た所で振り返ちに遭うことくらい分からないわけが無い。

何らかの経緯で感情が暴走。

自身を省みず、欲求のままに殺しにきた。というのも考えにくい。

なんせ、そうした感情は戦いにおいて命を落とす原因になりかねない。

特に”確実に殺したい”相手に万が一にでもそんなミスをするような教育はしていない。

じゃあなんだ？

目から感情を読み取るうにも色々な物が渦巻いてるようで、全く読めない。

理解が出来ない。

何を考えている？

彼女とはかれこれ400年以上の付き合いだが、こんなことは今日が初めてだった。

「もう・・・そんな芝居はしなくて良いの・・・姉様。」

「・・・芝居？」

何のことだかわから・・・」

芝居？

記憶改竄の解除を自力でした？

いや、ありえない。

エヴァちゃんでも解けないように、念入りに。

それも私の家族兼師匠であるスパ君にやって貰った記憶封印だ。

私の手でも確認してある。

元々サウザンドマスターやその周辺の最強クラスの人間に接触させる予定だったから、そのクラスの鋭い人間でも気づけないように巧妙に隠蔽したはずだ。

それこそ解析魔法に詳しい権威が念入りにやって初めて、ようやく気づけるというレベルの完璧な隠蔽を行った。

そのため、その辺の解析魔法を掛けられる機会があったとしても問題ないはずだ。

そもそも何か支障が出ているというわけでもない相手に、解析魔術を念入りに行うなんていう意味不明なことをやる人間が居るわけが無い。

しかも万が一気づかれても解除できないようにかなり強固に、協力に。

私の全魔力を込めた”最強の呪い”のような物だ。

これは魔法の中でも最高峰の呪い効果を持つといわれる”永久石化”を解除できる人間ですら解除できないと想われるレベル。まずありえない。

そう、それこそ英雄級の人間が集まって、偶然が重なって。始めて解ける記憶封印術。

まずこんな偶然が重なるわけが無いと安心してサウザンドマスターたちと接触させたのだが。

『だあゝいすきっ!!』

正直、舐めていた。

もっと念入りにやっておけば良かった。

それこそ造物主にも解除できないほどのものを。

抱きついてくるエヴァンジェリン。

どうして抱きついてくる？

私が何をしたのか分かっているのか？

何を考えているの？

分からない。

聞きたくない。

答えを聞くのが怖い。

そうだ、もう一度。

もう一度。

今度こそ。

完全に秀逸に完璧に。

二度とよみがえることの無いように深遠の底に沈めてしまおう。
嬉しい。

嬉しすぎて涙が出る。

でも、こんな最上の幸せは求めていない。
求めたくない。

自分の愛した人をみすみす不幸な目にあわせておいて？
今更どの口が幸せを求められるというのだ。
そんな人間が彼女の横に居て良いはずが無い。
彼女を幸せに出来る人間はきつとほかに居る。

さあはじめよう。

もう一度。

もう一度。

記憶を・・・

「あぐっ!？」

チャチャゼロが僕の右腕を切り落とした。

せっかくの魔力が飛散してしまった。
何をしてくれる？

ほら、エヴァちゃんもいきなりのことだ驚いているじゃないか。
僕の血なんかで汚れちゃって。
せっかくの可愛らしさが半減だ。

「どういっつもりだい？

チャチャゼロ？」

「・・・ゴシユジンノタメニ

ウゴイタダケダゼ。

オレハ。」

何を言っている？

彼女のためを思うからこそ、いや、自分のためなんだけどね。うん。

「攻撃魔法を使うとでも？

まさか。もう一度記憶を封印するだけだよ？」

との言葉を聞いて、瞬時に離れるエヴァちゃん。
なぜ離れるのだろうか？

「どういっつもりですか？

姉様。」

「エヴァちゃん。

これは君のためでもある。

スパ君。彼女を取り押さえて。

チャチャゼロも、邪魔をするなら壊すが？」

「っ！？」

僕の言葉を聞いて、構えを取るエヴァちゃん。

どうしてそんな顔をする？

「嫌です。姉様。

私はもう忘れたくない。」

「トイウケデ、オレハアリスノ邪魔ヲサセテモラウ。」

はっ！

何を言ってるんだか。

僕とスパ君に適うと思っているのか？

「ダメだ。

消さないダメだ。

スパ君、何してるの？

早く手伝ってくれないとー！ー」

「いや、オラは協力しねえだ。

いい加減、面倒は見切れないだ。」

「どうしてっ！？」

「もう止めるだアリス。

もう十分、罪は償った。

何よりもおめえさ勘違いしてる。」

何を勘違いしてるって言うんだよ？

「幸せは誰かから貰うもんでねえ。

自分で決めるもんだ。」

「そんなの奇麗事だっ！」

「バカヤロオッ！！」

づあっ！？

殺す気かっ！？

いきなりの全魔力を込めたパンチとか！？
すぐさま私が結界を張らなきゃ、学校の半分が吹き飛んでるところだ。

というか、バカヤロオとか言われたの初めてです。

「人によって価値観が違うように、人によって感じる幸福も違う。
お嬢を見てみるだ。
お嬢は幸せに見えるか？」

エヴァちゃんは目に涙を一杯に溜めて、嗚咽を必死に我慢している。

「それは・・・記憶が戻ったから・・・復讐の相手が・・・いなくなつたから・・・」

「違うよおっ！！」

ひでぶっ！？

こんどは吸血鬼の腕力を全て込めたビンタとか。

何！？

この人たち！？

どさくさに紛れて、殺そうとしてませんかっ！？

「復讐なんてどうでも良いのっ！！

私知ってたっ！！

変だつてことに！！

100年も200年も経てば、たとえ記憶が改竄されてたつて分かる！！

分かるに決まってるでしょっ！！」

「ど、どうでもいいの？」

「復讐の念がそんなに長続きするわけないでしょ・・・私だってバ

力じゃない。

全部私のためにやってくれてるってことくらい気づくよ!」!

僕の長年の苦勞はどこへ行つた！？

「……私にとっての幸せはそんなことじゃない。」

私のことを思ってくれてるなら、姉様が居ればいい。

居てくれるだけで良い。

ずっとそばに居てくれれば良いの。

それだけで幸せだから。

幸福だから。

だから、姉様も……無理なんてしないで良い。

今度は私が助ける番。

私が姉様を幸せにする番。

だから、お願い。

私をそばにおいて？」

「上目遣いに僕を覗き込んでくるエヴァちゃん。……
 なんて、可愛い。」

こんなときに不謹慎だと思われるが、すごく可愛いです。

結局これって僕の一人相撲じゃね？

僕は400年以上も何をやってたの？

馬鹿なの？

アホなの？

死ぬの？

[illegible]

もう笑うしかないってね。

笑って全てを吹き飛ばしてやらあ。

何をやってたんだろうね僕は。

勝手に抱え込んで、勝手に押し付けて。

結論から言えば、とどのつまり”大きなお節介”だったってわけだ。

400年経っても同じ失敗を繰り返す僕は一体、どれほどの阿呆でバカなのか。

小一時間くらい考察してみようかね。

「ね、姉様？

姉様は私の・・・私のことをどう思っていますか？」

どう？

どう思ってる？

愚問だね。

決まっている。

僕は速攻で答えた。

「だあゝいすきっ!!」

意趣返し兼ねて、こんな感じにね？
いかがでしょう？
エヴァにゃん？

6つ目 アリスの気持ち（後書き）

ここまで来たら分かるとおり。

今作でのヒロインはエヴァです。

主人公は非常に思い込みが強く、押し付けがましい・・・すなわち、不器用な男の娘。でも、これから先はラブラブ一直線。安心して（？）見守ってくださいませ。

本来ならもう少し長いのを予定していたのですが、これが作者の精一杯。

このページでエヴァンジェリン編は終了。

次回からは紅き翼編。

と言っても主人公は表向き活躍はしません。

7つ目 名実共に、一生共に

「・・・はあ。」

「どうしたべ？」

アリス。」

私を気遣ってくれるスパ君。

まあ、いきなり大きなため息を出せばねえ。

「どうしたも何も無いよ。」

こんな馬鹿なことを600年も気づかないなんて・・・自分のバカさ加減に呆れる。」

「オレ二ご主人ヲマモレトカ、イイツケタリナ。」

「う、うるさいな。心配だったんだ。」

何かと物騒だしさ。」

チャチャゼロにはキツチリ守ってもらうように、超さんが使う魔法紋と同じものを組み込んである。

もちろんエヴァちゃんには秘密。

ちなみにエヴァちゃんは頭から被った血を取る為に、お風呂に入っている。

切り落とされた右腕はどうなったって？

つなげたに決まってるじゃないか。

「こうなつてくると、全部話さないとだめかなあ・・・？」

「オラは別に構わないだ。」

「ハナシタハウガイイダロ。」

秘密ニサレタママジャ、オモシロクネエトオモウゼ。」

私がサウザンドマスターとアリカの子供だって事も、神様に頼まれてただ生きるのが目的だってことも話さないとダメだろうな。髪の毛も黒じゃなくて本当は金だとか、小さなこともある。これから先、大体のことはいつかバレルだろうし。

歴史を知っているって事以外は全て喋ろうと思う。

歴史うんぬんはまあ良いだろう、話さなくても。そもそも700年も前に知ってたことなんて殆ど忘れちゃってるし。未来人が居るとかいつか魔法世界にネギがいくとか。それくらいしか覚えてないです。

「それよりもだ。

一番の問題がある。」

「なんだべ？」

「ケケケ。

オマエガ男ダツテコト力？」

む？

人形のくせに鋭いじゃないか。

というか、我が家においては人間よりも人形の方が鋭いかもしいい。

スパ君しかり、このチャチャゼロしかり。

「そのとおりだよ・・・彼女を魔法世界に放つたらもう会うつもりは無かった・・・というか、そもそも知らせる必要が全然無かったんだね。」

別に男だろうと女だろうと、どうでもいいじゃん？

みたいな。

どうしようか？

「ゴ主人ノ、マンマエデ脱イダラドウダ？」

「なんで！？」

いきなり脱ぎ出したら変態じゃん！？」

「お風呂に一緒に入ったらどうだべ？」

「いや、それも無いわ！！」

というか、一緒にお風呂？

お、おま、おまおま、おまえね！！

いくら幼女といえど、好きな女の子といきなり一緒にお風呂とか！？
入れるわけ無いじゃん！？

恥ずかしすぎるわ！！

もし生理現象的なもので反応しちゃったらどうするの！？

付いてるはずが無い物を見て、ただでさえショックを受けるだろう
に、目の前で反応するとか！！

エヴァちゃんのリアクションが予想できないだけになおのこと怖い
！？

でも、このままだと彼女の好きは異性の好きではなく、家族としての
好きなんだよね。多分。

お互いに人外だし、600年も生きてれば性別なんて括りに捉われ
てない・・・という可能性もなきにしもあらずだが。

私としては異性としての好きでも相手にその気が無いのは嫌だ。
かといって男だと教えた途端に嫌われたりとかしたらどうしよう？
って思いもある。

「700年近クモ生キトイテ、チツチエエコトヲキニスルナ。」

「気にするって！」

「意気地が無いだ。」

一生、憎まれ役を勝手出る気概があるくせして、この程度の覚悟が無くてどうするべ?」

変なところで並の人よりも繊細なくせして、こういうところでデリカシー無いね!?

君たちは!!

「チャチャゼロに聞きたいんだけど・・・エヴァちゃんの好きはどいう好きだと思っ?」

「オレヨリモ付キ合イノナガイ、オマエガワカラネエノニワカルトオモッテルノカ?

トイウカ、ワカラネエノカヨ?」

「・・・殺気とか、ご機嫌状態とかそういうのは分かるんだけど・・・私に向かつてくる好意を受けたのは・・・今日が初めてだし?」

「オラとしては問題ないと思うだ。」

それに、なんだかんだで好意に近い感情は向けてたで?」

「そ、そうだったの?」

「オラから見た感じでは、お嬢は薄々なり気づいてた節があるだからな。」

アリスがお嬢を想ってたり、お嬢のためにしてきたってことを。」

「・・・気づかれないようにしてたつもりなんだけどな。」

「アリスはポーカーフェイスが苦手だから・・・ちらほら思わず漏れたって感じの笑顔を向けてたで。」

気づいてなかったんだか?」

「・・・うるさいな。」

腹芸は苦手なんだ。」

「そんなおめえさ見てたら、嫌いになんてなれねえべ。」

男だと知ったら、むしろ喜ぶんでねえか?」

は？

なんで？

「交尾ガデキルカラカ？」

「ぶはっ！？」

いきなり何言い出すんだ！？

こ、こ、こここ、この、この、こここの人形は！？

「交尾シテ愛ヲタシカメルンダロ？」

人間ハ。

変ワツタイキモノダゼ。」

「んだべ。」

交尾を誘ったらどうだべ？

断られたら家族として好きで、断られなかったら家族として旦那と
してだつてことだべ。

簡単にわかるべ。」

あ、アホじゃないのか！？

この人形どもは！？

というか交尾、交尾と言うな！！

「な、何を言ってるんだよバカ！！

わ、私は・・・え、別にロリコンじゃないし！！

な、なな、なんというか、一緒にいれれば満足だしっ！！」

「ね、姉様？

一体何の話ですか？」

わひゃあっ！？

いつの間にかエヴァちゃんがいるよ!?

「い、いや何でもないよ!!

何でもね!!

ほ、ほら!!

子供はもう寝る時間だ!!」

「・・・子供じゃないです。

それに寝る時間といっても、今はまだ午後の三時ですよ?

姉様。」

ぶすつとして、頬を膨らますエヴァちゃん。

可愛い・・・じゃなくて!!

早くここから遠ざけなくては!!

バカな人形が余計なことを言う前に!!

いや、それよりもだ。

「それよりも、エヴァちゃん!?

どしてタオル一枚でここに!?

ちゃんと着替えは置いておいたでしょ!?

「いえ、せっかくですから一緒にお風呂に入って、姉様と・・・背中
中のな、なな、流し合いとかも良いかな、と思ひまして。」

きたーーーーーっ!?

じゃねえ!!

来るなよっ!?

風呂イベントとか一生こないで欲しいっ!!

少なくとも、性別をばらすかどうかを決め手から来てほしかった!!

というか、エヴァちゃんお顔真っ赤だよ!?

そんなに恥ずかしいならまた今度にしたら!?

「あの、今はそういう気分じゃないって言うか・・・ね？」

「ね、姉様は私とお風呂に入りたくないんですか？
流し合いなんて面倒ですか？」

うおっ！？

泣きそうになるエヴァちゃん。

目に涙が一杯。

な、泣かないで！？

「い、いや、面倒でも嫌でもない・・・んだけど、今はまずいというか、むしろばっちこいつていうか
でも来るなっていうかね？」

私も複雑な・・・ほら、実は赤痢アメーバに感染してて、今私に近づくと移っちゃうよ？

みたいな？」

赤痢アメーバってなんだそりゃ！？

この状況で、そのチョイスが出来る自分を褒めたくなる！！
ありえなさすぎる！！？

私のバカ！！

「アレハワザトヤツテルナ、ゴ主人。」

「わざと？」

・・・というーああ、そうだか。

よくよく考えれば、吸血鬼の聴力なら聞こえてるべな。
もう知ってるだな。あれは。」

「サスガオレノゴ主人。」

人ヲカラカウノモ、オ手ノモノダ。」

後ろで人形どもが何か言ってるけど、そんな場合じゃない。
さて、どうしよう！？

この場での選択肢4つある。

- 1、逃げる
- 2、そのまま入る
- 3、なんとかごまかして入る
- 4、入らない

逃げるは無い。

いくらなんでも無い。

入らないというのも無い。

泣かせてしまう。

そのまま入るも無い。

まだバラす覚悟が無い。

残りはアレだ。

ごまかして入るだ。

よし！

幻術だ。

こんなときのための幻術！

とは言ってもエヴァちゃんくらいだとバレるかもしれないが、バレたところで何を誤魔化しているまでは分からないはずだ！

後から気づいたことだが、”女と偽って女性と風呂に入る中身も体も男の人間”って犯罪なんじゃないだろうか？

少なくとも、今現在はテンパって思い立たない私である。

さっそく風呂場へ。

エヴァちゃんも少し恥ずかしいのか、タオルを取らない。

というか、それバスタオルだから風呂の中まで持ってきてきちゃダメじゃない？とは言えない私。

上がった後にどうやって体を拭くつもりなんだろう？

私も服は脱いだ。

男物の下着はもともとそういう趣味だったことで憎まれ役時代にすでに知ってるから問題あるまい。

下着を脱ぐと同時に私の股間にある男性特有のものから意識をそらす幻術を使う。

視覚的なものも一応掛けておく。

その間もまだバスタオルを取ろうとしないエヴァちゃん。

そんなに恥ずかしいのになんでこんな無茶振りを！？と思ったけども、これはチャンスである。

「えと・・・恥ずかしいなら無理はしなくていいのよ？

エヴァちゃん。」

言い聞かせるような声音でそう言う。

頼む、通用して！！

神様に祈りながら・・・この際、あの金髪少女の神様でも良い。頼むからこの状況を打開して・・・

「いえ、大丈夫です、姉様。」

がっでむ！！

おーまいごっど！！

あの使えない金髪少女、ぶち殺す！！

とか理不尽な恨みを生成しつつ。
バスタオルを外すエヴァちゃん。

やばい、ロリコンではない。

ロリコンではないと断固として言うておこう。

700年も生きれば容姿は二の次になってくるし。

ロリコンじゃないし！

でも、好きな女の子が目の前で無防備に生まれたままの姿を展開している！！

ぐふっ！？

鼻血がでそうだ！！

反応しちゃいそう！！

まずい！！

まずいぞおっ！！

「さあ姉様、背中を洗って差し上げます。」

「え、ええ、ありがとう。」

がっちがちに緊張しつつ、私は戦場^{フロ}へと旅立った。

ヤバイヤバイヤバイヤバコさんだ！！（？）

何がヤバイって、やたら体を擦り付けてくるエヴァちゃんがヤバイ。必要以上に接触してくるんだけど、これってワザとじゃね！？

甘えたい年頃なのか！？

でもこう見えて、彼女600歳前後ですよ！？

特に重点的に股間ばかり攻めて来てる気がする。

あ、ごめんなさい、姉様。とか言いながら股間をわしずかみにされた時は、死ぬかと思った。

心臓がはじけるかと思ったよ。

なんでわしづかみ！？とかツッコむ余裕ないよ！？

鼻血と生理反応の阻止で精一杯です。

私の体を使つて洗つてあげますねとか言つて、体を擦り付けて背中を洗うとか！？

どこのエロビデオ！？

石鱒が私の股の間に落ちたと思つたらそこに体を入れ込みつつ右腕をつっこむとか。

つい股を閉じて、エヴァちゃんの右腕を挟んでしまい、エヴァちゃんが驚いたのか腕を引くと股がまあ擦れて。

生娘のような悲鳴を上げるところでしたよ。

もちろん「ひうつ！？」あたりでとどめた。

700年の人生経験は伊達じゃない！！

いや、こんな経験一度も無かつたけどさ！！

好きな女性自体、エヴァちゃん以外にはいなかったからこんな状況・・・というかえつつぱいこと自体、これが初めてです。

エヴァちゃんも最初はぎこちなかつたんだけど、徐々に乗ってきたのか、やたらと色っぽい動きと声で責めてくるんだ。

何この子！？

本当に幼女！？

うぬは何ヤツ！？ただの幼女ではあるまいな！？
つて思うくらいに。

いや、ただの幼女じゃないけどさ！！

大丈夫だ大丈夫！！

私を舐めるなよ！！

こんな時こそガチムチ神の出番だ！！

頭の中でガチムチガチムチと呪文を唱えながら、目を瞑って瞑想。
頭の中では絶賛ガチムチバトルが白熱中！！

ふははははははははは！！

ガチムチ万歳！！

ジークオン！！ガチムチ！！

私はガチムチ・パロ・ラピユタだ！！

目がああああ、目がああああ、ガチムチに犯されていく!!
ヤバイ!!

今度は戻れなくなる!!

思って目を開けるとそこには私を上目遣いでのぞいてくる美少女。
装備は裸。

二つのピンクが目に入る。

ごがあああああああああつ!!

今の今までガチムチモードだったせいか、その反動で、ギャップで
なおのことインパクトが強い!!

くそっ!!

私のライフはもう0よ!!

もうやめて!!

体がいつの間にか洗い終えていたらしく(あれ?いつのまに私は洗
われていた?)浴槽に一緒に入ることとなった。

大丈夫。

今の今までのピンクストームに比べれば、ただ一緒に入るくらいな
んともない。

はずでしたがつ!?

私の股のところにちょこんと座りこむように風呂につかる彼女。

「んしょ、んしょ。」とかいいながら座りなおすたびにお尻が・・・

エヴァちゃんのかわゆいお尻が私のトップシークレットに押し当て
られ、刺激され、いよいよもってエクスカリバーの鞘が吹き飛んで
しまった!!

ふふふふふふふふふふふふ!!

大丈夫、大丈夫。

こうしてる間にも身じろぎをするエヴァちゃん。

色々危ないが問題ない。
問題は無い！！

再度、ガチムチモードを発動するのみ！！

さあ、私の中に眠るガチムチパワーよ。

今こそ目覚めるのだ。

ガチムチ眼を開眼し、全世界の国民に永劫なるガチムチの安らぎを
！！

さあ万華鏡ガチムチ眼による幻術で、現実では一秒しか経過しなくとも幻術の中ではガチムチ専門誌『ガチに生きる』に掲載されてあった、ガチムチプレイ百選を自身に掛けるのだ。

そうすれば私のエクスカリバーも滾る血潮を収めてくれるはず。

ごめんね、エヴァちゃん。私は修羅に・・・ガチムチに生きる者。

あなたのそばには居られない。

アディオス、エヴァちゃん。

とか思ってた頃がありました。

なんとまあ強力なことに、エヴァちゃんは驚くことをしてきやがりましたよ。

「姉様・・・私を・・・好きにして？」

好きにして・・・好きにして？

スキンにして？

スキンヘッドにして？

スキンヘッド？

すなわち禿になりたいというのかっ！？

この子は！！

なんて恐ろしい子！！

世紀末に生息するモヒカン達と交友をばぐもつというのかっ！！
そんなのお母さん許しませんよっ！！

とか言ったら、エヴァちゃんに殴られた。

「姉様、ふざけるのは止めて
姉様が男だつてのは知ってる。」

「・・・へ？」

し、知ってたの？」

「というか、聞こえてた。」

「・・・うつかりしてたわね。」

「むしろ嬉しかったもの。」

これで名実ともに姉様と一緒にいられる。
妻として、伴侶として。

姉様は私じゃいや？」

「・・・いやなワケないでしょ。」

いいの？」

私、貴方の復讐を奪ったし・・・色々迷惑かけた。
これからもきつと迷惑を・・・」

とか言っと、またもや殴られた。

別に殴るのはいいんだけど、（よくないけど）吸血鬼の力考えてね、
エヴァちゃん。

私だから大丈夫なものを、普通の人なら殴られたところ吹き飛んで
るからね？

「今更過ぎるよ、姉様。」

言っただでしょ？今度は私が姉様を幸せにする番だつて。
私の旦那様に・・・なつてくれますか？」

「エヴァちゃん・・・。」

「キティって呼んで。」

「キティ。」

「うん。」

あ、やば。

泣けてきた。

嬉し泣きとか恥ずかしい。

「むしろこっちからお願いしたいくらいなもの。
私と・・・私の奥さんになってくれますか？」

というとエヴァちゃん改め、キティは。

「もちろん。」

不束者ですが、末永くお願いします。」

と言った時の彼女の笑顔は私にとっての一生の宝物だ。

どんな時もカメラは持っておこうと誓った瞬間でもある。

7つ目 名実共に、一生共に（後書き）

前回でエヴァンジェリン編は終わる予定でしたが、今回で終わることになりました。

これで名実共に、彼女達は家族です。

昨今、結婚したらずぐ離婚という家庭が増えてきてます。

悲しいことですね。清濁合わせて相手を愛するというのが出来なくなっているってことでしょうか？

結婚して始めて分かることで途端に冷める・・・ってことらしいですね。

今回はこの作品中のみの設定が出てきました。

名前に関することですが、エヴァちゃんのフルネームは「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」です。

略称も直したフルネームは「エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル」となります。

A・Kの部分はミドルネーム。

ミドルネームは日本人の文化には存在しないため、分かりづらいですが、一言で言うなら「勝手に名乗れる個人名」といったところでしょうか？

文化圏によりミドルネームをそもそも持たなかったり、名前を略してミドルネームのほうを名乗ったり、その逆もあったりと日本人には理解しにくいものです。

かくいう僕もあまりはつきりとは理解してません。

というわけで、とりあえず今作ではエヴァンジェリンが名前。

マクダウエルが名字。アタナシアの部分が貴族名（どういう貴族？という身分をあらわすもの）。キティが家族間のみで許される愛称として設定しました。

キティという名はそれこそ親や伴侶のみに呼ぶことを許されるもの・・・として定義しておいてください。

家族以外がこの名を呼んだ場合、初対面の女性の胸をわしづかみにすることよりも無礼なこと。として理解してもらえれば幸いです。すなわち、今回の「キティと呼んで」のエヴァちゃんの発言は暗に「家族になつて欲しい」という思いが込められてるわけです。

今回の話はちよつとえつちなラブラブだけだと思ったかもしれませんけど、結構重要だったりする話です。

8つ目 はた迷惑な姉妹

結局のところ、何も無くその日は終わった。

ウトウトしたところに私の布団にキティが潜り込んできたときは実に驚いたけど、まあ家族だし。

ま、いつかってことでそのまま寝ることに。

スパ君が「良かったただ良かった」と言いながら泣いていたのがまた申し訳ない。

心配をかけてたことをより理解させられたよ。ホントにね。

チャチャゼロも何か思うところがあつたらしく。

どこから持ってきたんだか分からないが、そこそこ上等そうなワインをどこか嬉しそうに飲んでいた、気がする。

んでもって、次の日。

「姉様。

どこかへ行くのですか？」

「うん。」

私は現在、玄関で支度をしていた。といっても簡単な物だけど。でも軽く旅できる程度には多い荷物だ。

「ちょっと魔法世界にね。

キティには言つたでしょ？」

私の目的は・・・というか、頼まれたことは一定量の魂生成。

あの金髪幼女の話によれば、私が生きている。

それだけで魂が生成されていくらしいけど・・・」

今更だが、私のこの世界での目的・・・というか目標？
依頼？それを振り返ってみる。

あの神様によると、私は1000年生きなくてはならない。

私の魂に魂生成器なるものを組み込んでいるらしく、私はただ生きているだけで魂を生成することだ。

私が死んだときに神様が言ったように、”世界による魂の数は決まっている”という世界の法則があるらしい。

それで、その世界で決まった数の魂をつくる。それが世界の創造をする上で一番先にやらなくてはいけないことらしい。

それが出来て初めて、輪廻転生機構が働くのだとか。

一日に約100個の魂が仕上がるそうで、それを1000年分。
それが私の役目だった。

別に急ぐ必要はないのだが、私は夏休みの宿題を最初の数日にやるタイプである。

後顧の憂い無く、何も気にせずキティとイチヤイチャラブするためにも、死なない程度に真面目に魂生成をやるうか。となったのだ。

そこで、魂生成の話に戻るのだがこれは生き続けるだけでなく、とある方法で早めることが出来る。

それすなわちこの世界における魂を生成する魔術。

『造物主の掟』（コードオブザライフメーカー）である。

それを行うのに必要な物がフェイト達が持つマスターキー、グランドマスターキー、グレートグランドマスターキーのいずれか。

性能の関係上、できればグランドマスターキー以上が望ましい。

私の魂に組み込まれてる魂生成器と組み合わせると、アスナ姫の力を借りずに造物主オリジナル魔法である『リライト』まで使えてしまうという。

要は、チート能力を単体で行う力を手に入れるためと神様から言い

渡された宿題をさつさと終わらすために、「完全なる世界」の連中の誰かから、マスターキーをちよるまかそうぜってわけである。

そのために考えた作戦が”サウザンドマスター達、紅き翼について行き、サウザンドマスターが造物主をぶつとばす所でこつそりと造物主の持つグレートなマスターキーを奪っちゃうぜ！”で、それをするためにまず彼等に取り入るために今から魔法世界に行こうってことである。

奪い取ったら、即トンスラ。

もちろん、持つてるとフェイト達に付け狙われてしまうので、使った後はこつそり返す予定である。

ついでにアルビレオ・イマにお礼をしなくてはなるまい。

今の私達があるのは彼のアーティファクトのおかげのようだし。おかげ・・・というより”くせいで”と言っべきかも知れない。複雑な心境である。

「というわけで、ラブラブいちゃいちゃしたいところだけど、せっかくお礼という口実があるわけだからこれ幸いとばかりに取り入ってくるわね。

キティはお留守番ー」

「私もついていきます！」

「いや、一応危険もあるわけだからキティはー」

「ついていきます。」

「でもね、キティ。今の計画を聞けば分かるとおり、こつそり奪うだけといっても力量の測れない相手のラスボスに会う機会がある以上ー」

「姉様にとっても危険です。私だって守られてばかりじゃない。」

というキティの顔は決して意思を曲げない。
言うことを聞かないという感じ。

・・・無駄よね。これは。

「私が誰に育ててもらったと思っているんです？
姉様。その程度で理由で私の意思を曲げられると思ったら大間違い
です。」

「・・・スパ君、育て方を間違ってる？」

「そ、その言い草は酷いだよ！？」

どう考えてもオラのせいではないだべ！？」

「ダロウナ。」

ドウ考エテモ、アリス似ダロウ。」

うるさい人形どもだ。

「そ、それに・・・」

「ん？何？」

恥ずかしそうに言いにくそうに、顔を俯けるキティ。

「う、浮気をしないか・・・心配です。」

上目遣い気味に頬を真っ赤にして。

そんなことをのたまうキティ。

可愛い！！

可愛いよ！！

可愛いったらありやしない！！

しぐさはもちろん、そんないじらしいセリフどこで覚えてきたのさ
！！

「ふふ。」

「・・・笑わないでください。」

そんなのありえないのに。

天地がひっくり返ろうと、月が消し飛ばうと、太陽が燃え尽きようとありえない話だ。

それこそ私の人格が。記憶が無くなって、別人になりでもしない限りありえない話だ。

とは言っても、不安になるのが人情かな？

「わかったよ。」

そんなこと言われちゃ、何も言えなくなるわ。

・・・キティったらいつの間にこんなに可愛くなったのかしら？」

そのままキティに抱きつく私。

嗚呼、温い。

これが家族の暖かさってやつだろうか。

「わ、私の愛らしさは・・・う、生まれたときからです。」

顔を真っ赤にしながらそんなことを言ってくる。

軽口のつもりのようなが、プルプル震えるくらい恥ずかしいなら言わなければいいのに。

まあ私からしたらキティ以上に可愛い存在なんて、ありえないんだけどね。

「ふふ、そうね。」

・・・スパ君、というわけでキティの分の荷物もお願いできる？」

「すでに終わってるだよ。」

「ゴ主人ノ”私もついていきます”発言ヲ聞イタ時カラ準備シテイ

タシナ。」

「・・・相も変わらず、気の利くカカシね。

知識、技術もさることながら、スパ君に出来ないことなんてもはや無いんじゃない？」

全く持つて凄いカカシである。今更であるが、カカシの使用用途を遥かに逸脱しているね。うん。

「ああ、それと、ナギに会う以上は髪の毛を黒くしてるだけじゃまずいかも知れないわね。」

黒い髪の毛でかなり雰囲気が変わると言っても、アリカ王女と近い彼等を誤魔化すのはいささか無理がある。彼女そっくりな外見は変に警戒されるかもしれない。

まあ、見られたところで他人の空似だと言ってしまえば良い気もするけどさ。

何らかの仮面はつけていこうか？

仮面・・・か。

でも仮面は邪魔臭いな。

となると変装？

変化？

変身？

・・・ほほう。

ちよつと面白いことを思いついちゃった。

これはイケル！！

勝てる！！

何に？とは聞かないで。

なんとなくノリで言っただけだし。

「キティにも手伝ってもらうからね？」

「何かは分からないけど、姉様の手伝いなら喜んでします!！」

というわけで、現在。

彼等はまたもや紛争地域にてバカス力悪者を蹴散らしていた。

「よし。」

こんなところかしら?」

「ね、姉様!？」

ほ、本当にこの姿で出ないといけないの!？」

「ええ、様式美と言っても良いかもしれないわ。」

「いや、どこの様式美かは分からないけど・・・本当にこれで出ないとダメ!？」

「お願い、キティ。」

いまいち、乗り気ではないキティに私の上目遣い攻撃を食らわせた!いつもは受けてばかりだが、たまにはこっちから責めてやる!!

「・・・う。」

・・・わ、分かったよ・・・分かりました!!

やれば良いんですよね!？」

「ありがとうキティ!!」

やっぱり持つべき物は理解ある妻ね!!」

「ね、姉様!？」

つ、妻だなんて・・・その・・・嬉しいです。

というか、抱きつかないでください!」

「いや?」

「い、嫌ではないですけど・・・時と場所を選んで欲しいというか・・・二人っきりのときにして欲しいというか。」

「可愛いわ・・・キティ。」

「ね、姉様。」

抱き合いながら見つめ合う私達。

「オイ、バカッブル。」

ソロソロジャネエノカ？」

「・・・嗚呼・・・アリスがあんなに幸せそうに・・・オラも幸せだべ。」

「テメエモモドツテコイ、ボケ木偶。」

おつといけない！！

タイミングを逃してはせつかくの魔法具が無駄になってしまう。

「行くよ。キティ。」

「は、ハイ！」

姉様！！」

彼等、紅き翼が戦っていると、相手側は鬼神を召喚したらしい。結構上位の者のようだ。

その鬼神目掛けてナギやガチムチや眼鏡剣士が向かおうとするとここに、颯爽と私達が躍り出た！！

ひととき大きな岩がどこからとも無く落ちてくる。

そして高くそびえた丘となる岩の頂上に私達が着地する。

「全世界の子供達！」

「よ、呼べよ、呼べ・・・！」

「悪の手先を潰すため!!」

「あ、悪の秘密を暴くため・・・!」

「子供達の笑顔を守るために!」

「わ、私達は馳せ参じた・・・!」

ふふふ。

さあ、見て驚け!!

見てわめけ!!

私達が!!

「戦場を駆ける麗しき白百合!!

キュア。ワイト!!」

「せ、戦場を駆ける漆黒の黒百合!

キュア。ラック!!」

「二人合わせて!!」

良し!!

決まるぞ、これは!!

「プ。キュア!!」

私達の背後でチュドーンチュドーンと演出的な爆発が巻き起こる。岩に組み込んでおいた簡素な爆弾がちゃんと動いてくれたようだ。キティの聲がいまいち出てなかった気がするが、こんなときのために拡声器代わりの魔法も開発済みである!!

戦場にとどろく私達の勇士！！

見てくれたかい！！おつかさん！！

私は初代ブ。キュアの白いほうの衣装をよりヒラヒラを付けて可愛らしくしてみた一品。

顔がばれないように、バタフライマスクなんてものまで付けてる。

バタフライマスクって蝶サイコーだね。

キティのも初代ブ。キュアの黒いほうの衣装にヒラヒラを付けまくってゴスロリ化した一品。

怖いくらいに決まった！！

しーーーーんと静まり返る戦場。

鬼神すらぼかんとしてるように見える。

<ね、姉様。やたら静か過ぎる気がします。>

<ふふふ。いきなりの登場に皆感極まって声が出ないのよ。>

<い、いえ、周りの視線が敵味方問わずに痛い気がします。>

<何言ってるの？さっきの口上を聞いていたでしょ？>

こんな可憐な2人を悪の手先だと勘違いするバカは居ないでしょうけど、念のため”子供達の笑顔を守る”とか”悪の手先は潰す”とか、分かりやすく正義の味方だって分かるようにしたのよ？

少なくとも味方からは好意的な視線ではあるはず。>

びしっとポーズを決めた状態のまま念話で会話する私たち。

「おい・・・なんだアリヤ？」

「私を知るわけ無いだろう。」

「俺様もいろいろな戦場を経験してきたものだが、あんなバカは始めて見る。」

「ハッ、ジャックに言われちゃお終いだな。」

「おいこら、ナギ。そりやどついう意味だ？」

「言葉どおりの意味だつての。」

「喧嘩売つてんのか？俺様としてはおめえをぶっ飛ばしてからでもかまわねえんだぜ？」

「そりやこつちのセリフだぜ、ジャック。」

「なんなら今からやるか？」

「ああ、望むところだ。」

「お、おい！？」

仲間割れしてる場合じゃないだろ！？」

見覚えはあつたが、名前を忘れていたガチムチ君はラカンというらしい。

ナギと喧嘩をおっぱじめる。

<姉様・・・味方するどころか、仲間割れの原因になったみたいですけど？>

<・・・私のせいじゃないもん。>

<言いたくは無いけど、これは確実に姉様のせいだと・・・>

<・・・違うもん。>

<それにいつまでこのポーズをし続けていればいいのですか？>

<誰かがツッコんでくれると思つてたから・・・タイミングが難しくなつたよね。ツッコまれた時のような口上も考えてたのに。>

<・・・他の人間も私達を無視して戦闘を再開してるみたいですよ？見なかったことにするつもりでしょうか？>

<・・・私のシナリオではここで、ノリのよさそうなあのガチムチ君やサウザンドマスターがツツコンでくれると思ってたの。>

<ええ、聞いてます。>

<そこで君達を助けるために遠くの星からやってきたとかそんな感じのことを言つて・・・「それはありがたい」みたいな？

そして一緒に戦場を駆け巡る内にいつの間にか親友と・・・戦友となっていたみたいな。>

<・・・だから、私は言つたのに。

普通にお礼しに行けば良いつて。わざわざここまで大きい戦いが始まるのを待たなくても良かったのに。>

<き、キティだつて結局は賛成したでしょ！？>

<そ、それは！？

それは姉様がどうしてもつて私に頼んだからでしょ！？

責任転嫁はみつともないと思う！！>

<みつともないつて何！？

誰に頼まれたところで賛成した時点で責任は発生すると思うけど、何か反論は！？>

<言うにことかいて、ふざけすぎ！！

姉様の親の顔が見たい！！>

<どうぞどうぞ、好きなだけ見ればいいじゃない！？

そこで戦場にも関わらず味方とバカみたいにガチムチとやりあつてるのが私の親ですう！！>

<この親にしてこの子ありつてわけね！！

姉様、可哀想・・・ぷっ。>

<わ、笑つたわねっ！？

笑つこた無いでしょ！？>

<別に笑うつもりは無かつたもん・・・つい笑つちやつただけで。>
<なおたちが悪いわよ！！

・・・これは教育しなোসないとダメかしらね？>
<・・・望むところよ、姉様。>

「手加減はしないわよ、キティ。」

「・・・当然ね。」

こうして初の姉妹喧嘩であり夫婦喧嘩が始まった。

私が炎の槍を100個繰り出せば、キティは氷の槍を200個繰り出す。

私が雷の暴風を打ち出せば、キティは闇の吹雪を打ち出す。

私がひとたび拳を振るえば、大気が裂け、周りのあらゆる物が弾け飛び。

キティがひとたび拳を振るえば、大地が裂け、周りのあらゆる物が沈み潰れる。

拳を打ち合えば、衝撃波が発生し、蹴りを打ち合えば轟音が響き渡る。

どちらかが叩きつけられれば、じわれが発生し、砂塵が巻き起こり。また叩きつけられれば、大地を揺るがし、竜巻が巻き起こる。

ちよつと外れた千の雷が鬼神の大半を焼き殺し、ちよつと外れた燃える天空が森や大地を焼き焦がす。

お互いに闇の魔法を使い、自分の魔法を自身に添加し、相手の魔法も添加し、それこそ音速の域で殴りあう私達はあたり一面を焦土に地獄へと変えつつ、殴りあった。

不毛なことをしてることに気づき、お互いに頬を染めながら仲直りした時。

いつの間にか戦いが終わっていたことに私達は揃って首をかしげたのだった。

8つ目 はた迷惑な姉妹（後書き）

しばらくはギャグテイストが続きます。

紅き翼編は終始ギャグテイストで行こうかなと思っていましたが、やはりここはナギとアリカの物語を書こう！となりました。

あまり期待せずにおまくださいませ。

ちなみにエヴァちゃんの戦闘力は主人公に一步届かないというレベル。

主人公は最強の戦闘力を持ちますが、それは単にひたすら地道に魔力をあげて来たことによる、魔力量が凄いというだけ。

どんな策があるかと数（物量）の暴力には誰だろうと勝てませんか
らね。

魔力量が同じと言う条件ならば、エヴァちゃんにも勝てるレベルです。

とは言え、全てを視認できるというある意味チートな魔眼がありませんから難しいことには違いありません。

9つ目 濃き面々（前書き）

意外と好評価なことに恐悦至極。

タイトルで損してるみたいな感想とかとても嬉しいです。

ぶっちゃけ、タイトルとか超てきとーですからね。

その内、これと思いついたら変えるかも知れません。

9つ目 濃き面々

ところ代わり。

現在、適当な建物の中にて私達は紅き翼の面々と面会してたりします。

「それで、あんたらは結局何者なんだ？
さっきの戦闘を見るに、只者じゃない・・・ってことだけは分かるけどよ。」

と、ナギが言えば周りのメンバーもうんうんという感じで頷く。
聞いてなかったのかな？
私達が一体何者だったのかってことを。

「私はキュアホワイっただあっ！？」
「それはいいです、もう。」

せっかくの自己紹介がキティのツッコミで阻止された。
というか、もう少し手加減してくれないと私いつか死んじゃうよ？
思いつきりどてっばらにパンチとか。
ほら、面白いくらいに吹き飛んだ私を見て皆ドン引きしてるじゃない。

ドン引きというよりはあまりの綺麗な吹き飛び方に見ほれてるって感じかしら？

それとも・・・飛ばされた先の壁を大破してしまったことによる「弁償しろよ。」的な視線？

「真祖の吸血鬼と呼ばれるエヴァンジェリンさんに殴られるだけじゃなくて、壁にあれだけの速度で突っ込んでおいてなんら意に介さず

立ち上がるって・・・どんだけですか、この人。
ラカンさんみたいですな。」

戦慄したような表情でこんなことを言ってるのは、ツンツン髪が尖
ってる少年。

確かタカミチ・・・だったかな？

もう、原作知識がほとんど無くてね。

名前を思い出すのも一苦労。

「オイ。いくらなんでも俺様だって、真祖の一撃を貰ってけろつと
出来るほど化け物染みてるつもりはないぞ。

まあ出来るんだが。」

「できちゃうんですか！？結局化け物じゃないですか！？」

「ちなみに俺も可能だな。」

「ナギも！？」

「私も出来ますよ。」

「アルさんも！？」

「ワシも可能じゃな。」

「・・・よく考えたら、この場に居る人間は僕を除けばそれくらい
出来て当たり前でしたな。」

「いや！私まで出来ると思われたら心外だぞ！？タカミチ君！？」

ふむ、タカミチと詠春はツツコミキャラか。

苦労人のようだ。

「馬鹿ドモノアツマリダナ。」

「おい、チャチャゼロ。それに私も入っているんじゃないだろうな
？」

「ふっ、アリスにかかればその程度、お茶の子さいさいだべ。」

ちなみにこの場にはスパ君とチャチャゼロもいる。

2人には拡声器代わりの魔法はもちろん、岩を飛ばしてもらったりとかしてもらったし。

私達の喧嘩の被害を味方側に行かないようにしてくれたのも2人である。

危なかったよね、正直。

敵どころか味方するべき勢力ごと皆殺しにしちゃうところだったもの。

ちなみに、ナギとラカンの喧嘩も凄まじい物であったが、その被害はアルとゼクトに防がれていた。

あまりの馬鹿さ加減に、詠春がぶち切れて2人を止めるまで喧嘩は続いていたのだから、私達よりもなお性質が悪い。

私達は自主的に止めたよ？もちろん。

しかも喧嘩することによつて、なおのこと絆が深まった気がする。

今度から定期的に喧嘩するのも良いかもしれない。

後日、そんなことを言ったら、チャチャゼロから刺された。

ごめんなさい、調子に乗りました。

「それで真面目な話、貴方達は誰ですか？

そちらの少女は数年前に会った覚えがあるようなないような？」

わざとらしく嫌な笑みを浮かべるのはアルビレオ・イマ。

ううむ、キティに聞いていたとおり、なんだか気に食わない男だ。

気に食わないというか、油断できないというか？

あまり係わり合いになりたくない気もするような、こんな友人が1

人はいて良いかもしれないと思わせてくれるような？

というか、波長が合いそうな気もする・・・ような？

不思議な男性だ。というか、この人男性かしら？女性？

男性みたな立ち振る舞いだが、どうなんだろうか。そこところ。

この人、本当は女性なんじゃないかな？

胸があるとか、生えていないと聞いても私は驚かない・・・驚けない自信があるね。

この男の問いに答えたのはキティである。

「ふん。貸しがあつたから、返しに来たまでだ。」

キティも私とあまり変わらない印象を抱いたようだ。

どことなく不機嫌なのはこんな男に借りを作つたのが、気に食わないのかもしれない。

ふて腐れたように指輪を・・・魔法媒体を投げ渡す。

あの日に借りた物らしい。

言葉遣いが気になったけど、私だけに敬語を使ってくれてるってコトかな？

特別って感じがして、こんなときになんだが顔がにやけてしまう。

「ど、どうしたのですか？

姉様。気持ち悪い笑みを浮かべて？」

「は、はつきり言うのね、キティ。」

気持ち悪いとはいくらなんでも酷いじゃないか。

というか、バタフライマスクを着用してるのに、よく分かるね？

「何年、姉様と過ごしてきたと思ってるんですか？

そんなことくらい見なくても分かりますよ。」

キ、キティ。

「ね、姉様。」

感極まって見詰め合っていると。

「オイ、バカップル。

イイノカ？

シツカリ見ラレテルゾ。ケケケツ。」

紅き翼の諸君が私達をうらやんでいる感じに見ている。
タカミチ君と詠春さん、ナギは若干顔が赤くなっていた。

「ふふん、分かってないわね？

チャチャゼロ。見せ付けているのよ！！私達のラブラブ具合をね！
！」

「ね、姉様・・・は、ハズかし・・・こらっ！？」

アルビレオ・イマ！！

き、きさまあっ！？

何を撮っている！？そのカメラで何を撮っているんだ！？

「おや？

分かっているのでしょうか？エヴァンジェリン。

これがかの闇の福音・・・人形使い、禍音の使徒、悪しき音信、不死の魔法使いと悪名高い極悪人だとは・・・。良い弱みを握れた物です。」

やたらとにこやかに良い笑みでそうのたまうのはアルビレオ・イマ。
ほほう？

分かっているじゃないか。

「後で焼き増しをもらえるかしら？」

「一枚、100ドラクマでお譲りしますよ？」

「な、何を言ってるのですか！？姉様！？」

「もともとは私のキティよ？」

写真を撮らせて上げるだけでも感謝しなさいな。

まけて頂戴。せめて10ドラクマね。」

「・・・むむう。このカメラはかなりの高画質を誇る特殊な魔法力メラで、現像にそこそお金がかかるのですが・・・しかたありませんね。

ではそれで。

焼きあがるのはざつと二日後になりますが、どうします?。」

「そうね・・・この住所に送ってもらえるかしら?。」

「ふむ・・・ここは。なるほど。」

麻帆良の住所を渡す。

どうせ後々ばれるだろうし、よしとしよう。住所ぐらい。

「ね、姉様!?

さつきから何を・・・!?。」

「あら?可愛い妹の写真をアルバムにとっておこうと思ってるのだから?」

「そんなに悪いことかしら?。」

「うぐ・・・う、嬉しいのですが・・・その男に・・・。」

「まあまあ。いいじゃない。

減る物じゃないし。」

「良いのか?アル。

どこの誰とも分からぬ輩じゃぞ?。」

ゼクト君が私を警戒したような目で見て、あえて聞こえるようにそう言った。

先ほどからずーっと警戒してるゼクト君。

歴史上ではなんか知らないけど、この子の体を造物主が奪っていつ

たんだっけ？

というか、警戒しないで欲しいな。

「大丈夫でしょう。」

この住所と、彼女の力量から見て・・・おそらくですが彼女は”金色天使”本人かと。」

「あ、あの”守護神”、”管理者”かのっ！？」

え？

何その二つ名？

金色天使はまだ良い。

昔の呼び名であるが、何の因果か今も呼ばれているのにはワケがある。

第二次世界大戦中のときに、その時の極東支部の長が調子こいて”戦争中に土地の権利書がなくなったことにして、この際だから奪いとっちまわね！”という、せこい考えの下、退去を命じてきたので丁度キティとの別れの件を引きずっていて、ナイーブになっていたこともあり、その時の極東に集まる魔法使いどもを本気で叩き潰したことがあった。

その時すでに魔族化していた私は魔力はもちろん、魔族の力も全開で連中をフルボッコにしたのである。

金色の翼と、金色の髪（髪の変色魔法がいつの間にか私の本気の魔力で弾け飛んでいたため）、金色の尻尾をくゆらせながら暴れまわった結果、”金色天使”と呼ばれるに至ったわけだ。もちろん変装は忘れていない。

NARUTOに出てきた”うちはマダラ”の付けている仮面を作つて、それを装着。魔眼の力もフルスロットルで、まあ相手からしたら夢に出てくるくらいの悲惨な・・・凄惨な事件だっただろう。

しかも力の差が分かるように敵さんは必ず、肺に刺さるように肋骨

を折り潰してやったので、なおのことだろう。

「内臓に突き刺さるように殴ってやる！！」とは我ながら、凄く殺し文句だった。

治療して、再度かかってくるが何度も何度も同じ位置を執拗に責め続けた結果、心が折れた連中は涙ながらに謝罪をしたというわけである。

暴れまわってすっきりした私はむしろお礼を言いたいぐらいだから、もちろん許した。

一応これから先は不干涉でお願いね。と言っておいたけれども。

問題は二つ目だ。

守護者？管理者？

なにそれ？

特に守ってるものなんて無いけど？

もちろん何かを管理してることも無い。

「守護者とか管理者って何？」

「・・・本当にこやつがそうなのか？」

私の疑問に、懐疑的な目線を向けるゼクト君。

さつきから嫌な態度だよね、このお子様。無理も無いけどさ。

「ええ、まず間違いないでしょう。」

守護者、管理者とは、世界樹のあるあの地・・・麻帆良の土地を守っている、管理している人としてどこかの誰かがつけた二つ名ですよ。畏敬の念をこめた・・・ね。」

「・・・大層なことになってるのね。」

まあ、私の暴れっぷりをみたらそう取る人が居ても無理はないかも

しれない。

「というか誰がどう見ても、”世界樹の地を奪おうとする輩におしおきをした”という風に映る。」

そんな意図でんで無かったんだけどね。

むしろ土地なんてどうでも良かったりした。

とはいえ魔力が他より潤沢な地であり、魔族にとって居心地が良いのには違いないんだけどさ。」

「とにかくその金色天使がなぜここに居るかってコトだよな？」

そして俺たちに力を貸そうとしてるのか？ってことも気になる。」

おや、ナギも意外と細かいようだ。

馬鹿っぽい感じだったからそんなこと意にも介さないタイプの人間だと思ってた。

評価を改める必要があるかもね。いや、さすがに気にするか。

「まずは自己紹介から。」

私の名はアリス・スプ・・・じゃなかった。

アリス・マクダウエル。そこにいるキティの家族だってことは・・・まあもう分かるよね。」

スプあたりで眉をひそめたのがゼクト君とアル。

危ない危ない。

うっかり本名を名乗っちゃうところでした。てへ。

背後で人形とキティがため息を付いてるが気にしない。

私は基本的にポジティブなのさ！

「明らかに偽名じゃの。その仮面と言い・・・どうも分からん奴らじゃ。」

より警戒を強めた感じのゼクト君。
まったく、クールな坊やだぜ！

「偽名は彼の・・・アルビレオ・・・アル君って呼ばせてもらうね。
アル君のイノチノシヘン対策。多分だけどそれって本名と対象に会うこと。それが条件だよな？」

「ええ、そうですよ。」

簡単に認めるアル君。

むむう、ここで軽く駆け引きなんかを期待してたんだが、拍子抜けだ。

「特にお天道様に顔向けできないってわけじゃないから心配しないで貰えると嬉しいな。

目的を言うならば、キティが世話になったみたいだからそのお礼。
それが第一。」

ここは本音で行くべきかな。

なんかセクト君が真偽をはかるウソ発見器的な魔法を使ってきてるし。

丁度いいや。利用させてもらおう。

あえてレジストしない。

「第二は私の目的・・・特に君達に害することじゃない。むしろ君達にとってはなんら害は無く、益になるだろうことをしたいが為に、君達と一緒に英雄ごっこに興じようかな？と思ってね。」

「・・・ウソは付いてないようじゃな。」

「ふふ、英雄ごっこ came しましたか。存外、言いえて妙かもしれませ

んね。」

「一緒に戦うってコトか？俺様としてはかまわねえぜ。強そうだしな。てか、一戦これからやりあわねえか？」

「そう勝手に決めて良いのか？・・・ガトウの胃がまた荒れそうだな。私は知らんぞ。」

「師匠も・・・大変ですね。」

皆一様に一応は賛成の意を示してくれたようで何よりである。

我ながら私達は凄まじく怪しいと思うのだが、それを簡単に受け入れる彼等はさすが英雄の器。と言った所かもしれない。

最後に1人だけ私を見つめていたナギが一言。

「・・・まあ他人の気がしねえしな。むしろなんつか・・・ほっとする。」

ついという感じにこぼしていた。

い、意外と鋭い。

なんというか変なところで器の大きさを知らされる。

ラカンの”おい！？口説くにしてももう少しまともな言葉あんだろ！？”という言葉に顔を赤面させながら”ち、ちっげーっよ！？馬鹿っ！！”とムキになるところは歳相応だが。

「・・・なかなか面白そうね。キティはどう思う？」

「・・・浮気はダメ、姉様。男なんてもつてのほかです。」

・・・少し間の抜けたキティの言葉につい笑みのこぼれる私だった。

9つ目 濃き面々（後書き）

お気に入り伸びが良くて嬉しい。

最初は原作のパワーのおかげだろうと思っていたのですが、これって僕の力も多少はあるのだろっか！？とちょっとだけ自身を持って嬉しい今日この頃です。予想以上にギャグネタが思い浮かばない。結構早めにシリアス回、もといアリカ王女とナギの馴れ初めパートに突入するかもです。

10つ目 本契約してみた

私達が紅き翼入りしてから早一ヶ月。

結構馴染んできたかなと思う最近です。

簡単なホテルの部屋までかりちゃってね。

せつかく(?)の大戦中だし、万が一にでも死なないようにパクテイオーもしちゃおうかなと思って、今日キティとのキスをしちゃったりなんかします。

「ねえ・・・キティ。」

「なんです？姉様。」

「キスしない？」

「ぶはっ!？」

い、いきなり何を言ってるんですかっ!？」

噴出すほど突拍子もないことだったかな？

・・・突拍子もないことだね。

ちなみに今は朝ごはんの最中。

今日はなんだか料理が面倒だったので、ツナ缶でご飯という質素な物である。

ツナってそのままでも、1手間加えるだけでも味が変わるから良いよね。

ただ、ツナーもといマグロって水銀の含有量が多いらしく・・・妊婦さんがあまりに沢山摂るのはお腹の中の子供によろしくないとかなんとか。

アリスちゃんのなんちゃって豆知識です。

幼児にも良くないとか、別に大丈夫だとかその辺は学者によって意見が分かれるらしい。

魚介類はその生態上、生物濃縮が行われやすく、水銀だとかを始め

として自然界では分解されにくい農薬や重金属類だと言ったものが蓄積されやすい傾向にある。

生物濃縮って言うのは・・・ミジンコやオキアミなどのプランクトンが水中の重金属などを吸収して、その吸収したミジンコを小魚が食べる。そうすると食べれば食べるほど小魚はプランクトンに含まれる重金属を始めとした体外に排出されにくい有害物質を溜め込むことになるよね？

その小魚がより大きな魚に食べられる。もちろん一度や二度じゃなく、生きてる限り小魚を食べるより大きな魚。マグロだとか鯨だとかね。

そうした小魚を食べてマグロの体により凝縮されていく。そしてその魚を人間が食し、最終的に人間の体の中に溜め込まれていく。これを生物濃縮と言ったりする。

もちろん世界は広いわけで、濃縮されるといってもビビたるものだから健康に大した被害はないとされてるけれど、妊婦さんはお腹の中の胎児が影響を受けやすいということで食物連鎖において上位に位置する魚介類は止めておいたほうがいいとされてるわけ。

陸上の生物でも同じくされているのだが、家畜として管理されている物が殆どであり陸上の動物は問題ない・・・と思って良い。

ちなみに毒物なんかも濃縮される。

ヤドクガエルというカエルを知っているだろうか？

やたらと色の綺麗なカエルが多いヤドクガエルの仲間なのだけれど、このカエルの毒を原住民が矢に塗りつけたことからヤドクガエルと呼ばれ始めたらしい。

この毒はカエルの体から作られるのではなく、この生物濃縮で体に溜まった毒だったりする。

ヤドクガエルが普段食べる昆虫にこの毒が含まれているらしく、それを利用するように進化したのがこのカエル。

それが証拠に人工的に飼育されたヤドクガエルは毒性が弱いとされ

ている。

警戒色として毒々しいともいえる派手なカエルが多く、人工飼育下では毒性を大幅に下げることができるところから愛好家が多いとか。ちなみにカエルの粘液には生物濃縮うんぬんよりの前に大なり小なり刺激物が含まれているため、カエルを触ったら手を洗うようにしましょう。

目とか触ったら、激痛に見舞われることになるよ？

私もあれはキツかった。

畑とか耕していると、特に米とかは水田ができるからそこにいつの間にかアマガエルとかが住み着くんだよね。

害虫とかを食べてくれるから基本放置なんだけど、収穫の時がまた面倒で面倒で。

邪魔くさいったらありやしない。

ぴょんぴょん飛び跳ねるから、適当に掴んで捨てたりしながら米やら何やらを収穫したら、汗をかくじゃない？

カエルを触った手で顔をぬぐっちゃったわけ。

つい、ね。

痛いなのって。

焦って目をこすったらより痛くなるわなんだで、酷い目にあっただわ。結局、水魔法で顔を丸洗いしました。

本当に・・・痛かった。

「どうしたんです？姉様？遠い目をして。」

「いや、ちよつと知識と過去の過ちの反芻をね。」

いきなり押し黙った私を見て怪訝な顔をするキティ。

畑仕事はキティにも手伝わせたのだが、不思議と動物達が彼女には近寄らないのだ。

本能で絶対的な強者だと・・・上位の生き物だと動物達は理解して

いたのかもしれない。

正直パニクるキティを見たかったという思いもあったから、残念至極極まらない。

ていうか、かなり話が飛んだわ。

「さて、話を戻すけど、ツナに1手間を加えたらポン酢と砂糖を加えてご飯と一緒に。というのが一番だと思っただけどうかしら？」

「あの・・・話を戻すなら、キスうんぬんでは？」

「・・・そ、そうだったわね。」

わ、わざとボケたんだからねっ!?

そこんと勘違いしないでよ!?

「勘違いしないでよね!!

あんたのためじゃないんだから!!」

「は？」

今のセリフもちよっとボケたつもりが、マジ顔では?と返された。これはいささかキツイ。

「う、ごめんなさい。いい加減真面目に話しましょう。」

「私は終始真面目でしたが。」

「・・・私にはそう見えなかったわ。」

「・・・苦しいですね。」

「・・・わかってる。」

とりあえず話を進めよう。

「前に話したとおり、危険がかなりあるってことは知ってるわよね？」

「ええ。」

「まあ死なない程度に目をつけられない程度に頑張るつもりだけど、人間事故はつき物よ。」

いくら私達が世界最強と言って良いほどの姉妹とはいえね。いや、正確には兄妹で夫婦だけでも。」

「人間じゃないですけどね。」

「まあそんな些細なことはとりあえず適当に放っておいて。ぶつちやけ、普通にキスしたいと言つのは恥ずかしいから、本契約をダシにしてこちらで一步踏み出そうかな・・・と思って嫌？」

ぶつちやけ過ぎたかも。

「い、いえ・・・その・・・そんなことは・・・ただ、ムードがあるっていいですか？」

もう少しなんというか・・・初めてのキスは・・・良い感じでしたいな・・・という思いが。」

顔を赤らめてそんなことを言う、キティ。

本当に可愛いなもう！！

「それで・・・そのままの・・・愛を確かめ合うというか・・・あはんうふん・・・というか、なんというか。」

ふむ。確かにここらで肉体関係を持ち、よりカッコたる絆を築くことも大切かもしれない。

その辺はあせらずに行こうかな・・・とのんびり待っていたんだけ

ど、女性からしたら早く私を心も体も奪ってってコトだろうか？

それともそうしたことをして始めて夫婦の実感が沸くとか？

ぶっちゃけ、前世では彼女もろくにいなかったからその辺の乙女心というものは分らない。

今でこそ女装をしつつ女言葉を使っているがこれはあのアホ神様による呪いで癪づいただけであり、ぶっちゃけ自分の趣味ではない。矯正する意味もあり見出せないからこのままにいるだけである。

もちろんキティがもつと男らしい言葉を使えといえ一日とかからず直すつもりであるが。

女装は自分の見た目が起因する。

男物の服が全く持って似合わない。ありえない。ダサイといって良い。

致命的なまでにチグハグなのだ。

キティと会って、呪いが解けたことを確認するがてらその時代の男物の服を着てみたが、もちろん似合わない。

現代でもそうである。

いや、反物や着物だった昔にくらべて洋服になってからなおのこと似合わなくなったのだ。

中世的なものでようやく着れるといったもの。

アリカ王女に似た自分がせめて20間近の容姿だったらなんとか美青年としていけたかもしれないが、この体は15歳の肉体。

ぶっちゃけ、背のこともあり美女というよりも美少女といったほうが正しい外見である。

とどのつまり女性の顔ではなく女の子の顔であるがゆえになおのと男物が似合わないのだ。

正直、甘く見てた。

流石のちぐはぐ具合にスパ君ーもといカカシですら物申すほどの似合わなさなのだから。

最近、イケメンを見ると無性に顔を潰したくなるのは病気だろうか？

「要は初めてのファーストキスと一緒に始めてのそういうこともしようってことね。」

「・・・じゃあ今からしましょうか？」

「そ、そんなに急にっ！？」

「善は急げとも言っし・・・雰囲気なんてどの時間帯にせよ、作ろうと思えばいくらでも作れるでしょ？」

そういう行為は夜にする・・・みたいなイメージは確かにあるのだが、待つ意味をあまり感じない。

というわけでさっそく準備をしよう。

部屋はカーテンをかけて暗くして・・・簡単なお香が倉庫にあったはず。

弱い興奮効果もあつたから丁度いい。

「キティはシャワーに行っておいで。」

「ほ、本当にやるんですかっ！？」

「やろうと思ったときにやらないと恥ずかしくて出来なさそうなんだもん。」

平気そうに見えて結構内心、テンパッてるんです、私も。

そもそもそういう経験が無いから。

こういう勢いつて大事だよな。

今を逃したらまたの機会は数年先のことになりそうだな。

いやね、お互い600年以上も生きてるとそのうちでいつかあ見たいな考えが定着してくるものなんですよ。また明日・・・今度の機会に・・・なんてやってたら10年後でした。みたいな？

ムードを大事にしたいと聞いた直後にこんなに急に進めるってコトが無神経でデリカシーに欠けるとは分かってるんだけど、そういうこともあるからね。人外ともなると。

重ねて言うけど、なんだかんだでテンパツてるのだ、私も。

というわけでお互いにお風呂に入って、水も滴る良い男の娘と女の子がベッドの上で正座。

そして向かい合つてるといふ奇妙な状況になっていました。
どうしてこうなった!?

目の前にはキスを今か今かと待ち構えて目を瞑つてる少女。
もといキティ。

ぷるぷる微かに震えながら、顔を真っ赤にして唇を突き出してくるその姿はまさに筆舌に尽くしがたし。

何!?!この可愛い生き物!?

私は一体何と向かい合っているのだろうか!?!と自問するくらいには可愛い。

というか、本当に可愛い。

なんていうか、可愛いは正義だつて言葉を聞いたことがあるけれど誰だそんなことを言つたやつは!?

可愛いは悪だろう!?

この瞬間のためならば喜んで犯罪を行う覚悟が私にはある!!
ちよつくら人類皆殺しにする覚悟を持てる位には。

ここまで覚悟を持たせるに値するこの幸せな瞬間を生み出すような可愛い生き物はむしろ犯罪だろう!?

悪だろう!?

正直、全人類を隔離するべきだ。

こんな決戦兵器と人類を接触させてはならないと思う今現在。
というか、誰だ!?

最近のガキンチョはませてるとか馬鹿にしたやつは!?

たかが粘膜接触、されど粘膜接触。

キスがここまでし難い物だとは死んで始めて理解させられた。文字

通りの意味で。

昨今の中学生は進んでいるというが、これを日常的に行えるとかこの戦士かと。

正直、中学生舐めてました。

キス一つでこれだけでもたつく私をヘタレと呼ぶか、初心と呼ぶか。人によって意見は分かれるところであろうが、自分からしようと言つて自分からビビっているのだからこれは間違いなく前者に違いない。

いざ、してみようと口を近づけようとするのだが如何せん何かが私を押しとどめる。

なんだろうと自問自答してみても全く分からないこのストッパー。

この可愛い生物を自分の唇なんかで穢して良いのか？みたいな簡単な崇拜心が出てきているのかもしれない。

こんな感じのことを思い、躊躇し、二の足を踏んでいるにも関わらずプルプル震えながらただ唇を突き出して待っているキティ。

嗚呼、もうヤバイ。

こんなへたれ野郎を信じて待たせていること自体申し訳ないのだが、何度見ても見ほれる可愛さ。

とかなんとか良いつつ

結局のところ何が言いたいのかというと、私はテンパッているのである。

先ほどから何度も言ってるように。

まあわかって欲しい。

正直気絶しそうなんです。

「・・・アリス・・・あんなに顔を真っ赤にさせて・・・オラ、こんなアリスがついぞ見られるとは思ってなかっただ。」

「意気地ノネエ野郎ダナ。男ラシク襲ツチマエヨ。」

・・・なんで君らがここにいる？
一応追い出したつもりなんだが？

とりあえず、アホ人形ども追い出して、再度キティを見つめると彼女
は目を開けていた。

・・・むうっ？

なぜだかよりしづらくなった。

「嫌なの？姉様。」

「・・・嫌なわけが無い。」

ただ、緊張で不思議と体が動かん。自分でも不思議なほどにね。」

「へたれなのね。」

「・・・面目ないです。」

「じゃあいいよ。私からするから。」

「は、はい・・・むぐっ!？」

・・・う・・・あう・・・えう・・・!？」

ヤバイやばいやばいやばいやばいっ!？

さつきから緊張で頭が沸騰しそうで限界だったのにさらにソレを・

・限界を超えて顔が熱いっ!？

さっきのが限界だったんじゃないのか!？

私の顔が一体どうなってるのか、鏡を見るのが怖いっ!？

この間もキティによるねつれちゅな・・・失礼。

熱烈なキス・・・ディープな物であるが、それが一分ほど。

ねつとりと深く、私の口腔を蹂躪したキティの舌は糸を引いてある
べき場所に戻る。

本契約のための陣による簡易的な興奮作用と快感作用も相まって酷
く蟲惑的なひと時であった。

正直、意識が飛ぶ寸前でした。

キティも恍惚とした表情を浮かべている。

キティからしたためか、キティが主となったらしく私の契約カードが中空に現れた。

今度は私の番だとばかりにキティは唇を突き出す。

先ほどと同じ状況に戻ったが、一度した以上もう問題ない。というにはいささか無理があつたがなんとかぎこちなくでも自分からすることが出来た。

自然と体が動き、キティを強く抱きしめながら深く重く、彼女に口付けをする。

それこそ口付けをもつて自身の気持ちを表現するように。

彼女の口腔を味わいながらぼーとする頭で考えたことといえば、ただただキティとこれからも一緒にいたいということだけだった。

今度は私が主としてのキティの契約カードが中空に発言したが、それを全く意に介さず私達はそのまま肌を重ね、夜まで過ごしたのだった。

お互いに尋常ならざる体力のせい、夜まで続いた行為だったがそのまま晩御飯とシャワーを軽く浴びてその日はよく分からない充足感に包まれながら一緒に布団で寝入った。

子供が出来たらいいんだけどなあと思いつつ。

まあ出来ないだろうけど、それならそれで人造人間ホームンクルスってどうやって作っただけとか思いながら深いまどろみに身を任せた。

11 目 バクティオーカード（前書き）

今回の話は僕の恋愛観的な物がふんだんに含まれています。

11つ目 パクティオーカード

「ふあああ、良く眠れた。」

「おはようございます、姉様。」

「あれ？」

もう起きてたの？キティ。」

「姉様の寝顔ってあどけなくて可愛いですよ。」

「当然よ！」

私、美少女だもん！」

「・・・ツツコミませんよ。」

「・・・別にボケてないし。」

いやまあ、ボケただけだね。

スルーされてしまった。

男でしょ！？とか自分で言うこと！？？みたいなツツコミを期待してました。

いけずなんだから、キティったら。

「まあいいや。」

ご飯は・・・面倒だな。」

「食べないとダメだよ、アリス。」

「おはよう、スパ君。」

というか人の寝室にノック無しで突っ込んでくるのはどうなんだろうか？

スパ君。

せつかくのキティとのラブラブ空間が！！

と言ったら、キティに殴られた。

最近乱暴になってきたよね。お姉ちゃんは悲しいです。

「馬鹿なことばかり言うからでしょ!？」

「馬鹿なこと？」

「一体全体なんのことだか？」

「私はいつでも真面目なつもぶっ!？」

「・・・殴りますよ。」

「殴ったよ、間違いじゃない？」

話の途中で殴るのはさすがにどうかと思うよ。うん。

いや、まあふざけた私が悪いのは分かってるけれども。

「昨日出たカードの確認しようよ。キティ。」

「は、はい。・・・き、昨日の・・・カード、ですね!」

「どうしたのキティ？」

「顔が赤いけど？」

あ、最後の方の自分の醜態を思い出して赤面してるのかな!？」

恥ずかしがってたけど、あのときのキティはそれはもう動画に撮りたいほどのあうっ!？」

「・・・殴ったよ。」

「・・・報告ありがとう。」

昨日のことで照れてるキティもまた可愛い。

実際、どこかにカメラを仕込んでおけばと後悔したり。

まあまた夜を共にすればあのかわゆいキティが見れると思えばいいか。

ふにゃふにゃで、がくがくと・・・こほん。

まあその辺は置いといて。

「魔法球の中で見よう。」

どんなアーティファクトかも分からないし、その辺じゃ危ないかもだから。」

「言われなくても分かってます!!」

「もう・・・照れていじけなくてもいいのに。可愛かったよ？キティ。」

「・・・別に。分かってるもん。」

ぷいとそっぽを向くキティ。

恥ずかしがり屋さんめ！

こいつう！

頬をぷにぷにしておこう!!

「ふふふ、可愛いな、本当にキティは。」

「私の頬で遊ばないで。早く行こう。姉様。」

「はいはい。」

というわけでダイオラマ魔法球。

アリスカスタムにて。

ちなみにこの魔法球は私が旧世界、魔法世界を歩いてきて良い感じの景色を見つけたらそこをそのままぶち込んだ物であり、景色という観点で言えばかなりの芸術点があるであろう魔法球である。

かなり昔から作っていたものなので、生えている植物や土地を切り取る際に一緒に入ってきた動物の中にはすでに絶滅したものも少なくは無い。

ある種の動物の保護球ともなっている。

こうした景色や動植物の姿を鑑賞するためのエリアが主立っているが、この魔法球にはもう一つ。入り口からいけるワープ陣から入ること、北海道ほどの面積のただの芝生がある。

ここでキティに修行や自分の修行。術の開発などを行っていた。

「まずは私のからいきます。」
「了解。」

というわけでキティがアダットと唱えるとカードが消え、代わりとばかりにアーティファクトが出現した。こ、これはちょっと困る。なんというか凄い存在感を――というか、威圧感？そんな感じの人形が出てきた。

一件、オーソドックスな黒髪長髪の目を瞑ったメイド人形。という外見だが、彼女（？）の周りには3つの武器が浮遊している。

一つは彼女の体長とほぼ同じくらいの大剣。

二つ目はそれと同じくらいの長さを持つ、紅い槍。

最後に、彼女の背後に浮遊している・・・ビームガン？

ロボットアニメなんかでたまに見る荷電粒子砲を放つような砲台のようなものがある。

その砲台の横にオプションとしてつけられているガトリングガンらしきもの。

キティのアーティファクトは”遠近両用殺戮人形”といったところだろうか？

もちろん、剣や槍がそのままの武器って事は無いだろう。

「キティ、効果とか分かる？」

「いえ、さっぱりです。」

まあだよな。

こういうときは実践で試す、練習で試すってのが主なんだけど、こいうときこそ魔眼の出番である。

視認能力という魔眼で見れば、あれよあれよという間に視認完了っ

てわけでさ！！

こういうものも”視て確認”できる。実に便利な魔眼だ。
ちなみにこの魔眼には名前がある。

「天使眼」と呼ばれてるそうな。

これは金色天使という名と共に、どこぞの誰かが勝手につけて勝手にそう呼び始めたっただけのことで、いつの間にかこれが定着していた。

まあひねりも何も無いつまらん名前だよ。

「ええと・・・ほうほう。これはまたエグイアーティファクトです
こと。」

視ていくと分かってくるこの人形。

遠近両用殺戮人形と評したが、それよりもあくどいものである。

遠近両用虐殺人形と称した方がしっくりくるだろう。

「全部分かりましたか？」

「うん。わかったよ。」

これって”概念”兵器だね。」

「概念兵器？」

「うん。」

まずこの人形が持っている剣だが、これは「勝利を掴む大剣」エク
スカリバー」[㊦]。

アーサー王という王様が持っていたと言われているいろんな意味で
有名な剣。

たしかもとの話では”王になれる剣”だったかな？

これはあくまでお話の中でのエクスカリバーであり、目の前のエク
スカリバーは違うものようだ。

勝利を掴むというだけあって、これで切裂けないものは無い。

断言しよう。無いのだ。

相手の攻撃の質、量、特殊能力に関わらず、とにかくこの剣は必ず勝つ。

この世界屈指のバグキャラと言われているラカンが全身の気を全て使った渾身の一撃ですら、普通に振るったこの剣には勝てない。はずだ。

ラカン君なら気合でなんとかなる！とかいつてなんとかしてしまうかもしれないけど、とにかく理論上ではこの剣に適うものはないとされる。

たとえ次元をぶつけるとか未知の攻撃だとしても、この剣で受ければダメージを受けることはないだろうし、迎え撃てば打ち勝つことができる。

そういう概念によって作られた剣なのだ。

そして槍の方。これは『不可避の投槍”グーングニル”』。

北欧神話に出てくるオーディンが持っていたとされる槍。

名前の通り投げれば必ず当たるといふ、必中必当、百発百中の神槍である。

どんなに弱く投げようとも、どんなに悪い態勢で狙おうとも必ず当たる神の槍。

相手側からしたら悪魔の槍だろう。

ただ、さすがに頭を狙えば頭を貫くまでずーっと飛び続けるというのではなく、途中で何かに当たると一度手元に戻ってくるようである。

相手は必ずワンアクションを強要されるので、これはこれで凶悪。

3つ目の武器が『貫くもの”ブリューナク”』

これは直線をただゆくだけのビームを放つ。

ただ、『貫くもの』という名にあるとおり、いかな攻撃、防御手

段を用いても防ぐことは不可能。

ただただ射線上にあるものを焼き貫く脅威の熱線である。

ただ”貫くもの”という名が指し示す”もの”は相手の防御手段や攻撃のみを指しているようで、魔族や亜人、大型のモンスターのよ
うなもともと体が頑丈な種族を相手にする場合には殺しきることは
難しいようだ。なおかつ連射不可能。

そして最後の武器。

目も武器となつていうことに視て気づいたのだが、この人形
の目はロックオン機能があつて、ロックオンした相手に自身の攻撃
を強制的にロックオンした対象に誘引させるというある意味常識破
りな効果が付いていた。

これによってブリューナクがより凶悪になる。

ただ、目を開いてる間は常に多量の魔力を消費するようである。燃
費が悪く、ロックオンするには一度だけでいいから視線を合わせな
きゃ意味が無いというのが欠点か。

視線を合わせたらロックオンされるという効果が初対面の人間にわ
かるわけもなし。

十二分の機能だけだね。

そしてこの人形にはチャチャゼロのような意識は介在していないと
いうこと。

とはいえ自立行動は可能のようである。

もちろんキティの人形使いのスキルで操ることも可能だし、その際
にはやたらと魔力伝導効率の良い魔法発動体になる。

まあキティや私のような魔族ともなるとそれこそ複雑な術式を持つ
魔法でもなければ基本的に魔法発動体無しでも魔法は使えるんだけ
どね。

肉体そのものが魔法発動体みたいなものだし。

「と、とんでもない人形ですね・・・。」

さすがのキティも驚きが隠せないみたいである。
驚いてるキティも可愛いのは当然の結果だね。

「驚いてるキティもまた”らぶりい”だね！」
「・・・また馬鹿なことを言っで。」

そういうことは頬を染めながら言っても説得力の欠片もないぞ！
キティよー！！

「さて、次は私ね。
アデアット。」

そうして出てきたのはなんか知らんが、装甲だった。
戦乙女って感じ？

それともガン。ムを擬人化した感じ？
そんな感じの装甲がふよふよと漂っている。
ちよつと許せないのが、胸の部分の装甲が大きめな女性に合わせた
形になっていることだ。

私は・・・いや、僕は一応男なんだが？

「姉様は男・・・ですよね？」

「そうだけでも。というか、じゃなきゃ昨日のアレはなんだったの
よって話でしょ？」

「う・・・そうですね。」

昨日の行為をまた思い出したのか顔が真っ赤になるキティ。

「むむう・・・見た感じそのまま使っんじゃなくてやっぱり装着して使っただけ・・・胸の部分がぽっかり空くんじゃないだろうか？」

それに体のラインがモロに出る構造だし。なんだコレは？嫌がらせかな？

股間部分とかあてつけなの？」

変則的な露出の多いスクール水着型？とでも言えば良いだろうか？それに装甲を後から付け足していったという感じだ。

なんにせよ魔眼で見てみるか。

もしかしたら、このままで使ったり、他者の戦闘力増加の効果があるってことかもしれないし。

それにしたって私には意味の無いものだが。

「うあ・・・これはこれでまたある意味凶悪だ。」

「私の人形のような概念兵器とやらですか？」

「いや、これは普通の装甲。

防御力とか攻撃力とかが跳ね上がるとか、魔法の補助に使えんとか魔力ならナギと同等、気ならラカン君と同等分が増えんとかそれはそれでかなりの性能を誇ってるけど、一番は装備した人間の体構造を変化させるってこと。」

「・・・つまり？」

「コレをつけるだけで英雄と同等の力を得るばかりか、女体化できるってことだよ。」

「・・・は？」

ううむ。

我ながら変なのを引き当ててしまった。

「によ、女体化・・・ですか？」

「そう。体形の最適化と言っても良いかも。この装甲にあわせて私の体に変化するってこと。」

装甲を外しても効果は持続して好きなタイミングで戻れるって云うマニュアルリカバリ機能・・・とても言おうか。そんな機能まである。これはかなり良い変装機具としても使えるかも。」

「・・・私にも使えますか!?!」

「うあつ!?!」

ど、どうしたの!?!

いきなり凄い形相で!?!」

「い、いや、別に何でもないんですけど!?!」

とにかく私にはめてもらったら私もこの装甲の形に最適化されるってこと!?!」

ちよ、ちよつと!?!

そんなに揺らされると頭がくらくらするんだだけ!?!

さらに言えば両肩を掴んでるキティの手が凄い力で、ミシミシいつてるから離して!!

肩が砕けちゃう!?!

「お、落ち着いて!?!」

こ、この装甲は元々、私が女だった場合・・・を想定して最適化された装甲みたいだから・・・そうね。

さつきは装甲にあわせて私の体に変化するって言ったけど、すでに装甲が私に合わさってる・・・ってことだから・・・多分、この装甲は装備者が女だったら?という仮定を再現して変形すると思う。見る限りじゃ微妙にはつきりしないんだけどね。

装甲側が装備者にこの形を強要するんじゃなく、装備者にあわせて変形するからキティにつけた瞬間にキティの体形に合わせて変形すると・・・」

「・・・なんだ、そうなんですか・・・」

すっごいがっかり来てるキティ。
なるほど。幼児体系のキティにとって、目の前のこれはちょっとしたー否。
かなりの憧れだったってことか。

「大丈夫よ？キティ。」

キティは十二分に女の子らしいから。」

「・・・でも、姉様だつてもつと大きいほうが良いでしょ？」

自分の胸を見下げて俯くキティ。

本当にこの子はいじらしい。

多少なりとも女性としての憧れもあつたんだろうが、一番は私を喜ばせるためだったのだろう。

その気持ちで十分だ。

確かに大きい方が良い・・・という気持ちが無いわけでもないが。

「私は気にしないって。」

キティならどんな姿になつても愛せるから。」

「私がでっぷりと肥えても？」

顔がやけどで悲惨なことになつても？」

不安そうな顔でそう聞いてくる。

何を馬鹿なことを言ってるんだか。

「時々、思うの。」

私ってその・・・その種の人にはたまらない容姿をしてるんじゃないかって。」

「その種・・・ロリコンのこと？」

「う、うん。」

そういえばキティのどこが好きとかはつきり言ってなかった気がする。

そういう種の人間だからこそ私が彼女を好きになった・・・自分を好きなのは容姿だけだと、不安になるのも仕方ないのかもしれない。違うってことはおそらくキティもわかつてはいるのだろうが、態度ではなく言葉としてしっかりと聞きたいってことだろう。

そういう不安はあって当然だ。

「そうね。」

太ったら気持ち悪いと思うかもしれないし、やけどで酷いことになったらドン引きすると思うわ。」

「っ!？」

一気に顔が蒼白になるキティ。

そんなキティの頭を撫でながら、私は言葉を紡いだ。

「逆に聞くけど、もし私がそうになったらキティはどうする？私を嫌いになる？」

「ならない!!」

即答。しかも張り叫ぶほどの声量で。涙を流しながらキティは言った。

「姉様は太ったら、ダイエットさせるし!!」

やけどで酷いことになった姉様を見ても愛せるもの!!
だ、だから!

わ、私のことも・・・」

「そう、私も同じ答えよ？
キティ。」

分かってるじゃない。」

深く、濃厚なキスをして、私は答えた。
決意表明の意思をもって。

「私達みたいな常軌を逸した人外がそうなるとは思えないけど、もしキティが太つてもダイエツトさせるだけだし・・・そもそも不健康の証だしね、肥満は。
やけどで酷いことになってもドン引きするでしょうけど、好きと言う気持ちにはなんら変わりはないわ。」

「き、奇麗事・・・じゃ・・・」

「今さっきあなたも同じことを言っただでしょうに。」

奇麗事と評するキティを見て苦笑する私。

もう一度口付けをして、再度気持ちを込めて言う。

「奇麗事でもなんでもない。
常識よ。」

顔が良いってことで結婚するなら男女のアイドルは全てカップル化して結婚してるわよ。

そうでしょ？」

「でも・・・」

容姿が崩れたら？

醜くなったら嫌われるんじゃないか？

これはキティだけではなくほかの人にも言えることだろう。
でも、私は。少なくとも私はこう言える。

「見た目が良いってだけで夫婦にいきなりなる男女なんて聞いたこと無いでしょ？」

見た目つてのは確かに重視されるけど、少なくともそれは最初だけ。

「

「・・・」

「いい？」

キティ。

”僕”は君の”全て”に惚れたんだ。

比喩じゃない。言葉どおりの意味で。」

「ひうつ！？」

一気に顔が真っ赤になるキティ。

「君の長所のいくつかがだめになったところでそれも含めて愛する。それだけ。顔なんて体型なんて最初だけ。

確かに気持ち悪く思うだろうけど、嫌いになることはない。

キティがキティである限り、ずっとこれは変わらない。

断言しよう。

変わらないんだ。奇麗事なんかじゃない。

心底からそう思ってるからそう言っている。

見て惚れたって程度の動機で復讐の相手になるほど善人ではないよ、僕は。」

「あう・・・あう・・・」

顔が真っ赤で何も言えない様子のキティ。

「これだけ言ったのに。

キティは何も言ってくれないの？」

「あの・・・あのっ！」

「なあに？」

キティは大きく息を吸い込んで、はっきりと言い切った。

「私も・・・あ、貴方の事を・・・その。

愛してるに決まっています！！」

「うん、知ってる。」

そういつてニツコリ微笑むとキティは、そのまま赤い顔をして熱いキスをーそれこそ僕という存在をむさぼるように、一心不乱に僕とのキスを交わし続けた。

時間にして20分ほど。

いくらなんでも長すぎると感じるのは贅沢なことなだろう。きっと。

そのまま行為に至ったのは言うまでも無いことだ。

11つ目 パクティオーカード（後書き）

もう一つのゼロ魔の世界で魂生成の方も書き始めました。

そちらも良しなに。

元々はネギまとゼロ魔、どっちのファンフィクションを書くかで迷っていたんですが、まあいいや！やっちまおう？てなわけで書いてまいりました。

よろしくです。

二つの共通点は神様の設定と神様から貰う能力が同じというだけですけどね。

12 目 タカミチやつれる（前書き）

2011/7/01 修正。

主人公のアーティファクト名をラテン語に。

とは言え確実に文法が間違ってますが、これが作者の限界。

12 目 タカミチやつれる

私はというと早速、装甲を装着してみた。

ちなみに装甲の名は『ウルトラ・ソムニウム夢現の体現鎧” ultra somnium
vi lorica”』。

胸やお尻やらがバインと突き出る。

正直、胸とか邪魔臭い。

顔を下に向けても足が見えんがな。

重い。とにかく重い。

動くと揺れるし、なんだか引つ張られる感じが好きじゃない。

先っぽも擦れそうだから、このアーマー以外の服装の場合、ブラジャーとか必要なんじゃないだろうか？

ブラジャー選びとか知らないよ？私。

型崩れとかもするらしいし。

良く知らないが。

「なんか・・・重くて邪魔ね。胸。」

結論から言うと、色々面倒そうだ。

胸で選ぶ男にはモテるんだろうけど、胸で見るような男からモテるというのと胸に関する手間暇がつりあわない気がする。

私が女ならば確実にいらん。

「姉様は今、全国のささやかな女性達を敵にしましたよ。」

ささやかな・・・とはやっぱり胸のことなんだろう。

どっちもいける私としてはあまりこだわりはない。

私が女性に求めるのは太ももとお尻であるからして！！

ちなみにキティの太ももとお尻は大好物です！！

解除すると、もと来ていた服になるのだが如何せん要所要所のサイズがあれになったので服がちよつとキツクになる。
ゴスロリ衣装がちよつといびつになつていた。

ちなみに私の普段の私服は基本的にはキティの好みであるゴスロリ黒系。

「さて、キティって確か裁縫とか得意じゃなかったかしら？」

「確かにそれは・・・趣味としてありますが・・・やっぱり仕立て直しますか？」

「これで外出するのはちよつと遠慮したい。」

「・・・男に戻れば良いじゃないですか。」

「少し不機嫌なのはコンプレックスから？」

「別に。」

「まあまあ。」

ふて腐れるキティもまあ可愛い可愛い。
とりあえず背中から抱きついておこう。
胸の大きさが分かるように。

「・・・くつつかないで。」

見る見る不機嫌になるキティ。
分かり易いキティもまた良い！！

「はいはい。」

やってくれる？キティ。」

「どうしてまたそこまで・・・」

「変装として完璧になるじゃないの。」

これで、どこの誰だろうと私を男だと見破ることは出来ない。これって超楽しくない？

なんか、こいつら私を女だと完全に思ってたやがるし！とか内心で嘲り笑いながら、堂々と女として振舞う。

これほど愉快的イタズラも無いと思うんだけど？」

「・・・悪趣味ですね、姉様。」

アルビレオ・イマに影響されましたか？」

「・・・いや、多分・・・もともとこういう面はあったと思う。」

アル君とはヤケに気が合うし。

好きにはなれないけどね。

「ね、お願い。」

「・・・はあ、分かりました。」

服を縫うのは楽しいですし、いつそのこと一から作り直します。サイズから測っていきますよ。」

「ふふ。さすがキティ。理解ある妻を持ててお姉ちゃんは大変嬉しいです！」

「・・・と、当然です。」

いつまで経っても、照れて目を背けるこの仕草は変わらない。

可愛いよ、キティ！

ちなみにアル君から貰った、魔法カメラで撮るのも忘れない。

「じゃ、写真を撮らないで！」

「どうして？」

こんなに可愛いキティをフレームに収めないなんて、神が許しても私が許せないわー！！」

「は、恥ずかしいからに決まってるでしょー！！」

「あうあつ!？」

恥ずかしがってるキティもまた良い!!

この私をノックアウト寸前まで追い込むなんて、キティも腕を上げたわね!!

もじもじしてる今の姿を全国民に見せてあげたい!!

ロリコンだろうとなかろうと昇天するに違いないわ!!
てか、しないやつなんてこの世に存在する価値なし!!

物理的に私が昇天させたるわい!!

まあ、見せないけどね!!

今のキティを見る権利があるのは他の誰でもない!

この私でああああああるっ!!

「姉様が狂った!？」

「何言ってるの!!」

私は常に狂ってる!!主にキティのらぶりいなところに!!

で、大真面目にキティの可愛さを語っているわ!!

もう、魂の髄までキティに骨抜きにされてる私をこんなにして!!
どうする気なの!?

つと・・・なんか股間がうずいて・・・これが女性の反応・・・
なんかむらむらしてきた。

キティを思い浮かべれば10回20回は堅い!!

私をこんなヘブン状態にして、私を失神させる気なのね!!キティ
!!

きつと私が自分を慰めてる姿を影から見てさらに自分がそれを見て
なくさーーぐふるっ!？」

キティにぶん殴られ、壁にめりこむ私。

「す、すばらしいストレートよ・・・ジョー。

貴方なら・・・世界を狙えるわ・・・ジョーッ!!」

「ジョーって誰!？」

ていうか、目覚めた？」

「ええ、目覚めたわ！！」

女同士の道！！

すなわち百合道―――がふぶっ！？」

めり込んだ私に再度パンチを食らわせるキティ。

パンチと言つか、タカミチ君の師匠とやらの髭タバコさんが使ってた居合い拳が飛んできた。

よりめり込む私。

「ふざけないで、姉様。」

「ふざけてない！」

大真面目にキティとレズの道へ・・・ぶえげらっ！？」

「そんな趣味ないです！！」

消え行く意識の中、キティのそんな叫びが聞こえた。

「てなことがあったんだけど、どう思う？」

スパ君、チャチャゼロ。」

「人形ニ、ソナコト聞クノハオマエクライダナ。ケケケ。ティウカ、バカップル過ギテ、ウザイクライダゼ。」

「アリスが幸せなようにやればいいと思うだ。

というか、その辺の部分はオラ達無機物には理解できないところだな。」

いや、その辺はどうでもいい。

「そこじゃなくて、キティの可愛さについてだよ。」

キティの可愛さときたら天井知らずで・・・あまりにも可愛すぎて私もどうしたいのやら？って感じでね。」

「ノロケカヨ。」

うん、まあそうなんだ。

ちなみに今は体を戻してある。

普通に胸邪魔。

「私のキティがいかにか可愛いか？それを聞いてもらいたかったつてのが8割方の理由。で、君達に集まってもらったのは他でもない。」

「アアン？」

「あれは出来てる？」

「アレ？」

アア、アレナラ今、木偶が最終調整ヲシテルトコダゼ。」

「木偶でなくて、名前と呼んで欲しいんだべが・・・まあいいだ。アリスに頼まれて作ったコレだな？」

といって、スパ君が取り出したのは仮面ライダー変身セット。

仮面ライダーに変身できる魔法具だ。どの仮面ライダーかと言えば、仮面ライダーカブトである。

ベルトと、カブトムシ型のギア。それが揃っている。

プリキュアときたら仮面ライダーだろうってことで、三人で共同開発をしていた。

キティはプリキュアの時は何だかんだでノリノリだったんだが、仮面ライダーにはあまり乗り気でなく、意外にも女の子なところが判明した。

そんなキティもイツツアプリティ！！

まあキティが可愛いなんてことは神も仏も知っている絶対不変の厳然たる事実だ。

「オマエツテ意外ト、アホダヨナ。」

「はい？」

「ナンデモネエヨ。」

何か言いたそうにしてるチャチャゼロ。

なんだかは分かんが、言いたいことがあるなら我慢せずに言ったほうが言いと思うよ？

我慢は体に毒だから。私なんてキティが可愛いと言うことを日に10回は200字詰め原稿用紙をイー学会でキティの可愛さの秘密をイーキティファンクラブを作りたいけどキティが私だけのキティでイー以下略。

おっと、いかんいかん。

思考に没していた。

「それで、調整はどこまで進んでるの？」

「それなら大方済んでるだ。

もう実践データを取っても問題ないぐらいだよ？」

「ふむ。

だったらタカミチ君あたりに付けて実践投入してみようか。

それともその辺の英雄願望がありそうな人を適当に見繕って、投入してみる？」

「何気に酷くないか？」

「何言ってるのさ。

これが完成して量産できればかなりこちらは有利になる。

力があるってことはそれだけ不殺を貫けるってこと。

敵味方を問わずね。

どうもアリカちゃん・・・と母親を呼ぶのもどうかと思うけど、ア

リカちゃんも戦争には心を痛めてる。

口にこそ出してないけど、あれはナギたちに殺さないように敵を倒してくれって言い足そうな目だったよ。

そんなことをすれば味方が多く死ぬようになる。

彼らもより危険になる。

だからこそ、言えない。言えるはずが無い。そういう顔だ。

正直、完全なる世界にそのかされる程度で戦争するようなバカどもなんてのは死んだほうがむしろ世のため、人の為になりそうだけどアリカちゃんのあの悲痛な面持ちを見ると・・・なんともね。

一応、母親だし、助けてあげたい。

そのためには私とキティの武よりも兵自体を強化するほうが効果的というか、私達じゃ力が強すぎて皆殺しよりも手加減するほうが難しいよ。」

「確かにそうだべ。」

「苦労人ダナ、ケケケ。」

あまり苦労してないつもりだけどね。

まあ、気を遣ってるのは事実だ。

「少なくとも味方の死ぬ数を大幅に減らせる。

そのためのテストパイロットにあたるんだ。むしろ望んでやってくれるだろう。

もちろん、実験と言うことも言い含めてそれで戦争に出る覚悟のあるものを選ぶ。

自分で出ると決めた以上、自己責任だし。」

「オマエガ付ケテ、外ニ出ルノジャ駄目ナノ力？」

「私やキティだと地が強いから参考にならない。

同じ理由で紅き翼の面々も不可。

・・・やっぱリタカミチ君も止めたほうがいいかもしれないね。

髭タバコさんも弟子がドーピングで強くなるのは望むところじゃな

いだろう。」

結局。

タカミチ君に頼んで、実践を経験させてみた。とりあえず、完全なる世界の拠点のひとつと思われるところにタカミチ君をぶん投げてみる。

「さて、今日は私と敵拠点のひとつを潰しに来ました。ここまでは髭タバコさんから聞いてるね？」

「は、はい。」

ただ、師匠からはそこまでしか聞いてなくて・・・なんで僕まで呼んだんですか？アリスさん。アリスさんがいれば十分だと思うんですけど。」

まあもつともな疑問だ。

面倒だからスルーするけど。

「まあ、とりあえず。」

このベルトをつけてくれる？」

「は、はあ？」

ナンですかこれは？」

「簡単に言々と新型の魔法具かな。」

装着者のパワーアップをはかるものだよ。」

タカミチ君は渋々ながら付けてベルトをつけた。

「昨日読んでおいてって言った資料にあった魔法具なんだけど、使用方法は分かる？」

「は、はい。一応。」

あ、あの！？

僕が付けて・・・戦うんですか？」

「いぐざくとりー」。

察しのいい子はお姉さん好きだよ。

キティの一億分の一にも満たない好意だけど。

あ、タカミチ君にほんのちよつとの好意しか向けてないってことじゃないよ？

キティを大好きすぎるってことさ。

キティに対する愛の大きさを数値化するならば私はブロリーのスーパーサイヤ人3状態の戦闘力を遥かに越えるから。」

「は、はあ？」

何言っただこいつって目で見てくるタカミチ君。
知らなかったのかな？ブロリーのことを。

「ソウジャネエダロ。イキナリノロケニ戸惑ッテルンダロ？」

「チャチャゼロ、頼んだよ。」

基本手を出さなくてもいいから・・・死にそうになったら助けてあげて。」

「ツマンネエナ。好きに殺ラセロヨナ。」

「まあ、そのうちできるって。」

「な、なんの話ですか？」

よし、装備したな。

すでに変身してるじゃないか。

ちよつと残念。

変身のエフェクトもちゃんとしてるか見ておきたかったのに。

「キャストオフの仕方も分かるね？」

それはここぞという時に使う様にね。」

「は、はい。」

「クロックアップもちゃんと分かってる？」
「だ、大丈夫です！」

うし。これで確認は終わりだ。
さあ伊ってくるのだ、タカミチ君！！

「へ？」

タカミチ君の腕を掴み、そのまま。

「行つてらっしゃい！！」

「へ！？・・・うあああああああああああつあ
ああつ！？」

思いっきりぶん投げた。

拠点のほうへ。

「んじゃ、モニターも忘れずをお願いね。

私、ちよつとその辺の町でショッピングして暇つぶししてくるから。

」

「良いゴ身分ダナ。」

「キティに服の材料に使う糸と布を買ってくるように頼まれてるの。
あとはレースと・・・なんだっけ？

型紙もいるんだったかな？」

「ハア、人形使イノ荒イ変態ダゼ。」

これのおかげで変身セットは完成。

着込めば、それだけで瞬動、虚空瞬動が使用でき、魔力、気も結構な量を使える。

なおかつカブトにあったキャストオフ（周囲への散弾攻撃、キャスト形態時は防御力アップ）機能とクロックアップ（超加速）機能もある。

それを量産した物を一部の部隊に持たせ、その部隊は仮面部隊と称された。

ちなみに。

このほかにも実験にはタカミチ君を使うようになったせいか、タカミチ君は私を避けるようになった。

そして私はそんなタカミチ君を強制連行。

紅き翼の面々はただ笑うばかり。

師匠のガトウを除いて。

「・・・タカミチにクソ度胸がついたのは良いんだが、最近やつれてるように見えるのは俺だけか？」

と言うガトウに。

「最近是我的夕風までもが改造されそうになってな。

どんどんマッドなサイエンティストになっているアリスに実験と称され色々試されてるタカミチ君に同情するよ・・・ナギやラカンに絡まれる俺のようだ。」

詠春は泣きながら語ったという。

12 目 タカミチやつれる（後書き）

次回はようやくアリカ登場

13 目 アリカちゃんとフエイとん（前書き）

久しぶりの更新。

13 目 アリカちゃんとフェイトン

そんな日々を過ごしつつ、戦争がヒートアップしていく中。

一度は占拠されたグレート・ブリッジを紅き翼の力によって、奪還したりそのまま帝国へと牽制がてら攻め込んだり。いけるところまで侵攻。

帝国を押し込んでいく形になった。

原作どおり、ナギは千の呪文の男と称えられたり、詠春にはサムライマスター、ガトウには――うんぬんとこの後世に残る戦いで名実ともに英雄となる。

私とキティはグレート・ブリッジ奪還後の挟撃を担当していたのでこの戦いには参加しておらず、特別目立ってはいない。

まあ目立ちたくないしね。

ちなみにであるが、正式には私達の存在は知れ渡ってはいない。

キティは一応賞金首になっているし、私自身も万が一にでも素顔が見られるとまずいということであまり前にとは出ないのである。ついでに言っておくとこれがきっかけでファンクラブなども出来上がった。

ナギ、ガトウ、詠春、アル君、ゼクト君のファンクラブである。

やはり一番多いのはナギで次にアル君、その次にゼクト君。という感じである。

イケメンや可愛い系の男はこれだから・・・

私にもひっそりとだけれど出来たのだが、会員メンバーの殆どが男性という。

ジーザスっ！！

まあ、女性にちやほやされたらキティに無駄なやきもちを焼かせてしまうだけだし、そういう意味でなら全く問題ないけどね。く、悔し紛れの言葉じゃないぞっ！！

本当だぞ！？

「ふむ。」

オヌシがアリスとエヴァンジェリンとやらか？」

そんなある日のこと。今日はアリカちゃんとの初対面^{はつ}である。

王宮に忍び込んでこちらから一方的には見たことがあるけどね。

すでに紅き翼メンバーとは挨拶を済ませて、最後に私達に会いに来たという。

すでに見たことはあってもなんだかんだで直接会つのは今日が始めてであるため、いささか緊張感が凄い。

この人が私の母親・・・になるのだ。

じかに見ると凄く綺麗である。

「は、はい。」

えと・・・アリス・スプーリーマクダウェルと良います!!」

あぶねえ！

つい本名を口走るところだった。

「ふん。」

人の部屋にアポ無しでイキナリ尋ねてきたと思えば、上から目線。気に食わん女だな。」

緊張がちがちの私を見て、不機嫌そうに眉をしかめつつアリカを見据えるキティ。

少しやきもちを焼いてるのかな？

母親といえども初対面の人間、それも女性にがちになってる私を見て少し面白くないのかもしれない。

そういうちょっとしたこともヤキモチを焼いてくれるのがまた、キティの可愛いところである。

「それは失礼した。

この口調はもはや癖なのじゃ。

あまり気にしないで貰うと助かる。」

「ふん。」

皮肉を被せたアリカちゃんにキティは鼻を鳴らして会話を切る。

まあもともとキティは気にしてないと思うけどね。

600年近くも生きておいて今更、口調でどうのこうの言うほど小さい人間では無い。

単純にやきもちがてらの八つ当たり、だと思う。

嗚呼、今日も今日とて可愛いキティ。

ごっそさまです!!

「えと・・・あの、アリカちゃん・・・じゃ、じゃなくて!!
アリカさん何か御用でしょうか?」

やっべやっべ。

ついつい心中での呼称を使ってしまった。

ラカン君がちょっと話しかけようとしただけで下衆呼ばわりされていたハズ。

これでは怒鳴られかねん。

「ちゃん?

そのようにフランクに話しかけられるのは初めてじゃ。」

「し、失礼しました。」

そりゃそうだ。

王族に対してちゃん付けは無いだろう。

いや、王族うんぬんの前に初対面の人に対する対応ということでも間違いである。

「いや、良い。

むしろそう呼んでくれ。

どこか心地良い。なんだろうな。

こう・・・心が温かくなる。」

無表情だった顔が満面の笑みを浮かべる。

うわ、これはクル！？

母親ながらに恐ろしい人だ！！

というか、キティが私の影で腰をツネって――あだだだっ！？

千切れるっ！？

千切れちゃうよっ！？キティ！！

う、浮気じゃないっ！？

浮気じゃないからあっ！？

「は、はあよろしいのですか？」

「敬語も要らぬ。

変わりにオヌシのことも名で呼ぶが、構わぬだろう？」

「は、はい！

あ、アリカちゃん！！」

「アリス。

よろしく頼むのじゃ。」

お互いに笑顔で握手しあう。

ブチリッとはがが千切れた音がするが気にしないことにした。

すっごい腰の辺りが痛いけど気にしないことにした。
したのである。

アリカちゃんが何か私の腰辺りを見て顔を青ざめていたが、どうしたのやらさっぱりである。サッパリサッパリ。
うん、サッパリ。

アリカちゃんとそのまま世間話？

私の生活を聞かれたので支障の出ない程度に話をして、アリカちゃんの身の上話——というよりも愚痴もちよこちよこ聞きつつ。
その日は終えた。

「あの人が僕の母親か・・・良い人だな。」

ナギよりも好きです！！

一見、無表情なのだが目の色で楽しんでいるのかが分かる。
なんというか、好きになってしまった。

母親は偉大である。

ネギがファザコンならば私はマザコンか。

知識や肉体的にはまだ母親ではないはずだが、どことなく僕を近く感じているであろう色がアリカちゃんにも見えたし、もしかしたら時間軸とは関係なく母と子というのは次元を超越して魂での繋がりがあるのかもしれないな。
とちよつと詩的なことを考えつつ。

1人会話の輪に入れず、ふて腐れてベッドに籠ったキティを慰める私であった。

い、一応言っておくけど浮気じゃないからねっ！？

「ガトウおじさん。

どうしたの？

頭を押さえて考え込んでやって。」

「アリスか？おじさんは止めてくれないか。
これでもまだ29だ。」

今は戦争の合間の一休み期間。

もとい休暇中。

ちよつとした別荘。

難しそうな顔で考え込むガトウを見つけたので、声をかけた私。
ナギとアリカちゃんは買い物という名のデートへと出かけた。
まああの2人に面と向かってそう言えば、否定するだろうが。

「・・・気にしてるのね。見た目。」

「・・・ほつといてくれ。」

いささか不機嫌になったガトウから話を聞くと、執政官コンスルのナンバー
2までもが完全なる世界の手先だということが分かったという。

よくよく考えると完全なる世界も凄いよね。

帝国と連合国。

そのどちらもの国の重職の人間を洗脳を使わずに取り込んでいるの
だからして。

一体、どんな説得をしたのやら？

フェイとんもがんばるなあ。

いや、今はまだテルティウム・アーウェルンクスって名乗ってるの

かな？

「確証は無いから、外で喋ってくれるなよ？」

「あい了解。」

大変そうだね。ガトウ君は。

「今度は君付けか。」

「私はガトウ君よりも年上だからね。問題なし。」
「は？」

呆けた顔をするガトウ君。

「だからガトウ君よりも年上だつて。」

「いや、も、モウイチド言ってくれ？」

「年上。」

「そのちんまい成りでか？」

「姿かたちは関係ないでしょうに。」

「蝶の仮面からはみ出てるところを見たところでは・・・15ほどの女の子にしか見えないんだが？」

「年上。」

しかも男です。

「・・・はあ。」

こちららふけ顔で悩んでるって言うのに・・・これだから嫌なんだ。魔法世界は。

俺より歳食ってるくせに、それよりも遥かに歳食ってる輩が若々しい姿でゴロゴロと転がってやがる。」

ふむふむ。

なかなかのコンプレックスをお持ちのようである。
ガトウ君は。

どんまい。ガトウ君!!

と話していると。

遠くからチュドーンと大きな炸裂音が鳴り響いた。

「なんだっ!?!」

「うわぁ・・・燃えてるねえ。」

音の発信源は川を挟んだ先の港町のようだ。

紅い炎が揺らめいて、黒い煙がモクモクと吹き上がる。

その後、一時間後ほどにアリカちゃんとナギが帰ってきた。

ナギたちの話に寄れば街中で誰かかしらが不意を付いて攻撃してきた。

反撃。

逃げたやつを追って、完全なる世界の下っ端組織を襲撃。
壊滅。

「バカがあっ!!」

「ごへばっ!?!」

ガトウに殴られるナギ。

「アホがあっ!!」

「のっぽしっ!？」

詠春に殴られるナギ。

帰ってきたナギがガトウと詠春に殴られたのは言つまでも無い。

「何すんだよっ!？」

証拠だつて取つてきてやったのによっ!！」

「アホ言っくなっ!！」

姫様まで連れて行きやがつてっ!！」

ちったあ、常識つてのを弁えろっ!！」

バカガキっ!！」

怪我したらどうしてくれんだっ!！」

「そ、そう言っくなよ・・・ほら、姫さんを置いて突っ込むのも危険だし・・・」

「そもそも突っ込むなッ!！」

「いや、だつてなっ!？」

姫さんが付いてくるつて言っただぜっ!？」

それに楽しそうだったから問題ないだろッ!？」

「問題ありまくるわあっ!！」

「あるばっ!？」

またもやガトウに殴られて壁に激突するナギ。

アホだな。うん。

と、してる内に。

「あああああ、あのの、あのあのっ!？」

い、今そこでお姫様と会いましたっ!！」

にこりと笑つて、ナギさんに礼を言ってくれ・・・って・・・は、始めて見ましたっ!！」

あの人の笑つてるところ！！」

慌てて部屋に入ってきたタカミチが慌ててそう言った。
それを聞いたナギはドヤ顔を浮かべてガトウと詠春を見やる。

あの無表情姫を笑わせたつてことで誇ってるんだろうが、私だって笑わせたのであるからして。

しかも私の方が先なうえに、笑わせた回数だつて多い。
ぶっ。

あの程度でドヤ顔とは片腹痛いっ！！

「姉様。

今日は私の部屋でしつかりとお話しましょう。」

「あれ？

キティ、いつの間に？

つて・・・あた、あたたたっ！？

ちょ、ちよつとっ！？

髪の毛巻き込んでるっ！？

髪の毛ごと襟首持つて引きづってるからっ！？

いた、いだだだだだだっ！？

ちょ、ちよつと、はげるっ！？

はげちやうよっ！？」

私もドヤ顔してたらしい。

キティにオシオキされました。

気持ちよかー！なかつたよっ！？

なかつたんだからねっ！？

次の日。

証拠を持ってマクギル元老議員に会いに行くということになり、会
いに行く。

「あんだ。

マクギル議員じゃねえな？」

「何を言っているのだね？」

「とぼけんなっ！！」

と言って、ナギは簡単な火魔法をマクギル議員に浴びせた。

随伴してきたラカンとガトウはいきなりのナギの奇行に慌てふため
くが、私はもちろん微動だにしない。ちなみにキティは留守番。
そして少しテンション上がり中なのです。

これから生フエイトを見れると言うのだから当然よね。

あわよくばマスターキーも手に入れられるかもしれない。

ちなみに私としては物語にあまり介入して死ぬはずの無い人が死ん
だり、もしかしたらナギとアリカちゃんが結婚しなかったりと、未
来が変わるかもしれないということで一番の目的であるマスターキ
ーを手に入れたら、真帆良に戻るつもりではある。

前者はともかく後者は非常にまずいのだ。

考えすぎではあると思うけどね。

いざそうになったらここにいる私はどうなるのか、色々不明だがと
にかく出来るだけ過干渉は避けるつもりではある。

今更だけどさ。

最低でもアリカちゃんの死刑イベント辺りまでは紅き翼と一緒に
行動するつもりではあるけれどね。

火魔法による煙が晴れて、フェイトの姿が明らかになーはっ？
あれ？
ん？

「驚いた。
良く分かったね。
千の呪文の男。」

「なっ！？
だ、誰だッ！？」

ガトウがマクギル議員に扮装していたテルティウム（のちのフェイト。）を睨みつけてそう叫ぶ。
誰だと聞かれて答えるやつはいないと思うけどさ。

一応、完全なる世界って秘密結社だし。
その幹部が自分の名前をべらべら喋ることは無いだろう。

「たりめえだ。」

ナギがテルティウムに対しての返事をする。
無視されたガトウはちょっとへこんでいた。 というのは今関係ないね。
うん。

「ふふふ。
やはりこうでなくてはつまらない。
とはいえ・・・」

テルティウム・・・テルたんと呼ぼう。
テルたんはこちらに目を向けた。

「“金色天使”までいるとは正直予想外だよ。

それに近い報告は受けていたけれど・・・ふむ。

君達はどちらかと言えば僕たち側に付いてくれると思っていたのだけどね。」

「どうしてそう思うのかしら?」

「なんとなく・・・かな。」

「・・・まあ、それはともかく。

テルティウムさん?で間違いないかしら?」

「・・・っ!」

さすがだね。僕の名前を知ってるとは。」

おおっ!?

や、やっぱりこいつは後のフェイトんなのか。

「テルたんや。」

「て、テルたん?」

「テルたんは女だったりするのかな?」

「そ、それはどういう意味だい?

僕が女に見えないってことかな?

だとすれば少し傷付くね。」

いや、何が驚いたってフェイトんが性転換していたのが驚きである。

なんでやねんっ!?

本来無いはずの胸のふくらみがやたらと目立つ。

WHYっ!?

ううむ・・・まあ別にいつか。

細かいことは。

いや、細かく無いけどさ。

確かアーウェルンクスシリーズには女性もいた筈。

水のアーウェルンクスだったか?

土のアーウェルンクスであるフェイとんが女であつたとしてもまあ、別に。

どうでもいいか。

「何をぐだぐだ喋ってんだ。アリス！！
とつとと仕留めるぞっ！！」

「それは困るな。

誰か1人ならばともかく、ジャック・ラカンや千の呪文の男、敏腕魔法刑事と称されるガトウに金色天使までいられては勝てるはずが無い。

というわけで、搦め手で行かせて貰おう。」

「させると思つてんのかよっ！！」

「はっ！！」

政治家なんぞより、万倍やりやすいぜっ！！」

ナギとラカンが襲い掛かるが、その前にテルたん搦め手が炸裂した。

「わ、わしだっ！！

ま、マクギルだ！！

反逆者が――」

テルたんが声音を変えて連絡を取る。

「げっ！？」

「くそっ！？そうきたかつ！？」

「にやるっっ！？」

上から、ナギ、ガトウ、ラカンである。

「君達は少しやりすぎた。

拮抗して無いと困るんだ。
というわけで、少しの間退場してもらう。」

テルたんから膨大な魔力。
そしてすぐに地面から吹き上がる石の槍が皆を襲う。

このときを待っていたっ！！

転移ゲートで逃げるテルたんを追って、私も影を使った転移をする。

「まさか、追ってこれるとはね。
さすがというべきか。」

金色天使。」

「テルたん。」

頼みがあるんだけど。」

「・・・君が？」

完全なる世界の幹部の僕に？」

「おういええい！」

「テンションがおかしいね。」

「ほっというてちょうだい。」

そつ真顔で突っ込まれると少し恥ずかしい。

「私のお願いってのは、マスターキー・・・できればグランドマスターキー。」

無理ならばマスターキーを欲しい・・・あげるのが無理だと言うな

ら一時的に貸してくれないかしら？」

「・・・君はどこまで僕達のことを知っているんだい？」

「まあまあ。」

「それも含めて貸してくれたら教えてあげる。」

「・・・ふむ。」

「まあ難しい問題だとは思っけどさ、そこを曲げてたの——」

「構わないよ。」

「はい？」

「今、僕が持つてるので良いかい？」

「とはいえあげることは出来そうにないけど。」

「良いの？」

「これ使つて、テルたんを消しちゃうかもよ？」

「別にそれを使わなくても君がやろうと思えば僕程度。」

「やられてしまうだろう？」

「それにこれは“まだ”使えないよ。」

「そう。」

私としてはキーに組み込まれてる術式を利用しただけだから問題ないけど・・・まあありがとう。」

「それで、さっそく聞かせてくれるかい？」

「僕はこう見えて忙しいんだ。」

キーを受け取り、さっそく本来の目的の魂を生成していく私。

「おおっ！？」

これはグランドマスターキーか。

ここまですとは思わなかったよ。

凄い速度で魂が生成されていくのを感じる。

これなら10分くらいで住むかも。

「ええとね、私が君達を知ってるのは未来人だからだよ。」

本当はちょっと違うが、まあこれでも良いだろう。

「・・・ふざけているのかい？」

「これは取引だよ？」

取引でウソを言う人間に見えるかしら？」

「見えないね。」

「なら信じてもらうしかないわ。」

「・・・僕達の計画とその成否も知ってるの？」

「もちろん。」

聞きたい？」

「・・・。」

「君達の計画は失敗するよ。」

「・・・そう。」

それは君が関与するからかい？」

「違うわ。」

私がどうこうするまでも無く失敗する。」

「・・・ふふふ。」

そうか、失敗か。」

少し虚ろな目をするテルたん。

しかし、それもすぐに消えた。

「ありがとう。」

「・・・失敗すると分かっけていてもやるの？」

「・・・ああ。」

人間ならばやる気がなくなるんだろう。

でも、むしろやる気が湧いてきたのはどうしてだろうね？

どうしてもやってやると言う気になる。

計画を果たすための人形だからかな？」

少し自嘲気味に笑うテルたん。

だが、そのやる気は人形だから。というよりも――人間らしいからといったほうがしっくりくるのは私の気のせいだろうか？

「気が変わったよ。

そのキーは金色天使。

君にあげる。」

「いいの？テルたん。」

「ああ。

それとテルたんって言うのは止めてくれないか？」

「・・・ふうん。

じゃあ、フエイとんね。」

「・・・いや、だから・・・。」

「テルティウムは“三番目”って意味でしょう？
新しく名前を付けてあげる。

番号ではない名前。

フエイト・アーウェルンクスって良いと思わない？」

「・・・はあ。

好きに呼ぶといいさ。」

そのまま去ろうとするフエイとんの背中に私は名乗りを上げた。

「私はアリス・スプリングフィールド。

ついでに言うとなんたりする！！」

「・・・最後に超ど級のどつきりを仕掛けてくれたね。いろんな意味で。」

「またね。フエイとん。」

「・・・またね。」

軽く手を振って分かれる私達。

うむ！

フェイトんとは気が合いそうな気がするよー！！

次、逢える日を楽しみしてる！！

13 目 アリカちゃんとフェイトン（後書き）

性転換しちゃったのはなんとなくである！！
後悔はしてないよ！？

ここから先の展開で迷い中。

アリカとの親愛を擲めて物語を進めていくか、淡白に進めていくか。
アリカとナギの恋愛をこと細やかにラブコメよろしく書こうと思っ
たのですが、面倒なのでそれはボツ。

なにより僕は主人公が一時的にでも変わると読む気が激減するタイ
プの人間なので、そういう人のためにもナギの一人称は書かん！！
（書く側としては別にいいんだけど。なので希望が多数あれば書
きます。）

で、話を戻しますが、主人公とアリカとの親愛を絡めるか、淡白に
行くか。

コレによって紅き翼編の話の長さが10話ほど変わりそうな気がし
ます。

もちろん前者が長くなりますが、そうなると紅き翼編のテーマは家
族愛になっちゃうかも？

とっとと真帆良編に行つて欲しい人は書かないほうが良いでしょう
し・・・悩みます。

メッセーじなんかで意見をもらえるとありがたいです。

どっちが良いか。

挨拶とかいらないので、家族愛を擲めて描いて欲しいならば1を。
淡白に進めてさっさと学園編に行つてくれと言うならば2を。

番号のみを書いたメッセーじを送ってくれば構いません。

例えば

『こんにちわ。いつも読ませてもらってます。

私は一番をお願いします。』

というメッセージを送るとしたら。

挨拶なんて抜かして

『一番で。』

もしくは

『1』だけでも構わないです。

感想を書きたい人は感想も書いていただいて構いません。

というわけでアンケート。

よろしく願います。

また、たとえば家族愛を望まれても期待に沿えるかはまた別の問題ですww

14つ目　ちゃちゃまる改造ふらぐ（前書き）

前の話にて。

大戦期の土のアーウェルunksは一番目だという指摘を頂きました。ま、間違えたわけじゃないんだからねっ！！

この作品ではそういう展開だけなんだからねっ！！

おほん。

修正しようとも思いましたが、そうなるとフェイとんが出てこなくなるのでこのままで進めることにしました。

ご容赦くださいませ。

14つ目　ちゃちゃまる改造ふらぐ

さてはて、おハロー。
アリスです。

前回のフエイとんの策でまんまと指名手配された紅き翼の面々。
彼等は逃亡生活真つ最中のご様子。

書類上では紅き翼に入ってなかった私とキティはのんびりとホテルでラブラブしている最中でございます。

戦いでは積極的に前へと出ていかなかったし、出ないと言うよりはナギ達が強すぎて出る必要がなかったと言うのが大きかったんだけどーなにはともあれ私はアリカちゃんと似てるから都合が良かったって言うのもあり、キティは賞金首だからということとで素顔をさらしていなかった目立たない私達にはあまり大きな問題ではないのである。

そもそも普段つけていた蝶マスクを外せば良いだけなのだ。
分かる人には分かるだろうがー直接会ったことがあり、内に隠してる魔力を確認できるほどの実力の持ち主に限る。
よって普通に街を出歩いていてもばれない物である。
というか、私達に関しては疑いがかかっていると云うレベルだしね。

「いいのですか？ 姉様。」
「何があ？」

ソファの上でゴロゴロし、少年ジャンプを読みつつカールを食べる私。

カール美味しいよ。

お酒のつまみとしても美味しいよ！！と言っても、私は呑んだこと無いからチャチャゼロとその酒飲みにつき合わされるスパ君の話の受け売りだけだね。

ソファの目の前の机には三ツ矢サイダー。
もちろんカロリーゼロなんかではない。
個人的には好きではないからね。

「ナギたちのことですよ。」

「ナギたちだからこそだよ。
問題ないわ。」

連合国はもちろん、帝国からも追われることになったナギたち。
帝国は今まで戦争をしていた相手だし、あそこに逃げるのはまず無理。

適当に逃げ回っているところじゃないかなあ。

これによる影響は両国にかなりのものが出た。

今まで連合が押していたのは英雄であるナギたちの力による物が大きい。

そのナギたちの離反（というフェイトンによる誤報）によって、連合軍は士気が低下。

さらには元々は帝国のほうが力が強いと言うことも相まって、あれから三日しか経過してないにも関わらずすぐさま拮抗するようになった両国。

もうちょっと頑張つて欲しいよね。だらしないんだから。

私達としてはもう戦争に関わる理由が限りなく無くなってしまった。
鍵で魂生成は完了したし、鍵自体も手に入れた。

これで私はたとえアーウェルンクスシリーズがすべて総出でかかってきたとしても、傷一つなく勝てるようになってしまった。

フェイトンはマスターキーは“まだ”使えないと言っていたが、私はアスナ姫の力を必要とせずにリライトが使える。

私と鍵があればそれだけで使えてしまうからして、魔法世界の住人相手ならば問答無用で勝ててしまうほどの戦闘力を手に入れたので

ある。

「ふむ、アリカちゃんを助けに行こうかな。」

「あの女にも反逆者であるという疑いが行くからですか？」

「うん。」

私達と違ってアリカちゃんが紅き翼と仲が良いというのは周知の事実。

となればその仲間であると言う疑いがかかるのは当然のことだよね。

「

というより、ちょっと三日ほどキティとラブラブでイチャチャな夜の乱れた生活をしていて、気づいたらアリカちゃんにも反逆者の疑いがかかっていて、いつの間にか捕らえられていたと言う。

もう少し経てば大規模な裁判の下、無罪か有罪か。

下手をすればそのまま斬り捨てられかねない。

キティに夢中になりすぎちゃった！てへ！

「はあ、姉様。」

「な、何かな？」

「それを知っていながら、まざまざと老害の阿呆ドモにあの女を捕られたのですか？」

「しょ、しょうがないじゃない！？」

最近、戦争戦争ばっかでろくにキティとそいう……ごによごによ……をしてなかったから……キティだって喜んでたくせに。」

「う、五月蠅いです！！」

人のせいにしちゃいけないですよ！？」

「ご、ごめんなさい。」

死ぬような目に遭っても私がここに存在する以上、金髪幼女神が言う世界による修正力によって死ぬことはまずない。(スパ君談)
ここで彼女が死ねば私は生まれえないことになる。しかし、一度存在した時間軸の歴史は変えられない。

これは“世界”の決まりである。

未来でネギと一緒に私が生まれる。これは決定事項なのだ。

よってその矛盾を修正するべくアリカ王女はある意味死ねない体なのだ。

が、フェイトんが女になっていたりと微妙に違う部分がある。

となればだ。原作ではなかったが、拷問を受けたりなんたりする可能性が無きにしもあらずということも。

死ななければそれで良い。というくらいの修正力しか無い為だ。

極論を言えば、子供を産める体でありさえすれば良いということになる。

致命的ではないにせよ、原作が悪い方向に変わる可能性がある以上助けに行くのが無難だろう。

赤の他人ならばともかく母親兼友人のアリカちゃんのためだしね。

「あんな女。放っておけば良いでしょうに。

・・・全く。」

と言いつつも私の向かい側のソファから腰を上げるキティ。

そんなキティはやはり私の妻なのである。

なんだかんだで行く気満々じゃない？

「・・・ふふ。心配してるくせに。」

「ね、姉様が行くからついていくだけで、私自身は特にどうとも思っ
てません!!」

アリカのことなんて・・・どうでも良いんです!!」

「またまたあゝ照れちゃって、まあまあ。」
「照れてないもん!!」

顔を紅くしてそんなことを言われてもね。
ちなみであるが、アリカちゃんとキティは良い友達である。
なんだかんだで仲良くなった。

2人とも高貴な出だから気が合うのかもしれない。

「というわけで、お留守番お願いね。」

スパ君、チャチャゼロ。」

「分かっただ。」

気をつけていくだよ。」

「留守番力ヨ、ツマンネエナ。」

ただ救出するだけならキティとの二人だけで十分。
この2人まで連れて行ったら戦力過剰すぎる。

「というわけで、アリカちゃんが捕らえられてると言う“ノクティ&ヒリントウス夜の迷宮

”に来てみました!!」

「誰に言ってるんです?

姉様?」

「特に誰でもないわよ?

単なるノリ?かしら。」

「・・・のんきですね。」

別に悪くはないでしょ?

こんな辺鄙なところ、無理にでもテンションをあげなきゃやってられせんって。

周りにはどこからどこともなくやってきた魔獣たちの住処となっている。まあ襲い掛かってくるほど凶暴な種じゃないみたいだけだね。だって、私達を見た瞬間に一目散に逃げ出すくらいなもの。臆病な子達が多いのでしょう。

それにしても、やたらガタガタ震えていたのはなぜ？

「姉様の言うとおり、辺鄙な遺跡ですね。

正直、探すのが面倒です。

魔力も遺跡自体が遮断してしまうみたいで魔力探査が出来ませんし・
・・」

場所をここにした理由は簡単に脱走できないようにってところかしら。

似たような様相が続く、入り組んだ道。それに時に時折出てくる竜種の数々。

驚くことなかれ。ここに出てくる殆どの魔獣が竜種なのだ。それも正面から向かえば一流の魔法使いが多少なりとも苦戦するレベルのものがである。

襲つてはこない臆病な竜種のようなのだが、これはいささか脱走を足踏みするには十分な理由である。

夜の迷宮とは良く言った物よね。

旧世界のゲーム、“世界樹の迷宮”を思い出さないかしら。

あれの階層の終わりに出てくるボスクラスの敵が普通に出てきて、尚且つ道形が全く分からない。

これだけでどれほどの脅威か。

ゲームをやる人は分かるかと思う。あまりやらない人でも想像は付くだろう。

さらに言えば、ここは現実であり回復系アイテム以外にも食料なんかも必要になる。

そう考えれば捕まったアリカちゃんとしてはいつ終わるともしれぬ迷宮を渡り歩こうなどとは間違っても思うまい。

強力な攻撃魔法で壁を無視してひたすら前へと突き進むというのも可能だが、それはナギや私のような魔力が無駄にある人向けである。アリカちゃんには向かないだろう。

調子のもつて安全なところに帰るまでに魔力切れなんて起こしたらそこでお陀仏だし。

そもそも竜種は縄張りを持つので、縄張りを荒らせばこちら一体の竜種にいつぺんに襲い掛かられないし。

といいつつも。

「どつせい!!」

雷の暴風!!」

無視して突き進むだけなんだけどね。

周りにいた竜種はすぐさま消えていく。

いまさらだけど、あの子達怯えていたり――するわけないよね!?!私のような可憐な男の娘を怖がるなんてありえないよ!!

「ね、姉様。

下手をしたらアリカまで巻き込みかねませんが。」

「・・・そうだったわね。」

目の前には半壊した壁がごろごろと転がる。

「今ので死んじやったりしてないよね?」

「・・・アホですね。」

「・・・うるさいな。ちょっと失敗しちゃっただけじゃない。」

今度からは一枚一枚、地道に壊して行くわよ。」

人間やめても失敗の一つや二つはあるものである。

「と思つたら・・・これか・・・」

「・・・ナギたちが先に助けたようですね。」

アリカちゃんたちがいたと思われる場所はおもむけの空。
誰もいなかった。
虚しい。

「・・・どうするんですか？」

「・・・もう知らない。」

勝手にしたらいいよ。」

「いじけないで下さい。」

「だってえ・・・もういないとか・・・無駄に魔獣たちの住処をあらしただけじゃないのよ・・・魔獣にも申し訳ないわ・・・さすがに。」

「おや？」

姉様・・・コレを。」

「うん？」

あら？これって・・・ふむ。

あれね。

ホムンクルス

人造人間の素体だね。使用済みの。」

部屋を良く調べるとさらに一枚向こうに隠し部屋があり、そこは研究所と化していた。

周りには培養槽がずらりと並んでいて、それらの中には一部が無い、もしくはほとんどの体の部位が無い“生体”が入っている。
死んでいるみたいだ。

「もしかしたら・・・アリカちゃんの血を使って人造人間を造ろうとしたのかな？」

「王族の血を引いた存在が必要だった・・・ということですか？」

「アリカちゃんを殺した後の傀儡を用意するためか・・・それとも王族の血を引いた兵士でも作ろうとでも考えたのかなんなのかコレだけじゃ予想が多すぎてコレと言うのは分からないけどね・・・完全なる世界の目的からするといささかずれ過ぎてる。

多分、元老議員の方が動いてるね。」

「完全なる世界の目的？」

「魔法世界の人々を救う。もとい世界を救う。のが、彼らの目的・・・だったかな？」

「なるほど。」

だからこそナギたちを罠にはめたと言うことですか。」

「うん。」

両国が拮抗していてくれれば第3勢力の完全なる世界の面々が動き易いというのと、救う前にあまりに殺されるのも困るって言うのがあるんだろうね。

帝国の人間の殆どが魔法世界人だから。」

「姉様から聞いた話はホント信じがたいですね。リライト・・・始まりの魔法使い・・・さらには魔法世界人の“楽園”への“転送”。今回の戦争が尚のこと面倒になってきました。」

「まあ、そういわずに付き合ってよ、キティ。どうせ暇じゃない？」

命の危険が無い程度に楽しませてもらいましょう。」

「まあそうですけど・・・。」

なんだかんだ言いつつも皆を助ける一番の理由は暇だからなのだ！！不純な動悸でごめんなさい。

だってねえ・・・600年以上も生きてると善悪観念なんてほぼ飛

ぶよ？

もちろんアリカちゃんを助けるのはそれだけではなく、情ゆえにってのもあるけどね。

ついでにこの研究所のデータも持ち帰ろう。

将来的に私達の血を引いた子供を作ることが出来るかもしれない。軽く試したんだけど専門外だったからちよつと行き詰ってたんだよね。

スパ君に聞けば分かったとは思うけど・・・二人の子供になるんだし、ここはやはり自力で――

ふふふふへへへえへへ。

娘と息子を1人づつにしようかな？

それとも娘か息子を1人だけにして、百年くらいかけて育てようか？2人もいたら教育費とかしつけどか大変そうだなね。

いや、教育費は土地代で十二分以上に足りるんだけどさ。そもそも普段買うのは服と食べ物、週間雑誌、面白そうなゲームを数点くらいだし。

のくせして年収は普通に億越えだから（麻帆良の土地が特別高いと言うわけではなく、単純に敷地がめっちゃめっちゃ広いために）、お金はそれこそお尻を拭ける位にある。

食べ物も普通にスーパーで済ませるし・・・生活費は今までで一番多く使った時でも月20万ほどだ。お金がありすぎるってのも困り者だよな。

キャビアとかも食べてみたけど、しょっぱいだけだった。

年代物のワインなんかは普通にキティが自分で作った1000～600年ものが沢山ある。

時価にしたら1000万はくだらないんじゃないだろうか？

ダイヤオマ魔法球ってこういう時便利だよな。

酒樽の収納スペースとして酒に適切な気温、湿度を整えた専用の魔法球を使って保存してるので保存の手間隙も一切無くただ日々を過

「ごすだけで年代もののワインができていと言つ。
しかも時間の進みも弄れるので・・・わふう。
すごいことになりそう。」

「姉様？」

「どうしたの？」

「急に黙つたりして。」

「ちよつとね。」

「・・・思考がずれちゃったけど、とにかくここのデータは持ち帰
ましょう。」

「ちよつと待つててもらえる？」

「電子魔法でデータを抜き取つてこうして・・・ぴこぴこ。」

「ニヤニヤとして・・・何を企んでるんですか？」

「プリキュアとかもうやりませんよ？」

「ふふふ・・・秘密。」

「驚くわよ。キティ!!」

「・・・お手柔らかにお願いしますね。」

「嫌よ!!」

「なぜっ!？」

「超ハイスペックな娘を作りましたか・・・それとも超可愛い男の
娘を作りましたか？」

「でも、私達の血を引くわけだから可愛いのは当然で・・・強いのも
当然よね？」

「となれば他に何かを・・・いつそのことハイブリットに両性具有に
しちゃうとか？」

「姉様・・・まだですか？」

「あ、うん。」

終わったよ。

んじゃま、帰ろうか。」

「・・・お手柔らかにお願いしますよ・・・本当に。」

「わかつてるつてば。」

大丈夫大丈夫。」

「不安です。」

ジト目を向けてくるキティ。

お姉ちゃんは悲しいです。

信じてくれないなんて！！

「ひどいつ！！」

もう私達の愛は冷めてしまったと言うのっ！！？
信じること。これすなわち愛なのにつ！！」

「あ、い、いえっ！！」

そ、そういうわけじゃないんです、姉様っ！！」

「き、嫌いになっちゃったのね・・・」

「そ、そんなわけ・・・」

「じゃあ、キスして。」

「は、はい・・・って、へっ！？」

「で、できないのね・・・うう・・・キティ。私のことを・・・」

「な、なみだ目で見つめられてもこんな場所で・・・」

「なんてね。」

冗談だけど。」

顔を真っ赤にして、あたふたと慌てるキティ。

嗚呼、可愛い。

ぷくくくくつ。たまにはからかうのも・・・

「・・・少し頭冷やそうか。」

「はっ？」

あ、ちよつと待って・・・その魔力量はちよつとしゃれにならないかなあって・・・ご、ごめ・・・がつぷうるうあんっ!？」

キティの鉄拳によつて星となった私であつた。

ちなみにキスはした。

可愛かつた物で、帰り際にちよつと頂いちゃいました。

「ふえっ!？」

こ、こんな場所で・・・なんて・・・バカです、姉様は。」

思わず押し倒しちゃったのは余談です。

14つ目 ちゃちゃまる改造ふらぐ(後書き)

淡泊に進めることにしました。

アンケートが感想でしか集まらないもの！ww
ちよつと恥ずかしいです。

2、3ページほどでこの章は終わり(マンネリして微妙につまらなくなりつつあると思いますしね)、ネギとの再開を果たします。という予定です。

追伸

メタギアオンライン良いよ！！
久々にやったらはまったよ！！

今まで13と14の間を彷徨っていたけど、14安定どころか、レベルが15になったyo！

”Leopard | Gecko”という名のキャラです。
見かけたらよろしゅう。

15目 終着へ向けて

はろはろ。アリスです。

似たり寄ったりな始まり方だけど、勘弁してね。

出だしって結構迷う物だから。

とか誰に話しかけてるのやら、意味の無い挨拶をしつつ。

あれからちよいちよい色々なことがあったのだけど、それらを飛ばして現在は完全なる世界との最終決戦。

ナギたちが頑張ってるさなか、私達は遠くにて遠見の魔法で鑑賞中です。

「姉様はあれに加わらないのですか？」

「キティにはもう言ったでしょう？」

完全なる世界の目的を。」

「スモエンケレティア

「ええ・・・魔法世界人の楽園への転送。

ナギたちはそんな都合の良いものは人生じゃない・・・ということ
で反発しているとのことですよね？」

「簡単に言つとね。

まあ確かにそれも一つの価値観なんだけど。

私としては彼らの計画を応援してあげても良いくらいなの。」

「・・・というと？」

人生辛苦をともなつてこそ良いものになる。

確かにそれはあるだろう。

あるかもしれない。

でも、自分に都合の良い夢しか見れないと言つその楽園ならばそれを必要としない。

それを必要と考える人間ならばその夢の中で味わえるはずなのだ。

ならば現実であろうと夢であろうとそれを経験することには変わらないのだから夢の方が良いに決まっている。
決して死ぬことが無い。

幸せな未来が――成功が“約束”されているのだから。

どう考えても夢のほうが良いだろう。

まあ、とはいえ私はごめんだが。

キティとの関係も都合の良いものになってしまうのは我慢なら無い。それ以外ならOKなんだけどね。

いや、だからこそ夢を拒否してるのかな？

あれ？

改めて考えると良く分からなくなってきた。

「姉様、私もそうです。

姉様との関係が都合の良いものになるのは我慢なりません。

拒否する理由などそれで十分でしょう。」

「うん・・・そうだよね。

ていうか、そうなると妨害しにいかなくちゃならないけど・・・まあ良いか。

所詮、赤の他人の些事だし。」

そもそもこの世界自体が崩壊にせまっているから止むを得ず、というわけなのだ。

他の術を持たない私達にとってみれば妨害する資格など無いだろうして、どうなるという話だ。

「っと、フェイトんが来たね。」

「・・・そのようですね。」

2人でのんびりと観戦をしていると、背後から魔法陣が出現。
ズタぼろのフェイトんが転移してきた。

「やつほー。フェイトん。

気分はどう？」

「ここは・・・」

「ここは君達のアジトから10キロは離れた場所かな。」

「・・・そうか。」

「フェイトんに渡しておいたお守りが作動したんだよ。
消える寸前まで痛めつけられると私の元に来るように。
せっかくの友人を壊されるなんてたまったものじゃない。」

まあ、後から再生できるだろうしさ。

「悪の秘密組織の幹部を捕まえて、友人とはね。」

「いやかな？」

「・・・別に。」

嬉しいよ。」

といって笑うフェイトんは可愛かった。

笑えたなら、もっと早くその顔を見せれば――ごふうっ!?

「浮気はダメ、絶対。」

「浮気じゃないし・・・いちいち本気で殴らないでくれる？
キティ。痛みがないわけじゃないんだから。」

「可愛い女の子を見たらすぐに顔を紅くする姉様が悪い。」

「わ、悪いと思うけど・・・あ、紅くなんてなつてたかしら？」
「なつてた。」

「・・・ごめんなさい。」

「・・・全く。」

しょうがないじゃないか。

私はキティとが始めてのキスで始めての彼女で妻なのだから。

そもそも女性と言う物に耐性が弱いという部分をかんがみて欲しい物である。

何度も言うけど、浮気するつもりは微塵も灰燼もないということを言っておく。

「ふふふ。」

相変わらずだね、君達は。」

「ありがと。誉め言葉として受け取っておくわ。」

・・・はい、これで体は“直った”でしょ？」

いつぞやに貰ったグランドマスターキーの力を使って綺麗にフェイトんの体を直した。

「こ、これは・・・ああ、そうか。」

君にはグランドマスターキーをあげていたつけ。」

「そういえば、コレをくれたのはどうしてなの？」

計画が失敗すると聞かせた途端、これを与えることになったのだけれども。

もともとはあげられないといったにも関わらずにだ。

「大した理由じゃないよ。」

「どうせ、フェイトんの性格からして後は見てるだけでしょう？一度負けた以上、負けを認めないような三流とは違うだろうし。」

ただ見てるだけなら暇つぶしがてら聞かせて欲しいな。」

と言うと、一つため息を吐いて、フェイトンは口を開いた。

「・・・それもそうだね。

理由は本当にくだらない。

どうせキーがあっても負けるくらいなら、自分の力で踏ん張ってみたかった。

それだけさ。」

「・・・ふふふ。」

「滑稽に映ったかい？」

本当にフェイトンは好きだ。

「違うわ。

人間らしくて・・・可笑しかったのよ。

今の貴方、とても素敵よ？」

「・・・あ、ありがとう。」

「生きてるって感じがする。

滑稽？」

私からしたらとても立派なことだわ。

・・・私にはとても出来そうに無い。」

フェイトンって原作で見てたときも思ってたんだけど、人形らしいけど下手な人間よりも人間らしい。

今、少しだけ頬を紅くしているのもまた・・・ね。

私との交友でより人間らしくなってきた気がする。

だからこの世界で二番目に好きなキャラだ。

もちろん一番にはなりえない。

一番はキティなので。

「それが僕にとっての生きがいだったからだよ。

君だってそれが生きがいだったら・・・」

「・・・私の生きがいはキティといればそれだけで満たされるからね。

そんな壮大な目的を生きがいとする気持ちは分かりそうにないわね。

「

とか話していると。

ドガガガッと派手な音とともに造物主^{ライフメーカー}が吹き飛んでいく。

ナギがやった様だ。

「・・・君の言うとおりだったか。」

「あら？」

信じてなかったの？」

「いいや。

僕も結構頑張ったからね。

ナギの左腕をなんとか千切り取ったところでダウンさ。

これも予測済みなのかな？」

「・・・おどろいた。

多少なりとも過去を変えろとは・・・この世界の住人には本来の歴史を変えることが出来ないはずだったのだが。

私が関わったからかな？」

「・・・ふふ。

まさか。

それは貴方が頑張った結果でしょう？

本来の歴史にあるはずが無いわ。」

「・・・そうか。」

それじゃ、僕はこれで。」

私の言葉を信じたか、流したのか。
表情を変えずに彼女は身を翻す。

「これから、どうするの?」

「生き残りを回収してから、同志をまた集めるさ。
まずは主の復活からかな。」

「・・・たまには麻帆良にきてね。
コーヒーくらいご馳走するから。」

「近くに来た際は寄らせて貰うよ。
また会おう。」

金色天使・・・いや、アリス・スプリングフィールド。」

「ええ、フェイトん。
体には気をつけて。」

そのまま水のゲートでどこかへと飛んでいったフェイトん。
まずはデユナミスあたりとの合流だろうか?

「分かり合ってる風でお楽しみでしたね。」

お姉様。」

「そうでもない・・・ってキティ?」

涙目で頬をプクツと膨らませてプルプル震えるキティ。
なにやらリスみたいで可愛・・・じゃなくて。

「わ、私と言う物がありながら・・・他の女と仲良くおしゃべりば
っかり・・・私だって本当は姉様と一日中おしゃべりしていたいく

らいなのに……。でも、ウザイと思われるだろうから自重してるのに……。ふぐ……。ぐず……。なおに。なのに……。姉様つてば最近はおよくちよく念話であいつとばかり話して……。分かり合った風に笑いあつて……。ぐず……。ふえ……。ふええええええええんっ！！

わ、私を捨てちゃだあつ！！

ねえさまああああああああつ！！」

こ、この少女。

な、泣きおつたっ！？

た、確かに最近はおよくちよく話してたけど……。たまりに溜まったストレスと、自分が捨てられたときの想像でもしたのだろうか？

「ちよ、ちよつと待ちなさい！！

そ、そんなわけないでしょっ！？」

「ふえええええええんっ！！」

ああもう！！

私としたことが！！

この日のことで頭が一杯になってしまつてたか！？
キティのこの状態に気づけないとは。

とにかく力強く抱きしめて、耳元でささやいた。

「私がキティを捨てるわけ無いでしょ？

ね、だから泣き止んで？

お願い。」

「ほ、本当？」

涙目で上目遣いでこうたずねてくるキティ。
ごくり。

なんて可愛いんだ、キティはっ！！

というか、いまさらだがキティは私が相手の場合は時々子供っぽくなる時がある。

今もそうだ。

自分を着飾ることなく私に自分を晒してくれているということだろうが・・・そう思うと尚のこと愛しい。

全く、本当に可愛いんだから。

内面も仕草も見た目も。

「全く・・・いえ、オンナノヒトってのは常にそういう不安を抱える物なのかもしれないわね。

ごめんなさい。

そうね、今度からは家にいるときは常に抱き合っているとかなど？」

「ぐず・・・そ、そうする。」

は？

え？

マジで？

ちよつとした冗談のつもりだったんだけど？

ま、まあ良いか。

常に抱き合いつつ過ごすのも・・・ふえへへへへ。

ヤバイ。

幸せかもしれない。（注＊基本的に彼女達はバカップルです。）

周辺を包む魔力消失現象を尻目に抱き合う2人だった。

決着から数日後。

オステイアの一段階目の崩落現象が始まる。

「本艦の周囲に強力な魔力消失現象。

このままでは・・・対抗呪紋塗装装甲もどれだけ持つか!？」

「泣き言はいらぬっ!!」

あと数時間持たせるのだっ!!」

アリカちゃんがそう怒鳴る。

「は、はっ!!」

「最も的確に市民を救えるように最大効率で船を回せっ!!
捨てて良い命は一つもないっ!!

意地でも救い出せっ!!」

世界を無に返す魔法陣。

それを無効化するためにアスナ姫の反魔法力場を封印。
アンチマジックフィールド

その代償が今の状況の原因である。

「キティ。」

「助けるのですか?」

「もちろん。」

別に他の人間が死のうと生きようと構わないんだけど・・・アリカちゃん
が助けたがってるからね。」

「・・・全く。」

帰ったら、埋め合わせとしてデートをしてください。」
「もちろん。」

というか、普段からしてるんだから・・・交換条件にもならないよね。」

「・・・うるさいです。」

「妻だから旦那の手助けは当然ってところ？」

「ただで助けるのが恥ずかしいんでしょ？」

「変なところで照れやさんなんだから。」

「ち、違うもん!!」

「はいはい。」

「ち、違うんだからねっ!？」

「わかったってば。」

「それよりも通信するから静かにしててね?」

「ち、違うんですからねっ!？」

「はいはい・・・っと、アリカちゃん？」

「もしもし・・・聞こえますか?」

「お、おぬしらは?」

通信画面にアリカちゃんの顔が映る。

「私達も手伝うよ。」

「ならぬ。」

魔力消失現象のど真ん中ではおぬしたちとて無力な人間に過ぎん。ナギたちにも言ったことであるが・・・」

「大丈夫だよ。」

私、一応ウエスペルタイア王国、王族の血筋だし。」

「な、なんじやとっ!？」

「ば、ばかなっ!？」

アンチマジックフィルター

「まあまあ、とにかく私もこの反魔法場で動けるってこと。」

「キティはキティでもととの身体能力がバカ高いからね。」

「とにかく私達に指示をお願い。」

「・・・分かった。」

無理はするでないぞ。

そして指示はクルトから聞いてくれ。』

「クルト君から？」

『妾も直接助けるからじゃ。』

『へ、陛下っ！？』

「おっけ。んじゃま、クルト君よろしく。」

そうして助けることになった結果、犠牲者は本当に少数になった。
のだが。

やはり少なからず死んだ人は出てしまったのである。

さらに数日後。

オステイアが消えたことによつてその原因を作つたとしてアリカチ
やんが捕まつたと言う。

もちろん、そんなことを許さない私としてはあちらにいるのは傀儡。
ホムンクルス
人造人間だつたりする。

もちろん、ホムンクルスといえど生きているといささか寝覚めが悪
いので、中身はキティの人形。

すなわち、人造人間技術と人形作りの技術の合作肉人形。
このときのために人造人間技術を盗んでおいたのである。

「助けてくれたことには感謝する。

じゃが・・・妾は死ななければならーむぐ。」

アリカチやんが“らしいこと”を言い出したが、人差し指で口を塞
ぐ。

全く・・・このバカ真面目な母親はこれだから・・・

「死ななければならぬ？
バカを言わないで。」

死んで何になるのさ。

むしろ生きて何をかをするべきだよ。

死んでも何も生まない。

ナンセンス極まりないね。」

「・・・。」

「その通りだ。アリカ。」

私としても・・・あれだ。

生きて欲しいと思わないでもないしな。

死ぬか生きるか。

どちらが辛いかといえばこの状況で生きると言うのは酷なのだろうな。

だが、あえて言う。

生きろ。

オマエは生きるべきだ。

色々な意味でもな。

綺麗なままで生きていける人間など存在しないんだ。

泥にまみれても生き続ける。

それが人間と言う物だろう？」

私の言葉にキティも加わる。

少し顔が赤いのは言うまでも無い。

「・・・そうかもしれぬな。」

「何、私もいるし、姉様も付いている。
辛ければよりどころにでもすれば良い。

それくらいにはなれるしな。」

「キティも言うようになったのね。」

「う、うるさいです！！」

姉様！

茶化さないで下さい！！」

ナギが偽者アリカちゃんを助けるまで後二年。

適当にアリカちゃんと人助けをしながら時が熟すのを待つとしよう。

まずは・・・シルチス亜大陸にでも行って見ようかね？

16つ目 そろもんよ！私は帰ってきた・・・故郷へ（前書き）

今回は一番短い話。

どうせなら前回到纏めればよかったと思いつつ。

16つ目 そろもんよ！私は帰ってきた・・・故郷へ

ずばごごんっ！

どががぐんっ！！

とあちらこちらで轟音を鳴り響かせる紛争地域の一つ。

シルチス亜大陸。

そこで私達は人助け中である。

私とキティがアーティファクトを使って全力で戦場をぶち壊し、上でドカバンドカバンと戦争をやりたがっている連中を殺しまくり、適当な上をあてがって徐々に徐々に安定させていこうと言うところである。

謀略、知略、策略とフル動員して戦場を駆け巡るうちに、そうした戦争をしようとする上の人間からは「血塗れ天使」ヒンゲラ・ササジゲルス Pingere

sange Angelus」と呼ばれ、戦場の被害者からは

ベルム クラウディア

ボビュリイ

「戦争を終わらせる者」 Bellum claudere pop

uli」と称えられ、呼ばれるようにも。

恥ずかしい2つ名がまた増えてしまった。

キティにはもともとの呼び名があり、原作とは違って戦争で傷ついた人たちを慈しむ良き吸血鬼として闇の福音と呼ばれるようになっていく。

そしてアリカちゃんはアリカちゃんです。ナギたちに会いに行けばいいものを、そんな暇があるなら1人でも多くの人々を助けるのが私の責務だ！と言つて意地でも会おうとしない。

まあいいけどね。

効率から見ても合流するよりは別々に助けていったほうが良いし。

今日もやることは変わらない。

まずは兵士をすべて半殺しにして、その間にキティとアリカちゃん
が死にそうな人たちを助けていく。

ちなみに兵士をわざわざ半殺しにするのは再度、紛争を起こさせる
ための力を削るためである。

兵士に罪は無いと分かっているにもかかわらず仕方が無い。

上を恨めと言う話である。

そもそもこの紛争自体が元老議員による自身の領土の確保という意
味合いが大きい。

今回の戦争で帝国と連合の両国が手を取り合い、表面的には同盟国
となった。

しかし元老議員はまだ世界をとることをあきらめていないのか周辺
諸国の侵略を開始したのだ。

表面上は寄る辺も無く、盗賊へと身をやつすことしか出来ない廃し
たオスティアの元住人の捕獲。

ないしは殺害という名目で周辺諸国を闊歩し、適当な集落や村を「
犯罪者の匿いの疑い有り」として占拠。

こうしてオスティアの国は滅びて尚、老害どもに利用されることに
なる。

ないしは不毛な戦争で失った豊かさを取り戻すべく、周辺諸国同士
が少ない資源を巡って戦争をし始める。

もちろんその戦火の代償はなんら罪の無い力の無い国民達の命であ
り、そうした国々を“守るため”に存在する兵士達の命でもある。
作物を作るには時間と人手が必要だ。

しかしそれを待っていたら多くの民が餓死していく。

それを良しとしない追い詰められた人々は冷静な思考の出来ないまま、ただただ戦うばかり。

酷い状況へと化していく魔法世界である。

それをアリカちゃんが良しとするはずもない。

時には体の調子を崩してでも人助けをするアリカちゃんを叱咤しつつ。

少しずつ、少しずつ私達は世界を癒していくのであった。

その世直し？の旅の途中で孤児を連れ添っているフェイとんとの挨拶もほどほどに。

あっという間に二年と言う月日は経って行く。

「妾の死刑が10日後じゃとな？」

「そうみたいね。」

「そういえば、あの傀儡にも魂が宿ったみたいですよ？
姉様。」

「傀儡って・・・偽アリカちゃんのこと？」

「目の前で、偽を付けて妾の名前を呼ばれるのはちょっと気分が悪いのう。」

「あはは、ごめんね、アリカちゃん。」

で、その傀儡に魂が宿ったってのはどういうこと？」

「どういうことも何もどうやら意志を持ち始めたみたいです。」

処刑にはケルベラス渓谷の魔獣を使うと言いますから・・・魂までも噛み砕かれてしまいます。

私としては・・・」

なるほど。

キティは魂が出来てしまった以上、アリカちゃん肉人形を回収したいということかな？

自分が作り出したものが無機物ならばともかく、意志を持つならば命と言っても過言ではない。

命を使い捨てにするようなことはしたくないのだろう。

それは私も同じだ。

この二年。頑張ってくれたことだしね。

人形には電子魔法で行動プログラムを打ち込んだだけだったはずなのだが、自立進化でもしたのかな。

なんにせよ、魂が宿ってしまった以上見過ごすことはしない。

まあどうせナギが助け出すんだろうし、その後で返してもらえば良いか。

でも一応、見に行くことくらいはしないとね。

本物のアリカちゃんならば世界の矛盾を修正する力によつて、確実に助かると断言できるが、偽アリカちゃんはアリカちゃんではない。間違つて噛み砕かれてしまう可能性が出てくる。

「では、処刑日には私達も行きましょうか。」

「私達？」

他にも誰かおるのか？」

「何を言ってるのさ、アリカちゃん。

ナギ達に決まってるでしょう？」

「ナギたちが？」

「本気で言ってるのお？」

惚れた女を見捨てる分けないでしょ？あのナギが。」

「ほ、ほ・・・ほれっ!？」

顔を真っ赤にして俯くアリカちゃん。

初心じゃのう・・・ホホホ。

「というわけで久しぶりの再開と行きますか。」

「じゃ、じゃが妾はどんな顔で会えば・・・」

「笑顔で良いでしょ？」

笑顔で。」

「え、笑顔か・・・む、むつかしいのじゃ・・・」

何言ってるの？この鉄面皮仮面は。

最近では鉄面皮具合を忘れたかのように笑いまくるくせに。

「いつも姉様に向けてるような笑顔をそのまま見せてやればいいだろう？」

いや、惚れた男なのだからより可愛い笑顔が出てくるかも知れぬな？」

「ほ、ほほ、惚れて等おらぬっ!！」

「いい、いい。」

そんなツンデレは求めとらん。

時たま、悲しそうな顔して“・・・ナギ。”とか呟くほどには惚れているのだろう？

というか義務だなんだと金繰り捨てて、とつとと会いに行けばよかったものを・・・」

「ぎゃあああっ!？」

ど、どこでそれを聞いておったのじゃっ!？」

「おや？

鎌かけたただだったつもりだが・・・本当に呟いていたのか。
らぶらぶだな。

まあ私と姉様には劣るが。」

とかなんとかほのぼのとした日々を過ごしつつ。
処刑日当日。

告白をするナギ。

ところがそれは別人。

ゆえに肉人形は困惑していた。

少し頬を紅くしていたところを見ると魂の性別は女性なのねと思
いながら私は笑いを堪えていた。

い、いやだつてね？

一世一代の告白を偽者にしちゃってるとか・・・ぷくっ！！

あはははははっ！！

ダメだっ！！

これは笑けるっ！！

ぷぷぷぷぷっ！！

さすがのナギも緊張してるのかな！？

いつもなら偽者だと見分けられただろうにつ！！

あははははははっ！！

もうだめ、死ぬ、笑い死ぬ。

「な、ナギ・・・」

ちなみにせつかくの告白なので意識だけはアリ力ちゃんを人形に憑依させてある。

女としてはこの告白を逃すのはちょっと可哀想だしね。

私にそんな気遣いはあるはずもなく、これを言い出したのがキティである。

「さて、これでめでたしめでたしってところかな？

あ、キティ。

魂は回収したの？」

「しましたよ、姉様。

人形のほうはどうします？」

「爆発オチで良いんじゃない？」

「・・・さいですか。」

爆発させたあと、なにやら絶望感溢れる表情をしたナギの元にアリ力ちゃんを送り、種明かしをするとナギにぶん殴られた。
痛いじゃない！？

いや、まあ怒るのも当然だけどさ。

その後は知つての通り。

こうして長い長い戦争は一先ずの決着が付いたのであった。

そして時は流れ。

ネギ5歳。

そしてアリス5歳。

そう、私は故郷ウェールズに700年以上ぶりに帰ってきたのであった。

年齢詐称薬によつて5歳児の姿で。

私は二度目の幼少期を過ごすことになる。

16つ目 そろもんよ！私は帰ってきた・・・故郷へ（後書き）

主人公に付いた新たな2つ名はラテン語表記。

ただ、確実に間違っているとあります。読み方もね。

ラテン語には性別と言う概念が存在し、これによってちよいちよい名詞が変化するのです。

英語くらいだろ？

と見くびって真面目にラテン語の勉強をしようと思ったら、予想以上に難しくて早々に挫折。

小説のネタ程度にそれを我慢してまで勉強しようとは思えず・・・英語？

そんなチャチなモンじゃねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を感じたぜ・・・なにこれ怖いラテン語。

17 目 近況報告

ふふふ。

私は帰ってきた！！

故郷であるウエールズに！！

とりあえずネギが生まれる前でも良いから適当に住居を作っておこうかなと思いつつ。

悪魔イベントの件も私が存在した時間軸には干渉出来ないということらしいが、こうしていると別にできるんじゃない？
と思えてくる。

いざとなったら、キティがいるし。

と思っっているとだ。

なんとまあ、驚いたことが起きてしまった。

“僕”が産まれる日。すなわち“僕”の誕生日。

“私”の体が“僕”に吸収されてしまったのだ。

スパ君によると同じ時間軸に同一の魂が存在すると言う矛盾を世界が修正しようとした結果がこれだそうだ。

世界からすると「あれ？同一の人間が同じ時間軸に存在してる？変だなあ。まあいいや、体を一まとめにしちゃえば！」といったところだろう。

お茶目な世界である。

でも、これなら確実に悪魔の襲来事件をどうにかできるということになるのでは？

と聞くと“出来る”とのこと。

出来なかったんじゃないの？

色々頭がこんがらがってきた。

タイムワープ系はこうした矛盾が七面倒だから困る。

今は懐かしい金髪幼女神様の話を思い出してみると「一度存在した時間軸の歴史は変えられない」。と言うのは今のすでに700年生きた“私”のことであり、“僕”として産まれた今の時代の僕と融合した“融合後の私”とは違う。という屁理屈みたいなことなのだろう。

確かに“私”では無理だろう。
吸収されてしまうのだから。

と、小難しいことを言ってみたものの。

つまり体が若返って、歴史を変える機会を得たと思って置けばいいのである。

うん。

麻帆良でキティと夜の遊びに励んでいたのだが。

私がいきなり消えたことに驚き、泣くほど心配したキティがネカネ姉さんの家にイキナリ入り込み、まだ赤子の僕を抱きしめたり・・・というハプニングがあったというのは余談。

目が赤く腫れていたのはツツコまないのがエチケット。多分。

とりあえず年齢詐称薬を使う手間が省けたのでラッキーとでも思っておこう。

それ以来、かなり強引にキティが私を引き取る形で現在はウェールズでキティとのんびり過ごしている。

ただ、人間だったころの“僕”と融合したため、身体能力が弱体化してしまっただようである。

鍛えなおすのが面倒という弊害が。大した弊害じゃないけどね。
ゆったりと鍛えなおす予定である。

少し鬱。体術のほうはセンスが無いんだよね。100年ほどかけて
フェイとんに追いつくくらいのレベルだし。そりゃ一生懸命やれば
多少は変わると思うけど。

そんな日々を過ごしつつ、5歳になった私。

ここからは本当の意味での未来を歩むことになるーとそれっぽく
決めて言った所で。

ネカネ姉さんとキティは近所のお友達という感じ。

いや、キティとしては「馴れ馴れしいのだあの女は！！友達なんか
ではない！！」と少し頬を赤めて言っているところを見ると、友達
なんだろう。

変なところでツンデレだ。

ちなみに五歳になるちよつと前くらいに起こるはずだった悪魔イベ
ントはもちろん叩き潰させてもらった。

前もって張っていた結界魔法を発動させて召喚された瞬間に即、滅
す。

召喚者はキティがくびり殺したのは言うまでも無い。

「姉様を狙うとはゴミムシどもが・・・調子に乗るにもほどがあつ
たな。」

と怒り心頭の様子で狙うように言った上層部の方も突き止めて殺し
ていた。

ちよつと甚振^{いたぶ}りすぎて暴れすぎたらしく、結果的に賞金額が上がつ
たのは仕方が無い。

せっかく紛争地帯での人助けで世間的に良く見られていたのに。キ
ティ曰く血を浴びないように“遊ぶ”のが大変だったらしい。

全て台無しである。

そこまでしなくても良かったよ？

と言うと、「世間よりも・・・ね、姉様から良く見られるほうが万倍幸せです。」と嬉しいことを言ってくれる。

これまた恥ずかしいのか、もじもじしながら人差し指を付き合わせて言うもんだから可愛くて可愛くて。

殺されるかと思いました。萌え的な意味で。

「・・・もぐもぐ。さて、今日は何をしようかな。」

「今日は私とデートの約束ですよ？」

「そうだったっけ？」

ていうかほぼ毎日してない？・・・んぐ、もぐもぐ。」

「い、イヤですか？」

「まさか。天地がひっくり返ってもありえないわ。

安心して。ただ少し刺激がねえ・・・ここって田舎だから特に何も無いし。」

むしろせっかくの一緒の時間がもったいない？というか。

どうせならもつとラブラブできるような施設で・・・あ、そうか。

今日は遊園地で観覧車としゃれ込みましょうか？

あ、でも時差で日本は今夜かな？遊園地やってないわね。多分。」

「観覧車？ですか。」

「そういえばまだ行ったこと無かったわよね？」

そうね・・・一言で言うならカップルの聖地？私たちはカップルと
いうか夫婦だけど。ムードを作ることにかけては一番でゆえに王道
な場所なの。・・・もぐもぐ。」

サンデーを読みつつチップスターを食べながら言う私。

どちらも日本の麻帆良にいるスパ君に送ってもらったものだ。

残念ながらウエールズの片田舎たるここにはサンデーはもちろん、
マガジンもチャンピオンもジャンプも置いてなかった。

本当に残念。

ほほう・・・桂馬も女装したか。結編の時は結編の時でよかったけどやはり男の娘たるもの女装しなくては。桂馬も男の娘だと思うんだよね。

そしてエルシイがんばった。

「さつきから何を言ってるんですか？姉様。」

「うん？」

ああ、神のみが良いとこなの。・・・とりあえずデートに行きましようか。

今日は森で散歩？それとも湖でボート？」

サンデーを閉じて、立ち上がる。

「どちらも・・・じゃダメですか？」

「んじゃどっちも行こうか。」

今日はどんな服着ていくの？」

「・・・。今聞くのはどうなんですか？」

「ふふふ、それもそうね。それじゃ、家の少し先に行ったところで待ち合わせね？」

「はい、わかりました。」

同じ家にいるんだから、一緒にいけ？

誰だ、そんなデリカシーの無いことを言うヤツは。

そんなんじゃモ・テ・な・い・Z O !

チップスターをパリパリ食べつつ、待ち合わせポイントへ向かう。

それもどうなんだ？と思うかもしれないけどしょうがないでしょ！？
ほうっっておくとシケってまづくなるんだからっ！！

しばらく待っていると、キティではない人が来た。

「どうしたの？ステラ。」

「どうしたの？じゃ無いでしょ。」

「・・・またあの悪者と一緒にいるの？」

「だからキティは悪者じゃないよ。」

「でも、賞金首だよ？」

「でもいいの。」

「うゝ、うゝ、そんなのわかんないよ！！」

「そんなこと言われても・・・」

「バカッ！

アホッ！！

しんじゃえっ！！」

「そんな子供みたいなこと・・・って子供か。」

「子供扱いしないでっ！！」

さて、目の前にいる少女だがこの娘は幼馴染というヤツでステラと言う、肩ほどの茶髪にクリっとしたお目目が可愛い、将来は引く手数多であろう美少女である。

元々はアーニヤのお母さん共々石化されるはずの娘だった。もちろん歴史は変わってるため、そんなことは無いのだが。

幼馴染のためかやけに距離感が近いのはともかく、キティに対しての悪感情は頂けない。

自分の妻を悪く言われて良い気分になる夫はいない。

とはいえ、相手は分別の付かない子供。

五歳児である。ここで怒るのは理不尽に過ぎるというものだ。

そんな子供に悪にも正義にも色々あるとか、元老議員のドロドロした話をしてキティの弁護をするわけにもいかず。

キティ自身は気にしてないようだが、私としては好ましい人間二人

がいがみ合っていると言う構図は好ましくない。
どうにかできればと思うのだが、キティとしては意外にもわりと優しく寛大な対応で応対していた。60年も生きれば幼児の1人や2人は気にしなくても当然だと思うがどうもそれとは違うつぽい。少し違和感を感じるのだが、それが何なのかはいまいち良く分からない。

と、考え事をしているとステラはまだ何か話しかけていたらしく、結果的に無視した私が睨まれるという状況に。
あほおっ！！と言って立ち去っていった。

子供とはかくも元気なものか。
いや、私も子供なんだけど。

「おまたせしました。姉様。」

「あ、うん。」

今日も可愛いよ、キティ。

・・・でも、キティが可愛くない日なんて無いわね。良く考えたら。

「ね、姉様。」

少し頬を染めてこちらを熱っぽく見つめてくるキティ。
身長が低いので見下ろされる形になるのが新鮮。

「どうかしましたか？」

「ん？ああ。」

ステラとちよつと話してね。」

「待ち合わせ早々に他の女の子の話ですか。」

「あ、いや、・・・ごめんなさい。」

「冗談ですよ。」

幼児に嫉妬するほど子供ではありませんし・・・あの娘が私に絡む

のは悪者うんぬんよりも姉様を私に取られたのが気に食わないので
しょうね。」

「・・・そ、その発想は無かった。」

「・・・おバカですね、姉さまはやっぱり。」

なるほど。

やきもちから彼女はキティに絡んでいた。と？

「そうなる彼女は私を好きだつてことになるよね？」

「そうなりますね。」

「不思議ね。・・・こんな女の子然とした男を好きになるなんて。」

「姉様はカッコいい男の娘ですから。中身の魅力が女の子の子を寄せ付
けるのかもしれないです。」

「あら？」

分かつてるじゃない。さすが私の伴侶。」

「・・・冗談ですよ？」

「・・・酷いじゃない。私の伴侶。」

「真面目な話、何かきっかけでもあったのでしょうか。心当たりは？」

「犬に襲われていたのを助けた・・・くらい？」

あとは結構一緒にいるとか、虐めから守ったとか・・・

「十分ですね。」

「これくらいで？」

「小さな時はそのくらいでも十分でしょう？」

「まあ・・・そうかもね。」

なんにせよその気持ちにはこたえることは出来ないんだけど。

「それじゃ、デートを開始です。」

「そうだね。・・・子供の体であることが残念だけど。」

「・・・私もまあ、そうです。」

「えっちなキティが見れないってのは少し残念。

腰砕けで頬をほんのりと朱に染めたキティの艶やかさときたらこれまた――」

「う、うるさいっ!!」

「ごはあっ!？」

ちよつとっ!？

殴るのではないんじゃないですか!？

人間にもどった今となつては魔族化してないんだから、下手したら死ぬよっ!？

「わ、わかつてます!

だから肋骨数本程度に抑えました!!」

「それでも十分、痛いわよ。」

今日も平和な日常の二コマであつた。

17つ目 近況報告（後書き）

このまま二度目の幼少期もといメルディアナ魔法学校での話を書いていくか、時間を飛ばして原作に行くか。

悩み中。幼少期編をやるにしても短いと思います。Maybe.

アリスの立場を生徒か副担任かでも悩み中。

それと新しくオリジナルを勢いで書いてみました。

良ければよしなに。

18 目 ほのぼのと殺伐（前書き）

うつむ・・・ネタが思い浮かばない。

次回は魔法世界へ・・・となるかもしれない。

18 目 ほのぼのと殺伐

さて、あれから一年経ち。

メルディアナ魔法学校へと入学する年となり、トラウマ事件も失せた今となつてはネギもすこやかに育つていった。

そんなある日のこと。

修行、子供の時。と言えば。

昔、断念した修行法があつた。

漫画ドラゴンボールで、主人公孫悟空がナメック星に向かう宇宙船の内部でやつていた修行法。

自分に対して必殺技かめはめはを放つて、それを撃墜するという修行法。

それを今やつてみようという気になった。

昔やったときはまるでダメな結果になったが今の力があればそれも容易い、はず。

「今回は私の力も上がつてるしね。これくらいの魔法がいいかな？
萌える天空！！あ、間違えた。燃える天空を自分に向けて撃つ！！」

というわけで詠唱を開始する。わざわざ詠唱するのはたまにするのもいいかなあと思つただけ。

「リステル・マステル・マギステル！

契約に従い我に従え

炎の霸王！！

来たれ浄化の炎

燃え盛る大剣！！

ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄
罪ありし者を死の塵に！！」

魔力のありつたけを込める。修行にならないからね。

ウーラニア フロゴシス
『燃える天空！！』

空に向かって撃ち放ち、転移で燃える天空の軌道に割り込む。

「さあ、どんときなさいっ！！

・・・あ、これまずくない？」

眼前に迫る燃える天空。それはちよつとやそつとで防御できるなんというチャチなものではない。

当たり前であるが防御力と攻撃力が拮抗する。なんてことは無いのだ。

ゲームでもそうだし、現実でもそうだ。

攻撃と防御。得意な方というのは分かれるのが概ねの人間だろう。

全く同じくらいという人は珍しいのではないだろうか？

そしてそんな私は攻撃の方が俄然得意である。

となるとどうなるかお分かりだろうか？

自身の防御力を遥かに超える莫大な攻撃力が目の前に。

うん。死ねる。

「ひいああああああああああっ！！げふうっ！？」

燃え盛り、地面に墜落する私。

くそつ。やはりサイヤ人の真似は出来ないのかっ！！

いや、防御力が攻撃力よりも勝つていれば可能なのだが・・・そう

考えるとこの特訓は防御力を鍛える特訓なのかも？と今更ながらに気づく私。

体の半分以上を炭化させながら、そんなことによりやく気づけた私であつた。

ぶつちやけ、金髪幼女神からの真祖にせまる再生力を貰つてなかったら人間に戻つた私はこれで死んでいた。

サイヤ人の真似事が死因とか。ははは、いや、笑えないわね。

家に帰るとキティから呆れた目で見られたのはご愛嬌。

メルディア魔法学校。

ここに通うとまあ見えてくる見えてくる。

私を疎ましそうに見てくる大人が多いこと多いこと。

しかし、オスティア出身の人でもいるのだろうか？

私を好意的に見てくれる人が意外と多い。

アリカちゃんは災厄の女王と言うことで世間一般からはあまり良く思われてはいない。

そのためそのツケが私にも回ってきているのである。世界的な犯罪者である王女と英雄の子供というのでそういった人たちはアクシヨンこそ起こさないものの、私を汚らわしい・・・貴族で言うところの妾腹の子を見るような目で見てくる。

唯一好感を持っている人たちは真実を知っているか、メディアに踊らされないだけの信頼を持っている、すなわちオスティア出身で実際にアリカ王女を見た人くらいであろう。

村ならばナギを慕って集まつた人が多いため、そのナギの子供ということで滅多にそんな視線にはさらされなかったのだが・・・学校、

通わなければ良かったかもしれない。

別にそうした有象無象の視線が気になると言うわけではなく、キティがちょっと殺してくる。とおつかいに行く気軽さで殺しに行きそうになるのを止めるのが結構疲れるのだ。

さすがにそれはまずいだろう。倫理的な意味ではなく証拠隠滅が面倒という意味で。

キティの犯罪歴が増えると困る。いずれクルト君が上り詰めたときあたりにキティの賞金首を取り下げてもらうのだからして。難易度が上がってしまうのではないか。

ちなみにネギへの視線はだれかれと言わずに好意的。英雄と瓜二つだモノね。

中には私に直接「オマエは本当に英雄の子か？」的なことを回りくどく聞いてくる輩も居たりして、辟易とする毎日である。

ちなみにその方には軽くおしおきをさせてもらった。もちろんばれないように。

一生水虫が治らない呪いとか無い？と麻帆良で留守番をしているスパ君に電話で聞いてみると、さすが高性能な力カシ。知っていたのでさっそく試してみた。

ちなみにであるが水虫の菌は爪や股間にも寄生するそうなので、そっちの方にも呪いをかけてやった。

下手にぼっこぼっこにしちゃうよりも辛いおしおきであろう。甘んじて受けるがいい。くっくくく。

それからその教師は授業中に股間や足や手をぼりぼり掻く不潔な教師として学校の噂になったという。

その後は知りません。

ちなみにこの呪いによる水虫は結構な確立で“伝染”する。

伝染の場合は呪いではなく普通の水虫よりも少し弱い水虫で
すぐに治るが、その分伝染し易いという設定で呪いをかけた。

彼がしばらくしてクビになったのは言わずもがな。彼のその後は誰
も知らない。

普通は触れてもそんなに簡単に移らないものらしいけどね。

それが搔いた手で触る、もしくは彼が触ったものを他の誰かが触る
と伝染。というわけで一時期水虫が学校で流行ったりもした。

テヘ、やりすぎちゃった。

正直、すまんかったと思ってます。

ちなみにキティや私、ネギ、ステラ、アーニヤは私が体に纏うタイ
プの除菌魔法を開発していたので伝染はしてません。
才能の無駄遣いとは言わないでね？

そんなある日のこと。

日本のように運動会があるようで、その運動会の日。

「今日は2人とも頑張つてね？
応援してるから。」

ネカネねーが私とネギを送り出す。

「大丈夫、お姉ちゃん！

僕頑張つてくるよ！！」

「私も頑張るね。」

子供っぽく声のトーンを多少上げて応対。

ちなみにだけど、私は基本的に子供っぽく振舞ってる。

割と自然と出来るのは歳かしらね？肉体的に。

「姉さ・・・じゃなかった。アリスはともかく坊やは勝て。アリスの弟の癖に負けたら私がじきじきに鍛えなおしてやる。」

「エヴァちゃん。応援をするにしてもそついう言い方だと、ネギが怯えちゃうわよ?」

「ふん、ネカネは甘いのだ。」

キティもちろん応援に来てる。

アリスはともかくって言い方だとなんか私だけエコヒイキされてるみたいだね。

ほら、ネギはなんでアリスだけ?と少し不満そうな顔してる。

小さな頃って兄弟間は特に臍に敏感だからね。

ずるいが口癖になりがちではないだろうか?

「ず、ずるいよ!

どうしてアリスは良いの!?

いっつもそうだよ!! エヴァンジェリンさんはアリスばかり臍負して・・・」

「はつ。私に臍負して欲しければ良い男になるんだな。

まあ、なったとしても姉様・・・じゃなかった。アリス以外に臍負するつもりは無いが。」

「結局意味がないじゃないかっ!!」

「そつ、がなるな。坊や。もし一位を取れたなら日本のお菓子を分けてやるからな。」

「え、ほ、ほんとっ!??」

「ああ、本当だ。」

と言って、微笑みながらネギの頭をなでるキティを見るとやはり子供が欲しいなと思えてくる。

さて、どうしようか。理論的には可能なのだが私の・・・液が今は

手に入らないんだよね。

ちなみに人造人間の材料は血液、唾液、精液、膣液などで作る。エロいとか言わないでね。し、仕方ないじゃないっ！！そういうものなんだからっ！！

要は私がそういうことが出来るようになって、キティの・・・あ、あれに出して色々混ざり合ったものをそのまま使えば良いということになる。

ちなみにこれらの材料のどれか一つではなく、全て使ったほうがより魂的にも血筋的にも近い人造人間が仕上がり易いことが分かっている。

もちろん6歳ボディでは不可能なことであるが。

「アリス、僕、アリスにも負けないからねっ！！」

「ん？ああ、もちろん私だって負けるつもりはないわよ？」

かといって勝つつもりもないけどね。

適当に2、3位くらいを取れば十分。

あまり本気を出したら大人げが無さ過ぎる。

もちろん魔法学校の運動会なので魔法ありきである。

肉体的には年相応でも、魔力や気が使える魔法学校の運動会なら教師だろうと私には勝てないだろうし。

というか、お菓子でずいぶんやる気を出すよねえ。

子供らしくて可愛い。

いや、子供か。

日本のお菓子が美味しいのもあるんだろうけどね。

こっちのお菓子は不味いし。

「おっと時間ね。」

ネギ、行くわよ。いつてきます。」

「あ、うん。ネカネ姉ちゃん。いつてくるね。」

「いつてらっしゃい。」

「いつてらっしゃい、姉さ・・・アリス。」

二人に見送られて運動会に行くと、ステラとアーニヤがやってくる。

「ネギ、負けたら承知しないんだからね！」

とアーニヤ。

「お、応援してあげるから勝ちなさいよ!!」

とステラ。

この2人はまあ似ている。

ツンデレ気味という意味で。

ちよっと一位を取ろうかなという気になった私は悪くないと思うわ。

結局のところ二位で落ち着き、一位はネギに譲った。

ネギと一緒に走らなければ一位のつもりではあったけどね。

キティにタオルで汗を拭いてもらいながら、私はポカ리를飲む。

アクエリアスかポカリかで言えば、私はポカリ派なのだ。

「姉様、格好よかったです。」

「姉様って言っちゃダメじゃない。」

「あう・・・」

「ふふふ。」

2人きりのときはともかく明らかな年上であり、悪の魔法使いたる

キティが私の事を姉様と呼ぶのはあまり好ましくない。
いつそのこと開き直っても構わないとは思っけどね。

平和な日々を満喫する私であった。
そんなある日のこと。

「それで？どうして襲ってきたのかしら？」

目の前にはズタボロの雑巾と化した学校職員。

最近私に対する視線が嫌が応にもうつとうしくなってきたのは知っていたが、ここまで直接的な手を取ってくるとは思ってもよらなんだ。
いや、多少は予想できてたけれども。

回想すると・・・いや、回想するまでも無いんだけどね。

災厄の子は死ぬべきだ！とか英雄の子は1人だけでよいとか叫びながら襲い掛かってきたのである。

もちろん返り討ちである。

弱体化したとは言え、目の前のだ三品にやられるほど弱くは無い。

あれ？理由も聞くまでも無くない？

勝手に1人で暴走したといったところかしら？

とはいえ困ったわね。力を見せるつもりは無かったのだけど。

うつむ、どうしよう？

記憶をイジって捨てておけばいいか？それとも殺しちゃう？人気の無いところだから良かったものの、万が一にでも人の目のあるところで彼みたいな人間に暴走されると困っちゃうな。

私は現在、魔法の才能が無い普通の少女を装っている。

彼等本国の人間としては処刑にしたはずの女王の血縁者が生きてい

ることはよろしくない。

なおかつその血縁者が英雄の血も受け継いでいるとなれば尚のこと世に出る可能性がある。英雄の膨大な魔力を備えてる可能性が高いからだ。

そうなれば必然的に有名になる可能性が大きくなり、その分魔法世界人に私の姿、名前が広まる。となれば後は言わずもがな。それと同じような理由でネギも狙われたわけだしね。

まあネギの場合は容姿がナギよりなので少し優先順位が低いけれども。

とにかく。

力量がばれるような行いは避けるべき。

かといって全くのオチこぼれは逆に注目を引くだろうからと適度の手を抜く程度に収めているのだが・・・その計画を破綻させてくれる可能性がここに出てきた。

いつそのこと悪魔事件を起こすだけ起こして私は死んだことにしちゃえば良かったかもしれない。

少々考えなしだったかしらね？

「とりあえず、あなたは死んでおいてね。」

「ひいつ！？た、助けがひゅっ！？」

サギタマガリで頭を貫く。

森に捨てておけば獣が食べて証拠も残りづらくなるだろう。転移で飛ばす。服は剥いで、持ち物も焼却処分である。

悪いけど目の前の彼を殺さないでいる理由は無い。

むしろ一度あったことは二度あるとも言っし、記憶をイジるだけではまた同じことが起こりかねない。

人格を変えると回りの人間に間違いなくばれるだろうし、一番手っ取り早いのはやはり殺すということである。

まあ正当防衛だしアチラが恨む筋合いはあるまい。

まあ私の力を見せなければ良いというだけの話。
人目の付くところを行くときはキティに随伴してもらえればそれで
解決する問題だし、それで良しとしましょうか。

時々そんなちよつと物騒な日々も過ごしつつ。

19 目 DOGEZA (前書き)

なぜこんな話になったんだろうか？

最近は新しく作ったオリジナルとかでこっちを無視して、久々の投稿だから！？ww

なににせよ後半は意図してやったものじゃないんじゃあ。

19 目 DOGEZA

ぐっもーにーんっ！

唐突でどうかと思うけど、現在私たちはヘラス帝国のテオドラ陛下もといテオちんのところに遊びに来ています。

遊びに、というよりはお仕事の依頼で来たんだけどね。

「姉様、ちよろちよろされると困ります。」

「まあまあ、そういわず。」

戦争が終わって、約16年近く。

戦争の傷跡は全て潰え、というと語弊があるが戦争で受けた傷は着実に癒えて殆ど見られなくなっていた。

なおかつ戦争で各国が躍起になっていた軍用技術の発展が、民間にも十二分に還元され始めたようで、戦争前と後では町並みが結構変わっていた。

このヘラス帝国も例外ではない。

それが新鮮で、飲食店のメニューや服飾屋など軍とは一軒無関係なものから、魔法使い仕様の遊園地なども大分様変わりしているようである。

これで落ち着いているというのが土台無理な話だろう。

昔も今も人々の生活様式の変わりを目で見て、感じて、ウキウキワクワクするのはもはや趣味と言ってもいいかもしれない。

「は、恥ずかしいなあもう！」

「恥ずかしがつてるキティも可愛いよー！」

「っ！ばかなこと言ってるじゃないで、早くテオドラのところに行きますよー！ー！」

別に恥ずかしがる必要なんて無いと思うけどな。傍から見たら、遠路はるばる子供だけで旅行してきた姉妹が、始めて見る街に目を奪われていると言う微笑ましい光景でしかないはずなのに。

ちなみに特別年齢詐称薬は使ってない。

私は五歳児然とした姿で、黒髪に。その程度である。

「田舎者丸出しなのが恥ずかしいんです!!」

「別に田舎者なんだから良いと思うのだけど・・・まあいいわ。

あ、見て見て!! キティ!!
ナギ団子だつて!! 勝手に名前を借りて商売とか、訴えられないのかしらね!?

その厚顔無恥さに痺れる憧れるう。というわけでもないけど!!」

「姉様、年相応の振る舞いですけど、私からしたら違和感が・・・どうにかなりませんか?」

「どうにかって・・・言われても・・・良いよ。そこまで言うなら自重するから。」

「あ、いえ、違和感があるだけで、恥ずかしがってる私をからかうための演技とかじゃなかったなら別に。・・・可愛いですし。」

「わ、私をなんだと思ってるのかな?」

からかうためだけに演技とか。

そんな性悪だと思われてるなんて。

そんなこと。。。割とするかもしれない。というかしたことがあったね。うん。

「唯一無二の愛しい人・・・です。」

「はうはっ!」

ふ、不意打ちドストレートが私のハートにすつとらいくっ!!

単なる冗談の掛け合いの中に本気を混ぜ込んでくる。

なおかつ顔を真っ赤にしながらそんなことをのたまうキティっ!!
あはあっ!!?

か、かわ、かわいいっ!!

「ま、まったく・・・私を幸福死させる気かしら?
可愛さが天元突破。マジ自重。」

「か、可愛くないもん!!」
「げはあっ!!」

も、もん・・・だとっ!?
普段ならともかく、すでにグロッキー状態のこの私にここでの「もん」は・・・死あるのみ。

「ふっ、計画通り。」

「なっ!!?

き、キティ、お、恐ろしい子。

ここまでを狙っていたのね!?

顔を真っ赤にしつつ、ニヤリとしたキティ。

いつのまにこんな高等テクニクを!!

まあ、計画通りといいつつも顔が真っ赤なところもまたエクセレン
ツなんだけど!!

「こ、こほん。とにかく、早く行きましょう。

観光なら後にしないと・・・約束の時間を過ぎてしまいますよ。」

「はいはい。

口うるさい妻だわ。」

「だ、だらしなない夫を引っ張るのも妻の役目です。」

「ふふ、そうね。」

そのままヘラス帝国の首都、ヘラスを歩いているとむむむ！
なにやら人ごみが！！
喧嘩のようである。

どれどれ、と野次馬根性丸出しで覗いて見るとそこには――テオ
ちんがいらっしやった。
なんでやねん。

「姉様・・・話しかけますか？」

「いや、スルーしましょう。知り合いだと思われたくない。」

どうやらお店にクレームをつけているようである。

それを見て他の人たちが何ぞや？とばかりにザワザワ。

どうも、飲食店に文句を言っているようで食事に虫が入っていたと
か。

まあそれはクレームを付けるだろうが、もう少しやり方と言つのを
学んで欲しい。

本来ならこんなに野次馬を集めることは無い。

彼女は軽く変装をしているのでヘラス帝国王女だということは分から
ないし、護衛らしき人もいない。

特別目立つ要素はないのである。

強いて言えば、変装して尚霞まないその可愛さであろう。いや、キ
ティには劣るが。それだつて野次馬をつくるほどの理由には無い。

さて、なぜそんな「まあ目立つだろうけど普通にクレームを言うだ
けのお客さん」的な彼女がここまで野次馬を集めてしまったのか？
そう。なぜに店員さん約10名を往来で土下座させる必要があるの
だろうか。

かわいそうに。

まさしく公開処刑である。

まあ虫の混入を許したということでは些か行き過ぎでも、妥当な結果とも言えるかもしれないが。

と、言うよりだ。

どうも彼らの話を聞いていると途中でテオちんだということがばれたらしく、彼女の怒りを静めてもらいたいがために率先して土下座をしているようだ。そりゃそうだろう。王女の不評を買ったとなれば———というか王女に差し出した料理に飲食店にあるまじきミスをしてしまったとなればこの店は最早潰れるしかない。

下手をすれば打ち首獄門———ということもありえる。いや、さすがに無いだろうけど。

帰ろうとするテオちゃんを引き止めて、わざわざ土下座をして誠心誠意謝っている。と状況を把握したところで。

テオちゃんも天下の往来で土下座させるとなると恥ずかしいのか、顔を上げておくれ！と顔を真っ赤にして叫んでいるのだが、いかにせん店員達はそんな！とか恐れ多い！！とかで聞く耳を持たない。

「とりあえず、先に王宮の方へ行きましょうか。」

キティが嘆息してそう提案する。

「そうね。キティの言うとおりだね。」

王宮のほうで待たせてもらいましょう。・・・めんどろそうだし。」

とスルーするよ的なことを言ってしまったことがフラグになったのか。

テオちゃんがオロオロするがこちらに視線が合わさる。

テオちゃんは10年来の親友に会ったときのような良い笑顔を浮かべ

てこちらにくる。

「エヴァッ！！来ておったのか！！

色々と積もる話もあるのじゃがとりあえず、助けてくれ！！」

「エヴァ？

誰です？

それ？私はフレデリカ・フォラッセンと言っしがない貴族ですよ。
私は忙しいのでこれにて。」

「だ、誰じゃ！？それは！！露骨に避けるのうつ！？」

とぼけたキティに突っ込むテオちゃん。

私がそんなテオちゃんに説明してあげた。

「説明しよう。

フレデリカ・フォラッセンとは目の前の一見、神が作ったと思われるほどの美と可愛さが内包された、他の追隨を許さない可憐な少女であるが、それは世を忍ぶ仮の名。

その実体はスライム的な何かである！！

触手的なプレイも出来るよ！！」

「ひ、卑猥じゃ！！

卑猥な生き物がここにおる！？」

「ね、姉様っ！！」

「ごはぶっ！？」

顔を赤くしたキティに殴られた。
痛いです。

というか触手プレイも良いかも。

キティをーーぐへへへ。がはぶっ！？

邪な波動を感じたのか、キティがまたもや殴りかかってきた。ごめんなさい。冗談です。4割8分くらい。

あ、今ふとビビツと来たのだが、ゴーストスイーパー的な意味での横島忠夫の横島の由来は邪よこしまから来てるのかもしれない。

だからこそあんなに助平なのか、横島君は！！

キティの割かし本気パンチで死に掛けてる私を一瞥して、キティは話を続ける。

「とりあえず、私に土下座させて悦に入る変態の知り合いはおらん。」

「別に妾がさせてるわけではないんじゃっ！！
こやつらが勝手にーひいつ！？」

いつの間にかテオくんが移動していたことに気づいた店員10名は頭を下げて土下座した姿勢のままこちらにサササツと寄って来た。ついとばかりに可愛らしい悲鳴をあげるテオくん。

なんかすっごいシユールな画だ。

土下座したままこちらに走り寄って？きたので普通にキモイ。

私も不覚ながら悲鳴をあげかけた。

「い、今のはDOGENZA歩方・・・か。こいつら・・・まさか。」

と戦慄した表情をとってるキティ。

バトル漫画で言うところの身のこなしを見て「こやつら・・・侮れん！」的な空気を出しているキティには申し訳ないのだが、目の前のアレを見てとなるとむしろ滑稽にうつる。

「ね、姉様、もしかしてですが・・・こいつらDOGENZA忍法を使う甲賀の忍かもしれません。」

「くふっ！」

こっそり耳打ちをしてくるキティ。

噴出しかけた私は悪くないと思う。

なんだよ、DOGEZA忍法って。なんだよ、DOGEZAを使う甲賀の忍って。

そんな忍見たくないよ。というかただただ嘲笑物だよ！！

キティが至極真面目にそんなことを言ってるのもまた笑いを加速させる。

NARUTOの世界にだっていないよ！！

というか、出オチ過ぎる！！

どうやって戦うんだよ！

「彼等はその見事なまでの土下座技術・・・先ほど見せたDOGEZA歩方を始めとして、ジャンピングDOGEZA、スライディングDOGEZA、バク転DOGEZA、回転昇竜DOGEZA、爆散DOGEZA、ガチムチDOGEZAと多々の技で相手を居たたまれなくするというにおいては一流の技術を持つらしいです。」

むしろー見てみたんだけど。

なんだよ、爆散DOGEZAって。

死んで詫びますってこと？でも爆散しながらDOGEZAって無理じゃないの？

それにガチムチDOGEZAってなんなの！！

あれ？

あれなの？

DOGEZAと同時に服がはじけ飛ぶとか？

「もともとは東方の武家の一つにあったDOGEZA流が広まり、現代では10ほどの流派に派生し、^{アクション}発展しているようです。

中には土下座の際の頭を下げる動作を極めて、それを攻撃に転化したツワモノもいるとか。達人・・・いえ、DOGEZA流では達人ではなく職人と言うそうですからーDOGEZA職人によって

行われるその一撃は生身でありながら、竜すらを一撃で屠るそうです。」

生身って気や魔力の強化無し？

何？その超ガチムチ野郎は。

ラカン君だって出来ないよ？多分。

「なぜ、そんなことを知ってるのよ。」

「・・・昔、珍妙なボケ老人から鉄扇術を習った際に酒の肴として聞かせて貰った話です。ついでに軽く齧ってたらしく、DOGENZA歩方も見せてもらいました。・・・そのときはテオドラや今の姉様と同じようなリアクションでしたよ。私も。普通にどん引きでした。」

「なるほど・・・ね。」

「・・・その時は半信半疑だったのですが・・・信じざるを得ないようです。姉様も分かるでしょう？」

「・・・分かってしまうわね。残念ながら。」

達人と言っただけで武術たる物が武術であるかどうか分かる。

もちろん、現在の私は貧弱極まりないのだが、今までの経験——
もとい記憶が消えるわけでもなし。

とりあえず目利きだけならば普通の達人と遜色はない。

その私の眼力が囁いているのである。

「これは完成された実践的な武術」だと。

正直、今の身のこなしを見るに瞬動レベルでのDOGENZA歩方とやらが可能なはずなのである。

・・・すっごく見てみたいのだが。

「なんというか、知的好奇心が沸いてきて止まらないの。負けた気がするのはなぜかしらね。」

「・・・私も同感です。」

そんな話をしてる間、テオちゃんはただただオロオロしてDOG EZAをしてる店員達に申し訳なさそうにしていた。

ちなみに、であるが。

テオちゃんが虫が入っていると勘違いした料理だが、もともとそういう料理だと言う。盛られた料理の天辺に油でカリッと上げたチャグロオオサソリという種類を飾り付けるーーと言っても食べられる上に美味しいらしいがーーいわば彼等の一族で伝わる伝統的な料理であり、むしろ悪いのはテオちゃんだったということである。

が、ヘラスには食虫文化が殆ど定着しておらず、食虫と言うことについては日本人並みの忌避感を持つために致し方ないと言える。

むしろそんなヘラスで昆虫料理を出した彼らの下調べ不足と言える。とりあえず、困っているテオちゃんを下げて、彼らを宥め、老婆心でたらこんどは連合国で販売してはどうか？と提案したところ、彼等には私たちにお礼を言っつてそのまま連合国へ向かった。

連合国は旧世界の各国から色々な人種が集まってくるので昆虫料理などはむしろポピュラーなほうなのである。

ちなみにテオちゃんは自分が悪い（彼らも悪いと言えば悪いのだが）ということで改めてその料理を食べたところ、凄く美味しかったとのこと。

連合国へ送ったのは失敗じゃな。と苦笑していた。

ちなみにお礼だと言うことで私たちもご相伴に預かったところ、実に美味しかった。

サソリとか美味でございました。

ちなみに私たちに虫に対する忌避感はない。

自分の体の体積の100分の1があれば良い程度の小動物に何を恐れることがあるというのか、むしろこれからしばらくはサソリがご飯のおかずになるだろう。

連合国へ移動する際に食材などは易く買い取らせてもらったので、その中にはサソリもいる。

1匹だけペットとして買うことにして、残りは食べることに。

ちなみにだが、昆虫食と言うのは栄養価も高いことをご存知だろうか？

概ねの昆虫は丸ごと食べるため、哺乳類で言うところのビタミンなどが豊富な内臓の類も全て摂取できるからである。

なおかつ余分な脂肪などは外骨格に含まれるキチン質が吸収、排出してくれるというのだから優れたもの。

中々優れた食材といえるだろう。

ついでに言えば繁殖サイクルが短いので、食べられる大きさになるまでに時間がかからないと言う生産性の良さもある。

などなど、いつぞやの時にスパ君から教えて貰った豆知識を反芻しつつ。

私たちはテオちんの住むヘラス帝国王宮へ来たのだった。

19 目 DOGEZA (後書き)

関係ないですが、体温が一度落ちると新陳代謝が10%以上落ちるため、脂肪や糖の消費が一度落ちるだけで減るそうです。免疫力も30近く落ちるとか。凄い数値ですよ。

そのため、冷え性の人は太り易いらしいです。

ちなみに癌細胞なども低体温時に活発化するらしいとのこと。

体温を上げるためにはちゃんとした塩分摂取や食事が大事だとか。皆さん、健康には気をつけてください。

20 目 ご主人様にゃん（前書き）

地味に続きを待っていたと言っ感想を頂き、有頂天になつた私^{わたくし}はさ
つそく続きを投稿するのであつた。

20つ目 ご主人様にゃん

「ところで、お主は誰じゃ？」

とテオちゃんの疑問の声。

ここは王宮、テオちゃんの私室である。

「私をご存じない・・・と？」

「むしろ、なぜご存知だと思ったのじゃ!？」

「この魔法少女的な何かを知らないとは、キサマ、もぐりであるな
っ!？」

「むしろ帝国皇女に平気でタメ口なお主の方がもぐりじゃないかの
うっ!？てか、魔法少女って何じゃっ!？」

「お邪魔女ドレミか魔法少女リリカルなのは、魔法少女まどか マ
ギカ。さあどれでしょう!？」

「姉様、プリキュアは入らないのか？」

「プリキュアはー！ーギリギリアウトじゃないかしら。なんという
か、魔法と言うよりは気を使う普通のバトル漫画的な？少女漫画風
ドラゴンボール的な？初代の必殺技のプリキュアマーブルスクリ
ーとか、もう合体したかめはめ波じゃないの。もしくはベジットが
使うファイナルかめはめ波？バトルも、魔法を使うと言うよりは肉
弾戦がままあるし。殴り合えるアレを魔法少女とは私は認めない。」
「そうでしょうか？私としてはあれも魔法少女の範疇に入れても良
いと思いますよ？」

ほら、魔法少女まどか マギカのほむらとか爆弾調合しちゃったり
してますし。まどかなんて普通に弓じゃないですか。弓を引けるよ
うな筋肉の付き方なんてしてないのにー！ーどこのアマゾネスだと
言いたいです。それらに比べたら可愛い方だと思いますよ。」

「それこそ魔法的な何かで補助してるのでしょうか？」

でないと一般人が爆弾調合とか無理でしょうに。例えば知識がろうと材料の入手や器具の入手的な意味で。弓も魔法の弓だから弦を引くのになんか力が必要ないってことじゃないの？」

「だからこそ、プリキュアも魔法的ななかで肉弾戦が出来るんじゃないんですか。」

よって魔法少女の範疇に入れても良いと思います。魔法使いが魔力で肉体を強化するようなものです。」

「えーでもなあ。なんかプリキュアは違うんだよねえ。私の中ではプリキュアってのはー」

「うがああああああああっ！！」

そんなプリキュア物議はどうでもいいんじゃないっ！！

何を話しとるっ！何をっ！！

今はそういう話をしてるのではなくー」

「あれ？」

テオちゃんもプリキュア知ってるの？」

「ん？あ、うむ。」

アリスとエヴァがいつぞやに戦場でその、こすぶれ？と言っんじやったかの？

あれを見て多少興味が沸いたので、旧世界からDVDをレンタルして見たのじゃ。

子供向けながら作画がしっかりしていてー同時期に放送されたらしい某サンデーコミックスのアニメの作画に比べたら、天と地ほどの差があったのう。ソレは純粋なバトル漫画じゃと言っのに・・・あのザ・ルガのしょぼさと来たら・・・妾の方で予算をひねり出して、リメイクし、帝国全国に放映したいほどの哀れさじゃったぞ。」

「て、テオちゃん。そういうことは、あ、あまり言ったらダメだよ、そういうのは。」

「う、うむ、分かってはおるのだが、あれは物申すしかーっってだからそんな話ではなくっ！！ん？」

姉様？」

おや、やっと気づいたか。

気づくの遅いぞお、テオちゃんや。

「その・・・すまんの。

一つお主の名前を聞いても構わんかの？」

「私の名はルルーシュ・ヴィ・ブルタニアン！！

ギアスの名の下に命ずる！！

テオちゃんよ！その尊大口調キヤラをやめたまえっ！！」

「きや、キヤラじゃないわあああっ！！

というか、真面目に答えいっ！！」

「あうっ！」

顔を真っ赤にしたテオちゃんにチョップされた。

意外と図星？

そして、すぐに押し黙ると私をじーっと見て、口を開いた。

「もしかして思うが、妾の記憶に違い無ければエヴァが姉様と呼ぶ人間は1人しか知らぬ。

が、お主はどう見ても・・・あれじゃ。どっかの馬鹿たちの子供——にしか見えぬ。

魔力の質やその分かれている特徴的な眉毛。黒髪は・・・魔法で染めてるようじゃのう。

というかそもそも、今回呼んだのはアリス・“マクダウエル”とエヴァンジェリンのみ。

はて・・・これはどういふことかのう？

お主は——アリス・“スプリングフィールド”で間違いない・・・と考えて良いのか？」

何か、間違っていて欲しいと言う感じの意志が見て取れるセリフである。

「間違いないよ？」

「・・・はあ。あれじゃ、とりあえずそこからどついったことなのか聞いてよいか？」

「説明長いよ？」

「かくかくしかじかで済ませておくれ。」

「かくかくしかじか。」

「なるほど。そういうことか。って分かるかつ！！ど阿呆！！」

「て、テオちゃんが言ったのにっ！？」

「マジでやるとは思ったらんかったわっ！！冗談に決まっとうっ！！？」

「もういいよ、意地でもそれで済ませるから！

かくかくしかじか！！」

「だから通じんというにつ！！——って通じたっ！？」

テオちゃんは一瞬、顔を顰めたあとに、得心の得た顔をした。
ふっ！！

実は。

こんなこともあるのかとっ！！

スパ君から“かくかくしかじか”の言葉のみで相手に対して自身の意図した記憶を見せることの出来る魔法を教えてもらっていたのである！！

「なんという無駄な才能。なんというご都合主義か。」

「誉め言葉として受け取っておくよ。」

「・・・アホっばいですね。2人とも。」

さてはて。

そんなことはさておき。

テオちゃんから話を聞くと、テオちゃんの頼みとは些か面倒なことだった。

簡潔に結論から述べるならば、王宮に勤める騎士の教育をして欲しい。とのこと。

どうも先の戦争で使える人間のほとんどは死に果ててしまったらしく、現在では下の者に教育できるほどの腕利きの人間があまり居ないらしい。

まあそれはそうだろう。

新兵に訓練を行うレベルの兵ともなると大抵は部隊長、もしくは副隊長と言った指揮に関わる役職に付くことが多い。

これは兵の力量や戦法を普段の訓練から理解してる教官の立場に居る彼等だからこそより相応しい役職とも言える。

だがしかし、戦争では腕や足を切るよりも先に頭を潰す。すなわち指揮系統を司る隊長職と言うのはまず真っ先に狙われる役職であり、
・そのために死に易いとも言えた。

非公式なれど中立のアリアドネー騎士団総長や連合の元老院議員リカード、テオちゃんは仲が良いので、戦争にはなりづらくはある。あるにはあるが、なったときの場合を考えるのが国というものであり、
・政治なのである。

はてさて。何が言いたいかと言えば、単純な話、このままだと国の守りの要である兵士が貧弱なのは有事の際に不味いよ！早くなんとかしないと！！でも早くするための良い教官が居ないよ！？

どうしよう！？現存の兵が教官レベルまでに仕上がるのに、どこから教官を引っ張るのとそのまま自力で頑張らせるのではもちろんかかる時間が大幅に違う。後者は万が一に備えるともちろんダメ！となればどこからか暇そうで教官が出来るだけの人間が必要である！！でも、戦争が終わり、物価が高まっている戦争後では安定した職を、ないしは高給職を求めるのが普通。そのために能力のある人

材がブー太郎であるはずも無く！！（今現在は徐々に物価が戦争前に戻り始めてる。が、まだまだ時間はかかる。）

嗚呼、どうしよう！！と思っていた矢先に暇そうで強さでは文句が無い、むしろ英雄達を普通に倒せそうなくらいの力量を持つ真祖の吸血鬼とそれと常に一緒にいる奇人、バタフライ仮面。

彼等に頼もうじゃないか。というわけで、今回の話。白羽の矢が私たちに刺さったと言うわけである。

「どうじゃ？」

アリス、エヴァ。十二分に礼はする。

頼まれてはくれぬかのう？」

「ええ〜でもなあ、私たちのラブラブタイムが減るってことじゃない？」

それに兵士さんも私たちみたいなちびっ子にあってこーだ言われるのは好かないと思うけど？」

「私も姉様の意見に同感だ。・・・らぶらぶはともかく。

そもそも国のごたごたくらい国で解決して見せろ。

仮に戦争が再開されても、それは貴様らがその程度だったと言っただけの話。

弱者は淘汰される。これは自然界はもちろん、人間社会でも言える事だ。」

「じゃからこそ、こうして頼っておるのじゃろう？」

弱者が自身の身を守るのに強者の力を借りてはいかん、というルールはどこにもありはせぬ。さらに言えば、もちろんのことただではない。」

「金ならば要らんぞ？」

私や姉様はすでに土地持ちだ。

マホラが焦土にでも化さん限り、私たちは金では動かん。

そもそも私たちに金解決できる類の物欲は薄いからな。・・・姉様と一緒に居られることが一番の望みなものだから。それを阻害される

ような頼みなど・・・」

後半はボソつと言ったようだけど、私にはちゃんと聞こえてますよ！
ああもう！！

キティっていちいち言うことがいじらしいんだよねっ！！
可愛い過ぎるよっ！！もう！！

「くつくつくつ。もちろんそのようなことは分かっておるわ。
貴様らのラブラブ度には辟易させて貰ったからの。
ゆえに考えた。

いや、正直言えば、アリスが子供になつてるとは思わなかったからのう。少々報酬選びに失敗したかと肝を冷やしたが・・・おう、来たか。こちらへ。」

ノックと同時にメイドさんがやってきた。

関係ないけど、キティにメイド服着せてーご主人様と呼ばせるのもーおっといけない、鼻血が出てきてしまった。

やばい、さっそく帰ったら着てもらおう。

というか、報酬がハンドメイドの一点物の可愛いメイド服だったら今の私は二つ返事でハイといってしまいそうである。

今まで漫画で何度かメイド服は見てきたが、ここのメイド服はデザイン的に一番かもしれない。

近くの服屋に売って無いだろうか？

それとも非売品？だとしたらそれを報酬に・・・嗚呼、でも、キティとの時間がーいやしかし、訓練中も常に一緒に居れば・・・

「ほれ、何を呆けておる。メイドを見とらんで、こっちを見んかい。」

「ね、姉様っ！！」

その辺のメイドに手をつけるなんてのは許しませんよ！！」

ぐりんと凄い勢いでこちらを睨んできたキティがちよつと怖い。
が、無駄な心配さ、ハニー――！

「キティにメイド服を着させてネコミミつけて、“ご主人様、今日はキティが夜のご奉仕をさせていただきますニャン！”とか言われたら――ごはっ――！」

「ね、姉様っ！？な、何を言ってるんですかつ！？」

顔を真っ赤にして俯くキティ。

私は私で想像しただけだというのに、想像上のキティの可愛さだけで、つい吐血してしまった。

やばい、マジデ可愛い。

凄い、見たい。

見たいよ、見た過ぎるっ――！！

というか、むしろ襲いたい。

夜のご奉仕だって！？

望むところだよっ――！！

「お主等……ちよつとキモイぞ。」

おつと鼻息が荒くなっていたのかも。

テオちゃんが軽く引いていた。

そしてキティもキティでトリップしていた。「姉様のためなら――

ーあ、でも――そのまま襲われたら何と言えば――ご主人様、優しくしてニャン？いや、でもそれではありきたり過ぎて――」
などと言っていた。

ごほん。

気を取り直して。

「で、報酬って何なの？」

「うむ。」

「これじゃ。」

と言ってテオちゃんから差し出されたのは一見何の変哲も無いメイド服。

このタイミングでメイド服とは。

彼女は妖怪さとりか？

ちなみにさとりとは心が読めるとかいう妖怪の名前らしい。
良くは知らん。

「まあお主等が夜の・・・あれじゃ、その、のう？
そういう行為はしているとは知っておったのでな？」

と言いつつ、テオちゃんは真っ赤である。

「なるほど。主従プレイ用に、と？」

「う、うむ。なんといつてもこれは一種の魔法具での？
俗に言う・・・よ、夜の魔法がかかっておるのじゃ。」

女性が着たならば絶頂に至り易く、締め付けが・・・と言った品で、
男性ならば精力増強、長さ堅さが・・・と言った具合で・・・」

「男性にも使えるのにメイド服とは何事か、とツツコンだらダメなのかな？」

「う、うむ、まあとにかく。」

おしどり夫婦ならば夜の心強いお供に。夫婦仲が冷めてきたのなら、
一度これを使って若い頃を思い出させるように・・・と夫婦のため
のものなのじゃが、今回。

おそらくお主達にとってこれは再興の一品になると思うぞ？」

「それはどうしてだ？」

とキティが聞く。

「アリスは子供に戻った、と言ったな？」

となればエヴァ。あっちの方も長らくご無沙汰であろう？」

「うぐ。」

ああ、やっぱり。

キティもちよつと欲求不満気味なのかな。

解消させてあげたいとは思っけど・・・子供の体じゃねえ。

「別にそんなもの必要はない。私は姉様の愛だけで十二分に満足だからな。」

「とはいえ、多少は性欲を持て余すこともあるじゃろう？」

だが、そんな問題もこれを使えば片付くのじゃ。」

「な、なんだとっ!？」

え、何？どういうこと!？

キティの食いつきも全然違う。

「あ、勘違いしないで下さい、姉様! 別に、その、だから・・・」

「わかってるってば。夜のアレをしたあとの多幸福感が癖になったんでしょ？」

むしろ五年以上も我慢させて悪かったわね。」

「あ、いえ・・・その・・・姉様は悪くありませんし。」

真祖は吸血鬼ゆえに性欲と言うのは普通の人間に比べてかなり弱い。そんなキティがここまで望んでる様子を見せるのは夜の行為を通じて抱き合ったり、なんだりすることでお互いに一緒にいるということをより強く実感できるからだろう。

ただ気持ちいいだけのソレと愛し合うもの同士のソレでは動機も結果もまるで違うものになると言つことに他ならない。

「それで、その言い回しから察するに、私が今すぐそうした行為が出来るようになるってことなのね？」

という私の言葉にニヤリという擬音語が似合うような笑みを浮かべ、口を開くテオちゃん。

顔が真っ赤なのがカッコが付かない。というのは言わないで上げるのが花であろう。

「うむ。」

あの服には色々な需要に対応するために小さな少女、もしくは少年に着させると一部の強制的な二次成長を促すという効果もある。さらにこれの驚くべきところはそれをしてもらな後遺症、ないしは副作用が無いということじゃ。

依頼はもちろん、新兵全てを鍛え上げてくれることには構わぬが、最悪教官にあたるものをーーそうじゃのう。5人ほどでいい。育成してくればあとはこちらでどうにかしよう。」

という言葉がトドメになった。

さっそく前払いとしてメイド服を貰い、まずは私が着用。二次成長を引き起こした後に、キティに着させ、ご主人様プレイをしたことは言うまでも無い。

あは！

やっぱりキティは可愛い。

20 目 ご主人様にゃん（後書き）

この物語の主人公ってリア充過ぎる。

キティみたいな可愛い嫁さんとか。もう主人公、爆発すれば良いのに。

21 目 ヘラスナイト（前書き）

騎士団を鍛える話が終わったら（多分、あと1、2話。長くても3ほど）お待ちかね（待ってるのでしょうか？）マホラ編です。

21 目 ヘラスナイト

てなわけで。

ヘラス帝国の騎士団。

ヘラスナイトを鍛え上げることになった私たち。

騎士団のネーミングセンスにそこはかとなくセンスを感じないこともないこともないような気もするかもしれないような気がする。

そんなことはどうでも良くて、とりあえずの騎士団を鍛える方針としては、まずは一ヶ月間ほど騎士団全体をばっちりかつちりと鍛える。

これは鍛えるのが目的ではなく、優れた人材を探すためのものである。

そしてどんどんどんどん厳しくしていき、ふるいにかけていく。

近接系を3人。

遠距離系の魔法砲台としての魔法使いを2人。

こんな感じで合計5人を選別、抜粋。

その後に5人にのみさらに鍛える特別メニューを与えるわけである。

ヘラスナイト

そんな素晴らしき騎士団強化計画の記念すべき一日目。

さっそくキティがぶち切れた。

その内容は以下である。

「さあ、貴様ら、この私たちが鍛えてやるんだ。存分に強くなつて良いからな。」

との、キティの言。

早朝。兵全員を集めてまずの一言である。

彼らからしたらおばこい娘が2人。

騎士の姿に似つかわしくない姿で——具体的に言うならばゴスロリ。ちなみに私はメイド服である。言うまでも昨日の物——いきなりの上から目線過ぎる一言。

はてさて。

その状況で悪い気分にならない人が居るだろうか？

いや。意外といた。

とはいえ、キティが賞金首でその実力を知っているから・・・というわけではない。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと言えば賞金首で有名で、写真も出回っているが、それはあくまでも幻術で自分の姿を変えたものである。

ゆえに今、キティを尊敬の眼差しで見ているのは恐らく、戦争終結後。続く内乱の中で傷つく人々を私とアリカちゃんで助けたキティとしての尊敬の眼差しを受けているのである。

しかして、それを知らない人ももちろん沢山居るわけで。

それを除いても確かに数人は居る。

しかしてその数人は“ちっちゃな子供が大人ぶってる”というその背伸びが微笑ましいとか、軍の上層部が決定したのだからそれなりの実力はあるのだろ。というキティのいきなりの発言と姿に惑わされないだけの頭がある人間のみである。

特に後者はすばらしい。というか、後者の人物を見つけ出すためのキティのイキナリの言葉だったりもするわけだ。

会場には軽く魔法による興奮剤も散布している。

これはどんな状況でも冷静な思考をもてるように。ということ、撒いた物だがその状況下でも冷静に状況を判断すると言っるのは将来的に教官——引いては部隊長になり易い立場の人間としてはかなり重要なこと。

なんでい。テオちんたら。オーバーなんだから。割と良いのがいるじゃないのさ。

ええと・・・あの兵士はマリック君と、エニシア・・・って読むのか？これ？あとはジャッカル君にルーク、文香^{ふみか}。へえ、日本人もいるのか。旧世界で日本人は珍しいな。ふむふむ。ほかにも数人いるけれど、こんなところかな。兵士の顔写真書類にメモをしておく。

「さて、まずは貴様ら。走れ。ひたすら走れ。死ぬまで走れ。いいな。」

とキティが言うが、色々と説明が足りてないよ。

「お嬢様。それではいささか説明が足りないかと思われます。」

なお、現在は昨日とは打って変わって、キティがご主人様、私が従者である。

主従プレイってクセになりそう。

「あ、ハイ。そ、そうですね、姉様。」

真っ赤な顔でそう答えるキティ。

恥ずかしいならしなきゃ良いのに。

今のこの状況は真っ赤な顔で「私ばかり・・・姉様ずるい。私も姉様にご奉仕されたいですニヤン」というキティの言葉によって作られた状況であるゆえ。

おつとやばい。またもや吐血しそうになったわ。

「ご主人様、呼び捨てて下さって結構なですよ？ついでに敬語も不要です。」

「……え、あ、ハイ……じゃなくて。ごほん。う、うむ。分かっている。……ご、ご主人様か……。えへへ。」

咳払いして尊大口調に直すキティ。

まあ敬語調のキティもさることながら、今のキティも新鮮で良いかも知れない。

後半の言葉には突っ込むまい。

むしろ満悦のようで何よりである。

「おいおい、ちみつこいクソガキが俺たちを鍛えるって聞こえたんだが……。気のせいかな？」

それにそっちのメイド服を着たガキも……。変な眉毛だな。おい。」

と、ここで乱入してくる馬鹿がやってきた。ガタイの良い……。名前は……。まあいいか。身のこなし的に大したことなさそうだし。

ゴリオさんとも呼ばう……。じゃなくて……！！

変な眉毛とは何事か……！！

身体的特徴を馬鹿にしちゃいけ……。ってっ……！！

ま、まずいぞ……！！

いや、もちろんこれは予想済みである。

こうした力量を測れず、状況的常識も理解できない（軍と言う公的機関がなんら実力の無い人間を引っ張ってくるはずが無い。というか、普通に彼らを鍛える以上、私たちは上官と言う立場になっているわけで、それに対しての言葉遣いとかがもうダメ）馬鹿がつかかってくることは織り込み済みである。

むしろそれすら利用し、そうした輩には噛ませ犬役。すなわち、手っ取り早く私たちの実力を理解してもらったためのサンドバック役として使うつもりだった。のだが。

しかも彼は……。――

「あつ、ちよつ!!」

つい声が出てしまった私。

彼が押し黙っているキティの肩に触れた。

ま、まずっ!?

瞬間、轟音。

爆音。

あたり一面が吹き飛んだ。

ごっばーんっ!とド派手な音が鳴り響く。

「この私に気安く触れるなよ。下郎。そもそも姉様の眉毛はすごく可愛いっ!!……って、ね、姉様っ!？」

「いったあゝ。痛いよ、キティ。」

ゴリオさんはキティが殺す前に割って入った私が守った。それでも私の背後で余波によって死に掛けているわけであるが。

いやあ、やばかった。

私とのラブラブを邪魔されたことだけならばともかく、私の周りには気の良い人が多くて忘れがちだが人間をあまり好かないキティにとって、気安く触る相手は普通に殴られる。なおかつ私を馬鹿にするともでなると・・・殺すほどまでの理由であるというわけではないが、かといって殺さないであげる理由があるわけでも無い。

ゆえに蚊を潰すようにキティはゴリオさんを殺そうとしたのである。私としてもキティに――人の嫁をクソガキ呼ばわりし、小汚い手で気安くキティの柔肌に触れたあの野郎は打ち殺してやりたいことこの上ないわけであるが、私たちの今の立場からすると殺さないであげる理由が無いというわけではない。

彼にも同僚、仲間、友人、家族がいるだろうし、これから先、彼らとは少なくとも半年ほどは一緒にいる予定なのである。

ちよつとしたことで殺されるから気をつけなくては――みたいなビクビクしながらこちらの顔色を伺いながら――彼らを鍛えるなんてのは精神衛生上、嫌だ。下手をすれば彼らが軍自体、辞めてしまいかねないだろう。

それは本末転倒というものである。

「ね、姉様……だ、大丈夫ですかっ!？」

すぐに駆け寄って私の腕を手取るキティ。
顔は真つ青。心配してくれてるのがわかる。

「大丈夫だよ、キティ。コノくらいなら普段からツツコミとして受けてる……と言うか、普通に骨とか折られてるんですけどね?」

「いつものとはワケが違いますっ!」

これは……殺すための一撃で……そ、それを姉様に……

「大丈夫だつて言ってるじゃない?」

「ま、万が一ってことだつてあつたじゃないですかっ!」

「いや、だから……そのくらいじゃ……」

「姉様っ!」

「は、はひっ!」

「私も気をつけますから、二度とこんなことをしないで下さい。」

「いや、でも……」

「姉様、万が一にでもあれで死んでたら私はどうなつてたと思ひます?」

えと……それは……ねえ?

「きつと姉様を追うべく私も死んでました。罪悪感を抱きながら。」

号泣しながらこの首を掻き切っていたでしょう。姉様はそんな私を見たいのですか？」

「・・・見たくないです。」

「なら、止めてください。」

「はい。」

はっ！？

これって普通に丸め込められたっ！？

「・・・姉様は私にとって何よりも大切な宝物なんですから・・・もっと自分を大切にしてください。」

「き、キティ・・・い、言うようになったじゃないの。」

「こ、これくらいは朝飯前です！！」

顔を真っ赤にしながら、そっぽを向くキティであった。

もちろん私にとっての宝物はキティである。自分の身以上に大切な大切な宝物。

おそらく私の命とキティの命、どちらかしかーという展開になったら私は迷わずキティを選ぶだろう。しかし、私は死なない。なぜならばキティは私を選ぶだろうから。

お互いにお互いの命を守りあうのである。

———なんか違うな？まあいいや。

閑話休題。

「・・・さて、キサマの処遇だが、姉様に免じて命だけは助けてやる。

姉様に感謝し、土下座し、咽び泣きながら姉様に礼を尽くすが良い。

」

「キティ、彼、気絶してるから聞こえてないと思うよ？」

「・・・こほん。た、狸寝入りしてるから大丈夫です!!」
「いや、無いよ。」

さすがにそれは無理があると思う。

「もうっ！」

姉様はどっちの味方ですかっ!!」

「キティ以外にはありえないわね。」

「でしょうっ！」

なら話を合わせてくださいよっ!!こんな大衆の面前で私に恥をかかせたー!大衆の面前？」

もちろんのこと一部始終は他兵士さんたちに見られている。

当初の目的は無事果たせたから問題は無いのだが、恥ずかしがり屋のキティにとっては・・・そうはいかないんだろうなあ。と思いつつ。

兵士のヒソヒソ声が聞こえる。

「百合？百合なの？」

「姉様だつて・・・という関係？」

「小さい方ってアリカ様に似てないか？」

「全く見えなかったんだけど・・・え、なんでマックスは倒れてんの？」

「マックス・・・良く生きてたな」

「幼女が2人も・・・くんかくんか」

「黒髪美少女と金髪美少女が教官だなんてー!むしろ俺が教えた。あれなことを。」

「見せつけかよ・・・オレのこの嫁さんなんて・・・とつと死んで保険金寄せとか言ってくるのに」

「元気だせつて。きっと新手的ツンデレだよ。」

「馬鹿なことを言うな。顔を赤くしながら保険金寄越せって言われてもちつとも萌えない・・・むしろちぐはぐすぎて逆に怖い。俺いつか殺されるのかな・・・あいつに。」

「宝物・・・ら、ラブラブ過ぎる・・・あの歳で恋を知ってるなんて、私だって・・・でも私なんて・・・」

「あらふぁーの私に対する挑戦と受け取ったわ・・・呪い殺してやる。」

色々な人がいるようである。

それと幼女がうんぬんとか黒髪美少女とか言ってるヤツは殺しておこう。うん。

キティに手を出す可能性が欠片でもある野郎は皆殺しである。

「き、きさま・・・きさまらぁっ!!」

今・・・いいいい、い、いい、今見たことは全て忘れろおおおおおオオオオオオオオッ!!」

キティが真っ赤になって兵士達を吹き飛ばしたのは言うまでもないあることだろう。

多分。

ちなみに非殺傷設定なので死人は出なかったとき。チャンチャン。

21 目 ヘラスナイト（後書き）

未だにアリスをどの立ち位置にしようか迷ってます。生徒か教師か。それともひたすらアルモといクウネルサンダースと一緒にキティをからかうか。

生徒と教師は他のファンフィクションで使い古されてるので、違うものにしたいんですよね。あ、これを書いてたらふと思いついた！いけるかもしれないっ！！

ということであまり期待しないで待っててください！！

ほおおおおおおっ！！

アイディアがどんどん閃いてくるぞおおおおっ！！

22 目 すごいよゴリオさん（前書き）

今回はラブラブ度低いよ！

222目 すこいよゴリオさん

二日目。

ヘラスナイツを鍛え始めて二日目。

彼等は戦々恐々とした様子で――しかしどこか微笑ましいものを、人によつては疎ましいものを見るような目（仲の良い私達に嫉妬する意味合いの）で――集まっていた。

昨日は単に走らせた後に、実践を模した隊規模の対決をさせてみると、現状の力量を見るのに費やした。

ちなみに走らせたのは根性を見るという目的もある。

人間、肉体は育つてもそれを動かすエンジン。始動力となる精神は中々育たないため、それが飛びぬけてるヤツは初期から引き抜いておこうと言つ心算である。

そして今日も走らせる。が、今日は実践訓練を先にしてその後には走らせた。

前日との違いは単に追い詰めた状態と万全の状態の動きの違いを見るためである。

もちろんのことその差が低く、あつたとしても根性で埋められるかどうかを見極めるのが肝。まあ無理だろうけれども。

三日目。

同上。

四日目。

同上

五日目。

以下略。

そしてこの後、さらに一ヶ月ほどかけて同じことを繰り返した。

なお、実践訓練は終わったら反省会をさせて、私たちもそれに口出しをする。実践前にはなんら言うことはしない。これは自主性と協調性を育むためである。

さて、ここらで大体良いのには目をつけた。

最初にあげた五人はもちろんのこと、ほかにも数百人。

合計、1000人近く居る中で才能を感じるのが約10人に1人という割合はかなりの嬉しい誤算である。

さて、ここからさらにふるいをかける作業を始める。

35日目。

「よし、貴様ら。いい加減基礎は身についてきた。まあ、まだまだ荒いがな。とはいえだ。

お互いに切磋琢磨し、お互いに技を褒め称え、お互いに絆をより強固なものにした。

私たちのアドバイスもあって、貴様らは――そうだな。そこそこの兵士レベルにはなった。たとえ戦争になっても生き残れるだろう。

―

というキティの誉め言葉に兵士達は沸き立つ。

「だが。生き残れるだけで勝てはしない――すなわち。何が言いたいのか、わかるな？

喜んでいられるのも今のうちだ。

これからさらに厳しくしていくんだからな。」

と言う言葉に、ざわめきはぴたりと収まった。

そう。もちろんのこと彼女の性格的にこのくらいの生易しい特訓（とはいえ、普通の新兵用の訓練よりもはるかに厳しいものだったが、）で終わるはずは無い。

ちなみに私も現在は弱体化（特に体に染み付けるしかない類である武術など）してるので。現在は成長に害が無い程度に修行をつけてもらってるのだが、それでも非常にしんどい。

さて、彼等いっぱしの大の大人達にキティが容赦してあげるかと言えば——もちろんそんなことはなく。

これから始まるのはキティによる修行と言う名の断罪ショーだった。誰が罪を犯したと言うわけでもないのだけれど。

40日目。

「ほらほらっ！！

どうした、どうしたあっ！！

足を止めると死ぬぞっ！！」

と言ってキティは兵士達を追いたて、ひたすらに当たるか当たらないか程度の位置に魔法をぶっ放す。

午前の近接タイプ兵士の訓練はどんな手を使ってもいいから格上のキティから逃げ切れ！ということである。

私は私で典型的な後衛魔法使いタイプの子達に対して魔法の講義を行っている。

肉体に起因する技術的な物は振り出しになってしまったとはいえ、知識だけならば700年くらいの物がある上に、私の師匠はあの神様印の「スーパークラシズ」のスパ君である。

世界で私以上に魔法が使えるとしたらそれは造物主くらいだろう。
そんな私は今日も黒板に向かい、椅子に登って背伸びをして魔法の
講義をするのである。

え、魔法で浮けばいい？幻術で背を伸ばせばいい？

馬鹿を言うなよっ！

私がこうして一生懸命プルプル震えて頑張ってる姿に――

「応用があんなに・・・ためになります。」

「きよ、今日も可愛いわね。アリス先生は。」

「あ、あんなに懸命に背を伸ばして・・・や、やばい。鼻血が。」

「よ、幼女が・・・幼女が頑張ってる姿がこれほど萌えるとは・・・」

「

「あ、あれは幼女・・・そして俺は紳士・・・イエス！ロリータ！
ノータッチッ！！だがしかし・・・あのプルプル震える太ももを驚
づかみにしたいっ！！」

「おいおい！太ももじゃねえだろ！？揉むなら胸じゃねえか。」

「いや、あんた達、何言ってるのよ。というか、先生には胸無いじ
やないの。」

「ばかつ！その胸が無い。けどほのかに柔らかい、薄っすらと胸筋
の上から乗っかる脂肪のふにふに感がタマランのだろうっ！！」

「私にはあんた達がたまらないほどにキモイわ。」

「・・・魔法変換効率が上がると魔力の消費が抑えられるのは道理・
・・・ですが、それをこのような方法でなんて・・・」

「先生、なんで浮かないんだろう？飛べるはずなのに。というか、
どうして誰もつつこまないのかしら。そのことに。これが空気を読
むってことっ！？くっ！空気を読めると書いてKYの私にとってこ
れほど辛いことは無いわっ！！」

「見た目で判断すると痛い目を見るってのは先生のためにあるよう
な言葉よね。」

「あの震えてる彼女の愛らしさがあらふおーの私にはとても禍々し

いものに見える！！憎いっ！！あんなものに騙される男も、私を捨てた男もっ！！全てが憎いのよおおおおっ！！」

ふっふっふっ。計画通り。

こうして私の人気が上がってくるとーあ、もちろん色々ダメな人にはツツコまないよ——キティがこちらをちらりと見る。そして少しこちらを睨み、生徒達に対して刺すような視線を投げかける。

『私の姉様に色目を使うヤツは性別問わず消すっ！！』と言わんばかりである。目でそう言っている。

私が魔法を使わない理由は魔法に頼ってばかりではそうした便利さになれて、便利さを享受するだけの墮落した人間になってしまいうから。などという立派な理由は無く。

単にこの方が生徒の好感度を集め、キティが嫉妬するかと思ったからである。

ふへへへへへ。嫉妬するキティも可愛いよおおおおっ！！というか、嫉妬するキティを見るために椅子を用意し、書きづらいのにも関わらず背伸びして黒板に文字を書いているのである。この程度の労力！

嫉妬するキティを見るためならなんら苦ではないのだ！！はーはっはっはっ！！

と思ったら、キティにそのことがばれてぶっ飛ばされました。ごめんなさい。ちよっとした出来心だったんです。

50日目。

さすが私とキティ。

才能がなかるうとあるうとかなりの成長をしていくヘラスナイツの面々。

ここでキティの訓練に進捗が見られた。

非殺傷設定の魔法、当たっても精神的なダメージもとい痛みを錯覚するだけの設定であったがそれをかいくぐり、キティからボロボロでも時間内一杯逃げ出した一人が出てきたのである。

その人が凄いのかと言われては、些か疑問の残る余地がある。

もともとキティの訓練は近接系兵士約700人を同時に相手取るものであり、その700人が決められた時間内、決められた範囲をキティの手加減した攻撃から逃げたり立ち向かったり隠れたりそれぞればらばらに動き、時には一致団結したり、罠を作ったりと。とにかく逃げ切れれば良いので、キティの実力をもつてしても一人くらいは逃すヤツが出てきても不思議は無いと思っていた。ゆえに特別おどろくことではなかったのだが、選別する前に逃げ切るヤツが偶然とは言え出てくるのは予想以上に早かった。

ちなみに名前は・・・マ・・・マーク？マルキ？アース？アックス？とにかくそんな感じの名前で、とりあえずいつぞやのゴリオさんだった。と言えば誰かは分かるだろう。

まぐれとはいえキティから逃げおおせるのは無理だろう。

それなりの才能があつたということに他ならない結果だった。

もちろんキティとしても私としても面白くないので、次の訓練にはゴリオを優先的にぶつとばすとキティは言っていた。

うむ、南無。

62日目。

さて、このくらいからそろそろ個人レッスン。

当初のエリート選別、エリートにさらなる教育を。英才教育作戦を始めることにする。

甚だ不本意ではあるのだがゴリオさんも選別メンバーである。

キティの柔肌をキサマの小汚い手で汚したことを許したわけではな

い・・・というか、訓練の名目で苛めてやろっじゃないか。
殺しはしない。殺しはしないが苛めに苛めて苛め抜いてやろっ。キ
ティも多分近い思いを抱いてるだろう。

91日目。

予想外なことにゴリオさんがやたら前向きすぎてつまらなくなっ
てきた。

当初の予定通り、優秀どころはかなり選抜されて今では約6人。
キティは接近系。私は後衛系を担当することは変わらず。

しかしてゴリオさんだけは接近系でありながらキティの訓練後にさ
らに私の訓練も追加である。

ところがどっこい。

何を勘違いしたのかゴリオさんは普通に「あれ？この2人から目を
付けられてる俺って優秀なのっ！？」という勘違いを起こし、それ
ゆえ私達のありもしない期待に応える為に懸命に耐え抜いた。

私たちの特訓とも呼べぬ特訓を耐え抜いたのである。

結果。なんだか知らないが気づいたら兵士一番の実力者となってい
た。

なぜこうなったし。

明らかに理不尽な理由（ちょっとそこ邪魔、とか）で殴つても「あ
はっはああああああっ！きたああああああっ！最近はお
嬢方に殴られても鼻血しか出ませんよっ！最初の頃は骨の1、2
本は軽く貰われてたのっ！俺って強くなってますよねっ！？」
と言っいきなりのギリギリセーフ？でM的な発言をかましてくれる
ゴリオさん。

余談だが、未だに名前は知らない。

あまりの前向きさと勢いに飲まれついと「うん。が、頑張ったよね。
ゴリオさんは。」とぼやきつつ、頭をなでてやると「ありやしたっ

！！」と叫んで自室に帰って行くのである。

ちなみに頭をなでてやったのはなんというか、今では恒例行事となつてしまったことで最初はゴリオさんに屈辱を味合わせるためと言う嫌味極まりない動機で始めたことだったのだ。

怒ろうにも相手は上司ゆえに屈辱に甘んじるしかない。というシチュエーションで苛め抜くつもりだったのに。

むしろ私に害が降って沸いてきた。

彼ばかりが、ずるい！私たちだって頑張ってます。彼と同じ訓練をすればナデナデしてくれますかっ！！といういつの間にか出来ていた私のファンクラブの連中に押し寄せられ、しかし面倒だった私はもちろんのこと「ゴリオと同じ訓練をしたものがそういった生意気なことを言えっ！」と言った。

言ってしまった。

もちろんさすがにナデナデくらいでゴリオと同じ、訓練とは名ばかりのただ辛いだけの肉体的精神的修行風いじめをやりたがるやつはいないと思ったのだ。

しかして違った。

彼等は修羅だったのだ。

結果は言わずもがな。

ファンクラブであった約100人は全員ゴリオと同じ訓練を耐え切り、私にナデナデされたとき。

その情熱をほかに向ければ・・・と思わないでもないような。しかし結果的には万々歳である。

128日目。

どうしてこう、やることなすことが裏目に出るのだろうか。と思いつつ。

今日もナデナデしてやることになった。

どうも自身よりも明らか年下なのに、そんな私に下に見られる感じがたまらなく“感じる”そうだ。
変態が多いな・・・とぼんやりと考えながら今日も彼等に訓練を課すのである。

180日目。

そろそろ半年が経つ。

予定ではそろそろ教官クラスを仕上げなくてはいけない。のだが。ぶっちゃけ選ぶ必要が無くなった。

100を超える人数が原作で言うところの・・・カゲタロウクラスになったからである。

ラカン君の強さ指標で表すなら2000前後である。

近接職は普通に瞬動は使えるし、虚空瞬動も可能。気の強化も下手な冒険者なら足元にも及ばない。中級呪文ならば普通に戦闘に組み込める。下級呪文ならば無詠唱も可能。

後衛職は上の下程度の呪文である雷の暴風クラスなら連発が可能。広範囲殲滅呪文の千の雷などだつて多少時間はかかれど普通に扱える。中級ならば連射である。無詠唱でバカスカ打ててしまう。

あ、もちろん遅延詠唱、無詠唱、さらには最低限の近接術も覚えさせた。

正直、兵士としては個々の戦闘力が化け物染みたことになってしまったが後悔は無い。

まさしく魔改造と呼べるだろう。

さて、最後に。
この特訓の成果。
最大の成果であるが。

無詠唱、遅延詠唱ならば中級まで可能。上級も先頭に組み込むという点では問題が無く、なおかつ虚空瞬動、瞬動、剣槍弓と三種の武器を十二分に扱い、拳打においては達人の一步手前クラスにまでたどり着き、頭脳に置いては並みの軍事を上まることになった最高傑作の名を言っておこう。
甚だ。
甚だ不本意かつ忌々しいことなのではあるが。

眼前。

兵士を鍛え上げ、厳しい訓練を卒業するという一種の卒業式的な物が行われている。
その壇上で。

一番優れた成績を残したとして表彰されている者がいる。
この国では重要なポジションに居るヘラス帝国第3皇女テオちゃんに表彰状を渡されたその人物は頬を軽く染めつつも誇らしげに微笑んでいる。

「以上、ゆえに妾は貴君を称えることにする。」

というテオちゃんの言葉に続く人物の名はマックス・オルウエイン。
ご存知、前向き馬鹿のゴリオさんであった。

もう一度言おう。
なぜこうなったし。

222目 すこいよゴリオさん（後書き）

はあああああつ！！

キティにゃんとのラブラブが少ないっ！！

キティにゃんともっとラブラブさせたいよっ！！

もっとピンク色に染めたいよ！！

もっと太ももを書きたいよ！！

・・・ごほん。

次回は新章。

もといマホラ編。

ふふふ、ちよつとありきたりのように見えておそらく他の皆様が書く物には無い、僕が始めて書く展開だと思います。多少の似てる部分はありこそすれね。

23 目 謀略（前書き）

キリが良かったんで区切っちゃいました。
短いです。

次回はマホラで会いましょう!!

23 目 謀略

「アリス・スプリングフィールドはいるか？」

ヘラスナイツの一件から五年後。私は十歳となつてしばらく。ウェールズのアリス家にて、数人の男達が唐突にやってきた。もちろん礼儀を弁えないバカどもにキティがご機嫌斜めになるのを宥めつつ。

「私ですけど何か？」

「貴殿に逮捕状が出ている。」

大人しく連行されてもらおう。」

「はい、りょーかいです。」

さて、なぜ逮捕状がうんぬんという話になったか。それを語るに涙。

感動的なストーリーが背景にある。わけもなく。

簡単に言えば、もう腐りすぎてるんだからいつそのこと元老議員という役職自体なくしちゃわない？

というクルト君主導の下。

元老議員を完膚なきまでに叩きのめす。

その手伝いを私達がすることとなったのである。

この5年。余程後ろめたかったのか、自身達がアリカちゃんに擦り付けた罪。それを私を通して見る元老議員の老害やそれと一緒にいるものたちは非常に多岐に上って色々な役職に付いており、結構な数をキティが殺したのにも関わらずいまだに彼らが潰えないのもうんざりしてきた。あれやこれと気の良いことを言つて新職員なんかも取り込み、あれからむしろ老害の息がかかった人間は増えたとも

言える。

などなどと言いつつも、皆はずこう思うだろう。「なぜ殺されるのに未だこちらに喧嘩を売るの？」と。彼らが関わってくるのは「アリス・スプリングフィールドが母親の一件で我らに反旗を翻す」かもしれないという恐怖ゆえに。といったところらしい。

アリカちゃんが生きていたという生き証拠である私。その私がアリカちゃん関連で動く色々な意味で厄介。彼らの罪がばれる可能性も全くの無関係者がやるよりも、動きようによつては元老議員という役職の存続すら危うい。

そもそも、そのことがばれば関係者全ての死刑は免れず。キティが怖くともどうせ死あるのみならばどうにかこうにかして私達を殺す。そう考えてるようなのである。

特に力を付ける前の幼児の時に。

全く、こちらとしては向こうに対する害意はそんなにあるわけでもないというに。

むしろアリカちゃんを社会的に殺してくれば王女などという人間の思惑渦巻くストレス満点環境から開放されるため、アリカちゃんの子として母が気楽に過ごせる環境にしてくれたのは感謝するべきところだ。

そんな私たちの思惑を知ってか知らずか。

私が賞金首であるキティと一緒にいるというのも相まって、彼等は尚のこと焦って懸命に私達を殺そうとするのである。

いい加減私もウザクなってきたのでどうしよう？

と思った私達はクルト君と組んで、徹底的に彼らの不正を暴いて役職自体を無くすくらいに世間の評判を悪くしよう！と思いついた。

クルト君はアリカちゃんの一件も含めて、今までに不正を集めてき

た。

小さなものから大きなものまで。

しかしそれでも未だ彼らの役職を潰すには一步足りない。それほどに元老議員の権力は根深く、強固に世界に結びついているということだ。

そこで。

さらなる後押し。最後に一つ大きな不正^{つみ}。私たちに対する――すなわち、戦争締結後は普通に良い意味で有名になった私達――冤罪も彼らを訴える肥やしにして、完膚なきまでに叩き潰す！と言った所なのである。

私にいたってはあの英雄と犯罪者にしたてあげられた悲劇の王女の娘（息子だけどね）という付加価値もある。

親子二代に渡って元老議員の身勝手に巻き込まれる。

しかもそれは最古から連綿と受け継がれた王族の血筋。

その旦那、父親はかの英雄サウザンドマスター！。

そんな重要人物^{キーパーソン}を食い物にしたと公表すればさしもの元老議員も潰せるだろうとのクルト君の言。

そのための第一段階が私の逮捕。

もとい「オコジョ化」である。

冤罪でやむを得ずオコジョ化されて、苦渋の日々を送る、世が世なら一国のお姫様となるはずだった私。いや、王子様だけでも。

ふふふふ！

世間を沸かしてあげるよ！！

この私が！！

ぐだぐだ小難しいことを言いつつも、結局のところ世間を巻き込ん

だドツキリをしたかったから。
それがクルト君に協力した私の一番の動機だったりするわけである。

23 目 謀略（後書き）

まさかの主人公がオコジヨ化してマホラ学園に！という話。ちなみに主人公は体術においては100年かけてフェイトんに追いつく程度ではないーもとい才能が無いやつですが、魔法においてはエキスパート。造物主ばりのチート性能です。

オコジヨ化も一種の魔法である以上、普通にオコジヨ化なんて解けます。

オコジヨ化においてキティと主人公の立ち居地の設定がひらめきまくったんですが、ストーリーのほうはどうしようかと迷い中。立ち居地的に昨日の時点では面白そうだったんですけど、一晩経つとー微妙かなあと。

いつそのこと彼女達の立ち居地を言ってしまうと、キティは力を隠してネギのライバルと成り、魔法少女となります！

そしてそんなキティに付き従う謎のオコジヨ！

そんな彼女達を警戒するネギパーティ！！

彼らの運命はどうなるっ！？

さて、いかがでしょうか？

24つ目 お帰り（前書き）

よし！展開が決まった！！

24 回目 お帰り

私が十歳となつてから二年後。

某日、麻帆良学園。

私たちの家の前である。

「さて、久々に帰ってきたわね。マホラに。」

「チャチャゼロはちゃんと留守番できているでしょうか・・・木偶にんーースパ君に迷惑をかけ同土でなければいいのですが。茶々丸、どうだ？ここが私たちのあ、あ、ああ、愛の巣だ。」

現在、私の姿は特別オコジヨと言うわけではない。

故郷ウエールズで私の逮捕はかなりの大騒ぎとなつたらしいが、まあそうした詳しい部分はまたの機会として。

ちなみにウエールズに住む人たちにとって私とキティは犯罪者として牢獄に入れられてるーーーという認識のほずである。

ただネギのことは多少なりとも詳しく言っておかなければなるまい。私の一件以来、ネギは色々思うところがあつたらしく、やたらと魔法や勉強を頑張るようになった。
そして12歳。

メルディアナ魔法学校卒業。

本来の歴史ならばネギは9歳。数えで10歳でメルディアナ魔法学校を卒業するはずだったのだが。悪魔事件が無かつたこととなり、父親であるサウザンドマスターへの憧れも弱かつたせいか特段に頭が良いというわけではなかつた。とはいえ、そもその頭の出来からして天才型なのでそれでもかなりの知識と魔法の腕ではあつたが。
(魔法に置いては原作以上だろう。キティが軽く鍛えていたので。)

おそらくもう一週間もすればネギもマホラにくることになる。

「ここがアリスとマスターの愛の巣ですか。」

「あ、愛の巣とか言うなっ！は、はずかしいだろうっ！？」

「・・・いや、マスターがそう言ったのですが・・・」

「そ、そうだったか？ま、まあいいんだっ！そんなことはっ！！というか忘れろっ！！」

そして気になった人もいるだろう。

私たちの間を歩いてる12歳くらいの子供は茶々丸。

クローン技術で培養した茶々丸である。

身長は私の現在身長と同じ130センチほど。

機械であつた茶々丸のロリボディ茶々丸を想像してもらえば良い。

ちなみにこの茶々丸はクローンのみで作られたちゃんとした生身であり、非常に可愛い私とキティとの間の実子といっても良い存在である。

ロボット娘という属性を消してしまつてよかったのだろうか？とやり過ぎた気がしないでもないこともないが、まあそこは気にしないことにする。

だって、私にロボットを愛する気はないのだし。

ロボットならばやはりロボットらしい格好よさという物があるもので、アンドロイドなど言うのはもつてのほかである。

腕や足などの体の一部が機械であるというのはカッコいいと思うけどね。

そんな私の厨二願望はさておき。

茶々丸が父親とも母親とも呼んでくれないのはどうしてなのか。

おそらくだが、魔法世界のクローン技術は魔法科学によるものが半分以上を占めており、その中の魔法的要素が茶々丸自体の認識に齟

齧を与えてるのだと思われる。

詳しい話はいずれ。というか、自分自身専門じゃないのでいまいち分かっていなかったりする。父親と母親と呼ばせたかったのだが、どの道幼女にしか見えない私達がそう呼ばれるのはちよつとアレだったので諦めて、キティはマスター（戦いの師匠的な意味で）、私はアリスと呼ばせることにしたのである。

そもそも茶々丸の培養に関しては想定外なことが多すぎた。まず茶々丸の容姿は私とキティが混ざるものであるはずなのにそうはならず、本来のネギまそのままの茶々丸の容姿。DNAにちゃんと仕舞しと物申したいが申す手段が無いので断念した。本来の物語に対する修正力？と思つては見たものの、そんな話は聞いたことが無いし、それならばそもそも茶々丸を生み出すことは成功しないはず。おそらく設定のどこかを間違えて、偶然茶々丸の容姿となつたとみて間違いはない。

下手をすれば性別すら違えていたと思うともう少し設定を詰めてから培養器を作動させれば良かったと思いつつ。

次に培養期間を間違えてしまったこと。間違えたと言うよりは予想以上の培養速度を見せてくれた。

赤ちゃんから育てたくて、胎児の段階で培養槽から出すつもりだったのにふと目を離れた際に育ちすぎてしまったのである。

赤ちゃんを育てたかったのに、と落胆。ボタン一つで単価にして19万8000円で作れるとはいえ。

一応、一つの命として――産まれる場所が子宮とガラス水槽の中という違いはありにせよ――この世に産んだ以上、そのまま廃棄処分と言うのはさすがの私でも躊躇された。

どこぞのレベル5進化^{レベルシフト}作戦をするわけでもあるまいし。そんなことをすればどこぞの幻想殺しに説教されながら殴られるという稀有な体験をする羽目に・・・なるわけもないが。単純に二人目を作っても処理に困ってしまう。なにはともあれ。

そんなこんなで茶々丸は二年と言う期間でもってもう12歳児並みの肉体を持っているのである。

ちなみに知能が高いのはアリカちゃんの処刑の時に使った身代わりクローンの魂をしようしているからでー！ー閑話休題。

要するに、だ。

茶々丸が幼女になって、生身になったよ！ーってことである。

ちなみに現在は闇の魔法を使うための土台作りの修行中。

私とキティの血を継いでいるがために普通にチート性能だったりする。

「お帰りだ、アリス。」

「ケケケ、ヨウヤク帰ッテ来ヤガッタナ。色ボケ夫婦ガ。殺シマクッテキタカ？」

うむ、久しぶりのスパ君の似非なまり言葉に、チャチャゼロの言葉遣いの悪さ。

とはいえ念話で会話してたので久しぶりと言うのは間違いかもしれない。

なぜ久しぶりと言ってしまったのか？

ノリだろうか？

ノリだろうな。

あまり深く考えずにいこう。

「イロボケとは酷いじゃない。

まだボケる歳じゃなーいーいや、ボケる歳ね。そういえば。というかボケるどころか死んでもおかしくない年齢じゃない！？」

「今更過ぎますね。姉様。」

「ソウイウノガ、ボケテルッテンダ。」

「こついつのを引き出すチャチャゼロの応対こそが悪いのに、私が悪くなってる!？」

「なんという罠かつ!？」

「・・・ツツコマネエゾ。」

「つつこんでよっ!？」

1人でボケて、誰も何も言わなかったらすべてるみたいじゃないかっ!？

「人それを滑つてると言うのです・・・姉様。」

「わ、私滑ってたつて言うのっ!？そ、そんな馬鹿なっ!？

超スピードとかチャチャなもんじゃねえ!もつと恐ろしいものの片鱗をー!」

「まあ姉様のつまらないボケはさておき。」

「っ、つまらないっていったっ!

つまらないって言ったっ!キティがつまらないってっ!」

お姉ちゃん悲しい!!

キティだけでも乗つてよっ!!

「スパ君、紅茶を頼めるか?」

「来て早々それだか、エヴァ。まあいいだよ。ほれ、アリスも子供みたいに喚いてないでこっちでお茶を飲むべさ。それとそっちの子が話に聞いていた茶々丸——だか?よろしく頼むだよ。」

「はい。そちらがマスターの従者であるチャチャゼロ様とアリスの親代わりのスーパーカカシ様ですね?」

「様付けなんていらねえだ。気軽にスパ君とでも呼んでくれて構わねえだよ。」

「俺様モ呼び捨て構ワネエゼ。」

「ではスパ君とチャチャー!は私と被るのでそこを除いたゼロと

お呼びします。」

み、みんなが私をエターナルブリザードにする！！
きよ、驚愕するしかない！！
それに喚いてるだっ！？

「わけの分からんことを言っていないで、姉様も据わってお茶を飲み
ましょう。」

「俺ハ茶ヨリ酒ガ良インダケドナ。」

「喚いてない、アリス、喚いてないもん。」

「はいはい、分かっただからお茶でも飲んで落ちつくだ。」

「何っ！？その駄々をこねる子供を相手にする感じの態度と目はっ
！？」

その生暖かい目で私を見るなっ！！その生暖かい目が私を熱く焦が
すっ！！」

「姉様・・・いい加減黙って飲んでください。照れ隠しはそれくら
いにして。」

「っ！？な、なんのことかしらキティ？」

「久々にスパ君たちに直接会えたから。照れてるのでしょうか？」

その照れ隠しがてら無駄にテンションが高いと言ったところですか？
私以上に生きておきながらー可愛いですから。」

どやああああ顔で笑み、こちらを見つめるキティ。

ば、ばば、ばれてーら。

つついそっぽを向く私。

顔、赤いだろっなあ。

「アリスは何時まで経っても可愛いだな。」

「ケケケ、良い歳コイテ恥ズカシガリ屋カヨ。可愛いナ、嬢チャン

「オオ？」

「なるほど。マスターはそんなアリスだからこそ惚れたんですね。」

「ああ、その通りだ。——じゃなくてっ!!」

おい、茶々丸っ!!そ、そんなはつきり惚れた腫れたとか言うんじゃないっ!!」

「どうしてですか？」

「は、恥ずかしーじゃなくて、それがデリカシーというものなんだ!!覚えて置けっ!!いいなっ!!」

「・・・？」

よく分かりませんがマスターが言うのであれば。」

そんな日常の一幕だった。

25つ目 とある生徒の心境模様（前書き）

他ネギま作品で人気のあの人が登場。魔改造されてたり、原作時期よりも早くに魔法側に引き込まれたりしますが今作では今のところどうにもするつもりはありません。あくまでも一般人の目線からツッコンで頂きますww

25 目 とある生徒の心境模様

私はここマホラ学園に通う中学二年の一般的な生徒だ。

ネット上では知る人ぞ知るトップアイドル、などという少し一般的とはいえない肩書きを持っていたりもするが、まあ常識の範疇。今、目の前で起こった出来事とは比べるまでも無く。私はあれである。非一般的な光景を見せ付けられたのだった。

「キティ、ねえ。ねえってば。」

「なんだ、うるさいな。用があるんですか？姉様？」

「そんなに怒らないでよ。ちょっとしたイタズラ心じゃないの。」

「あ、あれがちょっとした・・・ですか？」

「うん。あれくらいでそこまで怒るとは大人げなーーひいつ！？」

「人が寝てる間にパンツの中身をスライムまみれにしたことがー！あれくらい、と？」

「だ、だってだって・・・粘液的なものにまみれたキティを見たかったと言うか・・・もちろん始めは入れて起きた時の反応を楽しむつもりだったんだけど・・・入れただけでも敏感に反応するキティが可愛くてね？つい、調子に乗っちゃって・・・」

「調子に乗って・・・失神させるほどにスライムを操って私の体をまさぐったと？」

「はい・・・そうです。」

「というか、それだけじゃないですよね？」

私を楽しみにしていた“タマゴ屋”のプリンも食べましたよね！？
それも勝手にっ！！」

「そ、それは・・・ちょおおおとお腹が空いてただけでね？
つつい、ところ。手が伸びてしまったと言いますか？このいけないお手手が勝手にプリンの方を開けて、開けた以上は食べなければプリンを作ってくれた機械に申し訳ないだろう？ってな感じでー」というか、一週間も前の話でもうそれは謝っー」

「ば、ばかああああっ！！」

「ひゃうっ！？」

今日は晴れやかな快晴。

学校が終わったから久々にコスプレの材料の布でも買いに行こうかな。
と思いきや。

目の前から独り言の激しい少女——いや、独り言というか彼女は肩に乗ってるイタチ？オコジョ？ソレに対して話し掛けている様だ。
そしてなんだ、あのゴスロリは。

やたらと綺麗な金髪に端正な顔立ち。

馬鹿かつ！と突っ込みたくなるほどの美貌だ。

なんとなくリア充の匂いもそこはかとなく香ってくる。
死ねば良いのに。とか思いつつ。

「それにしてもゴスロリか。・・・羨ましくなんて無いからな。」

ゴスロリは私にとっては珍しいものでもないが、一般にソレを着て出かけるような服ではない。

よくもまあ白昼堂々と着れる物だ。目立つのが苦手な私としては些か以上に抵抗がある。

ちよつと憧れたりもするが。

羨ましいというほどではないと言って置こう。

「あのプリンは機械で大量に生産されるものじゃなくて、一日50個の限定生産のプリンなんですよっ!？」

「そ、そんなの知らないもん。」

「し、知らないじゃないでしよっ!！」

「ご、ごめんってばあっ!！」

タマゴ屋のプリンは確かに美味しい。

私も一度食べたことあったっけな。

あれ以来一度も食べれたことが無い。

彼女が、再度あそのこのプリンを手に入れることが出来るのは下手をすれば卒業する頃になっても無理かもしれない。

なぜに腹話術まで使って一人喧嘩をしているのかワケが分からないが、どこかの芸能プロダクションにでも所属しているのだろうか。

さすがにあの歳で忘年会の一発芸の練習だ、などということはあるまい。

つか、腹話術の練習をするにしても時と場所を選べって話である。ゴスロリ姿と良い、彼女は羞恥心をどこかへ置き忘れたようだ。

「まだありますよっ!！」

「ま、まだって何!？」

「私を怒らせるようなことをしたことです!！」

「だから、毎回ちゃんと謝ってるでしょ!！」

「だから姉様がいつまで経ってもそういう無神経なことをするから――」

ガミガミと言いかう少女とオコジヨ。
ん？

あれだ。私は彼女達と向かい合う形で歩いているのだが、そろそろ通り過ぎるところで――オコジヨ自体が喋っているような気がしないことも――いや。あっはっはっ。

まさかな。

ありえないっての。

そもそも喋るために必要な舌や声帯がオコジヨには無いはずだ。仮に人間並みの知能があったとしてもそれらが無いのだから生物学的に不可能なわけである。

「いかんいかん。厨二病になってたまるか。」

すでに卒業済みである。

ぼーっと姉妹が言い合つたのを見ながら姉妹の横を通り過ぎる。

と。

「そ、その君っ！？すぐに、逃げるんだッ！！」

目の前にはＴーレックス。ティラノサウルスと呼ばれるジュラ期にて食物連鎖の頂点に立つ、王者が君臨していた。そして崩御した。もとい倒れこんできた。

嗚呼、これは死んだ。

頭のどこかでそんなことを考えつつも、今更だけどこの学園色々おかしいだろっ！科学部でなぜこうまでオーバーテクノロジー的なロボットを作るんだ！？そもそも安全管理くらいしっかりしてから試験運用をしろっ！！人死にが出てからじゃ遅いだろっ！！という本当に今更ながらのツッコミもしつつ、死の衝撃に耐えるべく目を堅く瞑った。軽く引きつった悲鳴が出てきた気がしないでもない。

つてわけなのだが。

「ん？

あれ？」

衝撃がこない。

おそろおそろ目を開けてみると、そこには――非常識の権化とも言うべき物が存在していた。

「・・・ツツコンで欲しいのだろうか？」

そんな言葉がついと出るほどに非常識だった。

状況を説明するだけなら一文で説明が付く。

「オコジヨの尻尾が伸びて・・・Ｔレックスを巻き止めた・・・うむ。新種のオコジヨなんだろうな。」

いやいや、待て待てっ！！

待てえいっ！！

「あ、ありえん。いや、普通に考えて、おい、待て、あ、あれだ。ツツコむべき所が多すぎてツツコめない。

まずあれだ。ネコ目イタチ科のオコジヨがなぜに日本にいる？

いや、日本にもオコジヨは二種だったか？

存在するけども、完全肉食の気性の荒い生き物で人間に慣れるなんてのはそれこそ魔法少女とかそんな感じのアニメのマスコットキャラとしてでもない限り・・・そもそも法律上飼育できないはずだし――というかなぜに真っ白？冬毛？今夏なのに。

そして尻尾はどうした！？

尻尾が超進化して――つか、あれだけの体積があんな小さな体のどこに！？

仮にあの尻尾が内蔵されてたとしても、一体どれほどの筋力があるのか明らかに１０トン以上はありそうな物を受け止めてるけど干切

れないのかなとか、仮に受け止めたとしても受け止めた際の力はあの少女の肩にかかっている訳で・・・少女の肩は大丈夫なのかとかもツツコムべきところ・・・なはずだがなんか普通に涼しい顔をしてらっしゃるのは何故なのかとかなぜなにばかり。
極めつけは――」

目の前の不思議――否。超絶凄いオコジヨを連れた少女と研究者らしく白衣を着た生徒。おそらく高等区の生徒。は、特に何か言い合うわけでもなく。そのやりあいにはびっくり仰天した。

「す、すまなかった!？」

怪我は無いかい!？」

「ばか者が。」

気をつける。死人を出すつもりか。」

「はーはっはっ!大げさだなあ。でも確かに万一にでも死ぬ可能性はあったかもね。」

とにかくすまなかった。

そっちのやたら尻尾の長いオコジヨ君も。すまなかったね。それにしてもすごい長い尻尾だ。ぜひとも調べさせて欲しいけど・・・まあそれはいつかということだ。」

「き、キティっ!？」

き、聞いたっ!？」

わ、私、始めて初対面で男の子として――君付けされたのなんて初めてだよッ!」

「ね、姉様・・・どこで感動してるんですか・・・どこで。」

「これを感じせずに何を感動しろって言うのよ!!」

あ、でも尻尾を調べるのはノーサンキューよ。少年。」

「しょ、少年・・・に見えるかい？」

それにしても・・・最近のペットは喋ることも出来るようになったのか・・・芸達者なオコジヨだなあ。」

「き、キサマ・・・姉様をペット扱いとは・・・まあ今の姿では仕方ないが・・・うぬう。」

そ、それくらいにしろおおおおおおおっ！！
え？

これドッキリ？

ボケてんの？

ねえ、ボケてるの？

ボケまくってるの？

なんでオコジヨが喋ってるの？

いや、もう認めるよ。

しっかり喋ってるよ。

どう考えても喋ってるよ。

どう聞いてもオコジヨの口から声が出るよ。

え、何？

本当に最近のペットは喋るようになるの？

じゃあなんで実家のウサギのミー太は喋らなかったんだよ！

「千雨ちゃん。僕と契約して魔法少女になってよ！」とか言われて見たかったわボケエっ！！

いや、じゃなくて、厨二病は二年前に卒業したからそんな妄想は乙でした。でもなくてっ！！

普通に喋るわけねえだろうがっ！！

普通に受け入れてちゃダメでしょっ！！？

ダメだよねっ！！？

ねえ！？ねえ！？

そして万が一にでも死ぬ？

逆だわっ！！

万に9500人くらいが突発的なことに対応できずに死ぬだろうっよっ！

内五百人がたまたま反応したとか幸い、打ち所がよかつたって感じで助かるんじゃないかね？つてくらいの事故でしたよねっ！？

「じゃあ、僕はこれで。本当にごめんねえええ。」

と言いながら去っていく白衣姿の生徒。

茫然自失。

今の私はまさにそのお言葉が似合う格好にて突っ立っていることだろう。

「・・・姉様、このガキは・・・」

「ええ、どうやら認識阻害を兼用してる学園結界の影響を受けてないみたい。」

「・・・魔法生徒、の割には無防備すぎるし、多分体質かしらね。」

「どうします？」

記憶を消しますか？」

「・・・うつむ？」

問題ないんじゃないかしら？

ちゃんとした教育を受けた魔法使いなら――魔法の秘匿は魔法使いの義務である――とか言いながら――まあ対処するんでしょうけど、私たちは・・・ねえ？」

「ふふふ。ちゃんと反省してるんですね。」

「な、なんのことかしら？」

「どもりましたね。分かり易いです。」

私に記憶操作で封印した時のことがあるから、昔以上に記憶操作魔法を使わなくなりましたよね。姉様って。」

「べ、べつに関係ないもん。」

「では、そういうことにしてあげましょうか。」

「う、うるさいなあ。」

「はいはい。

というわけで、少女よ。

まあ忘れる。

覚えていたところでどうにもならんし、わざわざ私達からはどうこうするつもりはない。

・・・まあ深入りしすぎんようにな。」

な、なんだろうか？

いきなりの尊大口調で何かを言い出し始めた。流暢な日本語だなあとか関係ないことも考えつつ。

というわけで、といわれても小声で話していたせいか、こっちには殆ど聞こえてこないし。

つーか、この説明不足な感じ・・・なんかアニメに出てくるキャラを思い出す。

毎度思うのだがどうしてこいつらはこう・・・情報を小出しにしたがるんだろうか？

しかも出すのはいつも断片的かつ、中途な部分。

尚のこと不思議かつ興味を引くだけだと言うのに。

どうせなら何も言わないか、しっかりと理解できる最低限の情報くらいはくれても良いと思うのだが。

私がどういふことを詳しく聞こうとしたときにはすでに彼女は去っていったあとで・・・

やはりあのセリフはフラグだったか。

中途半端にーもといワケの分からんことを言って去っていく少女。じゃなかった。

少女。

「なんだってんだ？一体？」

私こと長谷川 千雨はただただ呆然とするしかなかった。

25つ目 とある生徒の心境模様（後書き）

ちらほら作中にも書いてるのですが、主人公は800年ほど生きてるので原作は殆ど覚えてないです。

ちうたんがオコジョについて詳しいのは二年前。彼女が小6年頃に厨二病に疾患していた頃、その当時やっていたアニメに影響されてオコジョが欲しくなって飼育法や捕獲法を調べる上で詳しくなった。ということ。

ちなみにオコジョは絶滅危惧種で飼育は研究か保護目的以外では許可されないそう。

保護と言っても曰ごろ食べている餌が野鳥や野鼠などの小型哺乳類らしいので寄生虫や雑菌的な意味で触るのが怖いですね。というか下手に手を出せば噛み千切られると思います。

指が。
*千羽から千雨に修正。作者の脳内では千羽と書いてチサメと読んでましたorz
ボケ過ぎた

26 目 風邪後の交渉（前書き）

あれ？

書いてたら結局ありきたりな結果に・・・ちなみに思いついた展開と言うのはオコジョとして学校につてことでした。が、主人公の性格的にこうなるだろうな～と思ったので没にしました。とはいえオコジョネタがないかといえ、あります。

オコジョと生徒のダブル職業で行こうと思います。

26 目 風邪後の交渉

「ううゝだるい、寒い、関節が痛い、喉がガラガラするうう。」

「大丈夫ですか・・・姉様？」

いきなりでなんだけれど、私は風邪を引いた。

くそう、ネギがようやくマホラに来る日だというのに。

全ての始まりが今日だというに。私と来たら・・・こんなことならとつと魔族化しておくんだった。

あ、でもなあ。

そうなるとこのまま身長が140くらいで止まったままということになりかねないし。

「大丈夫くない。なんもやる気沸かない。今日はキティと一緒に風呂はいる。」

「唐突に何を言い出すかと思えば・・・いつも入ってるじゃないですか。」

「ちがうう、キティに全身隅々まで洗ってもらうのぉー！」

「そ、それは・・・べ、別に良いですけど・・・キャラちがわないですか？」

顔を赤らめて、答えるキティ。

結構肌を重ね合わせているため、私の体の知らぬところなど無いというのに体を洗うくらいで顔を赤くするとはー！本当にえっちなものに耐性が無いキティである。

ふふふふ、まあそんな中々慣れないところもキティの魅力——という話は残念ながら置いておいて。

「キティ・・・なんかみずみずしいものが欲しい・・・」

「瑞々しいものですか？」

「・・・えーっと。リングは切らしてだし、ナシもみかんも無いですし・・・茶々丸っ！茶々丸っ！！」

ちなみに看病はキティ1人にしてもらってる。

真祖の吸血鬼ゆえに風邪を引いたことが無い彼女にとって看病と言うのは非常に困難な作業である。

おろおろしながら私を心配してる表情。

不器用ながらも私を甲斐甲斐しく世話してくれるその優しさ。

嗚呼、もう。

風邪を引いてよかったと思ったのは前世含めて今日が初めて。

ちよっとしたーごほ、ごほ・・・キティ・・・目が・・・目が霞んできたよーみたいな冗談でも真に受けるもんだから面白ー——じゃなくて、可愛いキティ。趣味が悪いと怒られましたけれども。

私も不老不死なので病気にはならないと思ったんだけど、スパ君談「真祖と同じくらいの再生能力があり、不老で死なないと言う点を除けば人間の肉体そのもの。魔族化した後ならばともかく人間のままならば普通に風邪を引く」とのこと。

とはいえ、再生能力があるので概ね寝てれば半日程度で治るとも聞いた。

ならばせつかくの看病タイム。

存分に楽しむしかないまい。

ちなみに私のキャラが違うのは風邪を引くと無性に甘えなくなるタイプなため。

「なんでしょうか、マスター。」

「なにか瑞々しい食べ物があったか？」

「・・・いえ。何も無いです。」

何か食べたいのですか？」

「姉様がな。」

「口移し希望だよお、キティ・・・ああ、キティの口移しで無いとダメだあ、私は死ぬかもしれないいいい。」

「だ、大丈夫です！！すぐにリンゴを買ってきて口移しで食べさせてあげますからっ！？」

ほ・・・本当に死んだりしないですよねっ！？」

「マスター、アリスの冗談でしょうから無視して大丈夫だと思います。」

どう考えても現状で死ぬような思い病気ではないですし。そもそもアリスは殺そうとしてもなかなか死なないでしょう。ゴキブリ以上の生命力でしょうから。」

「あれ？茶々丸って意外と私に冷たくない？」

「いえ、別に。気のせいでは？」

「なんか怒ってる？」

「いえ、別に。決して私の看病を“不器用でも愛らしいキティの看病を受けたいから茶々丸は何もしないでね”とアホな理由で断ったからとかじゃないです。・・・私だって心配したのに」

「ん？最後なんて？」

「・・・ぜんぜん怒ってないと言ったんです。」

「怒ってるじゃない。」

「いえ、別に。」

「怒ってるんでしょう？」

「いえ、まったく。」

「怒ってたりする？」

「いえ、微塵も。」

「正直になったほうが身のためよ？」

「正直に申しますと、リア充爆発しろと言いたくて溜まりません。ていうか、クマあたりに五体引き裂かれて死ねば良いのに。」

「聞きたくなかったわ・・・うん。」

「リンゴ、私が買って来ましょうか？」

「うん。無いならいいで・・・」

「あ、そういえば瑞々しいものがありました。」

「何？」

個人的にはナシ希望。でも無かったわよね？」

「ところてんです。」

「は？」

「のどごし爽やか、ところてんです。」

「いや、風邪の時にところてんは・・・ちょっと気分ではないわね。」

「のどごし爽やか、ところてんです。」

「のどごし爽やか、ところてんが好きなの？」

「・・・少し。」

ほんのりと頬を赤らめた茶々丸であった。

「姉様・・・どうです？調子は？」

「大丈夫。キティの口移しところてんのお陰で、全快よ!!」

風邪はと言つと一時間もすれば治ってしまった。

・・・まあいいや。

ちよつと残念だったりする。

もうちよつとキティに優しくされたかったです。

「さて、予想以上に簡単に治ったわけだけでも・・・さっそくネギ君の様子を見に行きましょうか？」

「あの坊やの様子・・・ですか？」

「ええ、今日来るって言ってたでしょう？」

「ああ・・・そういえば。面倒を見てあげるのはですか？」

「まさか。ネギも男よ。そうそう簡単に助けてあげてたらあの子のためにならないでしょ？」

むしろこつちから窮地に追い込むくらいはしてやらないとね・・・
ふふふふふふ。」

「また・・・悪巧みですか。」

「別にそれほど大したことじゃないのよ？」

クルト君からちよつと面白い話を聞いただけで。」

「面白い話？」

「まあキティがネギに会えば分かることよ。ついでにキティの入学準備も進めましょうか。」

「は？」

「ふふふ。」

とうわけで、私たちは校長室にやってきた。

「久しぶりね。このうち。」

「ワシをそんなフレンドリーに呼ぶのはおぬしだけじゃ。」

ぬらりひょん。もとい学園長が渋い顔で私たちと対面する。

「守護者、管理者のおぬしが・・・あのバタフライマスクだったとはな。」

「あり？」

「知ってるの？」

「・・・嬪殿からの。」

「詠春君には種明かししてなかったはずだけど・・・アル君から聞いたのかな。」

「そしてお主があゝの馬鹿の娘・・・いや、息子であることも知って

おる。」

「・・・それはどこからかしら？」

そのことを知ってるのはフェイとんのみ。もちろんフェイとんこのつちが繋がってるはずも無く。

クルト君はあくまでも今の私しか知らない。

私が英雄の息子であることは知っていても、大戦期に活躍したとか、マホラに住んでいるだとか。そこまでは知らないはずである。

逆にアル君たちは私が大戦期に活躍したとかマホラに住んでるとかそれは知っていても、私たちがナギの子であることは知らない。というかまだ生まれてなかったはずの人間なのだからそんな発想はまずありえない。

別にどちらか片方を知っているだけならば問題が無い。

この二つの事柄を“知りつつも”私を英雄の“息子”だと断言しているのが警戒を抱かせる理由だ。

私の背後で控えてる愛らしいキティも警戒の色を示している。

生まれてないはずの人間が過去に飛んでいる。それを信じている。

というのが問題なのである。いかに魔法世界と言えど時間移動魔法は存在せず、スパ君ですら使用できないのである。

ま、そもそも私は魔法世界の牢獄に要るってことなんけども・・・裏側も含めて知ってるでしょうし。

「そう殺気を向けられると老体には堪えるんじゃないのう。」

「全然そうは見えないのだけど？」

普通に座っているだけに見える。

一応、こっちの方が長生きしてるんだけど見た目でなんとなく貫禄を感じないことも無くもない。

見た目ってやっぱり多少なりとも大事だなあとか再認識する次第で

ある。

とはいえ、まあおそらく相手は内心一杯一杯だろうけどな。

「冗談はよしてくれ。お主・・・分かっててやっておるじゃろう?」

「内心の恐れを出さないように精一杯みたいだから、その努力に免じて気づかないフリをしてあげたんじゃないの。」

「・・・くぬ。可愛くないのう。」

「まあ見た目以上に生きてるからね。」

「そこまで知ってるなら、私がどれくらい生きたのかも推し量れるでしょう?」

「800年ほどじゃったか?」

「・・・ふむ。考えられる理由としては・・・しばらく前からこの辺の地下に住み始めたアル君かしら?」

「・・・さて、どうかのう?」

「とぼけなくても良いわよ。」

「・・・たく、あの男女。」

嘘を付いていやがったわね。」

「姉様、どういことですか?っていうか、姉様も男女かと。」

「イノチノシヘンは名前と会うこと・・・が条件じゃない。」

「おそらく、会うこと。それだけで十分なのでしょうね。」

「ツツコミのほうはスルーですか・・・」

「私の人生は丸見え・・・ってことね。まあ別にいいわ。本題に入りましょうか。」

まあ色々思うところはあるが瑣末なことはさておいて。

「それもそうじゃのう。」

「今までそちらから干渉することは無かったと言つのに、どうい風
の吹き回しじゃ?」

「最近、やたらと周りが騒がしいわよね?」

「・・・まあ隠しても無駄じゃな。

そうじゃ。相手は関西呪術協会——」

「別に相手がどうか、理由がなんだとか。

そんなことはどうでもいいの。

ただこちらから提案よ？」

「提案？」

「そう、提案。悪くない提案よ？」

「・・・聞こう。」

ヒゲをさすりながら聞く姿勢をとる、このうち。

「キティを学園に入りたいの。それと私もね。」

「ね、姉様ツ!？」

キティがイキナリの私の言葉に驚く。

まあ今更学校とかね？

「何故じゃ？」

「ネギのお守り・・・かしら？あとは単純にキティとの学園生活を
楽しみたい・・・というかこっちがメインね。」

「・・・色々とツツコミたいことはあるが、それで？

今までこちらに干渉するなど言いつつもそちらから干渉してくるの
じゃ。

それなりの詫び・・・と言っては難だが対価は貰えるのじゃろくな
？」

「ええ、だからその関西呪術協会とやらの嫌がらせの沈静化を手伝
つてあげるわ。」

「ふむ・・・それだけじゃちと弱いのか？」

既に人手は足りとるし、万が一に備えると言うのもタカミチ君やワ
シもいる。必要性がそれほどあるというわけでもない。」

「お姫様。

近衛このか嬢の護衛も兼任してあげましょう。すくなくとも関西との仲が良くなるまではね。

これでどうかしら？」

「それものう？」

すでに優秀な護衛を付けておる。」

内心喜んでいくせに、食えない爺である。

私達クラスの護衛となればそれこそ国家予算並みの値段がかかって
も良いレベルなのだ。

それをちよちよと学校の生徒名簿を弄る。それだけで世界を相手にしても守りえる鉄壁を手に入れられるというのに。

まあこれを言っても、別に本当に全世界を相手にするわけではないから必要ないが。備えあれば憂いなしという言葉もある。

このつちにとつてはむしろ美味しい話だろう。
その部分をおくびに出さずより沢山の交換条件を引き出そうとしてくる。

あわよくばマホラの土地の使用料の割引を願っていそいだ。
とはいえた。

そうそう思い通りになってやるつもりは無い。

「あら？」

なら別に良いわ。

マホラでなければダメと言うことも無いし。

普通の学校に通うから。」

「む・・・まあそれでも良いがのワシは。面倒がなくなるじやろっし。」

「ちなみに戸籍が無いとか、他の学校に入れないように根回しをするとか。

無駄よ？

戸籍はまあ大きな声ではいえないけれどもお金を積みさえすれば買えるし、根回しもこちらが上手よ。ていうかそんなことをしてるのが分かったら、貴方・・・潰すわよ？」

キティとの楽しい学園生活。それを潰そうとするやつは何人であろうと叩き潰すまでっ！！

「うぬう。」

「最後にもう一度だけ・・・“お願い”するわ。私たちをこの学校に入れて？」

「・・・ふう、良からう。」

好きにせい。」

「あら？」

良いの？」

「白々しいことを言う出ないわ。」

こうしてマホラ学園に入学が決まった私たちだった。交渉が終わり、帰ろうとした時。

「姉様、この魔力は・・・」

「ええ、まずいわね。」

ネギがこの部屋にやってくるっばい。

久しぶりに会うネギ。

自分で修行はちゃんとしてただろうか？

ちゃんとお風呂は毎日入ってるだろうか？と声をかけたくなるが、この姿。もといアリス・スプリングフィールドとしてここにいるのは不味い。

アーティファクトを呼び出し、装着。

女体化し、離着。

黒髪に染めて、準備完了。

しばらく会って無いし、胸が多少膨らんでる今の私ならばどこからドウ見ても可憐な女の子。

ネギは私が男だと言うのは知っているので、あとは他人の空似だつてことで済ませることが出来るはず。

当初は私はマホラ学園に通うつもりは無く、ネギのお守りがてらキティが学校に行きそれに私もオコジョの姿で付いていくと言つ予定だった。

が、どうせならキティと学園的な楽しさを共有したいと思つた結果、考えたのが今の姿である。

ちなみにこの姿の時は名前をリース・マクダウェルとした。
アリスをもじって名字はキティのを貰っただけである。

27 目 薬味の勘違い（前書き）

久方ぶりのちよつとシリアス

27つ目 薬味の勘違い

「なるほどのう。修行のために日本で学校の先生を。それはまた大変な課題を貰ったのう・・・」

このつちが目の前のネギに対してそんな白々しいことを言う。よく言うわ。

わざわざこの日のためにクラスを替えて、ある意味問題児ばかりを集めたくせに。

そもそも先生をやるだけなら、マホラ学園でなくとも魔法の――ウラの事情を知っている学園であればどこでも良いのである。絶対にウラから手を回したに違いない。

「学園長先生！これは一体どういうことなんですかつ！？」

と、ツインテールのオッドアイ娘。

大戦期にちらつと見たアスナ姫に似てるなあ――っと思っていると。

というか、人間のオッドアイってかなり珍しいよね。はい、そうですね。キティもカラコン入れてみる？いつもとは違った可愛さが・・・。遠慮しておきます・・・コンタクト・・・怖いですし。ぷくく。何がおかしいんですか！？別に・・・かわいいなあと思っただけよ。とキティとひそひそ話をする。

「まあまあアスナちゃんや。」

とこのつちが呼んでいるところを見ると、その目の前のオッドアイはアスナ姫本人のようだ。うむ。

世界って広いようで狭いなあ。

などと感慨深いものを感じていたら、話がとんと進んでいた。

「ではさっそく、今日からやってもらおうかの。指導教員のしずな先生を紹介しよう。入ってくれ。」

キイツと扉が開きそこからミラクルボインちゃんがやってきた。
ぼいん、ぼいん。

「姉さーリリース。やっぱり巨乳がいいんですか？」

「は、はひっ!？」

あ、いや、別にそういうわけじゃないのよっ!？キティっ!？」

視線が胸に行っていたのを感じ取ったらしい。

キティが怒り半分、自分の胸に対する嘆き半分の複雑な表情で睨んできた。

ふへへへ、役得役得。

ラブコメ定番、他の女の人を見て、自分を好いてくれてる女性がヤキモチを焼く!

これを経験したいがためにわざとボインちゃんの胸に露骨な視線を向けたのである。

バカなキティめ。

私はキティの体にしか興味が無いというのに。

というと生粋のロリコンと取られるかもしれないが、違う!と断言しておく。

幼女が好きなのではない。キティが好きなのだ!!

にまにましている私の顔を見て、キティは察したらしく。

「・・・あっ・・・くそっ。」

悔しそうな顔をしてそっぽを向きました。

もちろん頬は赤い。

嗚呼、照れてるキティもかわゆいよお。

ちなみにわざとにも関わらず、私が慌てたのはキティの目が潤み始めたからだ。

今度から胸関係で弄るのは自重しよう。

「よろしくね？」

「あ・・・ハイ。」

ボイン改め、しずな先生とネギが挨拶をしている。

ネギが若干、上の空なのはこちらをちらちら見ていることに起因しているのだろう。

先生として頑張ろうとマホラに来たら、犯罪者として捕まった自分の兄と似ているリースという人間と、その兄と仲が良かった（らぶらぶだった）キティと一緒にいる。

色々と気になるのは当然か。

そしてさすがの私もツツコマざるをえないのだが、扉とネギの距離はそれなりにあったのにも関わらず、なぜネギはしずな先生とぶつかり、あまつさえその胸に顔をうずめたのだろうか？

もちろんのことネギはそこまでマセガキではない。

本来だと・・・えーっと何歳だっけ？

とにかく本来の歴史とは違い、ネギは多少歳をとっている。

12歳というそろそろ第二次成長を始めるーいわゆる多感な時期であるが、それでもネギは英国紳士。

飯にだ。じつは内心でおっぱい大好きーっと思っていようが、それを行動に移すような子ではない。

しずな先生がわざとぶつけたというのが一番しっくりくる。
まさかシヨタコン・・・なのか？
それとも自分のお胸はここまで凄いですよ？という誇示？

そういえば聞いたことがある。

群れの仲間内で自身の力の強さや立場を定期的に誇示するという習性を持つ動物がいるとか。

犬ならばマウンティングだし、猿の仲間でもそんな行動があった気がする。

なるほど。

きっとしずな先生は今回新入りとなるネギや、ついでとばかりに新しくこの学校に入学する私とキティにその胸を誇示し、果てには「貴方達のおぼこいオッパイ程度では私には適わないわっ！だから、ちゃんと身の程知りつつ学園生活を送りなさいよ！」という彼女なりの教育的指導と見た！！

すなわちネギと私たちにマーキング行為を見せ付けたと言うわけである。

そうとしか思えない。

重ねて言うがドアとネギは結構、はなれているのだからして。
すなわちネギはダシに使われたということである。

「私のオッパイの大きさは分かり易く言うならば、子供の頭をうずめることが可能くらいよっ！！」と。
やられたっ！！

先制点を与えてしまったのである。

何よりも胸の無いキティの目の前でそのような振る舞いをするとは・・・この女。

万死に値する。

きつと目が潤んでいるに違いないと、ちらりとキティを見ると。

「っ!？」

キティは動じていなかった。

なぜ？

ここまでされて何も思わないはずが・・・

むしろこつちを気にして何やらアホの子を見るような目で見てくる。

「姉さーじゃなくて、リース。ちよつと殺気を抑えてください。」

「

「でも、キティ・・・彼女は貴方の胸をバカにーーげふうっ!？」

「胸が何だつて？」

「あ、いや・・・なんでもないです。」

「で、なぜあの女に殺気を向けたのですか？」

もう少し強かったら、気絶してましたよ？」

「・・・だつてそれは・・・」

かくかくしかじか。

「はあ・・・久しぶりに思い込み癖が・・・というか姉様。冗談ですよね？」

「何が？」

「はあ・・・きつと疲れてるんですね。そう信じたいです。いや、ネギと久しぶりに会えたからテンションが上がっているのでしょうか？何にせよ、黙つててください。」

「え・・・つと？キティがそういうなら別に。」

なんだつていうのだ、一体。

後日、何でなんなアホなことを考えたんだろう？と顔を赤らめることになるのはまた別の話。

「このか、アスナちゃん。しばらくはネギ君を2人の部屋に泊めてくれんかの？」

「ええっ！？なんでっ！？」
「なんで私達がっ！？」

「まだ住むところ、決まっておらんのだよ。別に問題ないじゃろ？」

問題大有りだと思う。

彼女達は中二。ネギは小六。

歳の差はたった、2年しかないのだ。

「仲良くしなさい。」

のこのつちの一言で締められた。

「それじゃ、丁度良いし私たちも今日から通いましょうか。あ・・・
そういえば茶々丸も通うかしら・・・まあいいか。あの子に聞いて
からでも。」

茶々丸のことを忘れてたぜ！

話が終わったので皆が出て行く中、ネギと私達は残っていた。
ちよつとした沈黙の後、キティがまず最初に口を開いた。

「どうしたんだ？ぼうや？何か言いたいことがあるのか？」

「よくもそんな白々しいセリフが吐けますね、エヴァンジェリンさ
ん。」

「？」

ネギの緊迫した声で空気が変わる。

キティは首をかしげた。

そんなキティもまた可憐である。

このつちは空気を呼んで静観。

「貴方がアリスを奪ったくせに……」

「ん？」

どういう意味だ？」

まあ私はここにいるんですけど。

……それは置いておき、どうやらクルト君から聞いたとおりのようだ。

ネギは元老議員直轄の部下から何かを吹き込まれてるらしく、私が逮捕されたのは「全てキティが原因である」みたいな認識になっているらしい。

もちろんそれを知っていれば阻止したのだが、かなり上手い事やつたらしくクルト君もそのことに気づいたのは最近だとか。ちなみに私はたまにウエールズに帰って様子を見ただけなので全く気づかなかった。

元老議員もあわよくば自分達を殺しうる目の上のたんこぶを英雄をぶつけて潰してやりたいとか考えているのだろう。

「僕は貴方を許しません。

絶対に……貴方を捕まえて、アリスの……兄さんの無実を晴らします。」

ありありと見える怨念の情。

「ほう？」

私に勝てるか？」

「勝つために努力をしてきたつもりです。」

「たかだか10程度のヒヨッコが驕るなよ?」

キティはキティでちよつとイラついているようだ。

いつもならこの程度で怒る事はないのだけど、全く見当はずれの――それも内容も内容だ。

殺気もあふれ出てきた。

まあその殺気はネギに――というよりはネギを通して元老議員に向けているのだろう。

勢いあまって殺しに行っちゃダメだからね?

キティに余計な罪が重なるし、計画自体も失敗しかねないから。

というかキティに敵対してるとしか聞いてなかったんだけど思いのほか根は深いようだ。

ぬぬぬぬ。面白がつてる場合じゃなかったかな。

何よりもキティに不快な思いをさせてしまったのが嫌だ。

「見たところ、坊やが私に勝てるほどの力を持つてとは思えないが?」

「ええ、それは理解してます。僕の“元”先生ですし、アリスとの修行も見えましたから。」

“元”を強調するネギ。

「この場で殺されるとは考えんのか?」

「僕はどうも英雄の息子……ということで大切にされてるみたいです。」

ここで僕を殺せばエヴァンジェリンさんもただではすみませんよ。すくなくとも連合国は敵対するでしょうね。」

「こざかしいことは考え付くようだな。」

さらに殺気が増す。

多少腕に覚えがある傭兵でも脂汗をかくほどの圧力の中、ネギは飄々としている。少なくとも表面上は。

「・・・やっぱりその程度なんですね。」

「・・・何がだ？」

「幼い時から兄さんと貴方を見てきました。」

少なくとも僕が見ている限りでは兄さんと仲が良かった。」

「それで？」

「まだ若輩の身です。間違ってるかも知れませんが少なくとも見ている限りでは恋人。そんな言葉すら当てはまるような気がしてました。」

そもそも・・・僕、貴方が嫌いだったんですよ？

ずっと一緒に居てくれた兄さん。

その兄さんはずっと一緒にいて、僕よりもずっと兄さんの笑顔を知っていて、ずっと・・・嫉妬していました。」

「・・・。」

「兄さんがオコジョにされて収監されると聞いたとき、まず第一に貴方のことを思い浮かべました。きっと貴方なら例え犯罪だろうがどこだろうが難だろうが兄さんを救い出してくれるって。」

そ、そんなことを思っていたらっしゃったのですね？ネギや。

というかブラコンくさいね。

外見的にはシスコンといっても良いかもしれないけど。

なんか照れるなあ。

「でも貴方は兄さんを助けてくれなかった。」

それどころか助けようともしてくれなかった。

兄さんが消えたと同時に貴方も逃げるようにどこかへ行ってしまった。」

「別にどこで何をしようが私の勝手だろう?」

「ええ、そうですね。」

それからです。

色々な人が来たのは。

口々にそういう人達が闇の福音が悪いとか唆したとか、陰謀だとか言っていましたけど・・・今日の日。

今日この日までは全くもって信じてませんでした。

いえ、一応彼らが言っているのは本当かもしれない・・・とは考えてはいたけど、それはあくまでも客観的なことできつと兄さんのための何かの結果が、兄さんが収監されたということだと・・・信じていたんです。きつと何か理由があるんだろうと。

いつかは助けにいくはずだって。

その時のためにちよつとでも力になろうと。一生懸命修行を続けてきました。」

「・・・信じるのは自由だからな。」

「でも、違いました。」

今日貴方に会って、それが違つと分からされたました。」

「・・・うん?」

ネギはゆつくりと私のほうを振り向いた。

あれ?

ずーっと私のことはシカトだったから、てつきりキティのことで頭一杯になつてるかと思つただけけどそうでもないみたい。

「貴方は“代わり”を見つけて満足したんですね。」

兄さんーアリスではなく、アリスに似た女性を見つけて見てくれだけ繕つて。

面倒なことを全て投げて・・・貴方はー」

この言葉で一気に殺気が吹き上がった。

あふれ出る膨大な魔力に建物が軋む。
魔力に共鳴して世界樹がざわめく。

ネギを守るべく静観していたこのつちが立ち上がるが間に合わない。
私も間に合わない。

重ねて言うけど、私、弱体化中なので。

そもそも間に入ったらいつぞやのことを繰り返すようなもので、そのときにキティに説教を受けたことを暢気に思い出したりもしていたり・・・などと言っている場合でもなく。

一般人に影響が出ないように隔離結界を展開するだけで精一杯。というかこれだけでもかなりの成果だろう。

一撃が重くぶち当たり、ネギが壁を4、5枚ぶち抜いて吹き飛ばされる。

壁が10枚あったら10枚はぶち抜いていたであろう勢いで学校の外へ吹き飛ばされたネギ。

ヤバス。マジヤバス。

死んだんじゃないっ！？

もし死んでたらこんな状況を作り上げる原因の一端を担ってる私としては正直、100年は気が滅入ること間違いナシなんですけど！？

ネギの元に駆けつけると、ネギは生きていた。

久しぶりにあらゆるものを視認する魔眼。もとい天使眼でネギの体を見ると、肋骨やガードに使ったであろう腕が折れている以外は問題なさそうだ。

軽症ではないが、キティの結構本気パンチを受けてこの程度で済んでいるのは中々である。

師匠も作らず独学でここまで行ったとすればさすがと言うべきか。
ネギは痛みに耐えながらも立ち上がり、ぶち抜かれた壁の奥のキテ

イを睨みつけて一言。

「・・・僕は絶対に貴方を許しません。」

これはちよつとやばくない？と思い、種明かしをせざるをえまい。もともとネギ経由で情報が漏れることを危惧したんだがそうも言うてられない。

ということでネギの治療をしつつも本当のことを話そうとしたのだが。

「ねーリリース、私は大丈夫です。」

「き、キティ。」

キティがいつの間にか私の隣にいた。

28つ目 女子の苛めは陰湿って聞くよね？

念話で真意を聞くことにする。

『さすがの言葉にちよつとキレかけてしまいましたけど・・・大丈夫です。姉様の代わりだなんて私が作ると思つているんでしょうか？先ほど坊やが自分で言つたとおり、坊やは人を見る目がまだまだですね。若輩極まりないです。』

『結構・・・の間違いじゃない？殺気が尋常じゃなかったわよ？それに、さすがにこれは・・・』

『真祖だから分かります。』

ネギはどうやら寄生されてるみたいです。』

『寄生？』

『恐らく、諜報用の虫かと。今、種明かしをするのは危険です。姉様の目で太ももの付け根あたりを見てください。』

『・・・これは・・・なるほど。』

『種類は分かりますか？』

『ええ、もちろん。これ、品種改良で作つたのは私だし。ううむ。どつという経路で元老議員に渡つたんだか・・・多分偶然でしょうけど。』

『どついつたものなんです？』

『200年くらい前かしら？』

キティを外に出して100年近くは経つた頃なんだけど、キティが心配だね？』

『ま、まさか？』

私にそれを？』

『それこそまさかね。』

そもそも真祖の体に入り込める寄生虫は現存しません。』

『えとそれじゃあ・・・』

『その頃キティは居城を構えてたでしょう？』

『その周りの生物に満遍なくこいつを・・・ちよつとね？』

『それで私の様子を見ていたってわけですか。』

『うん、まあ・・・その、別に覗くつもりじゃなくてね？』

『分かってますよ。』

心配してくれたんですね。ほんとにもう。どんだけ私のこと好きなんだか。』

『言葉で言い表せないくらい？』

『べ、別に言わなくても良いですからっ！！』

『はいはい。ふふふ。顔、赤いわよ？』

『う、うるさい！！』

・・・で、取り除けるんですか？』

『正直言つと半年くらい無理かも。下手したらそれ以上。』

『は？』

『キティの監視をする必要が無くなったから当然でしょう？虫下しは年末の大掃除の時に捨てたと思う。』

それに、こいつは魔法で取り除けないように魔法無力化能力をつけてあつてね？』

外科しゅぢゅつ・・・ちゅぢゅつ・・・しゅぢゅち・・・・・・・・。。』

『・・・・・・・・ぶつ。』

『わ、笑うなあっ！！』

ちよつと噛んだだけじゃないっ！！』

『はいはい。それで、しゅぢゅつ・・・。』

しゅぢゅつでしか取り除けないってことですね？』

『人のこと笑えないじゃないの。・・・噛んだことを無かったことにしたいならしいでいいけどね。気持ち分かるから。』

お互いに苦手な発音だったってだけの話である。

『虫に魔法無力化なんて・・・良くもまあ作れましたね。』

『それはさておいて、この虫を除去するには手術・・・あ、言えた。』

『そんな嬉しいんですか？』

『う、うるさいっ!!』

『いつもとは逆転ですね。立場。』

『やかましいっ!!とにかく話を進めるわよ。』

『はいはい。』

うぐぬっ!!

その余裕、後で後悔させちやる。

『それで、手術と虫下しの方法があるんだけど、手術は無理。』

『どうしてですか？』

スパ君あたりなら可能そうですね。』

『出来るかどうかなら私でも出来るくらいには簡単。一応、並みく
らいの医者くらいには医学知識もあるから。』

『ではどうして？』

『どうも魔眼で詳しく見ていくと、調整を受けてるみたいだね。』

『調整ですか？』

『名づけるとしたら調整監視寄生虫かしら。』

モデュレット・オブザープ・パラサイター

『厨二・・・ぶぶっ。』

『う、うっさいっ!!』

なんとなく厨二なことを言いたくなったのである。
そんな時あるよね？

『とにかく、この虫は調整を受けてるみたいで私が知っていた時と
は違うみたい。』

毒針と受信器官？みたいのを持ってるみたいだね。』

『毒針と受信器官・・・ですか？』

『多分、この虫を通して手術の気配や音を感じ取ったら宿主^{ネギ}を殺すように元老議員側で合図を送ることになってるってところかしら。』

『・・・取り込み防止ですか。』

『ええ。真実を知ってる可能性があるこのつちを警戒して、本当のことがばれた際、自分達に厄介な敵を増やさないように・・・保険つてところね。』

私が作った時はあくまでも品種改良であって、寄生虫の根本にある本能。「宿主が死ねば自分も死ぬために、殺すようなことは無い」という本能^{ルル}を破るような能力は無かったはずだから・・・後から遺伝子改良や移植などで付け足されたのでしょうか。』

『良い気分ではないですね。』

『まあね。となれば虫下しが必要なんだけど、念のために持っていた虫下しは捨てた上にもう使うことは無いと思ってる？』

『調査法もうる覚えで・・・』

『スパ君は知らないのですか？』

『虫自体、私が作り出したものだもの。既存のならばともかく、知るはずも無いわ。』

『つまり・・・虫下しを再度作るのに試行錯誤する・・・その時間が半年くらい、と？』

『そのとおりです。魔眼で成分や何が効く、というのは視認できるんだけど効く成分を持つ物体を探すのに苦労するわけで・・・』

『とりあえず、種明かしは先になるということですね。』

『うん・・・キティには悪いんだけど・・・』

『問題ないです。』

『今更1人に憎まれようと。』

『でも内容が内容でしょう？』

『・・・不快ではないというわけではないですけど・・・まあこれはクルト坊やの見通しの甘さと姉様のアホさ加減が引き起こしたことです。その分甘えさせてもらえれば・・・その・・・それで。』

『ふふふ、りよゝかい。』

なんとか話が纏まった。

ネギはこの間・・・30秒ほどだがずっとキティを睨み続けていた。どうもキティの返事を待っているようである。

律儀な子だな。

そんなネギに。

「しまったことか。」

というキティ。

このふてぶてしい物言いも原因のひとつだったんじゃないかなあ・・・
・と思わないでもない私だった。

というわけで、話が纏まったところでさっそく。

教室、2-Aに来た。

しずな先生は何があつたのか？と私たちの雰囲気を見て不思議そうにしている。

分かるよね、さすがに。

ちなみに来るまでの間、会話は無い。

「ああ・・・えと、ネギ君・・・だよね？」

「は、はい。」

戸惑ってるネギが私の言葉に返事をする。

私も意外と演技が上手いんじゃないだろうか。
いかにも初対面っぽいぞ！！

「盾は解いておこつか。」

「盾？」

しずな先生が疑問の声を上げる。

ネギも不思議そうに私を見て、あっツと声をあげて気づいたようだ。

「何のお話？」

「出たな、おっぱい魔人め。」

「はい？」

「あ、いえ、なんでも。」

あぶないあぶない。ついつい心の声が出てしまった。

というか、すごく・・・大きいです。

しずね先生つてどうしてこんなに大きいんだろうか？

純粹になぜなに知的好奇心が・・・今度食生活を聞いてみよう。

それともシリコンかつ！！シリコンなんかっ！？

ちなみに余談だが、世の男性の9割以上が巨乳が好きだとか。

少なくとも嫌では無いということである。

キティがギンと睨んできた。

ごめんなさい。

ネギは盾。もとい常時展開していた風障壁を解いた。気づいてくれたようでは何より。

あんなもん展開してそこら中歩いてみる。

何の拍子で魔法がバレルか・・・たまったもんじゃない。

「あ、ありがとうございます。」

「いえいえ。ではお先にどうぞ。」

「は、はい！」

「なんのことか分かりませんが・・・出席簿です、ネギ先生。」
「は、はいっ!？」

はいはいと返事がお元気なようで。

ネギは変わらず素直だなあ、と思いつつ。

「お、おはようござわぶっ!？」

黒板消しがドアを開けたとたんに振ってくる。

わざわざチョークをしつかり練りこむという陰湿なサービス付き。
あれは食らいたくないなあ。

「なるほど・・・これが噂の黒板消しブービートラップかあ・・・
ごほごほっ!なるほど、ひっかかっちゃったぷろっ!？ああああっ
!？あふんっ!？」

ドア前の脛辺りに引いてあった紐に足を引っ掛けて転倒。

転倒と同時に水入りバケツが振ってきて、頭に見事にヒット。引つかぶる。そこはかとなくカビ臭いのは掃除用のバケツだからだろうか？汚い。

ネギはローションでも塗ってるのかな？とも思うほど、コケた勢いそのまますると滑って教卓に激突する。

頭を強打していた。バケツを引つかぶってるので鼓膜が心配だなあと思いつつ。さりげなく風障壁でネギの頭を守ってあげてたキティ。優しいなと生暖かい目で見るとキティはそっぽを向く。ネギは不思議そうにしてた。

やっぱりキティは優しい。

そして、悪辣な嫌がらせだと思わずには居られない。

正直、どこの“ごくせん”やら“GTO”やらに迷い込んでしまっ

たのだらうか？と思う。

ハンマーセッション

衝撃授業とか必要になるのかな？

不良生徒ばかりなのかなあと思い、今更だけど女子の苛めは陰湿だと聞く。てことは陰湿なやつらの巣窟である女子中学校とか・・・
竜王の巣よりも怖くないかな？

苛められたらどうしよう？とガクブルしていると。

こどもーっ！？とかきゃーっ！とか可愛いつ！！だとかの声が響き渡る。

一名は冷静に「あ、ありえねえ・・・ありえねえだろっ！？マジかっ！？なんで子供？労働基準法仕事しろよっ！そういうのが許されるのは“ばにぼに”の世界だけだろ・・・いや、魔法少女リリカルなのはとかじゃ普通に9歳くらいで職を持つてるヤツもいたし、問題ないのか？いや、あれはアニメの話で現実とは違って・・・あれか？ということはあるか？学園の教師達は現実とアニメの区別が付いて無いということに・・・やっぱこの学園はどつかオカシイ・・・つか、あのブービートラップ郡は誰が作ったんだよ・・・見事なまでに計算されつくされてるし、そんなもんHR前に仕込むとか・・・無駄に早起きしたのか？というか下手したら停学もんだぞ。それを見てしょうがないわね、って感じで見てるしね先生も大概だが・・・あれ？よその中学もこんな感じなのか？そういうものなのかっ！？ま、待て待て・・・飲み込まれるな。飲み込まれたら終わりだぞ。私は・・・私だけは常識人であるんだ。飲まれるな・・・あれだ。きつと夢だ。なんだ、ただの夢か。よし！この言葉で私はあと半年は頑張れるっ！！」と、つつこんでいた。

苦労してますね。

というかその内容に少しだけ涙を流す私である。

「さて、その子が新しい貴方達の先生よ。さ、自己紹介してもらおうかしら。」

しずな先生が纏める。

イタズラの件とか流して良いの？

そういう緩さが陰湿ないじめに繋がっていくと私は思っただっ！！
ネギもちよつと涙目ですよ？

なにげにこの人酷い人なんじゃないかなあ？と思えてきた。
ふん。所詮巨乳でしかないということか。

「姉さーリリース、巨乳に恨みでもあるのですか？」

「いや、巨乳というより、なんとなく雰囲気的に気に食わないというか・・・」

こそこそと話し合う私達。ま、そんなに深くツツくことではないから気にしないでね。

「あの・・・僕は今日からこの学校でまほ・・・じゃなくて英語を教えることになりました。

ネギ・スプリングフィールドです。

三学期の間ですけど、よろしくおねがいします。」

わーーーーっ！！と沸く教室。

そんなにうれしいことかなあ、と思う。

別に嬉しくないと思うけどな。

女の子からすると嬉しいのかな？と思ってキティの方を見ると、キ

ティは普通の表情。

特に何も思っていないようである。

あれ？

ふむ。

このクラスが特別ってことなの？

ワケが分からない。

ていうか、魔法って言いかけてたよね。本当に大丈夫なのだろうか。お兄ちゃん心配です。いや、今はアーティファクトで女体化した後だからお姉ちゃんか。ややこしいな。

「先生、そっちの2人の子は転校生？」

なんか頭を後ろの方でぎくばらんに纏めてる・・・パイナップル頭の中二にしては背の高い女子がこちらに唯一気づいてくれた。

正直、この空気の中どう入っていか迷ったので、そっちから振ってくれるのは嬉しい。

というか助かる。

落ちてる100円玉を拾いやすくなる呪い――いや、祝福を付けておこう。

副作用として100円玉を見るとどんな状況でも拾いたくなるという習性が付いてしまうが、まあお金増えるし、良いんじゃないかな？

教室の黒板前まで行く。そして自己紹介。

「私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル・・・ええ・・・まあ、あれだ・・・よろしく。」

少し頬が赤いキティ。

照れ屋のキティに皆からの視線を一身にというのは辛かったかも。ぶっきらぼうになりつつあるのは照れて、他に何も言えないってことだろう。

「私はリース・マクダウェル。今日からこの学園に通うこととなりました。」

以後、卒業まで。どうぞよろしくしてくださいませ。・・・あ、いじめはノーサンキューです。」

といって、貴族の子女も真つ青なくらいに見事な礼を取る。

ふふ。今日この時までどんなキャラで行こうか迷っていたが、良いとこのお嬢さんキャラで行こうと思う。

最後の一言で台無しだ？

ばかな。何を言う。

これで、親しみが醸し出たはず。

お高く留まってないんですね？ 的なことがユニークに伝わったはずである。

実は8割方、切実に望んでいる・・・なんてことはないからね！！

帰国子女だーっ！とか綺麗な黒髪だとか可愛すぎるとかありきたりな感想を頂きました。

ボキャブラリーが貧相なのね。とか思いつつ、私は笑顔を振りまくのであった。

いじめられないためにも、第一印象は大切である。
なんてことは思っていないんだからね！！

28つ目 女子の苛めは陰湿って聞くよね？（後書き）

ちなみにですが寄生虫の「宿主を殺すことは無い」という本能は正ルしい宿主に宿った場合で、もし本来宿るはずの無い生き物の体内に入った場合、寄生虫は死ぬか暴れるかのどちらかです。（もちろん例外はあります。）

死ぬ場合は影響は無いのですが、生物の抵抗力に打ち勝って死なずに体内に入り込んだ場合はすみよい場所を求めて暴れたりします。いわゆる、寄生虫症ですね。

この場合、外科的手段で取り除くか、薬で殺すか、寄生虫の寿命が尽きるかを待たないといけません。

皆さんも寄生中症には気をつけてくださいね？

むやみに野生動物に触らない、フンなどが入り混じった物を触れたら手を洗う（公園の砂場など）、寄生虫が存在してるか分からない動物を食べる場合十分に火を通す。などが対策ですね。

29 目 リア充爆発しろ！（前書き）

タイトルは作者の主人公に対する気持ちです。死ねば良いのに。というか我ながら何故こんな・・・こんな忌々しい主人公を作ったのだorz

それとしない先生の名前とヒロインの名前を間違っていました。なんという初歩ミスかorz

29 目 リア充爆発しろ！

いじめを心配した私だったが、特別苛められるということも無く。マホラに転向して早くも1週間が経過した。

初日は酷く騒がしかったのだが。

まずネギが始めて2・Aに来た後、早速授業が始まったわけであるが・・・（ちなみに私とキティの席は隣同士で一番後ろの窓側。）ネギは身長が10歳の時とあまり変わらない。もといチビである。結果、背伸びをしつつぶるぶる震えてる小学生が懸命に黒板に文字を書こうとするという構図が出来上がった。

上のほうに書いて見やすくするという気遣いぐらいは出来るように兄としてはーいや、今は姉か。でも、本来は兄なのだし兄というだけでも構わない気もするが、やはりここはーまあどっちでも良いのだが、とりあえず以降は姉としよう。

姉としては小6でここまで気遣いが出来るんだぜ！と誇らしい思いである。

約一名、気持ち悪く身もだえしてる委員長とか呼ばれてた金髪少女がどこから取り出したのか、やたら装飾華美な椅子をネギに差し出した。

ネギはありがとうございますと言って遠慮なく土足で上がってるけど、確かその家具って高級ブランドの一点物の一つだったような・・・ちなみに高給家具に詳しいのは私の家の家具は全て高級家具だからだったりする。

材木はマホガニーかな？

一般に言われる高給木材というのは重厚な色合いや木目の複雑さ、

硬さなどで判断される。

もっと簡単に言えば広葉樹林がそれである。

樫や桐、オークやブナなどがそれにあたり、伐採できるほどに成長するのに100年かかるものがあつたりと成長するのに待つ時間が時間というのも相まって価値が上がってる。

木を巡る問題で抗争が起きるほどに価値は高い。

そんな木で作られた家具を惜しげもなく足蹴にするとはネギの無知もさることながら（小6くらいの男の子にとっては無理も無い）、委員長と呼ばれた彼女の成金振りが良くわかる。

ま、所詮家具は家具。使われてこそその本懐であり、その使用意図は個人の勝手だ。

どうこう言うつつもりも文句を言う筋合いも無いのだけでも・・・もう少しなんか・・・こう。

使い道が無かったのかな？とちょっとだけあの椅子に同情するのであつた。ああいった家具は基本的に職人が作るものであり、一つ一つ職人の技術の粋が込められている。

別に学校の椅子を使えば良いですよね？

そして授業中。

なんか知らんけど視界の端にひゅんひゅんと白い物が飛び交っていた。

もちろんであるけれど私に見えないわけも無く。

消しゴムを千切った物であるのはすぐに分かつたんだけど、なぜにそれがネギにぶち当たっているのだろうか？

これがドラマなどで目にする新任いびりというもの？

女子校って怖い。

そしてそれをしてるのがアスナちゃっばいということ。

なぜに君がネギを苛めてるの？

前に見たのはかれこれ10〜20年？

それくらい前の時なのだが、ナギは一体どういう教育を彼女に施したのだろうか？

いや、ナギが育てたからこそこんなお転婆娘になってしまったというのか？

というか、当ててる内にエスカレートしたのかヘアバンドを使ってパチンコの要領で消しゴムがぶち当たる。

私の隣では「あの程度、見ずとも避ける・・・馬鹿者が。」とキティがぼやいていた。

自分の弟子に当たるネギがあそこまで不甲斐ないとそうなるよね。

その後はさすがに気づいたネギがアスナちゃんに抗議し、アスナちゃんが反抗。それを見かねて？ネギを擁護した金髪成金委員長。

結果、委員長とアスナちゃんが取っ組み合いのケンカになってそのまま授業は終わってしまった。

そこは止めるべきでしょう？ネギ？

教師として喧嘩する生徒を止めることも出来ないとは不甲斐ない。さっきまでの誇らしさがどこかへ行ってしまった私であった。

12歳だししょうがないか、とは考えない。

仕事として請け負った以上、責任があるのだから。

出来ないならば端から受けなければ良いだけの話である。

そのことを説教してくれる人はいないだろうか・・・と考えつつ。

さて昼休み。

ネギに付いていこうかな？とも思ったが付いていったところで私が声をかけられるわけも無い。

初対面ということになっているのだし、私の見た目はアリスそのものである。黒髪に染めてるせいで多少のごまかしはあれど顔立ちが

変わるわけもなし、気まずいだろう。それに何か口を滑らしてネギが何かに気づき、それに気づいた寄生虫を繰る人間がネギを殺す。なんてことになったら目も当てられない。

虫の魔法無効化能力は宿主の魔力以外を無効化する設定である。それは治癒魔法もその限りではない。

ちなみであるがその魔法無力化を無効化する王家の血筋である私ならば問題ないのだが・・・残念なことに王家の血筋はネギも継いでいる。

すなわち虫は王家の血肉をもネギから取り込んでおり、その弱点すらなくなった完全な魔力無効化能力を持つてる。
我ながら厄介な虫を作り出してしまったものだ。

「ねね！リースさん！！」

「はい？——じゃなくて、何か御用ですか？

え・・・っと、まき絵さん？で良かったでしょうか？」

ご令嬢キャラのことを忘れてついと素で間抜けな返事をしてしまったが、すぐに持ち直す。

そして声をかけてきた子の方を見ると快活そうな女の子、まき絵とか呼ばれてた子がいた。

「そ、佐々木まき絵だよ。よろしくね。で、話んだけど今日の放課後、えーっとマクダウエルさん姉妹・・・っていうのはちよつとアレだね。名前で呼んで良いかな？」

「はい。構いませんよ。」

「構わん。」

「そ。ありがとう。で、リースちゃんとエヴァちゃんは予定って空いてる？」

「空いてますが・・・何かあるのでしょうか？」

キティは無言。

「それは良かった。貴方達とネギ君が来たことの歓迎会をしようと思つた。えっと・・・迷惑じゃないよね？」

「ま、それはとても素敵で嬉しいことですね。是非に参加させていただきます。リース感激！」

「姉様・・・気持ち悪い。」

「・・・はつきり言うわね。」

最後の一言はフレンドリーさを醸し出してみたPart2である。キャラがブレブレかもしれない。

即興のキャラなんてこんなもんだよね？

「ん？」

「あ、いえ。なんでもありません。」

幸い聞かれてなかったらしい。

今日帰ったらキャラ設定を煮詰めてみようか。

一日見てた限りで、このクラスにいないのは・・・病弱、ヤンデレ、狂人、変態・・・あたりか？

ヤンデレは却下。ヤンデレる対象がいなかったため。そもそもヤンデレ怖い。

狂人も却下。いじめられるよ、きっと。苛め怖い。いじめダメ絶対。となれば病弱か変態か。

病弱ならやはり王道として喘息の持病持ちとするか。吐血ごっこのために血糊を用意しておかねば。

変態はレズになるだけ。簡単である。幸い私にはキティという最愛の妻が居る。

ただ私の欲求を解放するだけで良いのだ。

キティをペロペロしたいとかクンカクンカしたいとか、はぐはぐし

たいとかクチュクチュしたいとか。概ねそれをするだけで最早変態以外にはありえんだらう。

「げふっ！？」

なぜか隣にいたキティに殴られた。

理由を聞くと気持ち悪くにんまりしていたそうである。まき絵さんがちよつと引いてた。

正直に私の“希望と書いて妄執”をキティにコソリと耳打ちすると顔を真っ赤にしながら再度殴られた。

結構本気で殴られたらしく、痛くてお姉ちゃん涙目です。

お姉ちゃんのこと嫌になつたの！？と純白のハンカチ（お嬢様キャラは常に持つてると思つたために、持つているアイテム。普段はポケットティッシュ程度しか持ち歩いてません。）を噛み締めて、泣きまねをすると、キティはそういうのはフタリきりの時にしてくれ！と言いながら再度私をなぐる。

とっても痛いです。

2人きりの時にはやつてしまつても構わんのだらう？とかっこつけて言つとまたもや殴られた。

私の鳩尾が、ぶろーくん・ふぁんたずむ。もといグロッキーです。

結局、歓迎会は良い具合に終わり、なぜかネギとアスナちゃんがキスしていた。みたいな噂が立つようになる。

ネギってば・・・恐ろしい子！

もう手箆めにしたのねっ！？

そんな子だったかなあと思いつつ。

お嬢様プラス病弱キャラを被りつつ一週間も過ぎれば登校なんて、なんのその。

今日も早起きして学校である。

というか久しぶりの学校ということで楽しくて仕方が無い。懐かし楽しい・・・とても言おうか。

現役の中学高校生には一度大人にならないと分からない感覚だろう。

「キティ、おきて。」

「・・・んん・・・姉様・・・そこは・・・んふっ・・・だめですう・・・」

一体どんな夢を見ているのだろうか？

ま、現実と大して変わってなさそうでもあるが。というか昨夜の情景そのままではないだろうか？

キティは艶かしくも際どい黒の下着だけで概ね、すっぽんぽん状態で寝ている。

うむ、眼福でござる。

昨夜はお楽しみだったようですね。と言われれば自身を持ってハイ！と返事が出来るほどに激しかった。

下だけ穿いてるのは性器から溢れる体液を止めるためである。布団汚れちゃうし。でもお風呂入る余力があるわけもなし。せっかくの余韻が台無しとなる。

とまあ、下ネタはこれくらいとして。

「キティ、ほら、起きて。シャワー浴びてからじゃないとさすがに不味いわよ。匂いの的に。」

「・・・んあ。ねえ・・・さま？」

「ほら、起きて。」

キティを抱き起こし、そのまま水を渡す。

「ねえさま・・・だっ。」

「はいはい。」

キティは低血圧である。

基本頭が働かない間は素直に甘えを見せる。

朝でなくとも2人きりの時はお互いに甘え通しだけでも照れるキティは外限定なのだ。

今のキティもまた可愛いのは言わずもがなであるが。

「んふ・・・ねえさまの匂い・・・いいにおい。」

「こーら。何時までもこうしていたいのは私もただ。

くすぐつたいし、いい加減準備しないと遅刻するでしょう？」

「・・・あう・・・はい。」

キティをお姫様抱っこしたまま風呂場へ連れて行き、おろす。

本来ならいつものように私が洗ってあげるところだが、お弁当を作る時間が無くなる。

スパ君を頼るのも良いのだが愛する妻のご飯くらい、できる限り自分で作ってあげたいのは主夫として当然のこと。

もちろん料理の腕はスパ君じこみ。その辺の料亭に勝る味は保障できる。

と言うと、料亭がしょぼく聞こえるが料亭がしょぼいのではない。

プロの料理人を霞ませるほどに私が凄いと言うだけなのだ。

ふっ。

「何カツコツケテンダ？気持チ悪イ。」

寝起きのチャチャゼロはそんなことを穿き捨ててそのまま自分の部

屋へと戻っていった。
傷つく。

30 目 見てられない故に（前書き）

感想や評価が我がやる気に繋がるウウウっ！！

最近就活準備や留年の危機で憂鬱です。本気で就活して万一でも内定取った時、留年したらと思うと取る気にもなれないし。

30つ目 見てられない故に

「今のところ誰に訳してもらおうかなあ……」

とネギが言う。

ネギはぐるりと見渡しつつ、キティと目が逢ったところでその瞳に怒りを宿し、私と遭った所で頬を赤らめ視線を逸らす。
なんでやねん。

憧れの兄に似た人間と目を合わせるのが気恥ずかしいってところ？
英語が苦手な人間は誰も彼もが目を逸らす。

ネギは視線を逸らしたことを誤魔化すようにアスナちゃんの名を呼んだ。

「な、なんで私なのよっ！？こういう時は出席番号順とか名前順とか……」

「え、でも……アスナさん……ア行ですし。」

「アスナは名前でしょっ!？」

ぎゃーすぎゃーすと言い合うネギとアスナちゃん。

そこに委員長、改め雪広あやか嬢が加わってよりややこしくなる。
もう見慣れた光景だ。

「そこまで言うならやってやるわよっ!！」

なんか話が纏まったらしい。

結局答えるのね、アスナちゃん。

「えーっと。カブトムシ……?が食べるのは……パンです?」

カブトムシはパンは食べないだろう。
というか口の構造的に無理である。

「ぶつ。アスナさん、英語ダメなんですねぇ……」

そういうことは普通いつちやいけないもんだよ……。教師的にも紳士的にも。

全く、子供とはいえネギというヤツは。

ネギの言葉で笑い声が響く。

そこでアスナちゃんがネギに掴みかかるが、アスナちゃんの髪がネギの鼻を刺激したのか、ネギは盛大にくしゃみをした。
なぜか魔力が発生し、術式が展開される。術式は武装解除。

魔法無力化を持ってるアスナちゃんからすれば問題ないように思えるがこの一週間で気づいたのは彼女が魔法世界の記憶を持ってないこと。

となれば魔法無力化も意識しておらず、常時展開されてる能力の程度では完全に無力化できずに脱げる可能性が高い。

さすがに身内のミスだし見過ごせまい。というかアスナちゃんが可哀想過ぎる。

男女問わず教室でいきなり脱がされるのは遠慮したはずだ。すくなくとも私は嫌だ。

「パチンツ」と指を鳴らして、レジストする。ちなみに指を鳴らしたのは必要だったからで、実は必要なくて、最近読んだハガレンという漫画のマスターグ大佐に影響されて魔法を発動する時は必ず指を鳴らそうなんていう自分ルールのため……。とかそういうわけでは断じて無いということは言っておく。

「姉様……。なんで指を鳴らしたんだ？」

「しーっ！しーっ！！」

「？」

首をかしげるキティである。

それはそうと私の魔法行使の結果、アスナちゃんの前でパァンと大きな音が鳴り響く。

少し私とキティが呆気に取られた。

どんだけ魔力込めてたんだっていう意味で。

無駄に魔力が籠ってた結果、私の魔法が抜かれた音がさっきのあれである。

どんだけええええええ。

キティは呆れ顔。

私も呆れ顔。

おそらく魔法のことを知ってる子達は誰もが呆れたんじゃないだろうか。

まだ暴走癖治ってなかった・・・どころか悪化してるっぽいことになげんりする私達だった。

武装解除はなんとかアスナちゃんのネクタイを分解する程度の威力まで弱まったらしく、大事無かったのが幸いか。

これはさすがに初対面うんぬんとか言ってられないかもしれない。

「で、このつち。」

「いきなり・・・で」と言われても分からんのじゃが・・・」

私は学園長室に来ていた。

正直このままネギを放っては置けない。

というか色々危うい。

ここはお姉ちゃん可愛い弟のために人肌脱ぐしかあるまい。

というかせめて魔法の秘匿や制御くらいはしっかりしてくれないと不味いだろう。

「そんなことくらい察しなさい。どうせ報告はある程度いつているのでしょう？」

「そりゃ、聞いておるし察しはつくのじゃが・・・一応お互いの情報 brushing 合わせも兼ねて子細説明をくれんかね？」

「・・・えゝめんどくさい。キティを教室で待たせてあるのに・・・勝手に察してくれないと困るわよ。」

「・・・なんつう無茶な。というかワシだつて暇じゃないんじやぞ。」

「だまりやあ。貴方はただ私の言うことに首を縦に振れば良いの。そうは思わない？」

「どこの暴君じゃ、おぬしは。」

「まあ半分以上本気のこの話は置いて。」

「結構本気で思ってるのね・・・ワシ泣いちゃう。」

「ジジイが泣いたところで世界の損失は無い。で、話を進めるけどこのまま放っておくのは些か不味いんじゃないのかしら？」

「ひどつ。・・・確かにそれにはワシも頭を痛めておるのじゃが・・・

・なにぶんネギ君も子供じゃ。あの程度ならば学園結界もあつて誤魔化すのも容易かろう。先生としての仕事のカバーはしずな先生が魔法関連に関してはお主等が面倒を見てくれよう？なにせ血を分けた兄弟なのじゃから。」

茶を啜りながらのほほんと言いつつ、このうち。

この狸ジジイが。

「白々しいこと言ってるんじゃないわよ。貴方もその歳なら分かってその上で言ってるんでしょうけど、社会人としてダメなのよ、ネギは。給料を貰い、仕事として教師をする以上そこには責任が発生する。中途半端なこととして良いわけが無いでしょう。生徒のためにもね。特にアスナちゃんなんて脱がされかけたのよ？」

そして部下の失態は上司が被るもの。それも分かってるだろうに。何よりそんな適当にやられるのはネギの身内としてむしろ許せないし、ネギのためにならないわ。

というわけでシツカリとしたバックアップを取る気が無いなら・・・本国にチクるわよ？」

本国は外の魔法使いよりも強い魔法秘匿の意識を持つ。それが知られば、このつちは即解雇。良くて別の魔法学校に左遷だろう。

「な、なんじゃと!？」

・・・じゃが、そんなことをすればおぬしの弟も大変なことになるじやろう？」

「あら？」

引き出しがなくなったの？意外ね。

もう少し色々用意してると思ったのだけど・・・私が兄だからって何も用意してなかったのかしら？

・・・苦し紛れにそんなことを言っても無駄よ。英雄の息子と多少優れてるだけのクソ爺。本国はどちらをとるかしら？

確かにネギもただでは済まないでしょうけど、それはネギが仕事を甘く見た結果。妥当な処分よ。あまりにも見かねるような内容だったり、元老議員がコレ幸いとばかりにツケ込むようなことがあればそれはその時に対処すれば良い。幸い、三国全てにコネクションがあることだし。私の存在を知らせずにネギに対する処分を緩和するのは難しいことじゃないわ。もちろん貴方に対する処分に関しては

何ら手を出さないで上げる。喜んで良いのよ？坊や。」

「ぐぬう……」

「何より……貴方の一番の目的つて脇の甘いネギがこのか嬢に魔法をばらしてくれるように……みたいなことを考えているんじゃないか？」

「そ、そんなことはないぞ。」

「声……震えてるわよ。」

立て続けに責めた成果、動揺が現れたようだ。

まったく、ネギを利用しようとは身の程を弁えさせる必要があるかもしれない。

面倒だから別にしないけれど。

「確か詠春君から聞いたんだけど……このか嬢は魔法を知らせずに育てているようね？」

でも貴方は何らかの理由でバラして置きたい。ま、どっちにもリスクとメリットがあるから人様の家の教育方針のぶつかり合いに口を出すつもりは無いの。でも、ネギを利用しようとしてネギにちゃんとした教育を施そうとしないって言うなら・・・こっちにも考えがあるからね。」

つい殺気が少し溢れてしまったのか、このつちが脂汗を垂れ流す。

「分かった。シッカリとした対応をすることを約束しよう。」

「最初からそうしなさいよ。」

で、話は終わり。やり方は基本的に任せるけど・・・学園結果もあって、あの・・・めがね巨乳・・・なんて言ったかしら？し・・・しずね？」

「しずな先生じゃ。」

「そう、しずな先生ね。」

あの巨乳も学園結界の成果、ネギに甘いところがあるわ。きつちり言い含めておきなさい。」

「きよ、巨乳で・・・もう少し言い方があるじゃろうに。」

「おっぱい？」

「なんでじゃ！？」

「あの人男の視線に苦勞しそうよね・・・同情するわ。」

「それはワシも悩み相談として聞いたことがある。」

「へえ。それで？ていうか貴方もジジイとは言え、男だろうに。」

「残念ながらワシは枯れとる。いまさらそんな目で見れんものう。認識障害の札をやったのじゃよ。」

「あの人関係者なの？そんな雰囲気は無かったけど。」

「いや、一般人じゃ。」

「あ、貴方ねえ・・・」

「まああの程度問題なかるう。何より可哀想ではないか。常に視線が集まるのじゃぞ？」

「・・・ま、難しい問題よね。胸が大きいだけならいざ知らず。美人の宿命ってやつかしら？」

「おぬしも経験があるのか？なにやらアーティファクトで女体化しておるそうじゃが・・・というか、女体化したからと言ってクラスメートの肌着姿を見まくり・・・なんてことは無いじゃろうな？」

「はっ。笑わせないでよね。」

「キティ以外の女性に欲情するわけ無いでしょうが。」

「ドウドウといわれてもワシは何と言えればいいのか分かんが・・・」

「

「さて、無駄話はここまでにして・・・というか、どうせならジジイじゃくて、キティと雑談したいし。とにかく。頼んだわよ。」

「・・・おぬしらは結局何もしてくれんのか？」

「授業中のカバ―程度よ。」

そもそもそういう秘匿や魔力制御はウェールズに居る時に魔法学校の先生が教えておかないといけないだろうに・・・大方、英雄の息

子ってことで甘やかしたのかしら？

ただでさえ膨大な魔力を持つてるのに・・・」

「おぬしらはちと厳しすぎんかの？」

「優しさと甘さは違うのよ、坊や。分かってるでしょ。」

「坊やはやめとくれ。」

「出来れば私たちも修行をつけてやりたいことだけど・・・今はちよつとややこしいことになってるからね。貴方にも説明したでしよう。」

「諜報用の虫じゃったか。全く、厄介なものを埋め込まれたもんじや。」

「まあ普通に過ごしてる分にはなんら問題ないでしょうから。半年後には除去できるだろうし。虫の出所もクルト君に秘密裏に探ってもらってるしね。」

「クルト坊やも大変じゃのう。しかしそれでは連合国しかさぐれまい。」

別国に潜んでいるとは思わんのか？」

「帝国はまた別の・・・ゴリオさんって人に頼んでるわ。皇女たるテオちゃんはろくに動けないしね。」

「ゴリオさん？」

「テオちゃんの部下。私たちの弟子でもあるのかな・・・」

このっちは「ゴリオか・・・日本であれば苛められてた名前じゃろうな」とぼやいていた。

本名ではないのだが、まあ訂正するのも面倒だ。そもそも名前を覚えてないし。

「んじゃ、私の用件はこれで終わり。また明日ね。このっち。」
「うむ・・・じゃあの。」

と云つて、このつちが振る手に力が籠つてなかつたのは私のせいだ
ろつか？

30 目 見られない故に（後書き）

次回は刹那との挨拶とドツチ部黒百合登場の二本でお届けする予定でございます。

31 目 刹那の疑心（前書き）

本来ならドツチ部の話をメインにしようと思っていたのに・・・おまけな感じになってしまった。ごめんよ、黒百合ドツチ部。

31 目 刹那の疑心

「茶々丸ゝいるゝ？」

「なんですか？アリス？」

さて、今日は休日である。

せつかなのでちょっとした町と化してるマホラ学園の観光がてら
買い物にいこうと思いいったのだ。

そこでせつかなので茶々丸の制服も買おうと思っている。

「茶々丸の制服を買いに行くの。サイズは計ってその場で買っから
それとリースって呼んで頂戴。」

ちなみに私たちの制服は前もって用意しておいたのだが、茶々丸の
はすっかり忘れていたのである。

「わ、私も学校に行くのですか？」

「行きたくないなら無理にとは言わないけど？」

「・・・い、行きます。」

「そう。なら支度してね。」

少し頬を赤くしてウキウキしてるように見える茶々丸。こうしてみ
ると歳相応のただの女の子である。

初めて小学校に入る子供は大きくニタイプに分かれるけど、どうや
ら茶々丸は入学を楽しみに出来るほうらしい。

泣きながら「ままあっ！！いやだあ、いぎたくないよあ！！」タイ
プでは無かったようで良いような、そんな茶々丸も見てみたかった
ような。

「んあ、・・・姉様、どこに？」

「あら、キティ？」

今日は早起きね。茶々丸の制服を買ってくるのよ。キティも何か欲しい物はある？」

「・・・うーん、それなら染め織物を買ってきてください。」

「染め織物？」

「浴衣でも作るの？」

「ええ、西洋の服はいい加減飽きてきましたし、そろそろ和服をにも手を出してみようかと思ひまして。」

「そう・・・でも呉服店なんてあつたかしら？」

「この前、姉様と一緒に買った制服を買った服屋の近くにあつたので、お願いします。」

「ふーん。色合いは？」

「適当に姉様の感覚で綺麗だと思うもので大丈夫ですよ。」

「そ。いつてきます。」

「いつてらっしゃい。」

といて、唇が触れる程度のキスをしながら軽く抱きしめあい、家を後にした。

「何時見ても、胸やけしますね。というか、マスターたちは私が産まれる前からこんなことをしてたんですか？」

茶々丸が忌々しそうに話しかけてくる。
なぜそんな顔をするのだろう？

「生まれる前と言つか・・・まあキティとは付き合いが長いわねえ・・・お互いにちゃんと向かい合つてからは20年前後くらいかしら。」

こんなこととは何さ。別にいいでしょう？何時までも仲むつまじい夫婦が何の害になるってのよ。」

「具体的に言々と周りにいる人間すべてに害悪です。」

「そこまでっ！？」

「というか20年もあの甘ったるい状態を維持してきたのですね。ドンビキです。」

「あら？僻んでるのかしら？茶々丸。」

「まさか。疎んでるんです。」

「むしろそっちの方が悪くないっ！？」

「よくもまあ、カカシさんとチャチャゼロ姉さんは耐えられてるもんです。私は今にも張ったおしたくなるのに。」

と、他愛のない話をしてしていると目の前から竹刀袋を持った女子生徒がやってきた。

確か同じクラスの桜崎刹那・・・だったか。

あちらもこっちに気づいたらしくそのまま近寄ってくる。

というか休日も制服着てるんだけど、それはどうなんだろう？

もっとラフな格好をすればいいのに。

ちなみに茶々丸は厚手のゴスロリ・・・私は白のワンピースに麦藁帽子と、病弱でお嬢様となればこれだろ！という服装——にしたかったのだが、時期は冬。病弱なのにその格好はありえんだろうということで、長袖の服にミニスカート。黒タイツを穿いて、コートを上から羽織っている。

ワンポイントファッションとして羽飾りを頭に刺していたりする。ゴスロリはラフに分類されるだろうか？

「おはようございます、桜崎さん。奇遇ですね。お出かけですか？ごふうつ。」

「・・・リースさんは今日も体調が悪そうですね。」

「いえいえ。これでも良いほうなんですよ？」

桜崎さんが何を言ってるかというところ、病弱をキャラ付けするために私は吐血ごっこをしているのである。

必ず登校したら一回吐血と言っことを続けていた結果。

最初こそ皆心配していたのだが、学園結界の認識緩和で今では吐血しても「なんだ、ただの吐血か」的な視線を向けられて終わってしまうのである。

ちなみに桜崎さんのような裏家業に関わりのある人にとっては「なぜ血糊をわざわざ使うのだろうか？」みたいな変人を見る目で見られている。

どうしてこうなったのだろうか？

最近では吐血ごっこも意味がないように思えてきたから不思議だ。

ただ唯一。千雨ちゃんのみが「いやいや、大丈夫じゃねえだろ！？なんで普通に学校来てんだ！？普通、ドクターストップかかるだろっ！？ていうかこいつらはこいつらで何、「また血を吐いてら。まったくリリースちゃんてば、病弱だなあアハハ。」みたいな空気で流してんのっ！？そんな感じに流しちゃダメだろっ！？明らかに末期入ってるだろっ！？そしてあの転校生は転校生でナチュラルに血を吐きすぎだろっ！？帰国子女という属性を除けばマトモなやつらだと思っただけというのに・・・こいつらもまた変態の・・・類か・・・こんなくしょう。」と哀愁漂う背中を醸し出していた。

細かいこと気にしすぎると、剥けますよ？と言ってあげたところ、なぜか「オマエが事の元凶なんだよっ！！」とドツかれたのが意味不明である。

「あの・・・それで今日は挨拶をと思ひまして、貴方達の家を訪ねようと思っっていたところなのですが・・・都合は大丈夫でしょうか？」

「挨拶？」

もう転校して結構経ってますし、全員と挨拶は済ませたと思うのですけど・・・」

「あ、いえ、そっちのほうではなく、同じ人間を・・・このかお嬢様を守る者として、一度挨拶をした方がよいかと思ひまして・・・」

わざわざ挨拶とは律儀な子だなあ。それとも――釘を刺しに来たのか、はたまたどの程度が見極めるために来たのか・・・どちらだろうか。

「えーっと、察するに私1人で十分だから余計な事をしてこのかお嬢様を危険な目に遭わせる・・・みたいなバカな真似はするなよ！・・・とても言いに来たのですか？」

「あ、いえ、そんな恐れ多い！！」

貴方の姉君であるエヴァンジェリン殿の実力を持つてすれば、百人力です！！そのエヴァンジェリン殿と一緒にいる貴方もいれば・・・事実問題はないでしょうが・・・学園長も信用できると仰っていました。

ですが・・・その・・・私には役目がありますゆえ・・・」

「悪名高いあの闇の福音が、その辺の小娘を本当に守るのかどうか・・・不安と言うことでしょうか？」

「・・・し、失礼ながらその通りでございます。

無礼を承知で申し上げますが、私はこのかお嬢様を守る剣なればこそ。妄信的に信じることは許されず。

此方の事情を推し量っていただければ、と何卒ご容赦のほどを。

単刀直入にお聞きます。信用してもよろしいのですね？」

ま、護衛と言う立場の人間からしたらそうそうすぐに信じるわけにも行かないよね。

私も逆の立場ならそうするし。

挨拶とは名ばかりの視察と言った方が正しいか。

おそらく桜崎さんも本気でこちらに悪意があるとは思っていないだろう。

今回の挨拶の主目的はおそらく、今後どれだけ当てにしていけるのか。

相手がどれだけ護衛と言う仕事に熱心に取り込むかが知りたいのだろう。

「そういう約束ですから、このか嬢に危機が訪れた際には出来る限りでサポートさせて頂きたいと思っております。心配には及びませんよ。このマホラ学園の見回りも任されていますので。」

「いざと言う時には当てにしてよろしい・・・ということですね？」

「はい。そう取ってもらって構いません。」

「そうですか・・・大変な無礼を働きました。心から謝罪をさせていただきます。」

深々と頭を下げる桜崎さん。

「護衛の立場からすれば疑ってかかるのは当然のこと。特に守る物が大切であればあるほど・・・ね。」

このかちゃんは良いお友達を持っているようで、羨ましい限りです。

「い、いえ！」

そ、そんなお友達というわけでは・・・」

「あまり話すところを見かけないのですが・・・友達ではないのですか？」

「その・・・私のような瑣末な存在がこのかお嬢様と友人などと言うのは・・・恐れ多いことです。」

・・・ような、ね。

このかちゃんの性格からするとありえないことだけど・・・どうも

自分の価値観の中で完結させて、それを周りに塗りつける――昔の私を見てるようで、微笑ましい。

きっとこのかちゃんとしてはむしろ仲良くなりたいて思うだろうな。

少しお節介してあげるのもまた一興か。

「あら？どうしてそう思うのです？」

「私は・・・その・・・穢れた存在ですから。そのような存在はこのか様の邪魔にしかなりえません。」

「私にはそうは思えないのですけど？」

「・・・失礼ながら、今日昨日程度の付き合いしか持たぬ貴方が、私たちにそう言ったところで何の説得力もありません。」

「まあ、それはそうですね。お節介が過ぎました。ごめんなさい。」

「いえ。こちらこそすいません。氣遣ってもらってありがとうございます。います。」

「興味本位ですから答えてくれなくても結構です・・・が、一つだけ不思議なことがあります。貴方はどうしてこのかちゃんを守りたいと思ってるのですか？」

「穢れた存在が邪魔だと言うならば護衛自体も止めてしまえば良いでしょう？」

「っ!？」

「護衛は貴方でなくては駄目と言うわけではないですし、むしろ貴方よりも腕の立つ護衛の1人や2人。このつちが用意できないとも思いませんし。貴方が彼女にこだわる理由はないはずです。」

まあ逆説的にそう思っていて、そばに居たい。だからこそ例え自分で彼女から離れた方が良くも思っていて、未だ護衛と言う仕事をしているのだろうか。

多分、これは自分が近くに居たいというわけではなく、仕事でやむを得ず近くにいる必要がある・・・みたいな言い訳を作るために護

衛と言う仕事をしてると私は見た。

一見した彼女の性格的にそういった言い訳じみた不純な動機で仕事をするのは好きそうではないが、自分の性格を曲げてでも一緒に居たいってことかな・・・愛されてるねえ、このかちゃんは。

「・・・ただ周りから人知れず彼女を守ると言うだけなら貴方は要りませんよ?」

「・・・い、要らない・・・のでしょうか・・・私は・・・」

泣きそうな顔になる桜崎さん。

彼女の心境を考えれば泣いてもおかしくない。

そして、苛めてるみたいで若干良心がちくちく痛む。

苛めてるわけじゃないんだけどね。

「それでも・・・学園長が貴方に護衛依頼・・・いや、護衛以来を託したのは西の長（詠春君）でしょうか?

なんにせよ、他ならぬ貴方——“桜崎刹那”に護衛を・・・自身の家族を任せたこと。

それには他の意味があるはずなんです。」

「・・・ほ、他の意味?」

「良く考えてみてください。刹那さん。

貴方が気づくことを祈ってます。」

「・・・。」

そのまま立ち去る私たち。

「アリス・・・じゃなくて、リース。説教臭かったですね。」

「ぐぬっ・・・歳食うと説教臭くなるのは人間の習性かもしれないわね。」

「まあ少し見直しました・・・けど。」

「ん？何？」

「いえ、別に。」

帰り際の茶々丸の嬉しそうな顔がヤケに印象に残ったのであった。

「普段があれですしねえ……」

「だから何だつてのよ……」

茶々丸が転入してきた描写は省く。

のんびりとした休日が終わり、月曜の学校はなぜにこんなにテンションが落ちるのかかと思いつつも学校を終え、そのまま平和な数日が経ったある日。

今日は何事もなく、ネギが暴走するまでもなく終わる。はずだった。なんでまたこんなことになっているのだろうか？

「ドツチ部黒百合が相手になるわっ！！」

概略を言うと、どうやら昨日、昼休みの場所とりでアスナちゃんを中心とした元気一杯組が喧嘩したらしい。

で、今は体育の授業時間になるはずだったのだが、高等部の娘達はどうも昨日のことを根に持っていたらしく、わざわざ中東部の屋上バレーコートまで来てバレーをやっていた。が、こちらも同じ場所でやる予定だったので、今度はコートを巡る喧嘩が勃発。

それをネギが止め「こら、坊や……もつとガツンと言ってやらないかっ！男だろ！」とヒソかにキティが応援していたのは見なかったことにして「ドツチボール勝負に持っていた。」

うむ。なかなか見事な誘導だ。

これなら高校生対抗ドッチボールってことで、しっかりと体育の授業をしてることになるし、見ず知らずの人とスポーツとは言えどコミュニケーションを取るのは社交性のアップに繋がる。意外と良い形の授業になった。

しずな先生の教育か、はたまたマグレか、そのまたネギの実力か。なんにせよ今回ばかりは私も誉めてあげよう。ただ、ちよつと魔力暴走があつたのが頂けない。

ちなみに私たちは見学。

私は病弱キャラで言うまでもない。

キティは興味なし。茶々丸は何分ボール遊びは始めて。ルールを知らない。

また裏家業グループも身体能力的に真剣勝負に出るのはどうかとおもつたのか、見学していた。

挑発してるのか、時々警戒の念を送ってくるタツミが鬱陶しい。悲しいことに世間的にキティは犯罪者となっている。

ゆえにやむえないことであるが。

また、桜崎さんは桜崎さんで時々こちらを見たり、思いつめた顔をしたりと少し追い込みすぎた気がしないでもない。

フォローしておかないと、いつの間にか「桜崎さんは一身上の都合で転校しました」みたいな展開になりそうで怖い。

うむ、後日タイミングを見てフォローを入れておかねばなるまい。

狸ジジイとしてはむしろ仲良くなつてうっかり魔法関連の秘密をばらしてくれんかなあ。みたいなことを思っていそうだ。

詠春君からしたら彼女なら例え気の許せる相手でもそんなヘマはしないだろうってところか。

ふつ、見事に真逆な思想だな。

詠春君も婿入りした立場だろうし、義父であるこのつちにあまり強くは言えないんだろう。

などと他愛のないことを考えつつ。

「・・・あの未熟者め。」

とぼやいてキティが魔法を発動した。

呆れた目をしている。

私も呆れた。

「・・・まったく・・・これは本格的に私たちがどうにかしてあげるしか無いかしら？」

なんとまあ、高校生の娘達のリーダーっぽい子の卑劣な行為を受けたアスナちゃんのために怒ったのか。

ついと言う感じに魔法を使ってボールを投げ飛ばしたのである。

まあ・・・百歩譲って魔法を使ったことは良しとする。

学園結界があるのだから、誤魔化せる。結果的には問題ない。が。

なぜボールに込められた魔法が武装解除なのか。

いや、それは確かに殺傷魔法ではないから良いのだが。

脱げるでしょ？と。

どんだけ脱がしたいんだよ・・・ネギ。

「姉様・・・これはさすがに・・・」

「ええ。前々から考えていたことがあるのだけど。

実行に移すしか無いようね。

悠長にコントロールを習ってる暇も無いでしょうし。」

悪いけどネギ。

私の教育方針は厳しく優しくだ。

覚悟してなさい。

31 目 刹那の疑心（後書き）

次回はあれです。

キティがネギと戦う話に突入します。

一応解説コーナー

考えれば分かることだと思いますが、いちいち考えるのが面倒だっ
て思う人が疑問に思うかもしれないので書いておきます。

アリスは2 - Aの皆からキティの姉だという認識ですが、刹那など
の裏事情を知る人間にとっては逆に思われてます。ゆえに「貴方の
姉君のー」と言ってるのです。

まさか天下に悪名轟かせる最強クラスのキティの姉がいるわけある
まいという考えからです。

32 目 ネギの選択・前編（前書き）

セブンスドラゴン2が面白すぎる。

久々にゲームにハマりました。更新が二日おきぐらいになるかも？

32 目 ネギの選択・前編

「このえも〜ん!!」

「なんじやい、リス太君？」

「って何をやらせるんじやつ!!」

「おおう・・・まさかこのボケに乗ってくるとは・・・どんびきするわ。」

「振っておいてそういう言い草は無いんじゃないかのう。
ジジイ泣いちゃう。」

「だからジジイが泣いたところで誰得かと。まあいいや。さて、オジジ。」

今回、私が来たのはなんてことはない。

このつちにも協力してもらいたいことが出来たのだ!!」

さっそくネギ強化作戦を開始したいと思う。

強化というよりは矯正？調教？教育？

まあそんな感じである。

その準備のためにもここにきたのだ。

「ふむふむ・・・なるほどのう。ネギ君に魔力制御を実戦形式で・・・とな。」

「いぐざくとり〜。」

実戦に勝る訓練は無いとも言っしね。」

「ううむ・・・しかしのう・・・相手はまだ12歳の子供じゃぞ？
ちとシビアすぎんかのう？」

確かに。

ネギがただの12歳のガキンチョでウェールズの山奥に籠ったまま
ならば何ら問題は無かったらう。

いや、脱がし小僧として問題はあったろうが。とりあえずそこは置いておく。

余談だが、大抵の魔法使いは魔力容量が10歳を迎えるくらいのと
きから12、3歳頃までに急激に上がる。魔力の成長期というやつ
である。その後は魔力トレーニングでコツコツと地味に増やしてい
くしかない。

もちろん個人差はあるし、もともと容量の多い子供ももちろんいる。
ちなみに私は元々あったタイプ。

一流魔法使いくらいの魔力は生まれつき持っていたらしく、成長期
にぐんと伸び、11歳頃にはすでに魔力量だけならナギ君を超えて
いた。伸びが収まつたくらいにはざっとナギ君の1、5倍くらいは
あったものである。（たかが1、5と思うかもしれないが元が元な
ので5割り増しでもかなりの容量がある。）

もちろん私の魔力は800年分の魔力トレーニングの分があるので、
今では恐らく魔力量だけならばそれこそ魔法世界を余裕で100年
は維持できる容量を持っていたりするが、脱線話はこれくらいとして
本題に入る。

「分かってるでしょ？」

成長著しい子供が稀に発現する体質。」

「過剰魔力縮膨症か。」

「そ。急激に増えた魔力に対して体が上手く適応せずふとした拍
子に溢れ出たり、逆に内側に引込んで魔法が使えなかったりする
一時的な病気。」

「余程魔力の伸びしろが大きくないと発現せん病気なのじゃが・・・
さすがは英雄の子と言ったところか。」

もちろん魔力が増えたところで順次、体が適応するのだがその適応
力すら上回るほどの成長力を持つ子供にのみ発現する病気である。
本来ならばきつちり体に適応する形で成長するはずなのだが、適応

力と魔力の成長力のバランスが悪い子供が稀に出る。

本来なら適応力と成長力のバランスは均等が取れているのだが、その均等が崩れている人間が一時的に発現する病である。目に見えない奇形児というのが一番簡潔かつ分かり易いだろう。

ちなみに私に暴走癖は出てない。

ネギの場合、適応力が低いということだ。

「しかし、成長期を過ぎてしばらく経てば勝手に収まるものじゃ。成長期は長くてもあと一年で終わる。こればかりはネギ君が悪いと言っわけでもなし。ちと酷じやと思うぞい？」

「確かにそうんだけど・・・脱がされる女性徒の身にもなってみなさい。」

「うぐぬ・・・」

「なんならここで貴方を脱がしてあげましょうか？」

「どれだけ屈辱的か身にしてみて理解できると思うわよ？」

「美少女に脱がされる・・・アリじゃな。襲われてるみたいでこう・・・興奮すると言っかぶはっ！？」

何かをほざきやがったクソジジイを殴ってやった。

目エ覚ませえ。

「いたたたた・・・ちよつとしたボケじゃろうに・・・年寄りはおれツちゅーの。」

「ごほん。まあ確かにそれはちと問題じやの。誰かが常に付いてる・・・というわけにもいかんし。」

「私たちが年寄りなんだから、むしろ貴方が気を遣いなさい。ジジイの服剥いたところで何ら楽しくないし、どうせならキティを剥くわよ。」

「・・・で、せっかくだからキティに対する不満もぶちまけてもらおうと思ってね。」

「ん？」

ああ・・・確かおぬしの憎き仇という形になっておるんじゃないか？」

「正確には幻滅したって感じでしょうね。」

「何を考えとるんじゃない？」

「簡単よ。キティに悪役をやってもらうの。」

「・・・なるほど。つまり場所を貸せと？」

「物分りがいいじゃないの。」

簡単に言うと、キティがネギを挑発。

ネギはキティに「なんで私を助けなかつた」^{アリス}と言つ不満を抱いてる。そのためネギは恐らく簡単に挑発に乗る。

戦う。

実戦を通して魔力の扱いを覚えこませる。

目的達成！！

「そう上手く行くかのう？」

さすがの英雄の血と言えど一度の実戦くらいでどうこうなるとは思えんのじゃが・・・」

「それでも少なくとも魔力制御は格段にアップするはずよ。ネギは基礎だけはちゃんとしてるし、戦い合いながら相手の技を盗むくらい・・・出来なくも無いでしょう。」

さらに言えば私の全てを視認する魔眼。戦闘前には天使眼の劣化版の移植もするつもりだ。

視認できるのは魔力の流れのみというものだが、これを埋め込むことによってネギはさらに学習能力を高めることが出来るはず。

ちなみに他の先生方がネギに魔力の制御を教えないのはできないからである。

この過剰魔力縮膨症はただ待つだけ。それしかできないとされてい

るからで、本来ならば生理現象のようなものでどうにも出来ないのだ。

このつちが洩りを見せるのも無茶であると思ってるからだろっ。

だけでも出来る！

ネギならば出来ると信じている！！なんていう良い子ちゃんことを言うわけでもなく。

単純に英雄の血はコントロール面でも凄まじい物があり、見込みがあるゆえに今回の作戦を立案したのだ。

少なくともネクタイと上着一枚分を脱がすだけで済む程度にはコントロールできる。という見込みを立てている。

一般人ならばどんな方法でも不可能だったろう。

「他の先生方の説得にも骨が折れるのう。貸し一つじゃぞ。」

「はっ。何を言ってるのかしら？これは貴方の学校の生徒のためでもあるでしょう？」

むしろそれが主よ。学園長の――責任者である貴方が尽力するのは当然のこと。ネギは確かに私たちの身内であるけれども貴方の部下でもある。面倒を見るのは上司として当然よ。」

「・・・正論じゃな。はあー。シスターシャークティーあたりの説得が一番大変そうじゃ。」

「シスターねえ。キティが吸血鬼に分類されるから？」

「うむ。由緒ただしい家柄での中。多方向で優秀なのじゃが、吸血鬼のこととなると“お家の使命”だとかで融通が全く効かなくなる。困ったもんじゃい。」

「部下を律するのも上司の勤めよ。せいぜい頑張りなさい、このえ坊や。」

「じゃから坊やは止めとくれと言っに。」

ヒゲをさすりながら眉をひそめる、このつち。

まあジジイの呼び名なんてどうでも良いことである。

「どうでも良くはないじゃろ。」

「キティ以外は概ねドウでも良いわよ。」

概ねから外れるのはもちろん家族や親しい間柄である。

「桜通りあたりが一番やり易いかのう。」

「一般人の排除と邪魔をしないように戒厳令を敷くこと。どれくらいの時間がかかる？」

「うつむ・・・一週間くらいかの。」

「そう。分かったわ。」

そのまま立ち去る私。

「何をする気じゃ？」

笑っていたのを見られたのか、このっちは怪しむようにドアを開けた帰り際の私に問いかけてきた。

「うつふ、ただの種まきよ。」

「皆さん、今日は身体測定だそうです！

今すぐ脱いで準備してください！！」

・・・あほう。

そんなデリカシーの無い言い方ありますか。

というかとっとと出て行きなさいな・・・全くネギは。

案の定、エッチと叫ばれ追い出されたネギ。

「さてと・・・それじゃ、キティ。手はずどおりをお願いね。」

「別にやるのは構いませんが・・・姉様？

何を企んでいるのです？」

「何って？」

全部言つたじゃない？」

「・・・姉様が・・・いえ、なんでもないです。」

少し頬を赤くしてそつぽを向くキティ。

さすがキティ。

私の“本当の目的”に気づいてるみたいね。

こりゃ、中盤くらいでハッキリバレちゃうかなあ。

ま、それならそれでいいんだけど。

きつと今キティが言いたかつたのは「私を愛してる姉様がなぜ私を悪役ヒールに？私を悪役ヒールにするくらいなら姉様が自分でやるでしょうに」と言いたかつたのだろう。

ちよつとアレなセリフなので照れ屋なキティは言えなかつたところかな。

もちろんそれに対する表向きの理由も用意してある。「キティを敵対視してるから、複雑な感情がないまぜになつてる私よりもキティの方が適任でしょ。」的なことを言つつもりである。

というか今言つた。

「・・・そういうことにおきます。」

「これは手厳しい。なんにせよ気をつけてね。」

「・・・私が坊やに遅れを取るわけが無い。」

「それもそつね。」

放課後。

辺りが若干薄暗くなった頃。

「今日は失敗しちゃったなあ・・・」

「何がだ？」

「ちよつとデリカシーがなかったかなあって。

・・・え？」

「さて、面と向かい合って話すのはあの日以来だな。」

「・・・なんですか、エヴァンジェリンさん。」

「何。腑抜けた坊やにちよつとしたチョッカイを・・・とても思っ
てな。」

キティは予定通りネギに接触できた様子。

そのまま任務「挑発」を行いたまえ、キティ隊員。オーバー。

『念話で兵士ごっこですか・・・こちらキティ、対象に接触。任務
を開始する。オーバー。』

『呆れつつも付き合ってくれるキティが私は大好きです！オーバー
！。』

『・・・とりあえず黙っててください。気が散ります。オーバー。』

『

『相変わらず直球に弱いキティに萌え萌える。オーバー。』

『通信切ります、オーバー。』

ここで念話が強引に切られた。
怒られちった。

「どうした？そんなに睨んで？私が坊やに何かしたか？」

「いえ・・・別になんでもありません。」

「今はいない人間のことで未だウジウジ悩んでいるのか。今のオマエをねえさーアリスが見たらドウ思うだろうな？」

「・・・見捨てたくせに。」

「うん？」

「アリスを・・・兄を見捨てたお前が兄さんを語るなっ！！」

「・・・だからオマエはどうだというのだ？」

「・・・え？」

「オマエはアリスが捕まっついていて。それは不当だと思っているのだから？」

「・・・もちろんオカシイって話した。兄さんが何をしたのかも良く分からず連れて行かれたんだ・・・もちろん僕だっけ黙って今まで過ごしてきたわけじゃないっ！！」

「で、結局今貴様の隣に大好きな兄はいない。それが答えを示しているだろう？」

その小利口な頭で良く考えてみる。

本当に助けたいと願っているならなぜ自分で助けない？

どうして動こうとしない？

「・・・それは僕1人じゃ無理だから・・・」

「そうだな。だがそれならそれでやりようがあるだろう？」

「・・・どんなやりようがあるっていうんだよっ！？」

「簡単な話だ。」

この場で土下座をして、私の奴隷と化す事を誓え。

ギアス
強制魔法でもってな。」

「・・・それは・・・」

「自分で出来ないならば他の人間の力を借りれば良い。

ほら、ただがその脆弱な身一つで愛する兄を救える私の力の助力を請える。安いものだろう？」

「・・・。」

「自身の身が大切か？」

・・・だとすれば貴様は所詮その程度だということだ。
相手が強大だからと面倒くさがって何もしない。そんな私と同じで
変わらぬ。貴様もまたアリスを語る口は持たぬだろうよ。
別に恥じ入ることではない。

それは至極当たり前で、“たかだか”兄1人。貴様が貴様自身の身
に劣る価値しかないとしたのならそうなのだろうさ。」

「・・・。」

ネギはプルプル震えていた。

泣きそうである。

えーっと？

やりすぎではありませんか？エヴァンジェリンサン？

というか悪役がここまで似合うとは思わなかったなあ。

これを本人に言ったら、泣きそうになるかもしれないが。

「・・・お、おねがいします。」

「ん？」

膝を折り、土下座をするネギ。

泣きそうになりながらもキティの条件に従うようだ。

というか、やりすぎのせいで私の本当の目的が崩れかねないのでせ
うが？

なんとか修正しないといけない。

「聞こえんが？」

「なんでもしますから・・・兄を・・・救ってください。お願いし
ます！！」

「だが断る。」

そう。

今回の目的は強制魔法が込められた誓約書^{ギアス}を渡すこと。

内容は今の話の流れ的に分かるだろうけれど、諜報用の虫にばれないようにまずは今回のことに関わる全ての事柄を口外の禁止。

キティが負ければ一度だけネギに対して武力的な手助けをすること。なお、この手助けは半年後以降から有効となる。

ネギはなぜ半年後だろう？と思っただろうがこれは単純に実際は私は捉われてないので、今から助けに行くとか言い出したら色々な面で困るからである。

というかあれだけ挑発した後では確実に言うのではないだろうか。

そしてネギが負けた場合は私の――アリスに関する記憶の封印である。

負けたときのペナルティがあつたほうがやる気が出るだろうと、無理につけたものだ。

消去にしないところで、私達側の本気具合が分かると言うものである。

消してしまえば良いところでわざわざ封印処置にする。

これは暗に「消えたら困っちゃうよ！」ってことである。

ネギが気づくことはあるまい。

そして私たちにとって記憶を弄る魔法は鬼門である。

ゆえにこそ記憶をいじることを選んだ。

記憶と言うのはその人を司る大事な物。

私達が考える上で一番辛いと思える事柄を選んだのだ。

厳しく優しく。

有限実行した結果、こんな感じとなった。

32 目 ネギの選択・前編（後書き）

ちなみに「だが断る」は作者的にもネタのつもりはありません。書
きながらネタになってることに気づいて思わず笑いましたわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8536r/>

ネギま！の世界で魂生成～キティとのラブイチャ日記～

2011年11月27日19時00分発行